

---

# ロストマーブルズ

CoconaKid

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ロストマーブルズ

### 【Nコード】

N9084W

### 【作者名】

CocconaKid

### 【あらすじ】

桐生ジョーイきりゆうは日米ハーフの無口で無感情な高校生。偶然、駅のホームで少女がビー玉を散らばせた光景に出くわす。

その時少女が発した言葉 「I lost my marble  
s」(ビー玉を失くした)

だがそこにはもう一つの意味が含まれる。

それがジョーイの記憶をつつくきっかけだった。

どうしてもはつきりと思い出せないあやふやな記憶。

まるで何かを知らせたいがために足元に次々転がるビー玉。  
しかしそれは隠し通すべき事だとしたら。 。  
それでもあなたに伝えたいことがある。

ピタゴラ装置のようにビー玉が転がり、謎解き、事件、暗号が次々連鎖反応を起こして飛び出してくる。

ゴールの先に何が待つ。

青春のページに残したい胸キュンな青春ミステリー小説です。

(自サイトからの転載)

## プロローグ

> i 3 1 5 7 2 — 3 9 8 5 <

(小説タイトルのバナー)

放り出されたビー玉が突然コロコロと数十個一斉に転がった。  
命を吹き込まれたように、転がり続けていく。

それからだった。

桐生ジョーイの記憶が突付かれる。

遠い昔の埋もれていた過去。

そこから目覚め出す。

それは意図されたことだったのだろうか。

やがてそれは連鎖して次々と事件を引き起こしとぎれることなく  
やってくる。

「アスカ」というどうしても忘れられない女の子の名前と共に。

忍び寄るものは謎をばらまき、そこに巻き込もうと罠を仕掛ける。  
自分は一体何者なのか。

そしてあの時の記憶はなんだったのか。

それを探る鍵となるのがビー玉だった。

失われたビー玉。

桐生ジョーイは転がるビー玉を追いかけてしまった。

> i 3 1 5 7 3 — 3 9 8 5 <

(この小説のイメージ画像)

「ジョーイ、リラックスするのよ。初めてじゃないんだから、そろそろ私に慣れてきてもいい頃じゃないの」

早川真須美はやわらかな甘いフローラルの香りを微かに匂わせて、簡易ベッドに仰向けに寝ている桐生ジョーイを上から眺め微笑する。

後ろで束ねていた髪の毛のゴムをすっくと外して首を左右に振ると、仄かな甘美の香りと共につややかな黒髪がシルクのカーテンのように広がった。

誘うような怪しげな目つきをしながら、胸を持ち上げるように腕を組むと、胸が大きく露出する襟ぐりから谷間が一層強調された。

桐生ジョーイは慌てることもなく無表情にそれを見つめつつ、ため息を一つ漏らしてから顔を逸らした。

「先生、俺をからかっているんですか」

「あつ、やっぱり色仕掛けもだめか」

早川真須美はがっかりとした表情を浮かべて後ろに下がると、デスク前の白い革張りの椅子にどしつと腰掛けた。

春の暖かい日差しが窓から入り込んでいる。光は部屋の白い壁に反射し明るさはさらに強められ、清潔感溢れる空間を生み出していた。

天井の白さが目に眩しいのか目を細め、ジョーイはやるせなく眩くように諫める。

「かなり今日は荒治療ですね。心理カウンセラーがそんな色気を使

って、面白半分に青少年をそそのかしていいんですか？」

「あなたの場合はテストのためにもこれでいいのよ。これで性欲も持ち合わせてないって言うことが証明できたわ。でもちよつとシヨック。これでもお色気ムンムンのカウンセラーで通ってるのに、なんか自信なくしちゃう。もしかして男の方が趣味？」

「ちよつと待つて下さい。どうしてそうなるんですか。俺は別に先生に興味がないだけで、それにこれは治療の一環となんの関係があるんですか」

「あなたの場合、全てにおいて無関心すぎるのよ。だから少しでも今時の若者らしいことがないか色々試しているところ。過去のことに拘りすぎてあなたは大切な今の時を無駄に過ごしてるわ」

「俺は何も拘つてなんていません」

ジョーイはこの治療が自分には不必要とでも言うように早川真須美の顔も見ず、ただ天上を見つめる。その態度は患者と言えど、ジョーイが生意気に感じられた。

早川真須美は苦笑いになりながらカルテとペンを手に取ると足を組み、きりつとした表情をジョーイに向けた。そして芸術作品の価値を探るようにジョーイの顔を眺める。

苗字が日本語、ファーストネームが英語。その名が意味している通り、ジョーイは日米ハーフであった。

17歳の多感な年頃。春休みが終わればこれから高校三年に進級する予定。

緩やかな癖がついた栗色の髪は、見るからにしなやかで柔らかく、猫を撫でるような気持ちでつい触れなくなる。さらに日光の下では益々明るい透き通った茶髪と変貌する。顔は日本人の母親に似てベ

「イスはアジアンフェイス。だが目が大きく凹凸がしっかりと誰の目にも西洋の血が混じっていると推測できた。」

顔は文句のつけようがないほど整って美しいが、早川真須美の目にはそれ以上のものを見ようと鋭く光っていた。

「それじゃ本題に入るわよ。目を閉じてリラックスして。そして心に引っかけてることを思い浮かべて」

ジョーイはまた始まったかとうんざりしながらも大人しく瞼を閉じた。何回同じ事を言ったか指で数をわざとらしく示して、白々しく供述するように語りだす。

「俺はまだ7歳のときだった。いつも一緒に遊ぶ女の子がいた」

「その子は何歳くらいの女の子？ もっと詳しく教えて頂戴」

「5歳くらい。時々家にも遊びに来ていた。毬のように元気に飛び跳ねて、いつも笑っていてとてもかわいい子だったように思う。でも顔の詳細まではもう覚えてない」

「その子の名前は？」

「アスカ」

「日本人？」

「分からない。でも俺と同じように血が交じり合ったような顔だったかもしれない」

「どうしてアスカちゃんが忘れられないの？」

「突然俺の目の前で消えたから」

「突然ってどんな風に？」

「家ごとアスカが爆破されて燃え尽くされるように消えてしまった」  
「殺されたってこと？」

「わからない」

「どうして家が爆破されたの？ それは事故？ それとも誰かが爆

弾を仕掛けたの？」

「わからない」

「それじゃ他にアスカちゃんを知ってる人は？」

「誰も居ない」

「家に来ていたのならお母さんは見たことなかったの？」

「多分見ていたはず、でも……」

「でも何？」

「アスカの存在を認めない。アスカは俺が作った架空の女の子だと思っっている」

「それはどうして？」

「俺が人形を使ってごっこ遊びをするのが好きだったから、アスカも俺が作り出した幻影だと思っっている」

「想像上のお友達ってこと？」

「でも違う。アスカは本当にいた。あの爆破が起こる前まで居間のソファで寝ていたんだ」

「その時あなたは何をしていたの？」

「受話器を手に持っていた」

「誰と話していたの？」

「誰かわからなかった」

「何を話したの？」

「母親が待つてるから外へ出るって言われた」

「外に出たの？」

「とにかく確認するためにドアを開けた」

「その時見た光景を思い出せる？」

「森の中のような木に囲まれた家だったから、少し離れたところで車が一台止まっていたのが見えた。俺が外に出ると、車から母親が出てきて、もう一人知らない男の姿も見えた」

「それからどうしたの？」

「母親に手招きされて、俺は走り寄った。母親は俺を車に乗せようとしたので、アスカが家に居ると知らせた」



「アスカちゃんはどうなったの？」

「男が連れてくると言って家の中に入っていった」

「その人はアスカちゃんを見つけたの？」

「見つけた」

「それからどうしたの？」

「俺の前に差し出した」

「差し出した？」

「差し出したのはアスカが持っていた熊のぬいぐるみだった」

「それでアスカちゃんは？」

「どこにもいなくなかったって男が言った。そしたら熊のぬいぐるみがアスカだって、俺の母親が言いきった」

「熊のぬいぐるみが？」

「そう熊のぬいぐるみがアスカの正体」

「そしてその後どうしたの？」

「家が突然爆発した」

この部分を語るのが辛いのか、ジョーイは顔を背けた。早川真須美は質問するのを止め、向きを変えてデスクに向かうと何かを書き込んでいた。

暫し沈黙が空間を無に変える。

色がついていない全てが白い部屋の中、机も椅子も簡易ベッドも白一色。光が壁の白に溶け込むように全てのものの存在も白さに同化されていくようだった。

ジョーイは無限に続く空間の中、真っ白い雲の上に置き去りにされ漂っている錯覚に陥る。それが不快感となり、我慢の限界に達した。

全てを忘れてしまいたい。突然の感情にジョーイは沈黙を破った。

「先生、アスカは本当は俺が作り出した想像上の人物なんです。あの爆発もただのガス爆発の事故だった。今ならばつきりとそう思えます。だからもうこの治療は必要ないです。全て俺が作り上げたイマジネーション」

早川真須美はジョーイの発言を無視して腕時計に目をやった。

「今日はここまでにしましょう。新学期が始まったらまた定期的にカウンセリングをすることでもいいわね」

「いつまでこんなことするんですか？ もう架空の話を聞いてもつまらないでしょ」

「架空の話？ つまらなくないわよ。ジョーイの心が覗けるもの。ジョーイはまだ真実を話しきってないのよ。忘れていただけなのか、それとも故意に言わないだけなのか。ゆっくりと過去の話に付き合っついていきましょう」

「だからそれがなんのためになるんですか？」

「あなたの心の傷を取り除いて笑顔を取り戻すためよ」

「俺はそう思わない」

「あら、どういう意味？」

「いえ、別に深い意味は。だってこの心理治療も母が勝手にそうさせているだけだし、俺は別に悪いところなんてない」

「そうかな。私の目には全然普通の高校生らしく見えないんだけど。常に何かを抱え込んで生きることを諦めているような感じがする」

「俺が、自殺をすることで？」

「そうは思わないけど、心の奥にある深い闇を取り除いてあげたいだけよ」

「それは口実で、本当は先生はビジネスもあるから、なんとかお客

を逃したくないだけでしょ。だからいつも引き止める」

「あら、そんな口叩くのね。まあそうね、ジョーイ程のハンサムな患者は手放したくないのは当たってるかも。なんてね。こう言えば満足かしら？」

「先生は本当に冗談が好きだ。それじゃ俺、これで帰ります。ありがとうございました」

ベッドから起き上がり、服を整えてドアに向かった。

「待つてジョーイ、嘘でもいいからもう少し私に笑顔を見せてくれない？」

ジョーイは振り返りもせず部屋を出て行くと、パタンと静かなドアの閉まる音が早川真須美を虚しくさせた。

自然に湧き起こるため息を、ふーっと吐き出し、デスクの端に置いてあつた電話の受話器を手に取りダイヤルをブッシュした。

「今日も何も発展はなしか……」

そして電話が通じると、いかにも気だるく誰かに桐生ジョーイのことを報告していた。

カウンセリングを終え、廊下を歩いて受付を通り過ぎ、ガラス張りの自動ドアを出るとジョーイは下へ降りるエレベーターボタンを何度も強く押した。

エレベーターは5階で止まっている。3階に下りて来るまでイライラするのか、ジョーイは右足を無意識にゆすっていた。

表示ランプが赤から緑に変わると共に、軽やかなベルの音がエレベーターの到着を知らせる。

ドアが開くと既に乗って入っていた数人の乗客が一齐にジョーイに視線を向けた。ジョーイの風貌が一般の日本人と違うと興味本位で

ジロジロ見ている。

面白くないと頭をうなだれるように無表情でジョーイはエレベーターに乗り込み、くるりと向きを変えてドアの前に立った。ゆっくりとドアが閉まると扉はメタル仕様のために後ろの乗客が映りこんでいるのが見える。そして全ての人間がジョーイを見ていた。

ジョーイが日本に来てからこのようにいつも人の視線を感じていた。気のせいと言いたかったが、ハーフと呼ばれるものは珍しがられて日本人の好奇心をそそる。

叫びたいのをいつも我慢しているが、たまに道を歩いているだけで、女子学生が何人か固まって、こそこそとあからさまに本人に分かるように話をするのだけは耐えられなかった。

振り向いて軽蔑の睨みをお見舞いしても、却って黄色い声が飛び交い不快極まりない。

エレベーターのドアが開くや否や、滑るようにジョーイはその場を去る。ビルを出ると太陽の光がまぶしく、恨めしい。これでまた自分の髪の毛が金髪に近づくと思うとやりきれなかった。

自分に西洋の血が混ざっているということだけでも日本で暮らすには目立ちすぎる部分だが、かといってアメリカに戻ってもアジア人と部類されて、いけすかない白人からはチャイニーズとか言われる始末。結局はどっちなんだよと、自分のインディティの確立を妨げられる。

「一体俺は何人だ！」と叫びたくなる。

どこに居ても基本的な状況は何も変わりはないが、日本に住んでからジロジロ見られる回数が増えた。

それは常に誰かに見張られていると感じるほど異常な程に。しかし、本当に誰かが故意にジョーイを監視しているとしたらそれが自分の過去の記憶に関係のあるものだとしたら消えたアスカと家の爆発の消化できない曖昧な記憶。カウンセリングを受けさせられる理由がこれなのだろう。過去に苦しみ、環境の変化の中で妄想を抱き、壊れる道まっしぐらの若き青年。

「くそつ、また視線を感じる」

ジョーイは突然立ち止まり、生み出してしまった妄想の中の監視者確かめるように後ろを振り向く。

側に居た周りの人間達はジョーイとすれ違つては一瞥を投げかけて歩いていく。

ジョーイは鼻でバカにするように笑うとまた歩き出して人ごみの中に紛れて行った。

しかし離れた建物の物影にじつと隠れてジョーイを目で追うものが確実に存在した。

その人物は口元に笑みを浮かべていた。

ジョーイの学校は特別都会とも呼べない、超ど田舎ほど不便でもない、スタンダードな普通のとある町に位置していた。

整った設備、モダンな外見、そして中等部・高等部が一緒になりそれだけでも沢山の生徒が集まる巨大な学校だが、さらにインターナショナルな部分も加わり、一般生徒、外国人生徒、帰国生徒が一度に学べる私立高校であった。

桐生ジョーイは帰国子女としてこの学校に中等部の時から通っている。それまではアメリカで過ごしていた。

規則は守り、宿題もきっちりこなし、テストでもいい点数をキープしては全く問題のない生徒であるが、態度が少し不遜で生意気さが人を近づけさせない。

女生徒には人気があるのに、それすら感心も持たずひたすら無表情でまるでロボットのよう決められたことを黙々とかこなす学生生活を送っていた。

ただ一人、同じ学年のトニー・ライデンだけは常にジョーイと一緒にいる。唯一ジョーイが友達と呼べる間柄であり、なぜなら一緒に住んでいるためにジョーイも無視できない。

日本のことが大好きで、どうしても日本の高校に通いたいとやってきたらしい。

ジョーイの母親の職場の知り合いが留学生を預かって欲しいと頼んだのがきっかけで、高校一年からトニーが居候することとなった。

トニーは長身で細身、金髪にブルーの目をしてそれだけでモテる要素が一杯だが、さらに輪をかけて女好きときているので、気に入った女性を見るとロマンチックにいつも愛を囁いているような男だった。ジョーイの目から見るとトニーは相当なプレイボーイに見える。毎回歯の浮くような言葉を恥ずかしげもなく言うことに呆れている。

ジョーイはそれをいつも見ているせいか、女を口説く行為に辟易してしまい、益々女性には特別興味を示さなくなっては、どこか自分に近づく女性を冷めた目で見てしまっていた。そういう態度を露骨に取るのでいつもあっちの方面の人と誤解を招き、勘違いされる傾向にある。その度に目つきが厳しくなり、益々不機嫌な顔になっていった。

高校三年生にあがったばかりの春、始業式を終えまだ準備期間としてこの日は半日スケジュールだった。

早々と学校は終わり、ジョーイはトニーと家路に向かうために最寄の駅へ向かっていた。

学校は郊外の静かな小高い丘にあり、周りは新興住宅地がこれから立ち並びそうなほどに土地を整備している様子がところどころ目に入る。数年後には立派でおしゃれな街を約束されたように、どんどん建物が建てられ、開発途中の建設ラッシュの景色が広がっていた。

学校から15分くらい歩いてやっと駅に着き、二階にある改札口へエスカレーターを上り、いつものように定期を機械にかざして二人は駅の中に入っていった。

「おい、ジョーイ、このまま帰るのもつままないし、ナンパでもしに街へ出かけないか」

トニーはホームに向かう階段を下りながら話しかけた。

「バーカ、俺がそんな事する訳ないだろ。行きたかったら一人でいけよ」

「お前がいなきやつまんないじゃないか。二人でいい女ひっかけようぜ。お前もたまには女くらい相手にしないといざというとき困るぜ」

「何に困るんだよ」

「お前、まだなんだろ」

「何がだよ」

「分かっているくせに、それともそういうことに興味ないってことは、もしかしたらやっぱりアレか？」

またどこかで聞いたような質問をされジョーイはうんざりして否定するのも面倒臭くなっていった。

「もしそうだとしたらどうなんだよ」

「俺が寝てる時に部屋に黙って入ってきて襲うなよ」

「バカ野郎！ かれこれ二年も俺の家に住んでいて俺が一度でもそんなことしたことあるのか」

「ハハハハハ、冗談だよ。でも俺ジョーイならちよっと経験のために……」

トニーは親指を噛み、しなを作るようなポーズでジョーイを見つめた。

「気持ち悪い！ 冗談でもやめてくれ」

ジョーイはありったけの皺を眉間に寄せて嫌悪感を露にした。

そして階段を降り終わって正面を見たとき、ホームのベンチに同じ学校の女生徒が何かを手に持って必死な顔をしてムキになっている様子が目に入った。



ジョーイが何をしているんだろうと階段を下りた場所で立ち止まり暫く見ていると、その女生徒はドロップの飴玉でも入っているような四角い缶の蓋を開けようとしているところだった。

蓋の境目に爪を引つ掛けて無理に引つ張っていたとき、すぽっと突然蓋が宙を舞い、その勢いで中に入っていたものも一緒に飛び出てしまった。

「あつ」

女の子が声を出した時、すでに中身は飛び散ってあちらこちらに散らばっていた。

それは丸いものだったのでコロコロと四方八方に転がっていく。女の子はベンチから立ち上がり、慌てて落ちたものを拾おうとするが、何個かはホームから線路へと落ちていった。

「あの子何してんだ？」

トニーが側で声を出したとき、ジョーイの足元に丸いものが転がってきた。ジョーイはそれを拾い上げまじまじと見つめた。

「おい、なんだそれは？」トニーが覗き込むとジョーイは「ビー玉」と呟いた。

ジョーイは指でビー玉をつまみながら、必死にビー玉を拾い集めている女の子を暫く見ていた。

その子は黒く丸みを帯びたフレームのダサイ眼鏡を掛け、セミロングの少し赤みがかかった髪を後ろで一つに束ねてとても地味な生徒

に見えた。だが顔の造りはそうではなかった。

眼鏡が邪魔をしていなかったらかわいい女の子だと目立つ顔立ちだった。

ジョーイが黒ぶちの眼鏡から何かの動物に似ているなど思っていたときには、トニーは既にその女の子に近づき、いつの間にか捨てたビー玉を数個手のひらに乗せて目の前に差し出していた。

「What happened? (どうしたの?)」

トニーは日本語が話せるのに、この時気取って英語で話しかけると、女の子は戸惑いながらも「I lost my marble s」と返していた。

トニーはその言葉を受けて高らかに大きな声で笑った。

ジョーイはそのやり取りを少し離れた場所から見ていたが、彼女が言った言葉が少し引つかかる。日本語に訳せば二通りの意味になる。

一つは「ビー玉を失くした」という言葉どおりの意味。だがもう一つ慣用句として「気が狂った」という意味にもなる。トニーは後者の意味としてジョークのように捉えて笑っていた。だが、ジョーイは過去に同じシチュエーションで自分が笑った時のことが頭によぎった。

過去に同じようなことがあったのだ。

『I lost my marbles』

『アハハハ、それって気が狂ったっていう意味にもなるんだよ』

デジャブーを感じた時のように脳がもっと思い出せと刺激する。

あの時、俺はアスカと話していたんだ。

無意識にその記憶を呼び覚まそうとしたとき、トニーがジョーイに手招きする。

「ジョーイ、お前もそれ、この子に返してやれよ」

手に持っていたビー玉をジョーイは見つめた。別になんの変哲もない普通のビー玉。中に黄色い模様がうねる様にして入っている。

ジョーイはそれを持って女の子に近づいて、女の子が手にしていた四角い赤い缶の中にビー玉を落としてやった。

「あ、ありがとう」

女の子は自分の失態を見せたことが恥ずかしいのか、かつこいジョーイが近づいてきたことに恥じらいをもったのか、この上なくあたふたとしている。

そして眼鏡の奥の瞳はジョーイをしつかりと一瞬捉え、そして見つめてはいけなかいのように目をすぐに逸らした。

「ねえねえ、君も両親が国際結婚？」

トニーが聞くと、女の子は答えにくそうとにかく頭を軽く一振りする。

「そっか、まあこの学校に通うくらいだ。バイリンガルは当たり前だし、ハーフも珍しくない」

「あなたは留学生？ 日本語上手いのね」

「ああ、ずっと日本のことが好きで小さい頃から勉強してたよ。やっと念願叶ってこっちに來れた。俺はトニー。そしてコイツはジョーイ。あんたは名前は？」

「私はキノ」

「ふーん。キノか。派手な学生が多い中、あんたは結構地味だね。日本生まれの日本育ちハーフ？」

「あつ、その……」

キノは答えにくそうにしていた。

「おい、トニー、初対面で失礼だぞ。コイツのことは気にしないでくれ。あんたも結構容姿の事で色々言われるんだろ。俺たち血が交じり合ってる特別な目で見られるもんな。まるで見世物の動物だぜ」

ジョーイがお仕置きの様にトニーの耳を引っ張った。

「痛ててて」

「別に気にしてません。それよりもビー玉拾って下さってありがとうございます」

「ただどうしてビー玉なんか持つてるんだ？」

ジョーイはキノが手にしてる赤い缶に視線を落とした。

「あつ、ビー玉好きなんです。さつき駅前の雑貨屋でこれが売ってたのでつい衝動買いしちゃって。中が気になって開いたらあんなことに」

「いくつか減っちゃったな」

「全部失くしたわけじゃないから大丈夫です。それにジョーイも一つ見つけてくれた」

ここでキノに名前を呼ばれてジョーイははっとした。さっきトニーが名前を知らせたとはいえ、その呼び方が昔から自分のことを知っているように聞こえたからだった。

「もしかして俺のこと知ってるのか？」

ジョーイは聞かずにはいられなかった。ビー玉のことといい、昔の記憶が刺激されて何かが飛び出しそうだった。

「えっ？ いいえ、今日初めて会いました。それに私まだこっちに引越して来たばかりで、この辺のことよくわからないんです」

「みたところ、ピカピカの高校一年生って感じだな。それにあんた日本育ちじゃないね。今までどこで住んでたんだい？」

トニーが口を挟んだ。

その時電車の到着を知らせるアナウンスと共に注意を引く音が流れてきた。それにかき消されるようにトニーの質問はぶつた切れた。

電車がホームに入りドアが開くと、三人は同じ車両に乗り込むが、車内は比較的空いているにも関わらず、キノは一礼をすると一緒にいるのが気まずいかのように二人から離れて前の車両に行ってしまった。

「あーあ、どうやら俺たち嫌われたみたいだぜ。なんかショックだな」

トニーがありえないとばかりに目の前の空いている席にドシンと腰をかけた。その前にジョーイが立った。

「お前が変な失礼なこと聞くからだよ。でもどうしてあの子が日本育ちじゃないってわかったんだい」

「ジョーイの名前を呼び捨てにしたからさ。日本で育ってれば呼び捨てに抵抗があつて”さん”とかつけるだろ。それなのにキノは前からジョーイのことを知ってるかのように聞こえたんだ。お前もそう感じたから自分のこと知ってるのかつて聞いたんだろ」

トニーの指摘にジョーイは言葉を失った。トニーにも同じように聞こえていたことがさらに不思議な感覚を呼び起こす。つり革を強く握つては、目の前の移り変わる景色を目に映して、瞳の瞳孔だけが小刻みに揺れるように動いていた。

トニーはジョーイが黙り込んだことで、何事もなかったように鞆から携帯を取り出し、メールをチェックすると忙しく親指が動きだした。

また女の子にメールを入れていると、ジョーイは呆れ顔になった。トニーが暫くメールに集中していることをいいことに、ふとキノを探すように連結部分のドアを通じてジョーイは前の車両を見つめる。こちらに背を向け、扉附近に立つキノが目に入った。

肩に掛けていた鞆から紐がついた何かを取り出し、耳の辺りに触れる仕草をしている。音楽を聴き始めたようだ。

あれはi podなのだろうか、どんな音楽を聴き始めたのだろうかなどとジョーイは他愛無い疑問を抱く。

そうやって暫く観察していると、覗き見しているような気分になっていった。

「キノか……」

小さく呟いた時、何事にも無関心だったはずだったのにと、ジョーイ自身はつとさせられた。

そして電車が大幅に揺れたとき、ビー玉が一つ不自然にコロコロと車内を転がっているのが目に入る。

「あいつまた落していったのか」

そのビー玉はジョーイの元へと、まるで引き寄せられるように転がり、拾わずにはいられない。

だが手にした時、それをキノのところにもでもって行くか迷っていた。

「どうした、ジョーイ？　はん？　またビー玉か。あの子、よく落すな。見かけもぱつとしなかったけど、なんかどっか抜けてそうだよな」

トニーは身を乗り出して、前の車両を連結部分の扉から覗き込みキノの様子を探ろうとする。一緒になってジョーイもまたキノの様子を覗き込むと突然ビー玉を握る手に力が入り、決心したかのように隣の車両に足が向いた。

だがそれとほぼ同時に、向かいのシートに座っていた大学生らしい男が本をパタンと閉じて立ち上がった。その男の行動に気を取られ、ジョーイとトニーは無意識に男に視線がいった。男は澄ました顔で腕時計にちらりと目を移し、前の車両へと歩き出した。

その男の姿は眼鏡をかけ背が高く、ぱりつとアイロンをあてたシャツが真面目な大学生風の印象を醸し出している。背筋を伸ばして歩く風貌は威厳が感じられるほど存在感が漂っていた。

ジョーイは先を越された感を抱き、その男の後を続いて前の車両にいけなくなってしまうた。

男はドアをスライドさせ、連結部分を抜けていく。そしてそのままただ真っ直ぐと歩く。キノとすれ違う時一瞬キノに一瞥を投げたような仕草をとったが、ひたすら前へと歩いていった。

キノは音楽に気を取られているのか、男が車内を歩いていても気がつかずにじっと動かさずドアの附近に立っていた。



「今、前の車両に歩いていった男さ、日本人離れしてるというのか、どこかなんか西洋かぶれしたような奴だったな。読んでた本も洋書だったし。ジョーイはどう感じた？」

トニーはジョーイの様子を伺っていた。

「お前はいちいちうるさいな。昔から何かと周りの人間を観察してはどうでもいいこと並べ立ててくれるよ。よくまあ、そんなに人のこと見てられるよな」

「俺の性分だからね。ジョーイが無関心過ぎるだけなのさ。だけど今の男さ……」

トニーが何かその後を言いかけると、車内から次に到着する駅の名前がアナウンスされ、電車はホームに入り、乗客は降りる準備に取り掛かり始め、気の早いものはドアの前に立ち始めた。大概の乗客はここで降り、それぞれの目的地へと乗り換える。

キノも降りる準備を始めて、ドアから少しだけ離れて開くのを待ち構えている様子だった。

ブレーキがかかり電車が止まる寸前にトニーも立ち上がり、ドア附近へと歩む。ジョーイもそれに続く。

「なあ、さっきあの男のことで何を言おうとしてたんだい？」  
ジョーイが問いかけると、ドアが開き、次々に人が降りていく。それに押されるように二人も電車から降りたとたん、辺りは人であふった返しとなり、ざわざわとしていた。

トニーはジョーイの質問が聞こえなかったのか違う答えを返してきた。

「俺、やっぱり一人でナンパしてくるわ。ジョーイ先に帰っててくれ」

「いきなりどうしたんだよ」

「じゃーな」

トニーは慌てるように辺りをキョロキョロして、ジョーイをその場に置き去り、人ごみの中に紛れていった。あれだけ目立つ容姿なのに、大きな駅では人の波にのまれあつという間にどこへ行ったのかわからなくなってしまった。

「一体どうしたんだ。あいつらしくない行動だ」

そんな独り言もかき消されるほど、人が水のように流れていく。

ジョーイは仕方なく歩き始めるが、手に持っていたビー玉に気がつくときノのことが気になり始めた。咄嗟に辺りを見回しキノがないか探し出した。

トニーですらすらに姿を消した人ごみの中ではキノの姿はもう疾うにそこにはなかった。

ビー玉を制服の背広のポケットに入れ、鞆を肩に掛けなおすとジョーイは乗り換えのホームへと歩いていった。

階段を上り終わり、連絡線を繋ぐ通路の一番端のホームへ向かって歩いている時だった。所々にキオスクや喫茶店、弁当売り場などのちよつとした小売店があり、そこは人がひっきりなしに集まって

はせわしなく動いている。その慌しい場所に立ち止まっている二人の女の子たちの姿が目に入った。

一人はキノだった。もう一人は別の制服を着たキノよりも背が高い女の子。その女の子はジョーイの位置から後ろ姿しか見えなかったが、向かいにいたキノは眼鏡の奥から戸惑いの視線をその女の子に投げかけているように見えた。

ジョーイは無視できずについキノに足を向けてしまう。自分でもなぜそうしたのかわからないまま、無意識に背広のポケットに手を突っ込んだ指先はビー玉に触れていた。

「おい、キノ…… だったな。ほらこれ、電車の中でも落していたぞ」

ジョーイがビー玉をキノに向ける。キノが啞然とジョーイに気を取られたとき、側にいた女の子も振り返る。突然現れたジョーイに一番驚いたのは側にいた女の子の方だった。

「やだ、キノちゃん、この人と知り合いだったの？」

前からジョーイのことを知っているような言い方だった。ジョーイを見つめる目がキラキラと輝いていた。

「あの、その」

何が起こっているのかわからないまま、キノはおろおろしていた。

「ほら、これ、お前のビー玉だろ」

側にいた女の子を無視するかのようにジョーイはキノにビー玉を渡そうとする。キノはそっと手を出してそれを受け取った。

「あ、ありがとう」

「お前、なんか困ってるのか？」

「ちらりと側にいた女の子を一瞥しジョーイが助け舟を出そうとしていた。」

「えっ？ 困ってる？」

「そうだったのは側にいた女の子だった。」

「やだー、私が何か何かキノちゃんに変なことしてるみたいじゃないの。キノちゃん、ちゃんと説明してよ」

「キノはそれでも何を話しているのか、この事態がどうなっているのかすら分からずに言葉を失っていた。」

「もう、キノちゃんらしくない。あの時のキノちゃんと別人みたい」「別人？」

「ジョーイは気になる言葉だけ拾って繰り返していた。」

「あのね、私から説明すると、キノちゃんは私の恩人なの。この間電車で痴漢に遭って困ったところをキノちゃんが助けてくれたの。またキノちゃんに出会ったからお礼を言っただけだったの」

「痴漢に遭った？」

「ジョーイがまた繰り返す。そして女の子をまじまじ見ると、整ったプロポーションに長いつややかな黒髪が突然飛び込む。そしてグラビアの表紙を飾りそうなほどの美しい顔で思いつき笑顔を見せていた。」

「痴漢が寄って来る気持ち分かるほど、ファンがいてもおかしく

ないくらいその女の子は男を必ず虜にしそうだった。

「私、藤沢詩織、光星高校の三年よ。宜しく」

ニコツと微笑むその笑顔には美しさだけじゃなく、知性も備わっているように見えた。なぜなら彼女の通う高校は進学校でも有名だった。

ジョーイもキノもハキハキと元気な詩織の存在感に圧倒されてしまった。暫し沈黙が流れると、詩織はせかすようにジョーイを見つめた。

「ちょっと、名前くらい教えてくれないじゃない」

「お、俺の？」

「他に誰がいるっていうの？」

戸惑いながらもジョーイは弱々しく名前を呟く。詩織はヤッターと飛び上がりそうなばかりに喜んでいた。

「あなたのことはよくこの駅で見かけてたんだけど、話すきっかけがなくて、まさかキノちゃんとお友達だったなんて」

結局はこの女も自分の容姿を珍しがってるただの女にしかみえなくなり、ジョーイの口角が下がって不機嫌になっていった。

「あのね、詩織さんもアメリカに一時期住んだことがあるんだって」

キノが詩織のためを思ってたか、話を弾ませようとぼそつと言った。

「住んでたっていうより、滞在してただけ。でも英語はそんなに喋

れないんだけどね」

それがどう関係あるんだとジョーイは苛つき始めた。話を元に戻そうとまたキノに向かう。

「お前、痴漢撃退したのか？」

キノは突然に話を振られこの上なくあたふたしだすと、チャンスとばかりに、また詩織が口を挟んだ。

「そうなのよ。満員電車の中で私が困っているのを察知したのが、キノちゃん『あっ』って大声出して、押すように私に寄ってきて、『大丈夫ですか』って助けてくれたの」

「だからあれは偶然で、たまたま揺れた時にバランスを崩して近くに居た詩織さんに突進してしまったただけなんです。だからびっくりして声を上げて、そしてぶつかったから大丈夫ですかって言っただけ……」

「いや、あれは違う。ちゃんと計算してやってくれたんだよ。一緒にいた私の友達もキノちゃんの行動はわざとだって言ってた」

何を言っても詩織はいいように捉えているのか、キノは困ったとばかり下を向いていた。

ジョーイはどうも詩織の話は信じられないようで、勘違いされるなど半ば同情するようにキノに視線を向けた。

「それでその後痴漢を捕まえたのかい？」

警察にでも突き出してたらある程度は信じられるとでもいいだけにジョーイは質問した。

「ううん、残念ながらはつきりと特定できなかった。でもそれから私も勇気が出て、いやな時は大声出そうと思った。今度痴漢に遭ったらやめて下さいって主張して派手に動いてやるんだ」

ガッツポーズまで取る詩織の仕草にジョーイは好きにどうぞと冷めた目つきになっていた。それでも詩織は選挙キャンペーンのように売り込む笑顔を崩さなかった。

「あつ、私もう行かなくっちゃ」

腕時計を見てキノは時間を気にしながら叫んだ。そしてジョーイと詩織を残し、逃げるようにさようならと挨拶をして小走りに去っていった。

「あつ、キノちゃん。今度ゆっくりり会おうね」

詩織は咄嗟に声を掛けるが反応もないままキノは一番端のホームへと続く階段を下りて行った。

「あいつ、なんか変な奴だな」

ジョーイがポロリとこぼす。

「キノちゃんってどこか不思議なところがあるけど、あの子なんだか自分の妹みたいでほっとけないって感じがする」

「妹……」

ジョーイはその時、おぼろげな記憶の中のアスカが浮かび上がる。

箱に入っていたビー玉を床にばら撒くアスカ。目に飛び込んだ沢山の転がったビー玉。そして瞬時に同時に叫ぶ。

「86個」

「あたしの方が早かったもん」

「いや、僕の方が0.8秒早かったぞ」

「違うもん、あたしの方が早くビー玉の数を数えたもん」

二人は意地を張っていたが、すぐに顔を見合わせて笑っていた。

ビー玉の数をどちらが早く数えられるか競争してた記憶だったが、瞬時に数を言い当てたというより、数を素早く叫んだ時点でお互い箱に何個入ってるか予め知っていたとしか思えなかった。

「ねえ、ジョーイ」

詩織の呼ぶ声にはっとさせられ、ジョーイは咄嗟に詩織を見つめた。

「よかったらお近づきの印に、これからお茶でも飲みに行かない？」

無邪気な笑顔を振りまかれ、詩織のような美人に誘われたら殆どの男はついて行くのかもしれないが、ジョーイは素っ気無く断った。

詩織はがっかりすると言っより、寧ろ清々しいと言わんばかりに残念とあっさりと声にする。嫌な空気も流れずに元気に「それじゃまた今度ね」と改札口を目指して潔く去っていく。

詩織は生粋の日本人ながらハキハキとしていた。ジョーイは思ったほど悪い奴でもないかと、鼻からふんと息を吐き、どうでもいいやと肩の鞆を掛けなおしてはポケットに手をつ込んで歩き出した。



自分の目指すホームに続く階段を下りかけた時、ふと気がついた。

「そう言えば、さつきキノもこの階段を下りて行ったっけ」

階段を下り切った時、ホームにキノが居ないかジョーイは無意識に探していた。

電車は到着を知らせるけたたましく鳴り響く音をお供にホームにちよつど入ってきたところだった。乗客たちは乗り込もうとぞろぞろと印のついた白線の内側に集まり列になる。

何気なしに人と人との間にふとピントがあつたように、前の方の車両に乗り込もうとしているのキノ姿が浮かび上がった。

ドアが開こうとしたとき、キノは隣にいた女性に気遣い笑顔を見せていた。

相手は小柄でへこへことキノに頭を常に下げている。お互い顔見知りな様子。

その女性は白髪で古風にも地味な訪問着を着て紙袋を提げていた。キノは過度に頭を下げられて恐縮しながらも優しく労わっているように見つけられた。その瞳が優しく眼鏡を通過してプリズム色の光でも出そうだった。

ドアが開くと同時に乗車していた乗客が降り、ホームは一斉に降りてきた人の波が大きく広がり混雑し始める。

それがいい具合にカムフラージュのように働いて、ジョーイはドサクサに紛れてキノと同じ車両に離れて乗り込む。

ちよつど乗り込む客も手伝って、ジョーイは気づかれることもなく、離れた場所で座席に座ることができた。座席は全て埋まり、何人かは立っている。

キノは車両の一番端に設置されている優先座席の前に立ち、前に座っている人と話をしているのか笑顔で対応していた。そこにはおばあちゃんと呼べそうな、先ほどの女性がにこやかにキノに話し掛けていた。

（あいつ何話してるんだ。さっきのおどおどした態度とは全く違うじゃないか）

消極的で自分の意見などはつきりといわないように見えたキノだったが、おばあちゃんを相手にしているときは、八キ八キと受け答えしている。

ビー玉を散りばめてあたふたしていたドジそうな女の子とは思えないほど、しっかりとしていた。

電車内から停車する駅が伝えられ、この列車は急行だと告げている。

学校は新学期が始まったばかりでもあるが、同じ電車を利用すると言うことは何度かキノと乗り合わせていた可能性がある。ただジョーイが意識をしたことがなく気がつかなかったただだが、この時はキノがどこで降りるのかジョーイは非常に興味を持った。

キノを観察するがあまり、知らぬと座席から身を乗り出すように体を前屈みにしていると、隣に座っていた初老の男性がジョーイを見つめていた。ただでさえ顔が目立つ風貌なので、目が合ってもすぐには逸らさず厚かましくじろじろ見続ける。ジョーイは不快極まりなく席を立ちそうになったが、足に力を入れてぐつと堪えて、何もなかったように背もたれに背中を押し付けた。

じいさん、見世物じゃねえんだよ、と悪態をつくようにそっぽ向けることで大いに相手に伝えようとしたが、全く応えてないようだった。

ホームで発車を知らせるベルが響き渡ると、ドアが閉まり電車はゆっくりと動き出す。

ジョーイはキノの様子を伺おうと体を前屈みにするが、また隣のじいさんも反応しだすので、それが鬱陶しくて思うように体を動かすことができなくなった。

次の停車駅まで10分くらいあるだろうか。その間はキノもあの場所から動くことはないだろうと、ジョーイは暫く大人しくしていた。

何もすることがなく、頭の中だけはフルに回転するが、ふとどうしてキノが気になるのか疑問になる。

ビー玉が駅のホームで転がったことがジョーイには脳にこびりつく程、それは衝撃を与えられた。

アスカ。

目の前で突然いなくなった女の子。過去にビー玉で一緒に遊んだ記憶。

アスカもビー玉が好きだった。

何かが引つかかる。

キノと出会ったことが、アスカの記憶を無理にこじ開けようとする。

もしアスカが生きていたら、キノと同じ年頃じゃないだろうか。

ジョーイははっとした。自分はキノにアスカを重ねている。まさかキノが、アスカ……

ふと安易に結び付けてしまったが、ジョーイはありえないと口元を少し上げ嘲笑しながらも、急にそう思いたい衝動に駆られる。

ずっとずっと気になっていたこと。なぜアスカは目の前で消えて、家が吹っ飛んだのか。それともアスカは自分の作り出したイマジネーションなのか。

そしてその頃から目まぐるしく物事が変化しだした。

母と父の離婚。いや、もう前から仲が悪かったのかも知れないが、幼い記憶を辿れば、父親と完全に会わなくなったのもあの事件がきっかけだった。

何を聞いても母親は教えてくれない。教えたくないほどに父親が憎いのだろうか。そしてジョーイはそれから笑うことを忘れていった。

全てはあの爆発事故を見てから自分も同じようにものの見事に吹っ飛んだ。

速度が徐々に落ちていった。次の停車駅がそこまで迫っている。ジョーイの降りる駅ではないが、キノはどうするのだろうか。ジョーイはチラリと様子を伺う。

隣のおじいさんはうとうとと眠っていたので、安心して前屈みに

なれた。

まだ降りる気配も感じられず、キノは優先座席に座ったおばあさんと普通に会話をしている。

あの様子からキノもまた完璧な日本語を話すバイリンガルだった。

普通簡単にバイリンガルと言うけども、いくら片方の親が日本人とアメリカ人だからと言って、自然にどちらの言葉も話せるようになるのは大違い。

言葉話せるようになるには、環境とどれだけその言葉に毎日触れるかが問題である。そしてその機会をどれだけ手に入れるかで単語の蓄積の量が違ってくる。

その国で生まれたものがその国の言葉を話せるようになるのは、常に耳にし生活することで自然に身につくからであり、そこにもう一つ他の言葉を覚えなければならない場合、同じようにもう一つの言語の環境を作らなければいけない。

自分の努力はもちろんだが、そこに親の努力とお金プラスされなくてはその環境を何も無いところから作るのは難しいものなのだ。

ジョーイも言葉に関しては多少の苦労を味わってきたので、キノはどのように育ってきたのだろうと益々興味をそそられた。心のどこかでアスカであって欲しいと訳もなく願う自分。馬鹿馬鹿しい空想と分かっているながら、そう思うことでアスカが存在していたと信じられた。

キノが降りる駅で一緒に下車して声を掛けてみよう。ジョーイにとっては大胆な行動に走ろうとしていた。それと同時に急に胸の鼓

動が激しく打ち響く。感情など顔に出ることはなかったのに、体の中から経験したことの無い血の騒ぎを感じジョーイは誰に指摘された訳でもなく急に恥ずかしさがこみ上げてきた。

無意識に前髪を掻き揚げて落ち着こうと何度も息を吸っては吐く。

電車が停車してドアが開くと降りる乗客はいそいそと車両から出て行った。念のためにキノを見ればまだ穏やかに話し込んでいる。

やはりこの駅で降りる気はなさそうだった。一緒に降りるその時を考えながらジョーイのドキドキはまだ続く。

ホームで『間もなくドアが閉まります』というアナウンスが流れた時だった。キノはおばあちゃんに向かって会釈をしたかと思うと、ドアの附近に向かい閉まりそうなドアをするりと抜けていった。

まるでその時を待っていたかのような降り方だった。一瞬のことで追いかけることもできず、ドアは完全に閉まって電車は動き出した。

もしかして観察がばれていて自分は避けられていたのだろうか。ジョーイは後味の悪い展開に顔を歪ませながら、やられたと思わずにはいられなかった。

だがその時、ジョーイと同じ気持ちを抱いていた男がいた。

その男は閉まったドアに駆け寄り、動く電車から悔しそうに駅のホームを歩いているキノを目で追っていた。拳を作り腹立ち紛れにドアを一度叩いていたが、他の乗客には降りそびれたマヌケな学生に映った。

制服からすると光星高校のものだった。乗り換えの駅で会ったあ

の詩織と同じ学校の生徒だ。

頭がいい生徒ばかりが通うレベルの高い高校だが、頭がいいからといって見かけは必ずしも比例するとは限らない。その男はふくよかな体つきで、髪も変に寝癖がついて全体の雰囲気もつきりとした冴えない風貌だった。

ジョーイはその男の様子を観察して、ふと勝手にストーリーを作ってしまった。

この男はキノの後をつけていた。もしかして、キノがあのような行動をしたのはこの男から逃げるためだったのではないだろうか。

ストーリー！

ジョーイの頭にシャープに言葉が浮かぶ。

男は諦めがつき、ドアの前に立ち静かに流れる景色を見つめていた。またその後姿をジョーイはもんもんと観察していた。

一度抱いた否定的なイメージは、男の印象をさらに悪くしていく。目立たないオタクのような、何かに拘ってネチネチしていてそうで、ジョーイも嫌悪感を知らずと抱いていた。

駅で詩織と話していたときに、妙に落ち着かずおどおどしていたキノ。もしかしたらこの男が近くに居て逃げたかったのかも知れない。ジョーイはあれやこれやと推理を働かせる。そして目つきがきつくなり知らずと睨みをその男にぶつけていた。

先ほどの停車駅から数分後、電車はまた速度を落とす。次はジョーイの降りる駅だった。そしてキノと話をしていたおばあさんも降りるのか、そわそわとしたでして駅が近づいている様子を窓から確認



していた。

電車が完全に停車するとドアが開き、あのストーカー男が真っ先に降りた。ジョーイも他の乗客に紛れて降り、それを盾にしながらストーカーの様子を探っていた。

あいつどうする気だろう。

ストーカーは迷わず降りたホームの反対側に向かい、電車の到着を知らせる電光掲示板で時間を確認しながら、戻りの電車を待つそぶりを見せた。

キノが降りた駅に戻る様子だった。今さら後を追ったところで、キノはその間に逃げてると思うと、ジョーイはそれ以上そのストーカーに感心を持たなくなった。

また同じようなことがあれば、今度は自分がキノに近づいて助けようという気持ちになっているのか、嘲笑う様にストーカーに一瞥を投げてから、ジョーイは改札口に繋がる階段を上っていった。

改札口で定期を機械にかざし、通り抜けたところで、元気に『おばあちゃん』と呼ぶ男の子の声が聞こえた。

男の子が改札口に走り寄る姿をジョーイは何気なく目で追った。

そこにはキノと話していたおばあちゃんが、とろけそうになった笑顔を男の子に向け、改札口から出てくるところだった。

「おばあちゃん！ お帰りなさい」

「あら、聡ちゃん。わざわざ迎えに来てくれたの。よく帰ってくる時間が分かったね」

聡と呼ばれた男の子は野球帽を被り、歯をにたつと見せながらおばあちゃんよりも手に持っていた紙袋を見ていた。迎えに来た理由が土産目的と分かりながらも、おばあちゃんは孫がかわいくてたまらず、優しい微笑を向けて紙袋を強調するかのようによろこびに見せていた。

ガキだなとジョーイはその微笑ましい光景をふんと一蹴するようには踵を返す。だがおばあちゃんと孫の会話から気になるキーワードが耳に入るとその足がまた止まった。

「さっきまでキノちゃんと一緒にだったんだよ」

「えっ、ほんと。で、キノはどこ？」

「それが一駅前で急に用事を思い出したとか言って降りちゃった」

「なんで？ キノのうち、この駅前のマンションじゃなか。何、道草食ってんだろう」

「そうだよ。美味しいケーキも買ってきたし、聡ちゃんも喜ぶから遊びに来てって誘ったんだけどね」

「なんで、お、俺が喜ぶんだよ。でもキノも残念だったな。折角ケーキ食べられるとこだったのに」

「残念だったね。聡ちゃん、キノちゃんに会えなくて」

「ち、違うよ。キノとは今週の日曜日会う事になってるから、別に今日会えなくても……」

誤魔化そうとしてふと首を横に傾げた時、聡はジョーイと目が合ってしまった。

キノについての情報を手に入れるスパイのようにジョーイは二人の会話を真剣に聞いていたため、もろに聡と見つめ合い、面食らってしまった。そのまま目を離してさりげなく去ればいいものを突然のことに頭が回らず固まる。

祖母に本当の気持ちを悟られた聡は持っていきようのない気持ちをぶつけるかのごとくキツとジョーイを睨みつけた。

「何見てんだよ、バーカ！」

「これ、聡、なんて失礼な。どうもすみません」

深々と頭を下げ、おばあちゃんは慌てて聡の腕を引っ張り、ジョーイの顔を見る余裕もないまま小走りに去っていった。

それでもジョーイはあっけに取られてまだ二人を見ている。その時もう一度だけ聡が振り返り、ジョーイに向かってべーっと舌を出して威嚇の態度を示した。

祖母が「これっ！」と注意をしているが、いつしか二人は人ごみの喧騒の中へと消えていった。

「ちえっ、なんだよ、ほんとにガキだ」

ジョーイも遅れてむっとしながらも、立ち聞きしていた事実を認めると自分が悪かったことに気がつく。身から出た錆とでも言いたげに少し長くなった前髪をパラリと掻き揚げ、チエツと舌打ちが自然に洩れるとゆっくりと足を動かした。

何をやってるんだと自分が情けなくなる。

キノがばら撒いたビー玉から、刺激された記憶が好奇心を呼び覚まされ、ほんの小さな出来事をきっかけに、急激に心がざわめき出す。

自分でも不思議だと戸惑い気味に無意識に下唇を噛んで眉間に眉を寄せていた。

駅を出たところで、聡の言葉を思い出す。

『キノのうち、この駅前のマンションじゃなか』

キノは俺と同じ町に住んでいるのか、そしてこの駅の近くに彼女の住んでるマンションがあるのか。

ジョーイは辺りをキョロキョロしだした。

駅は南口と北口に分かれ、聡達は北口から出て行った。ジョーイが出てきた南口は駅から大きな歩道橋が大型ショッピングセンターに直結している。その下にメイン道路があり車やバスが忙しく通っている。さらに周りはファーストフードや色を添えるような小さな店や雑居ビルが固まっていた。

この南口の駅前だけは賑やかだったが、北口は全く正反対でこれといった活気はないが、図書館や市民ホールといった公共施設が集まっていた。

高いビルが目には止まればほとんどマンションで、この中のどれかがキノが住んでいるものに違いないと、それを知りたいのか、ジョ

ーイはまじまじと360度体を回し建物を眺めていた。

帰る駅がここなら、尚更キノが途中下車した行動がおかしかったことは決定つけられた。やはりストーカー定義は正しいとジョーイはキノが取った行動に納得していた。

あいつ大丈夫だろうか。

無事にこの駅に戻ってこれるのか心配しながらも、ジョーイは一度駅を振り返るが、何もできないと気がつく諦めて歩き出した。それでもどこか足取りは重く、このまま無事にキノが戻ってくるまで駅で待っていたい感情に襲われた。

しかし出会ったとき偶然を装うように嘘がつけそうにないと分かると、振り切るように急に小走りになった。

駅から歩いて10分程の距離。オアシスのような駅から離れるとあとは砂漠地帯のように何も面白い建物はなく、住宅が連なる。

比較的新しい洋風造りの家が立ち並ぶ一角にジョーイは住んでいた。

ごく普通の家だが、母子家庭の親子には部屋が余る。だから留学生を受け入れることになり、トニーが同居することに何も抵抗はなかった訳で、トニーを受け入れたことで部屋代としてのお金が入るのは、ラッキーなことのように思えた。それでも儲かるほど貰ってわけではないが。

お金にはこれといって困ることはなく、母親がフルタイムで責任を負かされるような仕事についてるため、母子家庭ながらも少し余

裕がある暮らしができていた。

角を曲がった時だった。普段静かな自分の家の前にこの時タクシ  
ーが停まっているのが目に入る。

何事だと不審な顔つきで急いで家に走りよりタクシーを尻目に門  
を開けると、微かにバタバタと廊下を走る振動がドアの内側から伝  
わってくるのを感じた。普段この時間は誰も家に居ないはずだと、  
恐る恐るドアを開けると玄関先で母親の桐生サクラがちょうど靴を  
履いているところに出くわした。

「あっ、ジョーイ！ ちょうどよかった」

「母さん、一体何が起こったんだ」

ジョーイは母親に声を掛けながら玄関に置かれたスニーカーを  
一瞥する。

「お母さん、今からビジネスストリップなのよ」

「えっ、そんなの言っただけじゃなかったじゃないか」

「だから急なのよ。行くはずだった人が急病で急遽行けなくなって、  
仕方なしに私が行くことになっちゃったのよ」

「どこへ？」

「ニューヨーク」

「はっ？ 一体どれくらいいくんだよ」

「1週間は帰ってこれないわ。だからその間トニーと二人でなんと  
かやってちょうだい。お金はテーブルの上に置いた。足りなければ  
自分の小遣いから立替えといて」

「えっ、なんだよそれ」

「とにかく急いでいるの。ごめん。向こうに着いたら電話する」

「落ち着けよ。パスポートちゃんと持ったのかよ」

「あっ！ 忘れた」

サクラは折角履いた靴を脱ぎ、パニツク寸前の奇声をあげながら慌てて奥へと走って行った。タンスの引き出しを開けたのかごそごそする音が聞こえて来る。

「大丈夫かよ」

ジョーイは渋さを味わった顔をしてメタリックシルバーのスーツケースを眺めていた。

そのスーツケースにはこすれたような後や傷がついている。まるで母親の苦勞が刻まれているように思えた。

若い頃はそれなりに美しく、秀才と言われるほどの頭腦の持ち主と持てはやされたと聞いている。

40過ぎてもおばさんきつた老け込みはないが、艶やかさは衰えている。

離婚後も少し力を入れておしゃれをすれば再婚も可能だったかもしれないのに、自分のせいで苦勞かけているのかもしれないとジョーイは子供心ながら負い目を感じていた。

国際結婚に失敗して日本に戻ってくるというだけで世間の好奇心の目にさらされる。

ましてや派手な容姿のハーフの息子がいるとなると、益々足を引っ張っているように思えた。

本人はそんなことも気にせずサバサバとした明るい性格で、母親らしからぬ友達みたいな付き合いを装っているが、それが無理をしているんじゃないかと思わずにいられなかった。

またドタドタと音が聞こえると、サクラは話す余裕もないまま靴

を履く。その姿をジョーイは憂いな眼差しで黙って見ていた。

サクラは準備が整うと、背筋を伸ばしジョーイに笑顔を見せ、そしてスーツケースの取っ手を握って勢いよく転がすが、自分の方がつんのめって転げそうになっていた。

「もう、危なっかしいな。スーツケース持ってやるよ」

いたたまれない気分でジョーイが乱暴にスーツケースを取り上げる。

それが彼なりの精一杯の優しさだと理解しているので、サクラは少し涙目になりながら、ありがとうと呟いた。

スーツケースが外に顔を出すと、見計らってタクシーのトランクが空くポンという音が聞こえる。ジョーイがトランクを開け、スーツケースを入れた。その後は強くトランクの蓋を締め、わざとらしく手をパンパンとはたく。

母親はアタックするかのようジョーイを羽交い絞めに抱きしめる。がっしりとした体躯、身長も越されてすっかり成長した息子に改めて気がついた気分だった。

「おい、やめてくれよ」

嫌そうな顔を装うが、本当は母親の急な出張に少しは心配なのかジョーイも抵抗することなく大人しくしていた。

「じゃ、行って来るね」

母親がタクシーの後部座席に乗り込むが、ふと動きを止めて急にシリアスになりジョーイを振り返る。



「ジョーイ、くれぐれもトニーに女の子連れ込むなって釘を刺して  
いてね。パーティーは絶対禁止だから。あなたもね」

「トニーと一緒にするなよ。わかってるから。とにかく母さんも気  
をつけてな。土産忘れるなよ」

母親はジョーイを信じきっている笑顔を見せた。そしてドアが閉  
まると、タクシーはすぐに動き出した。

最後までジョーイはその車を目で追い、見えなくなると目まぐる  
しい出来事に疲れがどっと湧いてきた。

深いため息が自然に洩れた後、猫背のように体が丸くなり、ゆっ  
くりと家の中に入っていく。

母親が暫くないないと思うと静寂さが寂しさを漂わせる。いい年し  
て恥ずかしくなり、静けさを打ち破るようにエヘンと喉をならすと、  
急激に渴きを覚え、キッチンに向かった。

ダイニングのテーブルの上に白い封筒と素っ気無い箇条書きのよ  
うなメモが目に入る。

『急に出張が入った。1週間分の食事代。無駄使いしないように』

「あの人らしい」

なんだか笑えてきた。

封筒を手にとって中身を調べると3万円が入っていた。贅沢しな  
ければ一週間の食事代としては余裕の金額だ。その封筒をまた無造  
作にテーブルに放り投げる。

まあ、なんとかなるだろうとその時は軽く考えていた。

冷蔵庫を開け、中から冷えた飲み物を取り出し、それを持ってリビングルームのソファに座り込んだ。

なんだか疲れたとばかりに、ボトルのキャップを外しゴクゴクと飲み物を喉に流し込む。

落ち着いたところで、静まり返った部屋をおぼろげに見ながらジョーイは丸いものがコロコロと床を転がっているイメージを抱いていた。

キノが転がしたビー玉だった。

そのイメージはいつしかテレビ番組で観たピタゴラ装置ともいうのか、計算されていくつかの仕掛けを作動させながら転がり続けて途切れることなくゴールに向かうビー玉を思い出させる。自分自身の中でも同じように次々と反応して何か動き出したように思えた。

最後にどのような結果が待っているのか。  
いいことなのか悪いことなのか。

ただ気分は落ち着かない胸騒ぎを覚える。

「ビー玉……そしてキノ。それから I lost my marblesか…… アスカはあの時失くしたと言ったビー玉見つけたんだろうか。それに俺はアスカと一体何をしていたんだ。ビー玉、ビー玉……コロコロ、コロコロ、転がり続ける。そのうち俺の記憶も溢れ出る。ビー玉、ビー玉、失くしたビー玉よ出て来い」

ブツブツと意味もなくジョーイは呪文を唱えるように呟いていた。

一気に残りの飲み物を飲み干すと、ジョーイはテーブルに置いていた封筒をまた掴み、中から1万円を抜いた。そして普段着に着替

えて買い物に繰り出す。

行き先はもう決まっていた。駅前のスーパー。もしかしたらキノに会うかもしれないことを期待して。

ジョーイはスーパーの前に来たものの素通りし、そのまま足は駅を指す。

改札口の前まで足を運び、辺りをキョロキョロして誰が見ても人を探していると露骨にわかってしまう姿を晒してしまう。

電車が入ってきた直後だったのか、下車した客が改札口にぞろぞろと集まってきた。

ジョーイの胸が高まる。

だが、ふと自分は一体何をしているのだろうか、と我に返ってしまった。

キノに会ったところで何を話すつもりなんだ。

いきなり、もしかして君がアス力なのかと問いかけるつもりなのか。

何の根拠もなく、この日初めて会ったばかりだというのに、気になるというだけでそんな話を持ち出してどうするのだろうか。

ジョーイ自身なぜそう思ってしまうのか、自分でもわからなくなってきた。いつもの自分らしくないと、思い出したように無表情になつて踵を返す。

すると後ろから肩を叩かれた。

ジョーイははっとして、唾をぐくりと飲み込み振り返った。

「うそ、私のためにわざわざ迎えに来てくれたの？」  
猫なで声でしなを作り、目をパチパチ上向き視線で見つめる姿がそこにあった。

思わずジョーイは手が出て、その人物の頭を叩いていた。

「トニー、ふざけるのもいい加減にしろ。注目的になってるだろうが！」

「なんだよ。これぐらいの冗談も通じないのか」

「人前では変な行動するなってことだ。ただでさえ目立つというのに」

「ジョーイは周りを気に過ぎなんだよ。なんでそこまで堅物なんだもつと素直になってみるよ。人生は楽しいぞ。俺なんて日本に来てからモテてモテてバラ色の人生だぜ。しかも英語話すとさらにかっこいいーとキヤーキヤー騒がれる」

「お前は調子に乗りすぎなんだ。ちよつと白人で青い目の金髪なだけでカツコイイとちやほやする女達なんて中身なんてない奴らだぜ。バカバカしい」

「いや、俺は有難い。美味しい思い一杯させてもらってるよ。日本女性最高！」

トニーはすれ違う女性達に気軽に笑顔を見せて手を振っていた。  
ジョーイは勝手にしろと歩き出して無視をした。

「ところで、ジョーイ、なんで服替えてこんなところにいるんだよ。まさか誰かと待ち合わせ？ デート？」  
「そ、そんなんじゃない」

キノに会いたくて偶然を装ってうろろしてたとは言える訳もなく、平常心を保とうとしているが、自分が取った行動自体が異常ですっかり動揺していた。

「なんか怪しいな。俺に隠し事でもしてるのか。なんだよ。正直に言っちまえよ」

こういうときトニーはしつこかった。いい加減なようできて、人一倍物事をきつちりと把握しないと気がすまない性格。少しの変化も見逃さないくらいにいつも鋭く目を光らせる。

「そつちこそ、ナンパしにいった割には早く戻ってきたけど、結局上手いかなかったのか。お前らしくもない」  
ジョーイはなんとか話を逸らそうとした。

「ああ、いいのが居なかったんだ。やはり自分から声を掛ける時は飛び切りの女じゃないと意欲がわかないってもんだ。そんなことよ、早く教えるよ。一体ここで何をしてたんだよ」

逸らそうとした話もあっさり和不発に終わってしまった。

自分でもいつもと違うと感じている時にトニーにしつこく問いただされては益々ジョーイは誤魔化しようがなかった。返答に困っていた時だった。

「おい、あれ見ろよ」

トニーが歩道橋の斜め下を指差す。

話がそれたとほつとしたのもつかの間、またジョーイの心臓はドクツと大きく一度膨れ上がり、びっくりして目を見開いた。

キノだった。歩道橋下に向かって大型犬と一緒にこちら側に歩いてくる。

(うわぁ、ほんとに見つけちゃった)

真下の歩道橋下にさしかかり見えなくなると、二人は反対側の欄干へすばやく走りより、またキノの様子を上から覗き込んだ。

ジョーイは棒立ちになり歩いているキノの姿をじつと観察するように見ていた。

キノはピンクのフード付きのパーカーにジーンズを穿いている。あれから無事に戻ってきて服を着替えていた。

「あいつ、ここに住んだのか。でもあの犬なんて漢字がついた垂れ幕のようなものを背中に背負って歩いてるんだ」

トニーは漢字があまり得意ではなかったので読めなかったが、そこには”訓練中”と書かれた服を着て、バーの付いたハーネスを体に装着させたラブラドルレトリバーがキノに連れられて歩いていた。

「あれ、もしかして盲導犬じゃないか？」

ジョーイも不思議そうに答える。

犬は時々立ち止まったり、座ったり、キノの様子を伺いながら動いている様子は盲導犬として使命を果たしているように見えた。

二人は暫くキノと犬の様子を上から眺めていた。

「あいつ、眼鏡掛けてるけど、盲導犬が必要なほどそんなに目が悪いのか？」

「そんなことある訳ないだろ。あれは訓練してるんだよ。あの漢字は訓練中って書いてあって、すなわちトレーニングって意味だよ」

トニーの質問にジョーイは答えてみたものの、なぜ盲導犬の訓練なんだろうと首をかしげた。

キノが交差点の角で立ち止まり、犬も側で座り込む。その時、二人の場所から30メートル先くらいに居た。

この時間帯は車の量も少なく、人通りもまばらだったので見失うことなくキノの様子がよく見えた。

キノはパーカーのポケットに手を入れ何かを取り出しながら、角にあるガラス張りのコンビニの中の様子をうかがっている。

手に持っていたものを耳にあてたところを見ると携帯電話を掛けていたらしい。しかし相手が出なかったのか、またはろくな会話をしなかったのかすぐにポケットに直していた。

次に、掛けていた黒ぶちの眼鏡を外し、またポケットから何か黒いものを取り出すと今度はそれを顔につけた。サングラスだった。

ジョーイもトニーも何をしているのだろうと黙ってその様子を眺めていた。

キノは犬のハーネスをしっかりと握り直し、一緒にコンビニの中へと入っていく。

「なあ、ジョーイ。キノは一体何がしたいんだろう」

「さあ……」



首をかしげることしかできなかった。

二人はキノがコンビニから出てくるのを暫く無言で待つ。

暫くして自動ドアが開いた時、キノと犬が猛ダツシユして飛び出してきた。そして交差点の角をさつと曲がり、あつという間に二人の視界から消えた。

「おいつ、今、なんか逃げてなかったか？ あいつなんかやばいことしたんじゃないだろうな」

トニーの言葉でジョーイはありえるかもと頷いた。

二人は顔を合わせたのもつかの間、こうしてはいられないと咄嗟に走り出した。

駅のホームでビー玉をばら撒いた様に、またドジなことをして逃げたのではと思うと自然と好奇心がうずく。

二人がコンビニの前に近づこうとしたとき、パトカーのサイレンの音が聞こえ出した。そしてそれは見事にコンビニの前に駐車した。パトカーの中から警官二人が血相を変えて出てくると颯爽とコンビニの中へ駆け込んでいった。

ジョーイとトニーは恐る恐る外から中の様子を覗きこんだ。

パトカーの到着で辺りは騒然となり、野次馬が集まりだす。さらに他の警官が現れ、コンビニの前はあれよあれよと警戒態勢となり、緊張感が高まった。

ジョーイとトニーは詳しく知りたいとばかり誰よりも先頭で身を乗り出すが、あっさりと店の前に立って見張っていた警官につき返された。

その時チラリとレジ附近が垣間見れ、誰かが床にうつぶせに寝転がっているのが目に飛び込む。

「一体何が起こってるんだろう。キノが関係しているんだろうか」  
トニーの知りたがりやの首突っ込み主義が発揮し、なんとか状況を把握しようと首を伸ばしたり角度を変えたりと落ち着かない。

「なあ、ここで見ているより、キノを追いかけて直接聞いた方がいいと思わないか。今なら追いつけるかも」

ジョーイが提案すると、トニーもいい考えだとばかりに大きく振りかぶる。

二人が行動を起こそうとした時、コンビニのドアが開き、また二人の足取りは止まった。

警官二人に支えられ、ニットの帽子を被り白いマスクで顔を半分覆い、サングラスを掛けた男が片方の足を引きずるように出てきた。引きずっている足のズボンの裾が引き裂かれたように破れている。

その男はパトカーの後ろに乗せられ連れて行かれた。  
コンビニの中ではまだ他の警官が店員から様子を聞いている。

「おい、あの男の足見たか？ あれ、もしかして動物が噛んだ跡なのか」

ジョーイの言いたいことがわかるのかトニーも「盲導犬ってどう猛犬なの？」と語呂合わせのように返していた。

「とにかくキノを探そう」

ジョーイは走り出す。その後をトニーが追いかけて、二人は角を曲がった。暫く辺りを探すが、キノの姿はどこにもなかった。

トニーはすれ違う人、特に女性に声を掛け盲導犬を連れた女の子を見なかったかと訊ねていた。

歩道橋や信号、曲がり角もあり、真っ直ぐ向かったとは考えられずジョーイはまたやられたという気持ちを抱く。

行動が突拍子もなく逃げ足が速い。キノという存在が益々ジョーイの中で色濃くなるばかりだった。

「ジョーイ」と諦めの意思表示としてトニーが呼ぶ声が後ろから聞こえた。ジョーイはすつきりとしなないままトニーの側に行き、お手上げのように肩をすぼめたジェスチャーを見せた。

「また明日、学校で見つけて聞けばいい。同じ町に住んでるのなら朝、電車で会えるかもしれないしさ」

「そうだな」

ジョーイはトニーの言葉に納得してコクリと頷いた。これで堂々

と声をかけられる口実ができたと思うと少し気が晴れた。

「それより、腹減った。ランチまだだった。もう3時じゃないか。これじゃ夕飯になっちまうな。サクラは今日何を作る予定だ？」

「あつ、そうだ。母さん、さつき出張でニューヨークに行っただった。一週間戻らないって」

「えっ、それほんとか」

トニーは意味ありげに白い歯を見せてニタついた。

ジョーイは何を考えているかすぐ読めて、瞬時に釘を刺す。

「おい、パーティーも女も禁止だから、あまり露骨に喜ぶな」

「堅いこというなよ。なあ、折角のチャンスだ。ここはちよつと楽しもうぜ」

「絶対にだめだ。変なこと企んでいたら容赦なく出て行ってもらうから」

「ちえっ、ほんとに堅物だな。というより、母親のいいなりのマザコンか」

なんとも言えと、ジョーイはプイと横向いてそれ以上何も言わなかった。トニーはジョーイを怒らすことだけは避けたく、ズボンのポケットに手をつ込み、面白くないと言いたげな目つきを向けながらも大人しく言うことを聞くことにした。

二人は無言のまま歩く。そしてまたコンビ二の前にやってきた。

警察官の姿はそこにはなかったが、代わりにどこでネタを嗅ぎ付けたのか、ローカルな放送局のロゴがついたテレビカメラを抱えたマスコミが駆けつけていた。

「今夜のニュースで詳しいことがわかるかもな」

トニーが先ほどの言い合いは忘れたと言わんばかりにポツリと洩らす。

「ああ、そつだな」とジョーイはコンビニの中を見渡しながら歩いていた。

駅前のスーパーの前を通るとジョーイが顎を突き出すように首を振り「中に入るぞと」トニーを誘う。ジョーイがカゴを持ち、トニーは家来のようにただ後ろをお供するだけだった。

ジョーイは適当に食べたいものを手に持ち、素っ気無くトニーに形式的に意見を求むが、携帯電話をいじくって上の空のトニーは適当に「OK」となんでも軽く相槌をうっていた。

魚売り場に足を運ぶと生け簀の水槽があり、生きてる魚が泳いでいた。小さな男の子がそれを眺め、魚の数を指で追って数えていた。

動き回る魚に手こずりなかなか満足いくように数えられないでいる。ジョーイは生け簀をチラッと見てそして子供の側を通り、さりげなく21匹と呟いた。

男の子はきょとんしてジョーイを振り返り、そして母親の側に走っていった。何か話し込んでいるみたいだが、母親は適当に聞いて商品を選ぶのに忙しい素振りをしていた。

折角の遊びを邪魔してまじかっただかなとジョーイは少し口元を歪ませた。

携帯の操作を終えたトニーは、携帯を鞆にしまいながら皮肉るように口を開く。

「お前さ、本当の魚の数も数えてないのに、いい加減なこと言って小さな子供をからかうなよ」

「数えたよ。数えたから21匹って答えたんだ」

「あんな一瞬でかよ。うそだ」

「だったら数えてみな。ちゃんと21匹いるから」

トニーは水槽を見つめ数え出した。

「あつ、ほんとだ21匹いる」

「だろ？」

「でもこういうの、なんていったっけ。そうそう”まぐる”！」

ジョーイは首をかしげ、暫く考えて気がついた。

「ばか、それを言うなら”まぐれ”だろ！」

「なんだ自分で認めてるじゃないか。やっぱりそうなんだよ」

ジョーイはどうでもよくなり、ハイハイと相槌して他の食品に目をやった。二人は他愛もない会話をしながら買い物続ける。

レジで清算し、商品を袋に詰めているとき、ジョーイはふと視線を感じ辺りを見渡した。

「どうした？ 知ってる奴でもいたのか？」

「いや、なんか誰かが見ていたような気になった」

「そりゃ、俺がいるもん。皆どうしても見ちまうんだよ。そのうちサインしてとか来ちゃうぜ」

「そうだよな。トニーが居ればどうしても目立っちゃうな」

口ではそう言ってみたが、ジョーイにはどうしても監視されている被害妄想が抜けきらなかった。

二人がスーパーから出て外に出ていく。その姿を客に紛れて見ている輩が本当にいた。そしてそいつは携帯を取り出して指先を忙しく動かしていた。

「あーもう腹へった」

家に着くなりトニーは居間のソファアームに転がりへたり込んだ。

「ジョーイ、早くなんか作ってくれ」

「おい、俺一人にさせる気かよ。自分の分は自分で作れ」

ジョーイはテーブルの上に買い物袋を置いて、中の物を取り出しては冷蔵庫の中に入れ出した。ついでに現金の入った封筒をキャラクターのついた磁石で冷蔵庫の扉に貼り付ける。

トニーはリモコンでテレビを操作しながらけだるい声を出した。

「お前の方が料理できるだろ。なんでもいいから作ってくれよ」

「それじゃ片付けはトニーがしろよ」

「イエッサー」

リビングルームの壁に掛けられた時計を見れば、4時を過ぎていく。キノのことで頭が一杯で昼ごはんを忘れていたことが急に思い出され、ジョーイも急に腹の虫が騒ぎ出した。

暫く目を瞑り献立をイメージして、目を再びあけたときにはテキパキと行動に移す。

しゃかしゃかと米をといで炊飯器にしかけ、その間に他の料理に取り掛かる。

規則正しい感覚で包丁がまな板の上でステップを踏む音が響く。次に熱したフライパンに油を注ぎ、材料を放りこめばシューっという音が心地良く広がる。そして香りがほんわかと立ち上った。

トニーは台所で料理しているジョーイに魅了されていた。

「ジョーイはほんとに器用だよな。何をやらせても上手いよ」

「作って欲しいからってお世辞なんていいよ」

「いや、本気で言ってるんだけど。ジョーイはいつ勉強しているのかわからないのに、成績優秀。記憶力もいいし、ほとんどのことに興味なくせに知識は豊富でよくいろんなこと知ってるんだよな。クイズ番組でいつも答え先に言うしさ」

ジョーイは褒められても喜ばず、料理に集中する。フライパンを持ち上げ手首を動かすと、材料がきれいに宙に舞っていた。

「トニーだって語学に長けてるじゃないか。日本語だってネイティブと殆ど変わらないし、異文化の生活対応力は素晴らしいよ」

「だって、それは俺は俺は日本が好きだし、日本語勉強したいし、日本の女の子といちゃいちゃしたいから自然とやる気がでてそうなっちゃった。だけどジョーイは違う。根っからの秀才というのか、ギフトティッドだよ」

ギフトティッド。神から与えられた能力。生まれつき持っている特異な才能。

ジョーイの手元が止まった。

『ジョーイはギフトティッド以上の特別な選ばれた人間なんだぞ』

不意に思い出す、いつか父親から言われた言葉。暫くその言葉に縛られて動けない。

おぼろげな過去の記憶が薄っすらと浮かび上がりそうになったと



き、じりじりとフライパンの上で焦げ付いた煙が漂い、ジョーイははっとして慌ててフライパンを何度も揺らした。

トニーは空腹で耐え切れずジョーイの側に来て、つまみ食いを試みる。

あつさりとしてジョーイに手をはたかれて首をすくめ、退散するように自分の部屋に服を着替えに行った。

「ご飯の支度が整い、ダイニングテーブルで二人は「いただきます」と手を合わせる。トニーはそのとたんにかっつきはじめた。

「ベリーグッド！」

素直に喜んで食べるトニーにはジョーイも心なしか嬉しかったが、謙遜するように表情に表さず静かに口を動かしていた。

「ジョーイと結婚したら楽だろうな。ジョーイが女性だったら俺、即結婚申し込んでやる」

「バカ」

「だけど、ジョーイは高校卒業したらどうすんだ。そろそろ進路考えるときだろ。やっぱり大学行くよな。お前ならハーバードも目指せるんじゃないのか」

「まだ何も考えてないよ。目的もなくただ大学で学ぶなんてできっかよ」

「ジョーイはなんでもできるから、後は何がやりたいか早く決めるんだな」

「そういつトニーはどうすんだよ。このまま日本の大学に進むつもりか？」

「そうだな、日本語がいくら話せてもそれプラス何かがあれば就

職に結び付けそうもなさそうだし、俺も何を学ぼうか迷う。できたらこの先もずっとジョーイと共に居たいぜ。なあ一緒にの大学いこうか」

「小学生じゃあるまいし、自分の道は自分で切り開け」

「へいへい、ほんとにノリが悪いな。でもそういうところも含めてジョーイのこと俺は好きだぜ」

トニーは茶碗と箸を持ちながらウインクを投げかけていた。

背筋に寒いものが走ったが、それでもジョーイは平然として黙々と食べ続けた。だが口には出さないがトニーは親友と呼べるほどの仲になってるのは自分でも認めていた。

食事が終わり、トニーは約束どおり食器洗いをしていた。ジョーイはソファアに座りテレビのリモコンを握り止まることなくチャンネルを変える。コンビニで起こったことがニュースになってないか探し続けていた。

「おい、ジョーイ。落ち着いて一つのニュース番組だけ観ておけよ。それにあの出来事がニュースで取り上げられるとも限らないし」

トニーの言う通り、素直にリモコンを置いた。

トニーは片付けを終え、ジョーイの隣に腰掛け一息ついた。

「ところどころ、話蒸し返すけど、俺が帰ってきたとき駅で何をしてたんだ？」

キノの出現で気を取られてすっかり忘れていたが、トニーのしつ

こさに辟易して顔が露骨に歪む。それが却ってまずいことを聞かれて益々怪しいとトニーの目つきが鋭くなった。

「別に何もしてないよ。買い物しようと思っただけで駅前まで行ったら、ぼーっと歩いていたら通学の癖で駅までいつちまったただけだ」

こんな理由で誤魔化されるわけがないとは分かっていたが、ジョーイはここまでなぜ自分の行動が気になるのかトニーの拘りが病的なものに思えてきた。

「どうしてそんなに俺のこと一々気になるんだ。俺が何しようと思っただろうが。そう言えばトニーは何かと目を光らせて物事を見ているよな。そう言えば電車の中で席を立った男。あれも気になって何か言おうとしてたけど、何か気になったことでもあったのか？」

「えっ？ お、俺そんなこと言ったか？」

今度はトニーが慌て出し、はぐらかしてきた。

「どうした、視線が泳いでるぞ。あの男のことで何かあったのか？」  
「いや、別にないけど、なんかかつこつけて気に食わなくてさ、ほら、俺たちを意識してさ、自分も英語話せますって言う挑戦的な態度に見えたんだ」

「そういえば、なんか変に威厳があって、気取ってたように見えた」  
「なっ、そうだろ」

結局お互い聞かれたら困る共通が生まれてその話はどちらもかき消された。ジョーイもトニーも隠し事をされてる核心を持ったまま、何かしつくり来ない表情で怪しげな目つきをぶつけていた。

その時だった。聞きなれた町の名前が聞こえ、ブラウン管から見慣れたコンビニの映像が流れてきた。

「あっ！」

二人とも一瞬にしてテレビ画面に体を突き出してのめりこんだ。

「……のコンビニエンスストアで強盗未遂事件がありました」  
アナウンサーの読み上げるニュースに、二人は同時に声をあげた。

「強盗未遂事件!？」

「ニット帽を被り、マスクとサングラスで顔を覆った男がナイフを向け、店員に金を出せと脅しましたが、その時突然犬が入り込み強盗に襲い掛かるといふハプニングがありました。強盗が犬に襲われてナイフを落としたところ、コンビニの店長が機転をきかして取り押さえ、事件は未遂に終わりました。その時店内には店長ともう一人の従業員、そして客が一人いましたが怪我人はいませんでした。その様子は監視カメラに収められていました」

テレビの画面では雑なモノクロの映像に切り替わり、レジの斜め上辺りからの角度で強盗の顔と従業員二人の頭が映し出されていた。

強盗の手からきらりと光り、ナイフを握っているのが確認できる。突然のことに固まる二人の従業員。その時だった、横からあの盲導犬が飛び出して強盗に飛び掛った。強盗は押し倒される形で床に倒れたが、カウンターが邪魔になって体が隠れてしまった。そして犬が激しく尻尾を振って動き回っている様子がチラリと見え隠れしながら映っていた。

ジョーイもトニーも啞然としてその画面に釘付けになっていた。

犬が強盗から離れた時、コンビニの従業員がカウンターを飛び越え強盗を押さえつけているところでその映像は終わった。

キノはその映像ではどこにも映ってなかった。

「トニー、信じられるか。あの犬、キノが連れてた盲導犬だよな。訓練中と書かれた服も一瞬だったけど見えたよな」

「ああ、そうだよな。盲導犬って人襲うんだな」

「違うだろ。問題はそこじゃない。俺が言いたいのはあれが偶然の出来事なのかってことだ」

「そうじゃないのか、だってキノはあの後急いで逃げてたし、強盗とは知らずに人襲ったと思っただんじじゃないのか？」

「偶然にしてはできすぎてると思わないか。あの時、キノは強盗がいると分かって犬を連れてコンビニに入ったとしか考えられない」

「おい、おい、考えても見るよ、キノは女だぜ。ナイフを振りかざした強盗と分かって自ら危ない目に遭いに行こうとするか？」

「じゃあ、どうしてあの時コンビニに入ったんだよ」

「あいつ、携帯電話持ってたじゃないか。あの時電話が掛かってきて、誰かから何か買って来てくれて言付かったんじゃないのか。」

偶然コンビニの前に居たから、それで盲導犬の訓練中とはいえ、犬を連れて入るには抵抗があつて、サングラスをかけて目が不自由なフリをしたんじゃないだろうか。そしたら強盗がナイフ持ってたから、犬がビツクリして襲ってしまった。光るものを見たら興奮する犬もいるし、キノはやばいと思つて、犬が戻ってきた時にダッシュで逃げた」

ジョーイはトニーの推測に納得できなかった。それには詩織が言っていた痴漢の撃退の話聞いていたからだ。あの時、詩織は計算された行動だといっていた。

キノも否定したし、彼女のドジそうな冴えない風貌のせいでジョーイも勘違いされていたと思つたが、この事件を見ればやはり計算されていたように思えて仕方がない。

キノは強盗と知っていて自ら犬をけしかけたに違いない。それがジョーイの見解だった。

そしてストーリーカーに追いかけて煙に巻いたときも、見事にスマートなやり口だったのを再確認する。

「あいつ、只者じゃない」

ジョーイの脳裏にはしっかりとキノの存在が植え付けられた。

コンビニ強盗未遂事件は、地方で起こったニュースだったが、犬が登場し予期せぬ展開となりビックリ仰天ニュースとしてネットでも大いに取り上げられ、映像も動画共有コミュニティサイトでアップされたこともあって、あっという間に世界に知れ渡っていった。

ジョーイは夜中、自分の部屋で机に向かいネットに耽る。パソコンで流れる動画を何度も再生しながらコンビニ強盗未遂事件のことを考えていた。

キノはコンビニの前を通ったとき中の異変に気がついた。そこで携帯を取り出し、予め警察に電話を掛けた。そして強盗を刺激しないようにと、サングラスを掛け盲導犬を連れ込み、自分の目が不自由だと演技をしたに違いない。

強盗は目の見えない客だと思い込み、計画に問題はないと判断し、そのままナイフを見せて金を脅し取るうとする。

その後、キノは犬をけしかけて強盗を襲わせ充分ダメージを負わせたところで、後はコンビニの店長に任せて犬を連れて急いでその場を離れた。

キノがコンビニの監視カメラに映ってないのも、急いで逃げたのもその後係わりたくなかったから……

ジョーイは順序だてて考えていた。

しかし、ラブドールレトリバーという比較的温和な種類の盲導

犬が人を襲うのだろうか。

この部分が妙に引っかけた。

ボランティアということも考えられるかもしれないが、一般の学生が盲導犬を訓練していることも、不思議でならない。

あれはほんとに盲導犬？

もしかしたら盲導犬のフリしたただの犬？

それじゃなんのために盲導犬の訓練中だと知らせる服を着せるんだ？

ジョーイは考えれば考えるほど疑問が湧き、イライラしてきてさつさと寝る事にした。

大きな欠伸をして、ベッドに入り込む。

目覚まし時計をセットすると、ベッドの側に置いていたスタンドの明かりを消した。

目を閉じれば、またビー玉が転がる映像が浮かぶ。

コロコロと転がった先にはキノがいた。

そのイメージを抱きながらジョーイはすーっと闇に飲まれるように眠りに陥っていた。

静かな闇の中の眠り。深い眠りの中は、時の流れを忘れさせる。すやすやとジョーイは眠っていた。

そして夢を見た。

過去のしまわれた記憶が英語の言葉と共に再生される。



「(ジョーイ、ビー玉失くしちゃった)」

「(アハハハ、それって気が狂ったってどういう意味にもなるんだよ)」

「(それならほんとに狂っちゃうかも)」

「(えっ、まだ他のビー玉が箱に一杯入ってるじゃないか)」

「(でも一個足りないの)」

「(一個くらいいいじゃないか)」

「(だけどそれが一番お気に入りだったの。だって虹色でとっても綺麗だったから)」

目が潤んでで口元がヒクヒクしだす。

「(泣くなよ、アスカ。俺がいつか同じの買ってやるよ)」

俯いたアスカの頭にぼんと優しく触れて、再びアスカが上を向いた時そこにはキノの顔があった。

「キノ？」

「ううん、私はアスカよ」

夢の中でジョーイは混乱する。

アスカの顔は完全にキノに摩り替わり、アスカの面影は思い出せないくらいに消えていた。

さらに場面は変わり、足元に沢山のビー玉が放り出され、そしてその数を言い合います。

ビー玉は増えたり減ったりして、その都度面白いほどに見ただけでビー玉の数がわかっていった。

目が覚めたとき、辺りは薄っすらと明るく、時計を見ればアラームをセットしていた時間よりも30分程早い。

しばらくぼーっとしていたが、耳を澄ませば、下の階から小さく音が聞こえる。

「あつ、電話だ」

急いで起き上がると、朝方の冷え込みにぶるつと震えがきた。

階段をバタバタと下り、そして居間に飛び込んで棚に置いてある電話を手を取った。

もう誰からか分かっていた。

「もしもし」と発すると、遠距離らしく少し間が入り聞きなれた声が聞こえてきた。

「ジョーイ？　ちゃんとやってる？」

「ああ、やってるよ。今何時だと思ってるんだ」

「早朝でしょ。それぐらいわかってるわよ。こっちは今夕方なの、これからパーティがあるから今しかかけられなかったのよ。起こしてごめんね」

「既に起きてたから気にしてないよ。それよりそっちこそ大丈夫なのか。年取ってからの時差ぼけは辛いだろ」「年取っては余計よ。時差ぼけも忙しさで感じてる暇ありませんよ」だ

「わかったよ。ホテルからの国際電話なんだろ。高くつくから切るぞ」

「会社が払うからそれも全然問題ない。とにかく私がないからといって羽目を外すんじゃないわよ。変な人から声をかけられてもついていってちゃだめよ」

「おい、一体俺を何歳だと思ってるんだ」

「でも、気をつけてね。例えばお母さんが出張先で事故に遭ったとか、嘘をつかれて惑わされても安易に連れて行かれちゃだめよ。そ

の時は会社に必ず連絡して確かめなさい。それと困ったことがあったら、担任のシアーズ先生に相談しなさい」

「何を言ってるんだよ。そこまで言われると馬鹿にされてるとしか思えないぜ。それになんでシアーズが出てくるんだ。たった一週間の留守だろ。心配しすぎだよ」

「だからもしもの時よ。だって心配なんだもん」

「わかったから、何にも起こらないから安心しろ」

「あつ、もう行かなくなっちゃ。それから今日燃えるゴミの日でしょ。出すの忘れないでよ。それじゃーね、大好きよジョーイ」

最後の言葉の返事はいらないとばかりに、サクラは電話を切った。

ツイッターと受話器から聞こえる虚しい音にジョーイは「呆れるぜ」と小言を浴びせた。

高校生であつてもガキ扱いされて、気に入らないながらも、これが母親の愛だと思うとなんだか面映く背中がむずむずとしてくる。それがくすぐったくブルブルと体を揺らした。

「ふああああ、グツモーニング、ジョーイ。サクラから連絡あったのか」

トニーが欠伸をし頭を掻きながら居間に入ってきた。ジョーイは変なところを見られたかと思うと、持っていた受話器を放り投げるように元に戻す。

「ああ、無事に着いたみたいだ。それより朝食どうする」

「俺、シリアルでいいから自分でするよ。その前にシャワー浴びてくるわ」

トニーは腕を上げ体を伸ばしてバスルームへ向かった。

ジョーイは先に自分の朝食を用意する。

食パンを袋から取り出し、それをトースターに入れてレバーを下に押し下げる。ぼーっとパンが焼けるのを暫く待っていると、夢のことを思い出す。

夢の中までアスカがキノと入れ替わってしまい、記憶が塗り替えられたことの意味を重んじてしまう。

違う、違う、アスカとキノは関係ない。絶対にありえない。

強く否定し、そう思うこと自体馬鹿げたことのように扱うが、キノの存在はすでに心の深くまで入り込んでいた。

「なんでこんなに気になるんだ」

苛立つて叫んだと同時に、ポーンとトースターは音を立て、トースターが跳ね上がる。ジョーイは不覚にもそれに驚かされてドキッとしてしまった。それがキノのことを思っただけで感情と錯覚してしまっただけだった。

「あら、今日はジョーイ君がゴミ出しなのね。サクラさんもしかして具合でも悪いの」

出かけ際、ゴミを出したとき近所のおばさんと出会ってしまった。

ジョーイは形式的な挨拶だけで済ませたかったのに、近所のおばさんは面白い話を求めるように余計なことを聞いてくる。

「いえ、ちよっと出張中なだけで……」といってもそれで終わらせてくれない。

「まあ、サクラさん出張なの。どこにいっちゃったの」

「いえ、その海外へ」

「うわあ、さすがキャリアウーマンね。すっごいわ。で、どの国？　いつ帰ってくるの？　どんな仕事してるの？」

井戸端会議じゃあるまいし、まだまだ質問は続く。

おばさんが興味津々な目をして、ふくよかな体が前のめりになると、ジョーイは圧迫を感じて重苦しくなる。

いつまでも知りたそうに見つめる目が厭らしい。

ジョーイには先が読めていた。

自分が何かを言うときつとこのおばさんはあることないこと面白おかしく近所の人に言いふらす。だからこれ以上言いたくなかった。自分の母親が常に好奇心の目にさらされていることを良く知っている。更に気に入らない感情を抱いている雰囲気も伝わる。

何も言わないでこのまま去ってしまいたい。

「どうしたの、なんか言えないことでもあるの？」

しかし、おばさんの好奇心に余計に火を注いでしまい、黙っていても変に話を作られそうだった。

するとトニーが小声でおばさんの耳元に囁きかけた。

「いやね、おばさん。言えないのには訳があつて、ここだけの話なんです。いいですか、誰にもいっちゃいけないですよ。実はサラはアメリカ大統領の奥さん、つまりファーストレディと友達で今回ホワイトハウスに招待されたんです。ちょっと公にできないから出張って嘘ついちゃってるんですよ」

「えっ、そうなの。すっごい。もちろん誰にも言わない言わない」

特ダネを聞いたとばかり、鼻の穴が膨らんで興奮しながら、目の前で手のひらをヒラヒラ左右に振った。

トニーは悪意が混じったような微笑を向け「それじゃ行ってきます」と元気よく言った。

「ああ、行ってらっしゃい。気をつけてね」

おばさんは興奮気味になり、他に誰かに話したいとキョロキョロしていた。

「おい、あんな見え透いた嘘言つてどうすんだよ」

ジョーイは肘でトニーをこついた。

「いいじゃんか、どうせ何を言ったところで嘘ばかり話すんだろ。

だったら最初から嘘ついとけ。何も正直に言う必要はないんだよ。

バカ正直というのか、お前はこういうとき頭が働かないな」

何も言えずに、ジョーイは黙々と歩いていった。ちらりと後ろを振り返ると、さっきのおばさんがすでにゴミを持ってきた人となにやら話し込んでいた。

それを見るとあれでよかったと思えた。しかしあんな嘘をすぐに信じることに程度の低さも一緒に感じていたのか、ジョーイの目は蔑んでいた。

駅に近づくにつれて、なぜか胃がキューッと差し込んでくる。ジョーイは無意識に腹を押さえ前屈みになって歩いていた。

「おい、大丈夫か？」

トニーの観察力。ジョーイの変化に気がつかない訳がなかった。

「ああ、大丈夫だ」

何食わぬ顔を試してみたが、ジョーイ自身なぜこうなってるのかよく分かっていない。

「それならいいけど、ところでアイツと会つたらどうか」

トニーの一言でジョーイは胃から何か飛び出しそうになった。

(俺、もしかしてキノに会うことで緊張してるのか?)

自問自答してみる。

ジョーイの胃の痛みの原因はキノなのか。

夢を見たことでキノを非常に意識し始めた自分。それはアスカとキノを重ね合わせてしまい、キノを見る事とで益々アスカをイメーヂすることを恐れているのか。

何をそんなに深刻に悩む必要があるというのだろうか。

いつもの自分を取り戻すべく、深く深呼吸をしてみるもの、辺りを見回して首の動きは過敏になっていた。

通勤ラッシュで駅の改札口をひっきりなしに人が流れていく。

ジョーイとトニーもそれに紛れて流されるようにホームへ向かった。

トニーの行動もいささか落ち着かない。前日のコンビニの事件が気になってるのが、キノを見つけようと辺りを見回して探している。女性に声を掛けるのを全く躊躇わないトニーだから、キノを堂々と探せるところがジョーイには羨ましく思えた。

ジョーイは探そうにも普段の自分の姿にふさわしくないと、どこかでストップをかけ、首は油の切れたブリキのようだった。



「アイツ、先に行ったんだろうか。見かけないな」  
電車がホームに入り込んだときトニーが残念そうに言った。

「またそのうち会うだろう」

ジョーイは本心を気づかれずに素っ気無く返事を返したつもりだったが、階段を走って降りてくるのではと頭をかくふりをして首を動かし、階段方面をちらりと見つめた。

電車の扉が開き、降りる客は少なく乗車する客がどっと乗り込み車内はすし詰めとなる。

電車が動き、つり革を持ち暫く揺られていると、また違和感を感じ、斜め横から視線を浴びている気分になった。

そつと首を動かして気になる方向を見ようとすると、視界に入った全員の視線が一齐に返ってきた。目が合ってジロジロ見られて耐えられなくなりまた前を向いた。

結局は物珍しさのあまりに誰かがジョーイを無意識に見ていたということなのだろう。

監視されているなどと時々妄想することがあるが、これも自分の外見のせいで物珍しさで誰かに見られていることが原因だと結論せざるを得ない。

それでも気に食わないことには変わらない。

乗り換えの駅につき、溢れる人の中に混じっていた時だった。すれ違いざまに前日のストーカーの姿を見つけてしまった。

トニーの目の前、何事もなく見てみぬフリをしたが、何気ない顔で自分の学校に向かっているストーカー野郎になぜかムカついた。

学校の校門の前まで来た時だった、生徒指導の一環でシアーズ先生が生徒達に英語で声を掛けてている。

同じようにトニーとジョーイの顔を見ても「グーツモーニン」と挨拶をされ、二人は無難に答えていた。そのまま去ろうとしたとき、シアーズはジョーイを呼び止めた。

「(ジョーイ、相変わらず笑わないよな。あと一年で高校生活も終わりだろ。もつと青春を楽しめよ)」

余計なお世話だった。シアーズはジョーイが気に食わないのか顔を見る度につまらない小言を言う。

ジョーイは不快感を抱きながらも無表情で目だけ強くシアーズを睨んでいた。

「(そうそう、俺みたいに楽しめって言ってるんですけどねえ)」

トニーが相槌をうつように気軽に話すと「(お前は遊びすぎだ。身をわきまえろ)」と一蹴する。

「(ハイハイ、肝に銘じて置きます)」

「(それからトニー、話がある。昼休みにでも来い)」

「(ハイ、了解しました)」

トニーはおふざけで手のひらを額に当てて敬礼していた。

いくら担任とは言え、お節介なことまで口を挟むのでジョーイはシアーズが好きではなかった。他の生徒にはジョーイのように口を

出してるところを見たことがない。

シアーズもジョーイのような生徒は扱い難いのか何か嫌味の一つでも言わないと気がすまないらしい。

それなのに、母親は学校の先生だからということ、何かあればシアーズを頼れという。男親がいなくてもにこういう存在が必要だと思ひ込んでいるように思えた。

迷惑際まわりなかった。

「なんか、お前呼び出し喰らったけど、シアーズの奴、うるさい奴だぜ」

気持ちのはけ口を求めるようにジョーイは小言を呟く。

「まあな、何かとうるさいのは分かる。でも俺はあの人には頭が上がりたくないし、それにきついこと言われてもそんなに嫌でもないんだ。呼び出されたのもなんか理由があつてのことだと思つ」

「トニーがそんなこと言うなんてなんか意外だな」

「そうか。あいつさ、頭いいし、年も40過ぎの割りに若く見えて顔もいいだろ。完璧すぎて返す言葉がないんだよな。だから言うこと素直に聞いてしまつんだ」

シアーズは確かに精悍で貫禄もあり、男の目からみてもかっこいい部類だった。だが性格はネチネチしていると思うと、ジョーイは素直に認められない。

ふてくされた顔をしていると、トニーは苦笑いしていた。

「そつえば、気難しいところはジョーイと共通するところがある

かも。似てるところがあるからお互い気が合わないんだろうね」  
「一緒にするな」

ジョーイが苛立っていてもトニーは気にせずに出会った友達に気軽に声をかけていた。

トニーは女好きで女性ばかりに声をかけているだけではなく、アメリカ人らしい積極的な行動派というのか全体的に社交性にも長けていた。

ジョーイと違い、先入観なく自然に人と接し、友達の輪も幅広く広がり、学校の先生までもトニーと親しい。

トニーに気軽に声を掛ける生徒たち。そして楽しそうに話しこむトニーの姿を見てみると、ジョーイは自分はどこか人間性が劣っていると感じてならない。ついコンプレックスを刺激されたのか、先ほどのシアーズのことでも気分を害していることもあり、トニーの後ろを歩いていて面白くないと目を逸らしてしまった。

自分が人と違うと思ったのは決してハーフの外見だけが理由ではない。

小さな子供の時から既に違和感を抱いていた。

同じ年頃の子供と遊んでいてもしっくりこない。そして傲慢な自分の態度に気がついたのもその頃だったように思う。

ただ、アスカだけはジョーイを理解し、唯一気が合った友達だった。幼い子供同志だったのに、二人ともどこかませて大人びたそんな気がした。

それともやはり全ては自分が作り出した幻影でそれを信じ込もうとしてそのような記憶を勝手に植えつけただけなのだろうか。

アスカという存在はジョーイにとって何を意味するのか。

この時もジョーイの頭の中にキノの顔がアスカとして現れる。

そして肩を叩かれ、飛び上がるほどハツとした。

「おい、ジョーイ。どこ行くんだ。俺たちの校舎はこっちだぞ。前が見えないほどそんなに苛立つてるのか」

トニーは何を考えていたかなど説明できる訳もなく、ジョーイは適当に返事してその場を誤魔化し、先を早足で歩き出した。

トニーは何も言わず後をついて行くだけだった。

この日、夢で見た事柄からジョーイの心のバランスが崩れ、次々と要らぬ感情を抱く羽目となっていた。

自分らしくないと分かっていながらも、構内を歩く時キノの姿を無意識に探していた。

学年が違えば会う機会も少ない。あとは放課後また帰りが同じになるのを期待するしかなかった。

新学期の始まりは自己紹介や授業の方針の説明など本格的に勉強する雰囲気はまだ皆無に等しかったが、三年生は進路が関係してくるために何をやりたいのかしっかりと見極めて進学を決めるとどの先生もメッセージを送っていた。

ジョーイは全く何をやりたいのかイメージすら浮かんでこない。本人のやる気と意思とは裏腹に成績だけはどの難関大学も目指せるほどのレベルだというのに。

希望する大学に入りたいと熱望し、努力する学生がいる傍らで、ジョーイは望んでなくても世界トップレベルの大学に喜んで迎えられそうだった。

学校の授業は電卓で計算するようなものに思え、授業態度は覇気がなくいつも冷めていた。

そんな中でいつも同じようにこの日は終了した。

「よっ、ジョーイ。俺これから眞子ちゃんに会いに行くんだけど、お前もいくか？」

帰り支度をしている途中のジョーイに向かってトニーが誘いに来た。

「眞子ちゃんって誰だよ」

「インターナショナルじゃない方の一般生徒の一年生のクラスを主に受け持つてる英語の先生。英会話クラブの顧問もしてて、俺ゲスト出演頼まれちゃった」

「ちゃん付けで呼ぶほどいつの間に関しくなっただよ」

「いや、まだ会ったことないんだけど、昼休みシアーズに声かけられただろ。あれ英会話のボランティアの話だった。英会話レッスンを手伝ってくれるネイティブな発音する生徒はいないかってシアーズが眞子ちゃんに持ちかけられて俺が選ばれたということだ。はっははは」

トニーは得意げになっていた。

「俺は遠慮しとくよ。声かけられてないし」

「そう、卑屈になるな。まあシアーズもジョーイだけじゃなく、他の生徒には声を掛けにくかったんだろう。その点俺はこっこの得意っていうのか、天性というのか、適役ってことだ」

「いいから、さっさと行けよ」

ジョーイはしっしと追い払うようなジェスチャーを交えると、ト

ニ―はスキップ交じりで教室を出て行った。

ジョーイは呆れて椅子に座ったまま大きいため息を吐いたが、突然がばつと立ち上がった。

そして「アイツを探さなくっちゃ」と声が洩れると慌てて教室を出て行った。

ジョーイは一年生の教室辺りをうろつこうかと思いつつも、体は縛り付けられたかのように意思どおりには動かない。足をその方向に向けるだけで重力を倍以上に感じていた。

すれ違わずに下級生たちにじろじろ見られると、あっさりと諦めてしまった。

何をそんなに自分自身を固めてしまうのだ。

思うように行動できない自分がもどかしかった。

素直に感情を表に出さないと、自分を釘で打ちつけ考え方も捻じ曲げられない頑固さで凝り固まっていると気がつく。

気づくの遅い。

キノに好奇心をもって自分の中のもやもやする記憶を重ね合わせ、追いかけてよとするとする気持ちに自分自身ついていけなくなる。

落ち着かず、悶悶としてジョーイは下校していた。

途中道端の石を蹴るとコロコロと転がり、ビー玉のイメージと繋がっていく。

「そう言えばアスカは虹色のビー玉を失くしたんだ。結局俺は買ってやるとか言ったのに約束守ってないや」

駅の前まで来たとき、かわいい小物がショーウィンドウに並んで



いる雑貨屋が目に入った。

駅前の雑貨屋で衝動買い　確かキノはそう言っていた。

キノがホームでばら撒いたビー玉はここで買ったものなんだろう  
か。

店のドアがお客が入りやすいように開けっ放しにされ、そのドア  
にはオープンと英語で書かれたサインが斜めにぶら下がっている。  
ジョーイはふらりとその店に足を運んでしまった。

店に入ったとたん、四人の女の子たちがかわいい小物の前に固ま  
っているのが目に入った。楽しく笑い声も聞こえ、周りの雑貨と混  
じって目がスパークするようにバチツとしてしまう。思わず目をし  
ばたたく。場違いなところに来てしまったと我に返り、あたふたと  
出ようとしたら女性店員に声をかけられてタイミングを逃してしま  
った。

「いらっしやいませ。何かお探しですか」

疑問系でこられたら返事を返さないわけにはいかない。しかも思  
いっきり営業スマイルを向けられていた。

「あっ、その、ビー玉を……」

「ビー玉ですか。うちにあったかな。ちょっと待ってて下さいね」

店員は奥に引っ込んで探しにいった。

通路は気を使ってやっと二人ほどすれ違ふことのできる幅のもの  
が真ん中の棚を挟んで二つ平行している。狭い空間に商品もごちゃ

「ごちゃと隙間がないくらい置かれ、壁までいろいろ飾られ、余計に狭苦しく感じる。」

しかし女の子たちはその「ごちゃごちゃしたもの」が目飛び込むと購買威力をつつかれるのか、「かわいい」と何度も連呼している声が聞こえてきた。

「ねえ、みんなでお揃いでこれ買おうか」

キャツキヤと弾む声。待たされている間、その女子高生をジョーイはちらりと見た。

その中に一人だけ笑ってない女の子がいる。どこか浮いている印象を感じると自分と同じ匂いがゆらゆら漂う。しかも顔を見れば、純日本人とは言いがたかった。ハーフっぽい西洋風ではなく、どこか南国アジア系の濃い感じがした。

（俺の女バージョン？）

ジョーイはなんとなくそんな気持ちを抱いていた。

「リル、あんた買わないの？」

「私はいい」

ボソリと声を発する。

残りの女の子たちは一人だけノリの悪い友達に一瞬しらけた顔つきになったが、仕方がないと自分たちだけお金を払いにレジへと向かった。しかし途中またかわいいものを見つけて立ち止まり、いっお金を払って店から出て行くのか予測不可能な行動だった。

「私、先に外にでているね」

リルと呼ばれた女の子は、せかしたかったのか一人で店を出て行く。

出口付近でジョーイとすれ違い、ちらりと一瞥を投げかけた。

ジョーイは見て見ぬふりでただじっと立っていた。

リルが店から出て行くと女の子たちの話す声が聞こえる。

「高一になったばかりで新しく知り合って席も近かったから声を掛けたけど、あの子はなんか苦手かも」

「でもリルって過去に事故にあっってからトラウマを引きずって暗くなっちゃったみたい。お母さんも日本人じゃないし、そのことわからかわれたりしてたって噂も聞いたことがある」

「悪い子じゃないし私たちだけでも理解してあげようよ」

それぞれ話していた。

ジョーイはすっかり女の子たちの話を耳に入れてしまった。

「あっ、お待たせしました。以前あったかもしれないんですが、今うちにはビー玉置いてないです」

店員が戻ってジョーイに声を掛けた。

ジョーイは「ありがとうございます」と軽く会釈してその場を去った。

店を出ると、リルが目線を定めないうままボーっとショーウィンドウの前に立っている。

ジョーイは彼女の前を通り過ぎようとすると声が聞こえた。

「ビー玉だったら、100円均一ショップで売ってましたよ」

「えっ？」と感嘆してジョーイはリルを振り返った。

「ああ、ありがとう」

咄嗟に礼を言ったが、リルの顔は無表情だった。

益々雰囲気が自分に似ている。ジョーイはまじまじとリルを見てしまった。

「私の顔に何かついてますか？」

「いや、ごめん」

ジョーイはいつも自分が見られている立場なので、じろじろと人を見ることもいけけないことのように思えて申し訳ないと顔に表す。それはわかりやすく”すまない”と顔に書いて謝ったみたい

に。  
そしてさっさと去ろうとしたとき、リルは後ろから慌てて声を掛ける。

「いえ、気にしないで下さい。慣れてますから。あのっ」

「ん？他に何か」

「あなたも何か辛い事を抱えて、やっぱり人から違う目で見られていたりすることってありますか？」

「えっ？」

ジョーイは振り返り、その目は驚きで見開いていた。まさに自分が抱えている問題を言い当てられた。

「余計なこと言ってごめんなさい。なんか自分とオーバーラップし

て。つい口から出てしまいました」

子犬のような不安の目でジョーイを見つめる。

「別に気にしてない。でも君は何か辛いことでもあるのかい？」

「あると言えはありますけど、みんな何かしら悩みを抱えていますもんね。すみません。変なこと聞いて。私、飛鳥リルっていいいますよかったらあなたのお名前聞いてもいいですか」

「えっ、アスカ…… リル」

ジョーイは一瞬声を失った。アスカという響きがこの上なく体を揺さぶられる。

「どうかしましたか？」

「いや、俺は桐生ジョーイ」

「ジョーイ…… さん？ もしかして英語話せます？」

「ああ、一応は。生まれはアメリカだ」

「そうだったんですか。じゃあバイリンガルか」

急にリルの顔が暗くなった。がっかりしているというのか、ふっと息を漏らしていた。

何かを言わなければならぬと思い、ジョーイは慌てて質問を返した。

「アスカ…… さんは？」

「リルでいいです。飛鳥という苗字はあまり好きじゃないんです」「どうして？」

「私の名前、苗字がファーストネームに聞こえるでしょ。それで私以下の名前をアスカだっと思う人がいて、それが嫌なんです」

ジョーイは益々アスカという響きに動揺していた。

「あのさ、君はインターナショナルの英語コースの生徒なのか」  
リルは急に下を向いて、首を横に降った。

「私、一般生徒の方。英語は話せない。でも小さいときは英語話してたんだって」

どうしようもなく、悲しげな顔つきになった。

「そ、そうなの」

ジョーイはさっき店の中で聞いた話を思い出す。

事故にあってからトラウマを引きずって暗くなっちゃったみたい

「なんか深い事情もありそうだね」

「ジョーイさんは、私なんかと違って恵まれてる。私とオーバーラップしてるなんていっちゃってごめんなさい」

突然謝りだした。

ジョーイはリルの態度がよくわからなくなった。

何かとてつもなく、コンプレックスを感じて恥じている。

そして恵まれているという意味が混乱を招く。

「あのさ、一体何がいたいたいんだい？」

その時、店からリルの友達が出てきた。リルがジョーイと話している姿を見て三人は露骨に驚き、二人の中に無遠慮に入った。

「やだ、リル、この人は誰？」

友達その一が自分の存在をアピールするようについて。友達その二、その三もジョーイをまじまじと見つめる。

「俺、それじゃ失礼する。じゃあな、リル」

ジョーイは逃げるようにその場を後にした。あの三人はいつもキヤーカー騒がれる女生徒と同じで不快だった。

案の定、後ろで黄色い声を飛ばしながらジョーイのことをリルから聞き出そうとしている。

リルは得意げになるわけでもなく、そのときも無感情に淡々と説明していた。

ジョーイの頭の中ではキノ、そしてリルと新たにアスカを思い起こさせる要因が増えた。

「リルの苗字が飛鳥のように、俺の知っているアスカも果たして本当の名前だったのか？」

また記憶のあやふやさに翻弄され、苛立ちを払うように前髪を手でかきあげていた。

駅のホームでもしかしてキノと会うかもと淡い期待を持ちながら、ホームへと続く階段を一段一段緊張して降りる。

しかし、キノの姿はそこにはなかった。

前日、キノが座っていたベンチに近寄り、そこで飛び散ったビー玉のことを思い出す。

他にも落ちていているんじゃないかと辺りを見渡せば、本当に一つきらりと透き通った光を放つ丸いものが目に入った。

ベンチの足元に隠れるように一つ透明のビー玉が転がっていた。

キノの置き土産のような気がして、ジョーイはそれを拾う。

それを指でつまんで目の前にかざして中を覗いた。

別にな変わったものは見えないが、過去に同じようにしてアスカと覗きあったことを思い出した。

電車が入ってくるお知らせのメロディが聞こえてくる。

ジョーイはそのビー玉をポケットに入れ、これでまたキノに近づくと口実が出来上がったとポケットを上から軽く叩いていた。

乗り換えの駅で、連絡通路を歩いていると、後ろからジョーイと名前を呼ばれた。

振り返れば、グラビアの表紙を見せられているような笑顔がそこにあった。詩織だった。



またややこしいのに捕まってしまうのかと思ったが、このときふとキノの痴漢撃退の話が聞きたくなって、つい自分から走りよってしまった。

「嬉しい、私のこと覚えていてくれてた。無視されたらどうしようかと思つた。今日はキノちゃんはいないの？」

「あのさ、ちよつと時間あるか？」

「えっ、それってデートのお誘い？」

「違つよ、聞きたい事があるんだ」

ハキハキと物怖じしない詩織の態度は、正々堂々とした気持ちよさに思えた。そして何よりあっさりとして男っぽい。

ジョーイに出会つて喜んでいたものの、明らかに黄色い声で騒ぎ出す女生徒達とは違つていた。

二人は改札口を出て、駅の外に出る。

乗り換えする大きなターミナル駅だけあつて、この辺りは町の中心部分のようにデパートや映画館など娯楽施設が集まっていた。

詩織がスターバックスを指差し「ここでいいよね」と決めたのでジョーイは軽く頷く。

二人がコーヒーを手に入れテーブルにつくと、美男美女のとてもお似合いのカップルに見えるのか、店の中で注目を浴びていた。

「で、私に聞きたいことつて？」

詩織は軽くコーヒーをすすり、あくまでも自然体で普通にジョーイ

イと接する。それが話しやすい雰囲気醸し出しジョーイも遠慮することなく質問をぶつけた。

「キノの痴漢撃退の話の詳細しく教えてくれないか」

詩織はまたゆっくりとカップに口をつけてコーヒーを飲んだ。そして温かいものを飲んだ後の口の中が温まった空気をため息混じりに軽く吐き出す。

「なんだ、キノちゃんのことか。ちょっとがっかり。私のことかと思っただのに」

それでも詩織は笑顔を忘れなかった。

「でも、なんでまたそんな話を？」

詩織は先に理由を聞くが、さっさと話さないことにジョーイは少しイラつき、カップを手にして乱暴にコーヒーを飲んだ。

「ハイハイ、ちゃんと話ますよ。えっと、あの時、春休みで友達と遊びに行ってた帰りの電車の中のことなんだけど、夕方の通勤ラッシュが始まったときで、つり革をつかんで立ってたら急に背後でもぞもぞしたの。人が一杯いたけど、まだ少し詰めな程ではなかった。でも気のせいなのかはつきりわからなくて、自分で後ろを見るのも怖かったから、隣にいた友達に助けを求めたの」

ジョーイは真剣に聞いていた。

詩織は映像を頭に浮かべて思い出しているのか斜め上辺りに視線を移した。

「そしたら友達は私の斜め後ろに背を向けた同じ学校の男の子がい

るって言い出したの。そいつが怪しいって」

「同じ学校の生徒？　で、そいつが本当に犯人だったのか？」

「はつきりとした証拠はわからなかったけど、その男子生徒は私に  
触るだけの根拠はあったって訳」

「根拠？」

「私のことに好意をもっていたから」

「でもタイプじゃなくて詩織は相手にしなかった。それでその男子  
生徒は満員電車で詩織に触ろうとしたってことか」

「私の方をちらちら振り返っていたらしくて、友達がその男子生徒  
と目が合ったの。それで慌てた態度だったから、友達が痴漢って叫  
ぼうって言ったんだけど、そんな態度だけで証拠がなくてもし違っ  
たら私怖くて、それで困ってたの。でもまだもぞもぞが続いていて、  
どうしようかって思ってたとき、突然どこからともなくキノちゃん  
が倒れてきたの。そのお陰で注目を浴びて、さらにキノちゃんが『  
大丈夫ですか』って大きな声で言ったから、てっきり機転をきかし  
てくれて痴漢から助けてくれたように思ったの」

「なんでそう思ったんだ」

「だって、普通ぶつかつたらまずは”ごめんなさい”って言うと思  
うの。それにいくら電車が揺れたっていつても、あれだけ派手に普  
通倒れてこないもん。みんなこけそうになつたらどこかで足を踏ん  
張ったりするでしょ。ほら、あれと一緒によ。車が暴走して人を轢い  
たとき、ブレーキの跡があるかないかくらいわかるでしょ。あの時  
も私の位置をずらすように力入れて押された感じだった」

ジョーイは感慨深く一口コーヒーを含みそれを思量して飲み込む。  
詩織の解釈が正しいとばかりにコクリと頷いた。そしてコンビニの  
事件も仕組んだことだと固まっていた。

「そっか、話してくれてありがとうな」

詩織もコーヒーを一息つくように飲む。そしてここからが本題とばかりにジョーイを見つめる。

「で、なぜこの話を聞きたかったの？ キノちゃんについてなんか調べているんでしょ、ねえ、探偵さん」

「いや、そんなんじゃない」

ジョーイは落ち着かずにコーヒーをすする。

「フッフ、嘘をつくのがへたくそね。というより、あなたは嘘をつけない人だ」

「まだ昨日会ったばかりなのに、俺の何がわかるというんだ」

「そうね、言葉を交わしたのは昨日が初めてね、でも私はあなたのこと以前から知ってたわ。私がなぜ昨日あなたに会って喜んだと思う？ ずっとあなたと話をしてみたかったのよ」

「俺を口説いたところで無駄だから」

「そんなのわかってるわよ。だから話したかった」

「はっ？」

「あなたはうちの学校の女生徒の間でも結構話題に上るのよ。それにファンクラブがあるのも知らないでしょ」

「ファンクラブ？ なんだそれは？」

「よく、女の子からキヤーキヤー騒がれるでしょ。あれはあなたのファンクラブの人たちよ」

ジョーイの目はまさに点になっていた。その表情が面白かったので詩織は口元に手を置いて笑わないようにと顔を歪ませていた。またコーヒーを飲み落ち着いたところで話し出す。

「でもあなたは女の子に騒がれても絶対に有頂天にならない。むしろ雷を落とすように睨み付けて攻撃する。そんなことしても彼女た

ちには無駄だけど、私はあなたの毅然とした態度が気に入ったという訳。私があるたと話してもきつと不快感をまず表すだろうなと思って、確かめたくってさ、だから昨日あなたがその通りにしてくれたから想像したとおりの人だと思って思ったの」

「俺は陰で馬鹿にされてるってことか」

「あら、違うわ。彼女たちは純粹にあなたに憧れてるだけよ。それに私はあなたのこと馬鹿になんてしていないわ。あなたが実際どういう人か知りたかっただけ。あなただって、今私にキノちゃんのこゝと聞いているのは彼女に興味をもったってことでしょ。直接か間接かの違いだけでなんら私と変わらないと思うんだけど」

ジョーイは息を漏らすように「うっ」と呻き、言葉を失った。

「やっぱりストレートに気持ち顔に表れちゃうね、ジョーイは」  
「それで、俺と話してその後どうするんだい。ファンクラブとやらに報告かい？」

ジョーイは開き直ったとでもいうように、残りのコーヒーを全部飲み干した。

「やだ、私はただジョーイと話したかっただけで、この後のことがあるとしたら、私はあなたの友達になりたいくらいだわ」

「俺と友達？」

「そう、もちろん下心つきでね」

「えっ？」

「友達として普通に接して、そこから私のこと気に入ってくれたら嬉しいなってこと」

「お前って変わってるな。堂々とした潔さに感心するくらいだ。でも友達か、悪くないかもな」

ジョーイは詩織のサバサバした性格に脱帽だった。

「イエー！ これで友達成立つと。ところで、一体キノちゃんのと調べて何をするつもり？」

「いや、そ、それは別に」

「ん？ もしかしてジョーイもキノちゃんに不思議なことされたんじゃないの？ それで気になっているとか？ あの子ほんと不思議なところあるもんね。実はキノちゃんのことについて聞かれたの、ジョーイだけじゃないんだ」

「えっ、他にも誰かキノのことについて聞いたのか」

ちょうどその時、詩織の携帯の音楽が鳴り出し、話は中断してしまった。

「ごめん、ちょっとだけ待っててくれる？」

詩織は携帯を持って席をはずした。

待たされている間、ジョーイは深く椅子に腰を下ろし、頬に手をあて、テーブルに肘をついた。

首を突っ込めば突っ込むほどいろいろとキノの事が飛び出してくる。

何一つ理解不能で、キノが自分の周りを掻き回しているように思えた。

深入りしない方がいいのだろうか、それとも気の済むまで知りたいことを追求すべきなのか。

ジョーイは、無意識に空になったカップを持ち上げまた飲もうとするが、液体が口元を濡らさないことに気がついて、チエッと舌打ちをしてしまった。

「お待たせ。えつとどこからだっけ」

詩織が戻ってくると、ジョーイは姿勢を正した。

「他に誰がキノのことを聞いてきたんだ？」

「あつ、そうそう。えつと、一人は……」

「えつ、複数いるのか」

「うん。だからジョーイがキノちゃんのことを聞いてきたから、いるんところで彼女はなんかやってるなって思ったのよ」

「それで？」

「まず一人目は、私のクラスが一番の秀才君。篠原良平っていうんだけど、たまたま痴漢に遭ったときの話をクラスで友達としてたとき、キノちゃんの特徴のこと話してたの。あの子、ハーフでかわいいのに、似合わない黒ぶちのめがねかけてるでしょ。そのことについて話してるとき、篠原君が声を掛けてきたの。なんでも以前にそういう女の子を公園で見掛けた事があったんだって。ラブラドルの犬も一緒にいたって言った」

ラブラドル犬の話が飛び出て、まさにキノの事だとジョーイは思った。はっと目が見開く。

「その時、ほろ酔い加減のサラリーマンが、歩いてたらしいんだけど、ほらあれ、親父狩りっていうの？ ガラの悪そうな二人の男子学生が絡んだんだって。それで篠原君はどうしようかと思ったとき、キノちゃんが犬を追いかけるように走ってきて『うわ、皆さん逃げて、その犬噛みます』って叫んでたらしいの。」

そしてなんとほんとに噛んだの。サラリーマンの方の足を。サラリーマンの方がびっくりして悲鳴を上げたんだって。そして噛んだ後、歯をむき出しにして今度は学生の方に威嚇したの。それが効いたのか、学生たちは一目散に逃げていったんだって。犬もある程度追いかけて、その後戻ってきたんだけど、凶暴さは全くなくなっていて、大人しくなったの。

サラリーマンも別に噛まれた怪我はなく、却って怪我の功名みたいで、助かったってキノちゃんにお礼を言ってたんだって。キノちゃんはそのとき犬が噛んだからひたすら謝っていたそうだけどね。

篠原君にしてみると、それがどうしてもキノちゃんがわざとそう



仕向けたように思えて不思議な子だなんて思ったらしく、私の痴漢の話を目にしてそれが自分が見た女の子と被るところがあったから私に聞いてきたという訳」

ジョーイは知らぬ間に口を開けて驚いていた。

「それで、他には？」

「もう一人は、その痴漢の疑いをかけてしまった人。渋川カオル……」

詩織は言い辛そうにしていた。

「痴漢本人の登場か」

「でも、あれは証拠がなかったし、まだそうだとはい決め付けられない。だから事件の後、暫くして渋川君が私にキノちゃんのことを尋ねてきたときはどういう意図があったのか全くわからなかった。聞かれたけど、私は話をしたくなくて無視をしたけどね。そして三人目がジョーイだった。これで満足かしら」

「あ、ああ。ありがとう」

「ねえ、あなたはどんな不思議なことをされたの？」

「俺は、その……なんていうのか、あいつ危なっかしくて放っていけないって言うのか」

あまり詳しいことを話すのをジョーイは躊躇った。しかし放って置けないという言葉が詩織の理解をどんぴしゃりと得る。

「うんうん、わかるわかる。その気持ち。前にも言ったけどキノちゃんみてたら妹みたいに思えて。私も放っておけないんだ。実際キノちゃんみたいない妹がいるんだけどね。ほんとにハーフなんだ。うち、両親が離婚しててね、私は父に引き取られたんだけど、母親はその後アメリカ人と再婚しちゃったの。それで妹が生まれたんだけど

ど、子供の時に一度会っただけで、もう何年も会ってなくてさ、だからキノちゃんとい重ねて見ちゃうの。年も同じくらいだし」

「なんか深い事情がありそうだな」

「うん、妹の名前はアスカっていうんだけど……」

「えっ？ アスカっ!？」

「えっ、どうかした？」

「いや、別に、それでどうしたんだ」

「うん、小さいときに事故に巻き込まれちゃってね、その原因を作ってしまったのが私なんだ。幸い怪我は軽かったんだけど、でも良心の呵責はずっと感じたまま。だからキノちゃんを見るとアスカを思い出して本当に放っておけなくなっちゃうんだ」

ジョーイの血液は走るように騒がしくなり急に心臓が激しく波打っていた。

アスカの名前を何度も耳にして、キノを見て他にも同じ名前のアスカを思い出す者の出現。

キノの不可解な行動も拍車をかけて、ジョーイは過去の記憶と現在の出来事が混ぜ合わさって何を明確にすべきなのか混乱していた。

「そっか、大変だな。でもキノと君の妹のアスカは別人だ」

ジョーイはまるで自分にも言い聞かせているようだった。

「わかってる。でも人は気になる過去の記憶をすり替えようと今の状況に置き換えて解決したいって思うことってないかな」

ジョーイは詩織の言葉にどきりとした。

「そうだな。あるかもな」

なぜかぐつと手足に力が入る。

「詩織、今日はいろいろと話させちまって悪かったな。でもありがとう」

「へー、ジョーイは律儀でもあるんだ。そういう面も見ちゃうと益々心惹かれちゃう」

「あのさ、何度も言うけど、俺はそういうの……」とジョーイが言いかけたとき詩織が声色を使って後を続けた。

「……興味ないから、だって俺は男の方に興味あるから」

「おいつ、何を言うんだよ！ いい加減にしる」

ジョーイは冷たい目つきで詩織を睨んでいた。

「ごめん！ 悪気はなかったんだ。でも本気で怒ったってことはやっぱり違うってことだね。よかった」

「どういうつもりだ」

「確かめたかったんだ。ジョーイほどかっこいい人なのにあなたは全く女性に興味なさそうだし、それに彼女の一人もいないなんておかしいもん。誰か好きな人でもいるの？」

「そんなのいねーよ」

「じゃあ、過去に忘れられない人がいてそれを今も引きずっているとか」

「うるさいな。俺もう帰る」

ジョーイは無性に苛立ちを覚えていた。言われたくないことを言われると過剰に反応するかのようになり、ドクドクと血が体の中で慌てふためいて流れている。

席を立ち上がり、空のカップを持って力強くゴミ箱に捨てて店を出た。

「待つてよ、ジョーイ。私、度が過ぎたね、本当にごめん」

ジョーイは立ち止まり、息を整えてから振り返った。

「もういいよ。俺の話に付き合ってくれたし、それに、俺に喧嘩を吹っかけてきた女も今までいなかったってことで、その記念に許してやるよ」

「よかった。ついでにその記念として私を彼女候補の一人として考えてほしいな」

「懲りない奴だな。馬鹿も休み休み言え」

「私、本気だよ。実はさジョーイのことずっと前から好きだったんだ。あはっ！ やつと言えたっ！ さあて、言いたいこと言ったから今日はこれで帰る。それじゃまたね」

詩織は微笑み、踵を返してさっさと人ごみの中に紛れて行った。  
何が起こったんだとばかりに、ジョーイは立ったまま意識が飛んだ気分だった。

「いろいろなことが起こりすぎだ」

ジョーイは愚痴を心に収めて置けなくなるほど、ポロつとこぼしてしまおう。

荒波に飲まれてさらに渦に引き込まれたような気分でぐるぐるめまぐるしい。そのうち大きな鯨が現れて飲み込まれるんじゃないかとまだ何か起こりそうな予感まで感じる。

疲れた足取りで気だるく歩く。

駅のホームへ続く階段を降りれば、一際金髪の頭が目立つトニーの姿を見つけた。

通勤、通学ラッシュで人がホームに溢れていた。

まだ向こうはジョーイに気がつかず、混雑している乗客を隠れ蓑にして、気分転換に後ろからそっと近づいて驚かせてやろうとジョーイはいたずらっぽい笑みを浮かべながらそっと近づいた。

ちょうどそのとき、トニーの携帯が鳴り、トニーは英語で通話を始めた。

電話に気を取られ、近くにジョーイがいることにまだ気がついていない。ジョーイは声を掛けるタイミングを失い、そのままトニーの話を盗み聞きしてしまった。

「はい。今帰る途中で、電車を待ってるところです。ジョーイは

先に家に帰ってます。…… はい。わかっています。大丈夫です。…… 別に不振な動きはありません。…… はい、わかりました。そのときはすぐに報告します)」

トニーのいつになくまじめな態度。そして意味ありげな会話にジョーイは聞いてしまったことを後悔した。

ジョーイはトニーに近づくのを止め、違う車両の位置へと向かった。

トニーと話していた人物。内容からしてジョーイの存在のことも知っている。そして不振な動きという謎めいた言葉が心をざわつかせる。

トニーは一体誰と何の話をしていたのだろう。まさに今まで見たこともない一面だった。

電車が自分の駅に着いたとき、ジョーイはトニーが先に改札口を出るのを確認してから、少し間を置いて自分も改札口を出る。

そして電話の内容を盗み聞きしてしまったことを忘れようと首を横に数回振って駆け出した。

「おい、トニー。お前も今の電車だったのか？」

白々しいかもと冷や冷やしながらジョーイは声をかけた。

「なんだ、ジョーイ、まだ家に帰ってなかったのか。今まで何してたんだ」

「いや、ちょっと知り合いに会って一緒にコーヒー飲んだ」

嘘もつけないと思って正直に言ったが、正直に言い過ぎてもトニーの好奇心は交わせない。案の定、相手は女かとか、普段そんなこ

としない癖に何があったなどと聞かれて、詩織と初めて出会った前日の話やキノの痴漢撃退のこと、そして詩織に偶然出会って聞いたキノの話のことを全て話す羽目になった。

「ほんとか。キノって次から次へと不思議な行動してくれるな？やはりあれは計算されたことなんだろうか。それにしてもジョーイがそんな行動を起こすのも珍しいじゃないか。他にもなんかきつかけになったことがあるんじゃないの？」

まさにまだアスカの記憶のことがあったが、それは誰にも言うつもりはなかった。しかし、トニーは洞察力が鋭い。ジョーイはそれを交わすために話をコンビニ事件に戻した。

「そんなことよりも、とにかく、やっぱり昨日のコンビニ事件は偶然じゃなかったってことだよ」

「そうだな、だったら今からコンビニの店長さんに直接話を聞きにいこうぜ。何かわかるかもしれない」

二人の足はコンビニへと向かう。

店内は適度に客が入って、まばらに人が散らばっていた。レジはアルバイトの女の子が任され、店長らしき男性は奥のドリンク売り場で補充をしていた。

ちょうど店長がしゃがんでいたとき、手元が陰で覆われて暗くなった。何げなく店長が顔をあげるとそこに外国人がいたので少し動揺していたが、そつと立ち上がり、立場をわきまえて接客する。

店長は中肉中背で温和な雰囲気を持っていたので声も掛けやすく、トニーが人懐こい笑顔を見せて安心したのか、前日の事件のことを

聞いてもいやな顔せず話してくれた。

「あれはびっくりしてしましてね。でもなぜか犬が突然犯人を襲ったのでお陰で私も隙をついて取り押さえることができました」

「サングラスを掛けた女の子のこと覚えてませんか？」

トニーが聞いた。

「ああ、覚えてます。詳しくはわかりませんが、多分目の不自由な方だったんじゃないでしょうか。あの犬も盲導犬と思ったんですけど、運悪く強盗がいるときに入って来たために、強盗も来るなと叫んだんですよ。彼女は多分何が起こったんだかわからなくて怯えたんだと思います。それで犬のリードを手放してしまっただけでしょうね。そして、犬の名前を必死に叫んでました。犬もそれで異変を感じて、パニックを起こしてあんなっちゃったんじゃないでしょうか。結果的にはすごく助かりましたけど」

トニーもジョーイも店長の話をおとなしく聞いていたが、確信するようにお互い顔を見合わせて合図を打っていた。

「それで、彼女は犬をなんと呼んでましたか」

「えっと、なんか目の手術の名前みたいなの。レーシック？ いや、

ちよっと違うな。あつ、そうだシックレー、シックレーって感じに聞こえました」

「シックレー？」

「何度もそう呼んでたら、犬が強盗の足を噛んだんです」

トニーもジョーイもはっとした。知りたいことがわかったとばかりに、二人は丁寧に礼をいい、目の前のペットボトルのドリンクを義理堅く二つとって、レジに向かった。



そしてお金を払って外に出て、二人はおもむろにドリンクを飲みだした。

「おい、これで決まりだな」

トニーがそういうと、ジョーイは「ああ」と頷く。

「やっぱりキノは強盗がいると分かっているわぎとああいう行動を起こしたってことになるな。店長が聞いたシツクレーっていうのは Sic legs のことだろう。犬をけしかけるとときに、使う言い回し。すなわち、”足を噛め！” って命令をキノは出していた」

トニーが言いたいことを言い終わるとまたボトルに口をつけた。

「あいつ、やっぱり考えて行動していた。そうすると俺が詩織から聞いた話も全てキノが分かっているってやったことになる」

ジョーイは制服の背広のポケットに入れていたビー玉を取り出し、それを眺めた。

「どうした、ジョーイ？ まだなんかあるのか」

トニーに声を掛けられて、慌ててまたビー玉をポケットにしまいこむ。そして首を横に振った。

トニーはその様子を怪しげに見ていたが、何も言わずにドリンクを飲み続けた。

ジョーイはどこか落ち着かず目の前の道路を走る車に視線を向けていた。

キノが起こした行動が全て計算されたものなら、このビー玉をば

ら撒いたのもわざとだったことになってしまっただけか？ だったらそれはどういう意味があるんだ。それともこれだけは本当に偶然だったのか。

ジョーイはまだ全てがはつきりしないと、少し自棄になってドリンクを喉に流し込んだ。それが空になると、ゴミ箱に荒々しく捨てた。

「さあ、トニー帰るぞ。とにかく夕飯の用意だ」

「今日もジョーイが作ってくれるんでしょ。ジョーイの料理最高だもん」

ジョーイは媚を見せるトニーにふんと鼻から息を漏らし、踵を返して歩き出す。その後をトニーはへこへこついていく様子を見せたが、トニーの目は笑っていなかった。

何も言わず、ジョーイは黙々と夕食の支度をしていた。それを当たり前のようにトニーはソファーで寛いで待っていた。

「キノには結局会わなかったけど、あいつに今度会ったらなんていうつもりだ？」

トニーが伸びをしながら欠伸も交えて質問する。

「さあ、どうだろう。俺たちがキノの行動を問いただしたところで、あいつはあっさり認めないだろう。暫くは知らない振りして様子みてみようと思う」

ジョーイは頭の中でキノ姿をイメージしていた。顔に似合わない

黒ぶちのメガネをかけておしゃれ気もないような地味な風貌。そして大人しそうでおどおどとした態度。顔はハーフでかわいい部類なのにそれを殺しているようだ。

トニーも奇妙だと言いたげな表情をして腕を組んで顔をしかめていた。

「でも行く先々でなんか人助けしてるもんだ。別に隠すことでもないと思うんだけど。そういう場面によく出くわすよな、常に周りのことよく見てないと気づかないもんだぜ。あいつドジそうで冴えないように見えるだけに、計算して動いてるなんてまだ信じられないや」

「ちよつと待った」

ジョーイはパッと何かが閃き手元が止まった。料理をほっぽり出して興奮した様子でトニーに近寄った。

「どうしたジョーイ？」

「トニー、今、なんて言った？」

「えっ、キノは困った人によく出会って助けたって言ったけど」

「違う、その後に、ドジで冴えないように見えるだけにああいう行動を起こすのが信じられないって言ったよな」

「ああ、言ったけど、それが何か？」

「そこだよ。彼女の狙いは」

「はっ？ 何の話」

「つまり、わざとそういうドジで冴えないふりをしてるんだ。それもキノの計算された行動だ。あの黒ぶちのメガネだって、普通年頃の女子高生があんなの掛けるか？ まるで、ほらあれだ、あれ。ク

ラーク・ケント!」

「それって、スーパーマンの仮の姿の? って、おい、キノはスーパーガールか? 彼女の目的はこの町の平和を守りに来たスーパーヒーローなのか?」

「そこまでいうつもりはなかったけど、何か訳があつて地味に暮らしているはずが、目の前で事件が起こってしまったってそれを無視できないために、最小限に目立たないように手助けしたんだよ」

「なかなか面白い話だけど、考えすぎなんじゃないか?」

「いや、そう考えればなんか辻褄が合うじゃないか」

「じゃあ、キノはなんでわざわざ目立たない地味な生活をしないといけないんだ?」

「それは……」

ジョーイは自分なりに考える。

あのビー玉がもし彼女の俺へのメッセージだったとしたら。

ジョーイはどうしてもアスカがキノで、こっそりと自分の様子を見に戻ってきたと思えてきた。

しかし根拠は何もない。ただの自分の思い込みに過ぎない。それをトニーに話そうとしても自分の過去のことを一から話す羽目になつてしまう。それもできない。ジョーイは「うーん」と悶えるように目を閉じて悩みこんでいた。

「おい、なんか焦げ臭いぞ」

トニーの一言で、ジョーイははっとする。ガスコンロを見れば黒い煙がポーポー出ていた。

「オーマイーガッ」

ジョーイは走り慌てて火を止めた。ブスブスとフライパンの中は焦げ付き、中の物は真っ黒でいかにもまずそうだった。

トニーも後ろから覗き込む。  
暫く沈黙が続いた。

「今日は外食しようか」

ジョーイが苦笑いになると「グッドアイデア」とトニーは慰めるようにジョーイの肩を軽く叩いた。

このときもどうせ食べに外へ出るのならとジョーイは駅前のファミリーストランを選んだ。キノがまた現れるのではないかと期待しての事だった。

二人は窓際の席に案内される。

トニーはウエイトレスに愛想を振りまき、早速お得意の日本語の話術でウエイトレスの心を掴んでいた。

その間ジョーイは窓の外を眺める。内側の明るさで暗い外は見え難くいが、向かいの建物や街灯の明かりがあるところは人が歩いている姿が見えた。

女性が歩く度、キノじゃないだろうかと目を凝らして見ていた。ウエイトレスが去った後、トニーはメニューを広げ何を食べようか思索していた。

「おい、ジョーイ何食べるか決めたのか？」

「うん、俺、今日のお勧めのこれでもいいや。決めるの面倒くさい」

お勧めとしてピックアップされていたメニューの写真を指差した。

「そうだな、俺もそうしようかな。ところでさ、なんでさっきから外ばかり見てんだ。まさかまだキノのこと気になってるのか。お前もしかして惚れたとか？」

「ま、まさか。そんなことある訳ないだろう。だけど気になるのは確かだ」

少し自分でも予想外に慌ててしまったが、下手に否定するより気になる部分は素直に認めることにした。いちいちトニーにからかわれないようにする防御策でもあった。

トニーがどう反応するかジョーイはちらりと様子を見る。

「へー、ジョーイが女を気にする。珍しいな。でもキノは確かに不可解なところがある。ミステリアスな存在だよな。しかし理由があって素性を隠そうとしているとしても、一体どういう理由があるというのだろう」

それが自分に関係しているかもしれない。ジョーイはトニーの指摘にドキツとしてしまった。それをごまかすためにグラスを口元に持っていた。

二人は適当に注文し、適当に食べ、そして適当に話す。

「そういえば、英会話ボランティアどうだったんだ」  
ジョーイは口元をナプキンで拭いながら聞いた。

「ああ、今日は顔合わせの自己紹介で終わった。てつきり女の子たちだけかと思ったら男も結構いてさ、ちよつとやる気なくした」

「そんで断るのか？」

「うーん、眞子ちゃんは大人の魅力があつてちよつとセクシーだったんだ。だから先生目当てでがんばってみる」

「一体何しにいくんだ」

「そのうちジョーイも一緒に行こうぜ。連れて来るって眞子ちゃんに約束したし」

「勝手に決めるな」

その時トニーの後ろのテーブルに向かって、仕事帰りの4人の〇らしき女性が案内されてきた。トニーは側を通った4人に愛想良く「ハーイ」と挨拶する。女性は声を掛けられて嬉しかったが、慣れてないので恥ずかしげに対応していた。

4人はトニーの風貌からインスパイアされて、お喋りは英語や海外の映画スターについて飛び交っていた。

トニーとジョーイが黙々と食べているとき知らずと彼女たちの会話がラジオのように流れてきた。二人は勝手に耳に入ってくるのでどうしようもなく聞いていた。

「そうそうあの映画に出てくる騎士もかっこいいけど、チヨイ役だったあの妖精の女の子もかわいかったよね」

「ミラ・カールトンでしょ。出番少なかったけど目立ってたよね」  
「あの子一回台本読むだけで全ての台詞を覚えるんだって。何でも言葉も何ヶ国語も話せるって聞いたことある」

「絶対これからブレイクするよね。まだ15、6歳だし」  
「それから……」

トニーはかわいいと聞いただけでどんな女優なのか見たくてうずうずしていた。ジョーイに体を近づけて小声で話す。

「なあ、ミラ・カールトンって聞いたことあるか。俺、話し聞いて興味もっちゃった」

「はいはい」と適当に返事をしてジョーイは全てを食べきった。そして窓の外をぼんやりと眺めていた。

結局この日一日キノに会うことはなかった。



前日のコンビニで起こったことを直接本人から聞きたかったが、店長の話聞く限り、やはりキノは企んでやったことが裏付けられた。

詩織から聞いた話も合わせれば、自ら危ないことに首を突っ込んでまで困った人を見たら放って置けない性格なのかもしれない。

ただ、目立たぬように外見を地味にしているのは、なぜなのだろう。

そしてジョーイの前で転がったビー玉の意味。

もしそれが意図されたことなら、ジョーイにしか分からないメッセージを突きつけた。

それはすなわち、キノがアスカだということ。

訳があつて名乗り出られないので、何かを伝えようとしているんじゃないか。

ジョーイにはもうそれしか考えられなかった。

(じゃあ、キノがアスカなら、俺はどうしたいんだ)

突然、電流を浴びたように体がビリビリといきり立つ。

「ジョーイ！ 何を突然立ち上がってるんだ。びっくりするじゃないか」

「あつ、いや、早く帰りたいなつてつい思つて」

自分の行動を誤魔化すが、ジョーイ自身うるたえていた。

「分かつたよ。ほれ」

トニーは勘定をテーブルの上で滑らせてジョーイに近づけた。

「はいはい。払ってきますよ」

ジョーイは課せられた義務のように請求書を握るとレジの前に向かった。

トニーは口元をナプキンで拭き、ふーっと満腹になったと息を漏らす。不意に窓の外を見ればラブラドルの犬が目に入り、さらにその隣に黒ぶちメガネを掛けた女の子がいたので、慌てて立ち上がりジョーイの元へ行く。

ジョーイは一万円札を出しているところだった。そこにトニーが「キノがいた」と言ったものだから、咄嗟に出口に体が動いた。

「ちょっと、お客さん、お釣り、お釣り！」

ジョーイはあたふたとレジに戻り、驚づかみにするようにお札を握ると小銭は飛び散った。構ってられるかとそのまま飛び出してしまった。

「トニー、キノはどっちへ行った」

「あつちに犬と一緒に歩いていった」

しかしその方向を見れば疾うにその姿はなかった。それでも二人は付近を捜す。

「絶対キノはこの近くにいるはずだ。駅前のマンションに住んでるらしいんだ」

ジョーイは辺りをキョロキョロしている。

キノに反応してこんなにも我を忘れているジョーイを見たことがないと、トニーは笑みを浮かべながら驚いていた。

「ジョーイ、やっとお前も高校生らしく熱くなったな。なんか嬉しいよ」

「えっ？」

ジョーイは急にしぼんだ風船のように勢いをなくしてその場で立ち止まった。猫背のように体を前に屈めながら呆然とする。

「どうした、ジョーイ？」

「俺、俺……」

「はっ、俺俺詐欺か？」

「帰るわ……」

「どうしたんだ。さっきまでの情熱はどこへ行った」

ジョーイは向きを変え、力なく歩いていく。

「仕方がないな。ちょっと慣れないこととして俺がそこを指摘したからって怒るなよ」

トニーは後ろからジョーイの頭をくしゃくしゃとつぶすように髪を掻き回してしてからかった。

ジョーイは気分を害した訳ではなかった。あることに気がついてしまった。

それは自分でもびっくりする感情。アスカに会いたい。そしてアスカが恋しいと。

（あの時、俺はアスカを失って、知らずと幻だったと思い込もうと

して自分を抑えていた。感情を外に出す事を拒んだ。怖かったんだ。失くしたものが何であったか気づきたくなかったんだ)

ジョーイはぎゅっと二つの拳を握っていた。

「クーン」

「ノー、クワイエット！ シー」

キノが犬に向かってひとさし指を口元にあてていた。

少し離れた大型電気店の中から顔を出して、ジョーイ達の様子を伺っている。

「よっ、キノちゃん。今日もツクモのトレーニングかい」

人のよさそうなふくよかなおじさんが店の奥からやってきた。

「あっ、店長。いつもお世話になってます」

「いいんだよ。盲導犬の訓練にうちの店にいつでもつれてきな。歓迎だよ。だけどそういえば、昨日この近くのコンビニで強盗未遂事件があつてその時の映像みただけでなんかツクモに似てたな」

電気店の店長は腕を組んで不思議そうにツクモをじっと見る。

「いやだ〜。私もそれ見ましたけど、あれはツクモじゃないですよ。こんな大人しいツクモが人を襲ったりする訳ないじゃないですか。人違いならぬ、犬違いですよ」

「そうだよな。こういう犬よくいるもんな。それにツクモはこんなに大人しいから人なんて噛まないよな。第一盲導犬だし」

ツクモと呼ばれた犬ははちきれんばかりに尻尾を振って愛想を振

りまっていた。

キノはジョーイたちの姿がすっかり見えなくなったのを確認してから、店長に挨拶をしてその場を去った。

「ツクモ、なんか派手にやっちゃったね。あの二人も私を探してるみたいだったし。ねえ、これからどうする」

ツクモは首を傾げて哀れんだ目をキノに向けた。

そして家に戻ったジョーイとトニーはネットでミラ・カールトンを検索して大声を上げていた。

「ええっ！ う、嘘だろ……」

「これどういうことだよ」

家に戻ってくるなり、ダイニングテーブルの上にノートパソコンを置いて検索をかけたトニーが答えを知りたいとばかりに声を荒げた。

そこには驚く結果が出ていた。

トニーが、コンピューター画面に人差し指を向けて目をぱちくりさせている。

ミラ・カールトンという名前で検索したとき出てきた画像は二人も知っている人物だった。

「どうしてキノの顔が出てくるんだ」

ジョーイが何度も目をしばたいている。

ミラ・カールトンはあまりにもキノに似ていた。

似ているどころか、瓜二つも通り過ぎて同一人物に見えた。

「おい、俺たちすごい秘密を知ってしまったんじゃないのか」

トニーが分かったとばかりに得意げになる。

「なぜ、キノは地味な風貌にならなければならなかったのか。その理由はこれだったんだよ。駆け出しのハリウッド女優で、その正体

を隠してお忍びで日本へ留学に来ていた」

「まさか」とジョーイはまだ信じられない。

「これで謎が解けるじゃないか。自分の真の姿を隠すクラーク・ケントだと言ったのはジョーイだぞ」

「でもさ、ミラ・カールトンっていくらキノと瓜二つといっても、ブロンドで青い目で、全くの白人じゃないか。キノはダークな赤茶色髪だし、目の色だって明るい茶色だったぞ」

「そんなもん、いくらでも変えられる。髪を染めることも、色つきのコンタクトレンズつけることも、なんとでもできる」

「でもキノはアジア系の血が入ってる感じの顔だぞ」

「だったら、ミラ・カールトンが修正入れた顔なんじゃないのか。映画の世界だぞ、特殊メイクのプロがいつも側についているところだ。こんな顔立ちも化粧で簡単に作れるだろう。青い目のコンタクトを入れればアジア人でも白人みたいに見えるじゃないか。まあその反対もありだろうし。そんなのどっちでもいいや」

トニーは興奮していた。まだ駆け出しとはいえ、映画に出たハリウッドの女優がすぐ側にいる。何かとワクワクするようだった。

ジョーイはまだ慎重だった。キノはアスカだとほぼ固まりつつあったところに予想もつかない展開になってしまい、がっかりとしてしまう。

アスカがこっそりと自分に会いに来てくれたと勝手に想像していたことが馬鹿らしく、そして誰にこの話を漏らしたわけでもなく羞恥心を感じてしまった。

折角やっとな気がついた気持ちも宙ぶらりん。

(俺はキノを通してアスカを感じたかっただけか)

このとき、詩織に言われた言葉を思い出した。

『人は気になる過去の記憶をすり替えようと今の状況に置き換えて解決したいって思うことってないかな』

詩織が自分の妹、アスカをキノに例えたとき、ジヨイーは思いっきり否定したくせに、自分はそれを棚にあげて過去の記憶を現在に摩り替えようとしていた。

そうすることが本当に楽だった。だが、キノはアスカではない。

(俺はアスカの幻影を追い求めすぎていたって訳か)

なんとも情けない、眉毛が浮いたような表情でふーっと鼻から息が漏れた。

次の日、トニーは一層キノの姿を探した。朝の通学で、キヨロキヨロしすぎて不審人物になっていた。

「ちょっとは落ち着けよ、トニー」

「これが落ち着いてられるか」

「でも、彼女にしてみたら気づかれないことなんじゃないのか。だったら知らないフリをしてやるのが一番だと思っただけだ」

「その前にちゃんとした友達になっておきたいんだよ。知り合いにハリウッド女優なんて滅多にないチャンスだぜ」



下心丸出しのトニーにジョーイは呆れる。  
しかし、この日もキノに会うことはなかった。ちゃんと学校に行っているのかさえわからない。

そして放課後、トニーはまた英会話ボランティアへ向かい、ジョーイは無理やり引っ張られていきそうになるところを、寸前で交わして走って逃げた。

何が楽しくて人の手伝いをしなくてはならない。  
ズボンのポケットに手を入れ、下校する生徒に紛れて、不満な顔つきでふてぶてしく歩いていた。

「あの、ジョーイさん」

校門を出ようとしていたとき後ろから声を掛けられる。  
振り向けば、リルがいた。

気を使うのも話すのも億劫で、愛想がない顔を向けたが、リルの方がそれ以上の仏頂面だったように思えた。  
あれが人に声を掛ける顔かと思いつつ、自分もこれが人に声を掛けられて応える顔かという勝負だった。

さすがなんとなく同じような雰囲気を持つ自分達。

「やあ、何か用か？」

「これ、どうぞ」

リルは黄色い網にいくつも入ったビー玉をジョーイの目の前に差し出した。

ジョーイは暫くぼーっとしていた。

「ビー玉探してたんでしょ。家の近所に百均の店があったから、ついでだったし買って来た」

「えっ、俺に？」

リルは頷き、さらにジョーイに接近する。そして拳骨を突き出すように力強くビー玉を差し出した。

ジョーイは受け取れと脅迫に似たものを感じ、それを恐々手にした。

「ありがと。そうだ、金払わなくっちゃな。消費税入れたら105円でもいいのか？」

「とても細かいんですね。でも、いらない。私からのプレゼント。

その代わりに、一緒に帰ろう」

「…… ああ」

先に物を貰うと断れない。リルに圧倒される形でジョーイは肩を並べて歩く羽目になった。

お互い暗く、話も弾むこともなく、足並みだけは揃う。

「私、変でしょ」

リルが唐突に話し出す。

そう思っただけでもジョーイはハイと返事できず、曖昧に声を濁らしたような息を吐き出した。リルはそれでも表情を変えずに話し続ける。

「私、昔はちゃんと笑える子だったんだよ。近所にね、私のことアスカって呼ぶお兄ちゃんがいて、それが私の本当の名前だと思って

「いたみたい」

ジョーイはただ聞いていた。アスカという響きが脳裏の中の何かに触れながら。

「そのお兄ちゃん、とても優しかった。私、風貌がこんなんでしょ。同じ年頃の女の子って目ざとくそういうところ突付くんだよね。それで友達いなかったから、お兄ちゃんが仲良くしてくれてすごく嬉しかった」

ジョーイの頭の中ではいつしか自分とアスカに置き換えて聞いていた。アスカと過ごした時間が映像となって目の前に現れていた。

「だけどそのお兄ちゃん、いなくなっちゃった。自分でも何が起こったかよく覚えてないけど、気がついたとき自分は病院にいたの。ミイラみたいに包帯ぐるぐる巻きで。後で聞いたら、そのとき建物の小型飛行機が墜落して、家がどーんって爆発したみたいに焼け焦げたんだった」

ジョーイは眉間に皺を寄せた。何かが被る。

「お兄ちゃんもその時私の側にいたはずなんだけど、それ以来姿を見ることはなかった。子供心ながらとてもショックで一時期話すこともできなくて、その間に英語も忘れちゃった」

「あのさ、それってどこで起こったんだ？」

「アメリカ」

「えっ」

「私のお父さん、日本人だけど留学していて、そこでお母さんに出会ったの。最初はアメリカで住んでいたんだけど、暫くして日本に移住してきたの。お陰で日本語はなんとかしゃべれるようになった

けど、英語はすっかり抜けてしまった。だけど、私が日本人離れした顔だから、それだけで英語が喋れて当たり前って思われて、それで話せないと分かると、馬鹿にされたりした。また欧米の顔でもないでしょ。なんか蔑んで見られたり」

ジョーイはまたこんがらがってきた。リルの話がところどころ自分の過去と重なる。アメリカのどの州にいたのか聞こうとしたが、リルはまだ話し続けている。

「昨日、ジョーイさんのこと恵まれているって言ったけど、ジョーイさんのお母さん白人でしょ。そっちの血が入ると私のような東南アジア系より日本人に好まれるよね。それにバイリンガルで、どっちの言葉も話せるし、憧れの対象だよ」

これが前日リルが見せた態度の元凶だった。道理でコンプレックスを感じていた訳だとジョーイは納得していた。

「あのさ、俺の場合は、母親が日本人なんだ」

「あれ、でも桐生さんって苗字……」

「母親の姓だ。うちは離婚したんだ。今のところ二重国籍だから国籍選ぶまでどっちの姓も名乗れるけど、母親の戸籍に入ってるから日本に住んでる以上、日本語の姓の方が便利だね。でもアメリカのパスポートは親父の姓になってる」

「そっか。ジョーイさんも色々あるんだ」

「名前なんかどっちでもいいよ。リルの苗字のアスカだって結局は自分の名前に間違いないだろ。だったら嫌いになるな。ところで、さっきの事故の話だけだ」

ジョーイが話を戻そうとしたときだった、微かに嚙り泣きが聞こえてきた。よく見るとリルが涙ぐんでいる。

「おい、なんで泣いてるんだ」

「だって、ジョーイさん、あの時のお兄ちゃんみたいなんだもん。

お兄ちゃんも私が自分の顔が嫌いだっていったら、自分のこと嫌いになるなって、怒ってくれた。それでつい思い出しちゃって。あの時のお兄ちゃんがジョーイさんと重なる」

ジョーイは黙り込んだ。ぐつと歯を噛みしめ力を入れる。心の中で何をやってるんだと戒めているようだった。

それは自分の過去の記憶と重なるところを見つけて、また無意識にリルのことを自分の記憶の中のアスカではないかと一瞬でも思ってしまったからだだった。

だが、すでにリルが目の前で辛い思い出の中の”お兄ちゃん”を現在のジョーイに重ねて見ている姿を見ると、やるせなくなつた。

状況が似てようと、ジョーイがリルの知ってるお兄ちゃんではないように、リルもジョーイの知っているアスカではない。

ジョーイは突然ぐつと意識して背筋を伸ばし、前を向いてしつかりと歩く。

いい加減、過去の話に翻弄されるべきではないと自分に言い聞かせているようだった。

リルはジョーイとは反対方面の電車に先に乗っていった。

電車の扉の窓から向かいのホームにいるジョーイに向かって手を振る。

その時外から窓に入り込んだ光の屈折なのか彼女がうつすらと微笑んでいたように見えた。いや、実際に微笑んでいたに違いないとジョーイはそう思うことにした。

そして応えるように指が伸びきってない手のひらをちらっと一度見せてやった。

リルが乗った電車はゆっくりと動き駅のホームを去っていった。

電車を待つ暫くの間、ジョーイはホームに同じ制服を来た学生たちをウォッチングする。

音楽を聴く者、本を読む者、ぼーっとただ立っている者、友達と楽しく会話をしている者、それからいちやついているカップルたち。これが高校生活の一幕。

(俺は周りからどう見られているのだろう)

ふと自分のことを気にしてみた。そう思うようになったのも、リルという自分によく似た人間を見たからだろうか。

トラウマとコンプレックスを抱いた笑わない少女。

見ていて痛々しく思ったのも事実だった。

自分のことを少しだけ気にするようになったのも、アスカの記憶に拘るなど自覚した第一歩なのかもしれない。

今度のカウンセリングで早川真須美が自分の変化に少しでも気がつくだろうか。そう思うのも不思議だったが、明らかにジョーイの中で何かが違ってきたように思えた。

自分について考えながら電車で揺られ、そして乗り換え駅でないと、すれ違いざまにある人物を見てはつとした。

キノを追いかけていたストーカーがいた。

もしかやこの男、キノの正体に気がついていてそれで追っかけをしているのかもしれない。

これもまた話が繋がったように思った。

この男は危険な存在かもしれないと、ジョーイは後を追いかけてその男の肩を叩いた。その男は振り向き、見知らぬジョーイに戸惑っていた。

見れば見るほど冴えない男だと嫌悪感を抱きジョーイの顔はきつく睥睨する。

「あの、何か？」

おどおどした声だった。

「あのさ、あんた、キノを追いかけてるだろ」

「キノ？ あつ、もしかしてあの黒ぶちメガネの女の子ですか」

「そうだ。いいか、彼女に近づくんじゃない。お前彼女が誰だかわかってんだろ」

「えっ？ なんのことかわかりませんが、僕は彼女と直接話をしたいんです」

冴えない面がどことなくとぼけているように見える。ジョーイは苛立った。

「だからそれが迷惑っていうんだ」

「けどどうしても会いたいです。そういうあなたは一体キノさんのなんなんですか？」

「えっ？」

ジョーイはそういえば自分はキノを知ってるがまだ友達とも呼べる仲でもなかった。彼女のことを気になりすぎて知り尽くしていた気分になっていたが、実際ジョーイの立場はなんだろうと自分自身考え込んでしまった。

凄みを利かせていた顔が、間の抜けたぼかんとした表情になり、暫く沈黙が続いた。

「あの、僕ちよつと急いでいますので失礼します」



ちょうど逃げられるタイミングだと、ジョーイの気が抜けているときにストーカーはさっさと去っていった。ジョーイはまるで海岸に取り残された漂流物のように、もの悲しげに置き去りにされていた。

我に返ったとき、人がひっきりなしに両端を歩き流れてジョーイは周りの歩く人の障害物になっていた。

自分でも何しているんだと、突然起こした行動に信じられないでいた。

「ジョーイ！」

今度は自分が後ろから肩を叩かれる。そして振り向けば、詩織が微笑みを一層強くして目を細める。

「こんなところに突っ立って何をしてるの。あつ、もしかして私を待っていてくれたとか」

「そ、そんなんじゃない」

「あつ、ほらほら、あそこ見てごらん。改札口の向こう側。あそこからジョーイのこと見てる女の子たちがいるでしょ。あの子達、あなたのファンクラブの子よ」

「えっ？」

改札口を出たところ、端の方で女生徒達がジョーイを見ていた。詩織がジョーイの腕を上に取り左右に振ると、彼女たちは飛び上がってキヤーと露骨な態度を取っていた。

「おい、何すんだよ」

自分の腕を振り解いた。

「これで分かったでしょ。ファンクラブの存在」

「そんなことどうでもいいよ」

ジョーイは不機嫌な顔を露骨に見せた。

「また怒らしちゃったかな」

詩織はそれでも懲りずに笑っていた。

こいつも変な奴だとジョーイは眉を眉間に寄せて視線をぶつける。

「ちよつと、詩織！」

また新たに誰かやってきた。

「急に走って行くから、びっくりするじゃない」

「ごめん、つい愛しの王子さまを見つけちゃって。それがこの人」

両肩を掴まれてジョーイは詩織に押し出された。

目の前にセミロングのストレートな髪にカチューシャをつけた女性  
性が、顔を突き出してジョーイを上から下まで吟味して見ている。

ジョーイは不快な気持ちを伝える前に、詩織の友達は驚きを交えて喋りだした。

「えー、この人が詩織の彼なの？ うわあ、初めまして吉本瑞菜と

申し………」

「違う！」

ジョーイは最後まで聞かずに即座に返答し、礼儀もわきまえずにさっさと去る。

瑞菜の不快感は顔にあぶりだされていた。

「ちょっとジョーイ。ごめん、瑞菜。先に帰ってて。ほんとごめんね」

詩織が手を合わせ謝罪をする姿を不満げな顔つきで見下ろすが、渋々受け入れて瑞菜は帰っていった。

ジョーイを追いかけ、詩織は彼の腕をむぎゅっと掴んだ。力が入り過ぎていて痛みを伴う。

「痛いだろ。お前とかかわると必ずイラつく」

「それ、酷くない？ 私たち友達でしょ。冗談くらい言ってもいいじゃない。これって気を使わないで付き合える理想の関係だよ」

ジョーイは詩織の手をはたき、一息いれて間を置くと、詩織に面と向かった。

「あのさ、なんで俺なんだ。詩織のことを思ってる男は他にいるだろっ」

「でも私が思いを寄せるのはジョーイなんだもん。それに……」

詩織はその先を遮った。ざわざわと駅の中のうるさい音が急に耳につく。

「なんだよ、急に黙り込んで。用がないのなら俺帰るから」

詩織の目が水面のようにせせらぎ、水気をたっぷりと含んでいく。リルの時もそうだったが、どうしてこういう展開になるのかジョーイは頭を抱えてしまった。

しかし、詩織の涙の中に複雑な心境が含まれているのが見える。

この状況ではその涙の訳を聞くのが筋だと、ため息を一つついて観念した気分で詩織を見つめた。

「ごめん、ジョーイ。私、はしゃぎ過ぎちゃった。ジョーイが普通に私に接してくれて嬉しくて、そんなジョーイが益々好きになつていくし、恋が止まらなかった。私こんな風に恋したことなかったんだ」

「だったらもつと俺に好かれようとか、そう思わないのか」

「もちろんそうなんだけど、ジョーイには私のありのままの姿をみて欲しかったんだ。嘘偽りない自分の姿を」

詩織の目に溜まっていた涙はそこに留まり切れないと、つーっと頬を伝っていく。

「あのさ、俺、ハンカチとかもってないんだ。だからほら」

ジョーイは詩織の制服の袖を取ると、彼女の腕も一緒につられて上にあがった。そしてそれで拭おうとする。

「ちよつと」

「仕方ないだろ、泣く方が悪いんじゃないか。制服汚したくなかったら泣くな」

詩織はジョーイの顔をむすつと見つめて、堂々と自分の制服の袖口でワイパーのように一拭きした。そして肩が動くくらいの大きな息を吸って吐くと、そこにいつもの笑顔が伴っている。

「あのさ、私、子供の時、自分がちやほやされて当たり前だっと思ってたの。みんなかわいっていつも言ってくれたし、自分でも愛されてるって子供心ながら自覚していた。

だけど両親が離婚して、私は経済的な理由から父親に引き取られ、母はその後仕事先で知り合ったアメリカ人に見初められて、あつと

いう間に再婚。そして渡米して異父姉妹ができた。

私は母親に会う権利があったし、父もそれについては理解があったので、海外で少しだけ母たちと一緒に過ごしたの。英語なんて全然分からなかったけど、いろいろなところに連れてって貰えたし、それなりに楽しかった。

妹もお姉ちゃんができたって喜んでくれて、懐いてくれたの。妹はハーフで本当にかわいかった。だけど私は嫉妬したの。優しいお父さんとそして私の母にたっぷり愛されてるところを目の当たりにすると耐えられなかった。

だから妹に覚えたての英語で『I don't like you』なんて言っちゃった。妹はショックだったのか泣きながら家を飛び出してしまって、夕方になっても戻らなくてそれで警察ざたになっちゃった。

あの時私もこの大きさに気がついて頭が真っ白になっちゃったから、そのときの記憶があやふやなんだけど、とても嫌な思いだけは残ってるんだ。

その後はいい子になろうって、人を傷つけちゃいけないんだって頑張ってきたんだけど、男の子には好かれても女の子にはいい子ぶってって嫌われることが多かった。仲良くしてくれる男の子とちょっと楽しく話したら、すぐに告白してきたり、その男の子を好きな女の子には睨まれるし、本当に最悪。

そんなトラブルばかり続くから、みんな色眼鏡で私のこと見ちゃって、私は自分の思うままに接しられなかった。

だけど、ジョーイは違ったの。ジョーイはかっこいいのに、それを鼻にかけない、寄ってくる女の子にも見向きもしない、自分の思うままに生きてるって感じがした。そんなジョーイに恋をして自分は本当に楽しかったんだ。だから自分も思うままにジョーイに接したかった」

詩織は詩織なりの悩みを持っていた。一度見れば忘れられないく

らしい美人。しかしそれ故に嫉妬の対象にもなりやすく、そして彼女自身、嫉妬とは何かを身をもって経験している。詩織にも詩織なりのコンプレックスがあった。

ジョーイは一言も発さず最後まで静かに聞いていたが、詩織が静かになった後を見計らって口を開く。

「わかったよ。でも俺はお前とは友達だが、恋人ではない！そこだけはつきりさせておく」

「でも私がジョーイを思い続けていてもいいよね」

「それは詩織の自由だ。だが、俺には何も期待するな」

「うん、これからはジョーイに好かれるように努力して、いつか振り向いてもらえるように頑張る」

「無駄なことは頑張らなくていいぞ」

「でも、ジョーイは一生恋をしないつもりなの？」

「そんなの知るか！ マイナス1点！」

「は？ 何よそれ」

「はい、解説します。俺が気に入らなかったことを発したときや、または行動で表したとき、点数をつけることにしました。マイナスの数が増えれば、どんどん離れて、最後には友達解消です」

「えー、ちよつと、それ嫌だ。あつ、でもプラスになればいいんだ。だったらそれグッドアイデアかも。点数が10点になったとき、私のこと考えてくれる？」

「それはありません。プラスの点数はつけないことにしています」

「ジョーイ！」

「とにかくだ、俺の気に障ることをするなよ」

「ううん、約束できない。だって私はありのままの私でいたいから」

詩織は吹っ切れたような笑顔をジョーイに向けた。

やっぱりそれは詩織らしい清清しい潔さに見えた。そういつとこ

るはジョーイ自身羨ましく思えるのだった。

詩織は嫌いではないとジョーイは軽く詩織の頭をこついた。  
詩織の目は先ほどの涙で潤っていたが、それが効果的により一層輝きを増す。

「ジョーイ、それじゃまたね」

詩織のプリーツの入ったスカートが軽やかに揺れて、これ以上の長居は必要ないとばかりに自ら引き際を見せる。後腐れないところは気に入った。

「プラス1点……」

ジョーイが小さくつぶやくが、詩織の耳に届くことなく、詩織の姿は押し寄せてくる人ごみに同化されていた。

ジョーイが腕時計を見れば、電車の発車時刻が近づいていた。慌ててホームに向かって、ドアが閉まるギリギリのところまで電車に飛び込む。

この日の夕飯は何にしようだのと主婦のようなことを考えながら、電車に揺られ家路に向かっていった。

無防備でいただけに知らない人から声を掛けられたときは非常に驚いた。

「ジョーイ・キリュウ」

後ろから突然名前をフルネームで呼ばれたのは、自分の駅の改札口を出た直後だった。

発音とイントネーションが日本語読みではない。

振り返れば、周りの人間よりも頭一つ分以上飛びぬけた、大柄な男が目に入る。黒い革ジャン、ジーンズ、ツンツンに立てたダークな髪の毛、そして黒いサングラスとそれらが合わさるだけでも目立つというのに、さらにそいつは日本人ではなかった。

ポーズをとるようにサングラスを粹にはずして、気取った笑顔を見せたが、ジョーイの目は気にいらないと力が入って細まった。

「（少し時間あるかい？）」

「ノー」

「（おいおい、その態度はないだろう）」

「（母から知らない人には気をつけると言われてますので）」

「（君は知らなくとも、私は君を知っているんだが、とにかく少し聞きたい事があるんだ）」

上から目線の横柄な態度が鼻につき、顔は思い切り歪む。

ジョーイの警戒する態度はやる気を起こさせ、その男は笑みを浮かべながら、懐から何かを取り出し、自慢げにそれをジョーイの目に突き出す。

ジョーイは目に付いたところを口に出して読む。

「（FBI…… ガイ・ダルビー？）」

「（おっと、Guyと綴るが、読み方はギーだ。ギー・ダルビー、よろしくな）」

「（FBIが日本で何を？）」

「（おや、この状況でまず最初になぜ自分に関係があるのだろうと  
思わないんだ？）」

「（俺は悪いことなど何もしてない。FBIに声を掛けられても自分のことに関係しているなどと全く思えない）」



「（まあ、いいんだけどね。そのうちわかることだから。ところで、最近誰かから連絡なかったかな？）」「

「（一体何がしたいんですか。あんたのこともよく知りもしないのに、俺には答える義務はない）」「

「（一筋縄ではいかないと思ってたけど、君から情報を得るのはやはり困難だ。君は何も知らなさ過ぎる。知ろうともしないけどね。但至少は知っておいた方がいいんじゃないかい？ まあ、私もお節介だとは分かってるんだけど、君を見てたらイライラしてきてね）」「

「（一体、何が言いたい。回りくどく真相をぼやかしたことを言われてもさっぱり理解できる訳がないだろうが）」「

「（はいはい、すみませんね。私もはつきりと君に言ってやりたいんだが、上からの命令でそれができない。だけどヒントをやるう。それで君が勝手に気づけば、私は直接言ったことにはならない）」「

ギーはポケットから小さな粒を取り出し、それを手のひらに転がしながらジョーイに差し出す。

「（なんだよ、これ。ただの大豆じゃないか）」「

「（いいからいいから、これが真相なんだ。ほら受け取れ）」「

ジョーイは近くで見てやるうと挑むように受け取った。

「（それじゃ今日のところは、これで失礼する。そうそう、サクラは今いないんだっただな。真相を知るチャンスかもな）」「

「（おいっ、どうして母さんのことを）」「

ギーはサングラスをまた掛けると、悪意のある笑みを片方の口元に込めて吊り上げた。

ジョーイが引き止めても振り返ることなく去っていった。

追いかけて問いただしても無理だと思つと、ジョーイは後姿を睨

むことでしたか気持ち処理できなかつた。手のひらの一粒の大豆をぎゅつと握り締め地面を蹴るように踵を返して、ジョーイは家路に向かった。

一体、この大豆は何を意味しているのか。ギーの目的は何なのだろう。

指で大豆をつまみ気を取られていると、ぼやけた視界の中で大型犬を連れた人とすれ違う。ジョーイははっとして振り向くが、キノじゃないと分かると大きなため息が出た。

ノンストップでねじ込まれるように何かか迫ってくる。それはキノが転がしたビー玉から次々に連鎖反応を起こすように作動し始め、不思議な事件や事柄がびっくり箱を開けたように登場する。

まるで自分がお遊びに仕掛けられたピタゴラ装置の転がる玉のような気分だった。

そのきっかけを最初に作ったキノは一体何者なんだ。本当にハリウッド女優なのだろうか。

ジョーイは思い立ったように方向を変えると足は本屋を目指していた。

雑誌コーナーを目指して映画やハリウッドスターのものはないかと探す、間違つてアダルト雑誌が目に入るとジョーイはドキッと体に刺激の電流を流した気分だった。

そんな時不意に周りの男性たちと目が合つと気恥ずかしい。慌てて去るのも、じつとその場にいるのもどちらも嫌だった。

そのままカニ歩きになりながらゆっくりずれていくと、それらしき雑誌を見つけた。

手にとってみたが、付録がついてるのか紐で閉じられて中の様子が見られない。表紙にはミラ・カールトンという名前も載っていないところを見ると、まだ日本では知られてないように思えた。

仕方なく諦めて、本屋を出ようと思ったが、今度は大豆のことが気になって、何か関連する本はないだろうか、その辺を歩き回った。

料理本のところで、ヘルシー大豆料理特集というのが目に入ったが、ぱらぱら見ても食べ方くらいしか載っていない。

分からないことだらけだと、ジョーイは不満な顔つきになりながら、何も買わずに本屋を後にした。

その後本屋の中で、ジョーイが手にした本を峻厳な目で見ていた者がいた。同じように手に取り、喫緊の問題のように捉えていた。

それは前日もスーパーでジョーイを陰から見ていた男だった。

ジョーイが家の鍵を開け、ドアノブのレバーに手をかけた時、一瞬動きが止まる。

ギーの言葉が頭によぎっていた。

『真相を知るチャンスかもな』

母親が出張でいないことを知っていたギー。

母親が居ないことが真相を知るチャンスとは一体何のことだろうか。

ジョーイは邪念を捨てるようにドアを力強く開けて家の中に入った。

まだトニーは帰ってきていない。

誰もいない静まり返った部屋。すっかり薄暗く、視界のはっきりしない霧の中にいる気分だった。

靴を脱ぎ、二階の自分の部屋に行こうと階段を上りかけたときだった。手すりに手をかけたまま体は停止する。ギーの言葉が更なる霧を作り、頭の中まで入り込む。それを取り除きたいがためにジョーイは一階にある母親の部屋に向かった。

引きドアをスライドさせるとそこだけ唯一畳がある和室だった。

電気をつけると、筆筒や小さいちゃぶ台があるだけの飾り気のないシンプルな空間がくっきり現れる。普段も入ることなくいつも素通りな場所だが、ギーの言葉で突然に秘密が隠されているように思

えてならなかった。

母親といえども、黙って留守中に部屋に入るのは気が引けたが、ジョーイは息を飲み辺りを見回す。

まず筆筒の引き出しを開けると泥棒になったような気分になる。その上には自分と母親が写った数年前の写真が木でできたフレームの中に入れて飾られていた。

写真に写っている母親と目が合うと、益々良心の呵責が強くなる。なんとも後ろめたい気分で一通り引き出しに目を通したが、一番上は小物類、その他は衣類しかなかった。

次に押入れの前に立ち、躊躇いながらスライドさせた。

上の段は布団があり、下の段には収納入れのようなものが入っていた。反対側もチェックするが、段ボール箱やジャンクっぽいものが押し込められていた。

箱に手を出し軽く手前に引いてみる。あまりにもそれは容易い動作だった。

もし隠したいことがあるのならこんな分かりやすいところに無造作に置いておくだろうか。

ジョーイは中身を確かめることもなく元の位置に戻した。

後味の悪い顔になりながら、押入れの襖をそっと閉める。

そして筆筒の上に飾ってあった写真立てを手に取り、母親には直接言えない分、写真に向かって「ごめん」と謝った。それをまた戻そうと置いたとき、ぱたつと後ろに倒れてしまった。後ろの支えの部分をしっかりと固定しようと手にとったとき、パラッとその部分が弾みで外れてしまい、中の写真がずれてしまう。

きつちりきれいにはめ込もうと一度裏を取り除いたときだった、写真が二枚入っていたことに気がつく。後ろに隠れていた写真をジョーイはゆっくりと眺めた。

そこにはサクラを真ん中に挟んでジョーイの父親、そしてもう一人見知らぬ男性が笑顔で写っている。写真は古ぼけているが、その中の三人は若々しく、学生のようなだった。

「大学時代の写真だろうか。ダディと母さんが一緒に写ってるのは分かるが、もう一人のこの男は誰だろう。なぜこの写真を隠すようにここに飾っているんだろう。母さんの若き忘れられない思い出もあるのだろうか」

これについてはそんなに根深く疑問に思うこともなかった。家の爆発の事故以来、過去の産物も吹っ飛び、唯一残った写真があるとしたら大切にしたいという思いはジョーイにも理解できた。

それが青春時代のものなら隠すように飾っていてもおかしくもない。

初めて見る写真。若かりし頃の両親の姿を暫くじっと見つめていた。そして視線は見知らぬ男へと移る。

その男は髪も髭も長く、色的にもライオンのような鬣に見え、そこにサングラスを掛けていたが、がっしりとした体躯でかっこいいワイルドな魅力があった。

その反対側の父親は対照的に誠実で真面目腐った堅物に見える。ジョーイの目は寂しげにそれを捉えていた。

「そういえば、俺のダディってこんな顔だったな。ずっと見てなかったから忘れてた。俺に会いたいとも思わず、一体どこで何をしているのやら」

ジョーイ自身も今更会っても何も言うこともないと、次第に冷めた目つきに変わっていった。

ジョーイの記憶には、泣いていた母親に気遣うこともなく、黙って去っていった父親の後姿が残っていた。子供心ながら何か重大なことがあったと感づいていたが、あのとき母親が見せた悲しい表情が離婚を物語っていたのだろうと思う。

そして自分たちは捨てられた。

一方的に父親が悪いという見解のために父親に会いたいなどと母親の前で言ったことはなかった。そしてそれはいつしか話にはいけないとまで思うようになったのだった。

あれを境に父親に会うこともなくなったが、その後にアスカが消え、そして家が爆発した。

あれからジョーイ自身、変わってしまったと自覚している。

一体あの時何が起こったのだろうか。

「もしあの出来事がギーの仄めかした真相に関係していることなら、それを母さんは隠しているというより、辛い思いを忘れたいために言いたくないだけなのじゃないだろうか」

ジョーイは写真を元に戻しながら、コトリと慎重に筆筒の上に飾

った。

探ろうという気持ちは疾うに失っていた。

FBIが探ってるのは家が爆発したことでの事件性であり、自身には関係ないこと。そんなことに自分が利用されては困ると、ジョーイは母親の部屋を去った。

だが、渡された大豆の謎だけはどうもすっきりとしない。どんなクイズ番組の答えも答えてきたジョーイにとって、与えられた課題を解けないのは癪に障った。

謎を解くぐらいなら問題ないだろうと、大豆の件だけは心に留めておいた。

ジョーイはこのとき、まだ物事を軽く捉えすぎていた。

大豆のことを考えながら今晚の夕飯を作る。ご飯を作るのはジョーイの仕事となり、トニーは片付け専門とに自然に分かれていた。

玄関先でにぎやかな声がすると、トニーがダイニングエリアに現れた。

「なかなかすぐに帰れなくてさ、すっかり遅くなっちゃった。おっ、嬉しいね。ご飯がすでにできてるなんて。いい妻を持ったよ」

「馬鹿！ 早く手を洗って着替えて来い」

「でも、なんかすごくヘルシーな献立。豆腐料理？ 豆料理？」

ジョーイは大豆のことを考えすぎてわざわざそれにまつわる食材を買ってきて作ったのだった。

冷奴、厚揚げ、アゲの入った味噌汁、納豆、豆の煮付け、豆サラ



ダがテーブルに置かれていた。全て大豆に係る。

「不服なら食うな」

「いえ、そんなことはありません」

トニーは急いで服を着替えて食卓についた。物足りない気もしたが、空腹が進ませ、ガツガツと食べていたが、納豆だけは無理だと、ジョーイの方へ押しやった。

「なあ、トニー、大豆と聞いたなら何を想像する？」

「は？ そりゃ、豆腐、醤油、味噌、豆乳…… それから、豆まき？ 鬼、節分！ でもなんでそんなこと聞くんだ」

「大豆見てたら、奥深いなと……」

ちらりとトニーに目をやり、表情を伺いながら話す。

「時々変なことに拘る癖がある奴だと思っていたが、今度は大豆がテーマかい。それで今日の夕飯がこれなのか」

「俺、そんなに変なことに拘ってるか？」

「ああ、ジョーイの拘りは異常だぞ。例えば風呂場のシャンプーの位置。俺が動かすと必ず元に戻すだろ。しかも同じ向きにして。本を並べる順序もそう。必ず元の本棚の位置に戻す。俺なんてたくさんありすぎて順序なんて覚えてないから適当に入れても、ジョーイは並べ替えるんだよな」

「そんなの普通じゃないか。きつちりと整理整頓してるだけだよ。お前がだらしなだけで」

「市販の食べ物でもそう。原材料が何かきつちり見る。今回の大豆もヘルシーとかの文句に煽られて拘ってるんだろ。何かと世界でも大豆ブームだからね。それとも他に何か理由があるのかい？」

ジョーイにはトニーが別の方向で捉えてくれている方が都合がよかったので、拘ってると言われむすつとしそうになったが、そういうことにしておいた。

「その通り、大豆はヘルシーだ」とジョーイは箸で煮豆を一粒つまんだ。

「そりゃ、繊維質、植物性たんぱく質、イソフラボンとか体にいいもの一杯詰まってるのは分かってるけど、今日はこれでいいとしても、毎日これじゃ俺は嫌だからね」

「イソフラボン……」

「どうした、まだ何か拘ってるのか？　もしかしてダイエットとか更年期障害とかいうなよ」

「お前よくそんなことまで知ってるな。しかし俺がそんなことがあるわけないだろ」

「だったら大豆の何に拘ってるんだよ」

トニーは夕食に少し不服ながら、空腹を満たすためにひたすら食べていた。ジョーイはその後何も言わずに味噌汁をずーっとすすった。

「あつ、そうだ。今日キノに会ったぞ」

ジョーイの口から味噌汁が吹き出そうになる。

「おい、汚いじゃないか。気をつける」

「どこで、会ったんだ」

「英会話ボランティアで一緒だった」

「えっ？」

「俺も、彼女を見たとき、思わず『オーマイーガード』だった。教室では個人的に話すことができなくて、挨拶するだけで終わった

んだけど、その後一緒に帰ろうとしたら、誰かが迎えに来てるからっていつて急いで帰っていった。そしたら本当に車に乗ったとこ見ちまったよ。誰が運転してるか分からなかったけど、ありゃ、男だな」

ジョーイは言葉を失ったまま、トニーを見ていた。

「やっぱりハリウッド女優だけあって、周りは派手なんだろうか。益々興味湧いちゃうね。ん？ どうしたジョーイ。驚いた顔して。やっぱりお前も気になるんだろ。ジョーイにしては女に興味を持つのは珍しいけど、キノは不思議なことやるだけに特別だよな」

「特別……」

ジョーイはその言葉を繰り返すと、特別な重みを感じて体が緊張していた。

硬くなって突っ張っていたジョーイの体の筋肉は限界だとばかりに突然力が入らなくなり、持っていた箸をぽろっと落としそうになった。

はっとして慌てて箸を掴み直す。

何を動揺しているのだろう。

落ち着こうとばかりに目の前的大豆の煮付けを一粒挟んだ。そして平常心を保つ。それはいつもの自分の姿であるのに、なぜか無理をしているように思えた。

「特別っていうより、奇抜で謎めいてるだけで真相を知りたいだけだろ。それにまだハリウッド女優だって決まったわけじゃないし、ほんとのそっくりさんだけかもしれない。迎えに来ていた人もキノの親の可能性もあるだろ」

言い終わると、ぱくつと豆を口に放り込む。

「まあな、勝手に俺らが推測してるだけに過ぎないのは分かってるけど、あのコンビニ事件はキノの企んだことなのははっきりしている。やっぱり只者じゃないだろう」

「それで、英会話ボランティアではどんな行動だったんだよ」

「ああ、俺もそうだけど、眞子ちゃんの指示で動いてたから、別に変わったことはなかった。普通にボランティアで来ていただけだった」

「お前、先生のこと眞子ちゃんって呼ぶのは止めるよ」

「いや、それが本人も気に入ってるみたいで別に注意はされてないぜ」

「本人に向かってその呼び方だったのか……」

「うん。あっ、そういえば、俺が眞子ちゃんって呼ぶとキノのやつ眞子ちゃんの反応見てた。キノも俺がそう呼ぶことに対してびっくりしてるのかな」

「一体クラスには何人いて、どんなことやっつてんだよ」

「気になるんだったら来ればいいじゃないか」

ジョーイがその質問で黙り込んでしまうと、社交的ではないのは充分理解していると言わんばかりにトニーは優しく負担にならないように笑みを浮かべる。

「意地張ってないで、一度来てみないか。ジョーイがくれば眞子ちゃんも喜ぶと思うぜ。明日来いよ」

「なあ、そのボランティアって毎日あるのか？」

「クラブ活動みたいだし、レギュラー人は毎日かもしれないが、ボランティアは気が向いたらいつでもいいってことになってる。一回こっきりでもOKってことさ」

「そっか」

「じゃあ決まりだね」

ジョーイは行くとはっきりと答えた訳ではなかったが、トニーによって決め付けられた。だがそれを全く否定せずに、茶碗を持ちジョーイはご飯を口に入れ、ただ黙々と食べていた。

トニーは世話がかかるとも言いたげな目をしながらトニーもまた黙って食べていた。

トニーが夕飯の後片付けをしているときだった。部屋の中で突然電話が鳴り響く。

ソファでテレビを見ながら寛いでいたジョーイは面倒くさそうに立ち上がり、視線はテレビに向けながら電話の受話器を取った。

どうせまた母親からだと思い込み、けだるい声で「もしもし」という。

「(ヨツ、どうだ大豆の謎は解けたか?)」

電話の向こうのぶっきらぼうな言い方が、嫌な世界に引きずり込むように体をはっとさせた。

相手がギーだとすぐに分かった。それと同時に心臓が高鳴り、こめかみがうずくようにドクドクと血が流れるのを感じると、その後言葉につまって何も言えなくなる。

本当はどうして電話番号を知っているのか、なぜしつこく付きまとうのか、問い質したいが、このことを外部には知られてはいけないと本能が察知して、トニーを見つめる。

トニーは後姿を向け、血洗いをしている最中でジョーイの行動にまだ気がついていない。

ジョーイはくるっと背を向け、ただ耳を澄ましていた。

「(なんだ、急に黙り込んで。そうかまだ謎が解けないもんだから悔しいのか。まあいい。それならもつとヒントをやってもいいんだぞ。明日学校が終わったら会わないか)」

ギーからの誘い。ふざけるなどでも言って断るべきなのか。しか

し家にまで電話を掛けてくるといふことは知らずと身边を調べ上げられている。どうせまた何度も誘ってくると判断すると、ジョーイの口から投げやりに「OK」と返事をしていた。

「（場所は明日なんらかの方法で知らせる。こつちも色んなリスクがあるもんで、君と接触するのは注意が必要なんだ。明日使いを差し向ける。頭のいい君のことだ。すぐに俺からの連絡だっていうことがわかるさ。それじゃな）」

電話は用件を伝えるとすぐに切れた。

ジョーイは、ギーの傲慢な態度にイラつきながらもそつと受話器を置く。

「なんだ、サクラからの電話だったのか？」

タオルで手を拭きながら、トニーが話しかける。

ジョーイはできるだけ怪しまれないようにそれらしき嘘を咄嗟に思い浮かべた。

「いや、早川真須美、俺のカウンセリング担当の先生からだった。明日学校終わってから会えないかって」

トニーはカウンセリングのことについては気を遣う一面を持っている。精神的な問題が含まれるので触れてはいけない話題とでも思っているのか、これを話すと受け流すところがあった。

「そつか、大変だな。じゃあボランテニアはまた今度一緒に行こうぜ。明日は遅くなるのか？ まさかそのままお泊りってことには…

…」

「馬鹿！」

「冗談だよ。まあそれでも俺は気にしないぜ」

トニーは笑いながら、用が済んだとばかりにソファアにへたりこんだ。リモコンを持って番組をさりげなく変えている。そこには重い話を無理に軽くしようとしているような心遣いがあったように思えた。

知りたいことはとことん追求してくるが、ジョーイのカウンセリングのような繊細な領域には一切かわらないようにするのは一置くところなのかもしれない。

ジョーイの過去についてはトニーには一度も話したことはないが、時々異様に気を遣う場面があるのは母親のサクラから何か聞いているのではとジョーイは感じていた。

自分のような癖のあるものと仲良くできるのはトニーくらいなものだと、ジョーイも認めるところがあるが、一緒に住んでる以上トニーは結局人一倍気を使っているのだろう。

時々腹を割って好きなこと言い合えば喧嘩になるところ、トニーは絶対そこまではしない。女に対してはだらしないが、男として見習うべきところも具え持っていた。

それだけに嘘をつくのは心苦しいが、この件に関しては人に知られてはいけなくと強く何か耳打ちするような感覚を覚える。

第六感とでもいうのだろうか。それはとても危険な香りも伴っていた。

翌日、普段通りに学校へ向かう。



どこからギーの連絡が入るのか、気が抜けないと朝から気難しい顔を周囲に向けながらジョーイの体はピリピリしていた。

「ジョーイ、TGIFライダーだぜ！ Thanks God, it's friday！」

トニーに背中をどんと叩かれた。

神よ、金曜日をありがとう。アメリカは土日が休みなので金曜日は気が楽というのか楽しみを抱くところがある。陽気なアメリカ人は、キャッチフレーズを口走りさらに陽気になる。

しかしジョーイたちの学校は週五日制を無視して土曜日でも半日の授業が盛り込まれていた。別にライダーを神に感謝する理由はない。

ときどきずれるんだよなとトニーのおめでたさがわずらわしい。とにかくトニーは楽しめることは楽しみたいという男でもあった。

この日の朝もまたいつものように電車に乗るがそこにはキノの姿はなかった。前日トニーが学校で見かけたということは通学はしているみたいだが、どうも避けられているような、あれ以来キノとは会えない日々が続く。

ジョーイが背広のポケットに無意識に手が触れると、硬い丸みのものに触れた。

そういえば、駅で忘れた置き土産のビー玉をまだ持つてることに気がついた。

まだまだビー玉は転がり、何かにぶつかっては次の出来事へと続

いている実感を抱く。

学校の門をくぐれば、トニーは知ってる顔に次々会い、挨拶をかわしていく。ボランティア活動でさらにその顔は学科や学年を飛び越えて広がりつつあるようだった。

他の友達に囲まれてトニーはそのまま先に行ってしまった。トニーの交際範囲であり、ジョーイは一人になろうと別にどうでもよかった。

一人で歩いているときだった。後ろから「ジョーイ」と小さく声を掛けられた。

学校で自分に近寄って声を掛けて来る奴など滅多にない。

掛けてくるとすれば、自分によく似た無表情のリルくらいなものだと、何も考えずに後ろを振り向く。

だがそこにはキノが立っていた。

「キ、キノ!？」

ずっとその存在を求めて探していたのに会えなかった人物が、自ら声を掛けてきた。

ジョーイが驚くのも無理はなかった。

いつものポーカーフェイスとは程遠く、目の見開いた姿をさらけ出してしまふ。

「おはよう……」

遠慮がちに、まずは挨拶をするが、キノもまた緊張しているのか、ややうつむき加減で人差し指でメガネを押さえつけるしぐさをした。

「ああ、おはよ」

「あの、これ落としませんでしたか？」

キノの手から情報誌が差し出された。

見知らぬ雑誌。ジョーイは突然声をかけられることで落ち着かないでいたところに、落としたこともないものを突き出されて、戸惑うほど間抜けな表情で動揺する。

全くのちんぷんかんぷん。思わず声が裏返った。

「こ、これを俺が落とした? えっ?」

「はい、ここに名前が書かれた紙が一緒に挟まれていたんです。も

しかしジョーイのなつて思つて」

キノが情報誌の中を開くと、紙が確かに挟まれていた。走り書きされたような筆記体でJoey Kiryuと記されていた。

その開いたページには油性らしき黒いペンで何重にも丸で囲んだ印も入っていた。見覚えのある写真。自分がカウンセリングで通うクリニックがあるビルの写真が載せられている。

「これを一体どこで拾つたんだい」

「あの、その、日の出公園という場所で、昨晚犬の散歩をしてたとき、偶然この雑誌が落ちていて、ゴミ箱に捨てようと持ち上げたらその紙が出てきたんです。それで雑誌をぺらぺらめくっていたら、ページに印がついてたので、一応確認した方がいいと思つてその…」

日の出公園は駅前から東へ向かったところに位置する。朝日が昇るのが見られるので日の出公園と名づけられている。犬の散歩というのは、あの盲導犬のことなんだろう。

しかしジョーイは前日にそこへは行つてない。だがこの雑誌が何を意味しているのか心当たりはある。

これがギーからの連絡なのだろうか。  
しかしなぜキノがメッセンジャーの役になっているのかわからない。

「あの、やはりこれはジョーイのもの？」

下から覗き込むようなキノの不安な目がメガネの奥でジョーイの

反応を探っている。

「ああ、そういえば俺のだ。わざわざ届けてくれてありがとう」

わざとらしかったかなと思いつつ、ジョーイはその雑誌を手にする。

キノは戸惑った目をむけながら、そわそわしていた。

「あの、余計なことかもしれませんが、印で囲んであったところ、今日そこへ行くつもりですか？」

「えっ、どうしてそんなこと聞くんたい？」

キノは何かを知っているのだろうか。彼女の行動は常に普通ではない。ジョーイは冷や汗が流れる気分になりながら、唾をぐくりと飲み込んでいた。

「いえ、その情報誌にそこで春の夜桜祭りがあるって書いてたから行くのかなって思ってた」

ジョーイは雑誌に目を通した。確かにキノの言った通りのことが書いてある。あの辺りの街路樹は桜が植えられていた。それがライトアップされ、この日だけ大通りの車の出入りをとめて歩行者天国となるとあった。

「今、桜の見ごろだから夜桜もきれいでしょうね」

「ああ」

意外と普通な会話でジョーイは少し評し抜けた。

それが声にも現れて、あまりいい印象に聞こえなかったのかキノ

はまたおどおどしました。

「あつ、すみません。長々とお話して。それじゃ失礼します」

「ちょっと待って」

走って去ろうとしたキノの腕をジョーイは咄嗟に掴んでいた。

掴んだ方も掴まれた方も思わぬ接触にお互い顔を合わせた。その一瞬の間がお互いの心臓を一度停止させたようになったが、その後反動で一気に喧しく動き出した。

「じ、ごめん。その色々と聞きたいことがあるんだ」

咄嗟に手を離せば、栓が抜けたように体から熱いものが溢れ出る。ジョーイがこんなにも焦ったのは初めてだった。

「あの、一体なんでしょう」

怖がっているととれるくらいの小さな声。キノは身を縮めながら質問を覚悟した。

その時、学校のチャイムが鳴り出した。タイミングが悪いとばかりジョーイは頭を掻く。このチャンスを逃せばまた次いつ聞きたいことが聞けるか分からない。ジョーイは覚悟する。それは自分でも暴走していると自覚するほどだった。

「なあ、今日、夜桜祭一緒に行こう。放課後校門で待ってるから。それじゃまたな」

ジョーイは返事も聞かず走り出した。自分が桜のように頬が染ま

った祭り状態だと、体の中のガスを抜くようにやけくそで猛スピードで走っていった。

「何やってんだ俺……」

キノはその場で暫く突っ立っていたが、自分も遅れるとばかりに慌てて校舎へと走っていった。

キノもまた考える余裕がないまま、鳴り終わりそうなチャイムの中、スカートの裾が大きく揺れてパンツが見えてもお構いなしなくらい必死に駆けていた。

教室に飛び込んだジョーイは、息切れを起こしていたがそれは走ったことによるものなのか、キノに出会って血迷ってデートに誘ったことでドキドキしているのか、心臓辺りを押さえながら戸惑っていた。

それはまるで体の中がバチバチと火花が飛び散ったようにスパークしているようだった。

自分の席に着くとヘナヘナと急に体の力が抜けて机の上に覆いかぶさる。

（俺、何やってんだ？）

暫くしてシアーズが教室にやってきて、ホームルームが始まったもふにやっとしたままだった。

シアーズが睨みを聞かした目でジョーイを一瞥する。

それでもお構いなしにジョーイは自分の世界に入り込んでいた。

シアーズも特に注意をすることなかったが、たるんだジョーイの態度に少し訝しげな目を向けていた。

ホームルームが終わると、シアーズはその態度が気に食わなかったのかジョーイの側にやってきた。

「(ジョーイ、今日の放課後でいいから、私のところに来なさい)」  
ジョーイは突然のことに面食らった。何か言おうとしたが、シアーズは返事も待たずにさっさと教室を後にした。

(ちえっ、ついてねえ)

ジョーイは突然の呼び出しに、驚きと苛つきを感じ、そしてキノとの約束のことを考えると遅れないかと不安までよぎる。

「おい、ジョーイ、シアーズに呼び出しくらっちゃまったな。なんかあったのか？」

トニーが近寄って心配していると見せかけて、突然白い歯をニタリつと見せると面白がって茶化す。

「えっ、何もしてないのに呼び出されちゃったぜ。くそーシアーズめ」

「日ごろの態度が悪いからシアーズも我慢の限界だったんだろうな」  
「俺、そんなに態度悪いか？」

「ああ、無茶苦茶生意気だぜ。まあそれがお前らしいんだけどな。やっぱ年上には失礼なんじゃないか」

「面倒くせー、特に今日は急いでるのに」  
「ああ、そういえばカウンセリングの日だったな。少しくらい遅れてもいいんじゃないか」

「えっ、ああ、そ、そうだな」

トニーの前ではカウンセリングのことになっていた。まさかキノ



と夜桜祭りにいくなんて言えない。しかし、ギーの連絡のことも気になる。

キノのことで浮かれている場合じゃなかったと、自分の置かれている状況がわからなくなってしまう、急に表情に陰を落としてしまった。

「どうした？　なんか他にあるのか？」  
「いや、なんでもない」

ジョーイは一時間目の教科書を鞆から取り出す。そして担当の先生が現れるとトニーも自分の席に戻り、授業が始まった。

ジョーイは考え事をしたような顔つきのままその授業を受けていた。

この日はどうも落ち着かず、一層一人になることを好んだ。休み時間も極力トニーから離れ、全ての授業が早く終わればいいとそればかり考える。

昼休み、適当に昼食を済ませ、一人ぶらぶらとジョーイが構内の中を歩いているとき、リルの姿を見かけた。

友達と校舎と校舎の間の中庭で話しているが、相変わらず仏頂面だった。

それでも友達の話聞いてたまに首を振って相槌を打っているところは、話に参加している様子だった。

ジョーイはついリルを観察してしまう。

そして周りが急に派手に笑い出したその時、リルの口元がかすかに上向いた

「あいつ、今笑った。あいつもあいつなりにこの状況に溶け込もうとしてるんだな」

自分も変化がある状況の中、ジョーイは他人事のように思えなくなっていた。

リルがふいに首を動かしたとき、ジョーイの存在に気がつくと手を上げて遠慮がちにジョーイに向けて振った。

ジョーイも躊躇することなく手を上げてその挨拶に答えてやった。

そのやり取りを見ていたリルの周りの友達は何を見開いて驚いては、リルがジョーイと友達なことが信じられないとばかりに責め立てるようにジョーイとの関係を問いただし始める。

周りの友達は何が羨ましいとばかりに嘸し立てては、なかなかやるじゃないとリルの存在も一緒に認めていた。

ジョーイはその様子を見て巻き込まれるのはごめんだとさつさと退陣したが、リルがなんとか皆と上手くやっている姿によかったとつい思ってしまった。ジョーイの口元も少し微笑んでいたかもしれない。

そして、そのリルとジョーイのやり取りをまた遠くから見ているものがいた。  
キノだった。

放課後、シアーズに呼び出されていたためにジョーイは職員室に向かう。

何を言われるのかわからないまま、顔はいかにもうつとうしいとばかりに会う前から反抗的な態度になっていた。

職員室に入れば、シアーズは自分の机の上について書類を見ている。

そこに気だるく近づきぶつきらぼうにジョーイが声を掛けた

「(言われたとおりにやってきましたよ。一体何の用ですか？ 急いでいるので早くして下さい)」

シアーズはジョーイに視線を移すと一息ついて、言葉を選んでから口を開いた。

「(ジョーイ、何か悩んでいることでもあるのか?)」

「(はっ？ そんなもんある訳ないだろ。なんで俺だけにそんなこと聞くんだよ)」

「(お前は態度が悪すぎるからだ。何か気に入らないことがあるからわざと学校でそんな態度を取っているのかと思っつてな。お前は頭はいいが、その態度では内申書に響くぞ)」

「(そんなの気にしてない。悪くつけたければつけてくれ。話はそれだけか)」

「(ジョーイ、いい加減にしるよ。そろそろ進路も決めなければならぬ。もつとこれからのこと自分で考える。お前は一体何がしたいんだ？ お前は恵まれた才能を持っているのに宝の持ち腐れだ)」

「(余計なお世話だ。恵まれた才能？ 一体どんな才能だよ。俺の

ことまるでなんでも知ってるみたいな言い方だな」

「（私はただ担任として助言しているに過ぎない。お前のような生徒は放っておけないだけだ）」

「（それじゃ俺から放っておいて欲しいとリクエストさせていただきます。それなら担任風吹かせる必要もないだろ。余計なお世話なんだよ！）」

シアーズはここぞとばかりに先生の権限を示した。

「（ジョーイ、口を慎め。そんな態度を取るならディテンション居残りだ）」

「（おいっ、俺この後用事があるんだよ。そんなことしてられるか）」

「  
シアーズはジョーイに黙ってプリントを差し出す。

「（これができるまで家には帰るな）」

落ち着いた態度の中に鋭く光る目つき。容赦はしないとシアーズはジョーイを見つめていた。

ジョーイはこれ以上反抗したところで無駄だと思い、ひったくるようにそのプリントを手にした。

（問題を解くくらい5分もあれば簡単にできる。それなら喜んで引き受けてさっさと帰ってやる）

そう思いながら不敵な笑みを浮かべ、挑戦的にシアーズを睨み返した。

「（わかったよ。これをやればいいんだろ。ああ喜んでやってやるよ）」

「（よし、その言葉に偽りはないな）」

「（ああ）」

そしてシアーズの隣の机が空いていたので、遠慮なく座り込みシアーズの目の前でプリントに取り掛かる。

しかし内容を見てジョーイはやられたと思った。

「（これ、英語でも日本語でもないじゃないか。おいっ、スペイン語なんて卑怯だぞ）」

シアーズに文句を垂れると、シアーズは黙ってスペイン語の辞書をジョーイに投げた。

「（喜んでやるって言ったのはお前だぞ）」

ジョーイは悔しがるが、シアーズは愉快とばかりに笑っていた。

「（くそっ、なんでスペイン語の問題なんか出すんだよ。俺、授業とってねえじゃないか）」

それでもジョーイは辞書を片手に、一心不乱で問題を解き始めた。一刻も早く終わらせてキノに会いに行かなければならない。焦る気持ちの中とにかく問題を解いていく。

そして30分後。

「（ほら、できたよ。これで文句ねえだろ）」

「（ああ、まあいいだろ。とにかくだ、これに懲りて私に逆らうなっつてことだ。覚えとけ）」

ジョーイは、歯を食いしばって立ち上がり、パイとその場を腹立たしく去った。

シアーズは去っていくジョーイの後姿を見送り、そして答えたプリントをじっと見つめる。

「（辞書を片手に習っていない言葉をここまでやれるとは、やっぱりアイツは天才だ）」

シアーズはふっーと漏らすようなため息をついた。そして腕時計を見て時間を確認していた。

「くそっ、すっかり遅くなっちゃった。キノの奴待ってるだろうか」

ジョーイは慌てて校門まで走るが、その付近にキノらしい姿がすで見えないことに気がついていた。

校門を出てもキノの姿は見当たらなかった。

「やっぱり先に帰ってしまったんだろうか。くそっ、シアーズの奴。一生恨んでやる」

ジョーイはキノと連絡の取り方も分からず、イライラして頭を掻きまぐる。

しかし、あの手渡された情報雑誌のことは無視できず、なぜキノがああ情報雑誌を持ってきたのかも依然謎のままであり、ギーからのメッセージかもしれないと思うと追求したために一人でそこへ行くことを決意する。

「一体何が分かるというのだろうか」

ジョーイはもう一度学校の校舎を振り返り、キノの姿を確認するが、大幅に遅れてしまったことでもうキノは帰ってしまったと思ひ込みすっかり諦めてしまった。

そしてがっかりと肩を落としながら駅へと歩いた。

駅でもしかしてキノに会えるかもと少しは期待してみたが、やはりその期待も無駄だった。

急にやる気も失せたようになりながら、とにかく目的地へと向かう。

カウンセリングに来るためにいつも来ている場所だが、さすがにこの日は夜桜祭りとあって人通りが激しかった。

車の出入りはすでに禁止されていて、ストリートでは人が溢れている。

夜店も出ていて、雰囲気は面白そうでなかなかいい。

桜も満開ときている。

それらを見ていてジョーイはふと眩いてしまった。

「もしキノとここへ一緒に来ていたらデートになっていたじゃないか」

二人でこんなところに来て一体何をするつもりだったのだろうか、ジョーイはやはり会えなくてよかったのかもと想着てしまった。

しかし自分から誘っておいて結局約束を果たせなかったことは罪悪感もあり、次キノと顔を会わせた時どういえばいいのか今から気が重くなってしまう。

考え事をしながら歩いていたのもあるが、混雑した中で注意を払わずにいたために、ジョーイは前から歩いてきた男とぶつかってしまった。

しかしそのぶつかり方は決してジョーイだけが責められるものではなかった。

肩をいかつかせながら周りのことも気にせず歩く相手にも充分非があつたが、その相手が悪かつた。

派手なスーツを着て、悪人のように我が物顔でひねている態度は普通の人ではないのが誰の目にも見えていた。

ジョーイもぶつかった瞬間相手の顔を見たが、少しヤバイと本能的に感じた。

だからこそ素直にジョーイはすぐに謝つた。

「すみません」

「ん？ すみませんだと」

丁寧に謝つたつもりだったが、その男はジョーイの顔を見るなり気に入らない態度を示す。

「おい、兄ちゃん、なかなかムカつく顔してるじゃないか。今ちよつとむしゃくしゃしてたんだよ、いい機会だ、おい、顔貸せ」

なんと理不尽なとジョーイは思ったが、気がつくつと、いつの間にかその男の仲間と思われる数人の男達に挟まれていた。

「ちよつと、ちゃんと謝つたじゃないですか」

そう言っても許してもらえず、二人の男に腕をつかまれて、全く



人気がない路地に連れ込まれてしまった。  
そして胸を押されて、ジョーイはよろめいた。

かつてない危機に遭遇し、ジョーイはごくりと唾を飲み込む。そしてじりじりと後ろへ下がるが後ろにも誰かが立ち逃げ切れる自信がなかった。

「よお、兄ちゃん、歯食いしばれ。一発殴ったら許してやる」

態度がいかついその男は体はそんなに大きくない。

殴られてもたかが知れてるとジョーイは一発くらいと覚悟を決めた。

だが男が走りかかって殴ろうと拳を向けたとき、咄嗟の反射神経でジョーイはよけてしまい、男は勢い余って転倒してしまった。

またそれが更に怒りを買ってしまい、男の怒りは頂点に達してしまった。

男の合図と共に周りの仲間がジョーイを押さえ込む。

ジョーイはほんのちょっとぶつかっただけで、サンドバックのような殴りを腹に数回お見舞いされてしまった。

「うほっ」

ジョーイは抵抗できないまま苦しみもがく。

そこに誰かがかなきり声を上げながら駆け込んできた。

「ジョーイさん！ 誰か、誰か助けて！」

その悲痛な叫び声で男達はややこしくなっ  
てはいけな  
いとジョー  
イをその場に捨てて去っていった。

「ジョーイさん！ 大丈夫」

叫び声をあげた主はジョーイに近づいて体を支える。

地面に崩れるように膝をつき腹を抱えながらジョーイは朦朧とした意識の中でその声の主を見る。

「ど、どつしてここに君が……」

「ジョーイさん……」

「リル？ なぜここに？」

リルは目に涙を溜めながらこの状況が信じられないとばかりにうろたえている。

「ジョーイさん、立てる？ 病院に行かなくっちゃ」

「だ、大丈夫だ。ごほっ」

ジョーイは立とうとするが腹にかなりダメージを受け、息をするのが苦しく感じた。

「どうしよう、どうしたらいいんだろう」

あんなに感情を表さないリルが我を忘れて取り乱すように慌てている。

ジョーイは安心させるためにも声を絞り出した。

「そこに、落ちてる、鞆を、とって、くれ」

リルは鞆を拾うとジョーイに手渡した。ジョーイは中から携帯を取り出し、電話を掛ける。

「早川先生…… ジョーイです。今、近くに、居ます。助け、て、下さい」

それを言うとジョーイは力尽きて倒れてしまった。

「ジョーイさん！ しっかりして」

リルが側で叫ぶ。

「もしもし、どうしたの？ 一体何があったの？ ジョーイ」

ジョーイの手から離れた携帯電話はまだ繋がったまま、そこから早川真須美の声が聞こえてきた。

リルは震える手でその電話を取り、この状況を伝えた。

そして早川真須美はこの後リルの情報を頼りにクリニックのスタッフを数名連れて駆けつけ、ジョーイを運び出した。

そして再びジョーイが目覚めたときはいつものカウンセリングで使う簡易ベッドの上に寝ていた。

その側でリルが目を赤くして様子を伺っていた。

「こ、こは」

「やっと気がついたみたいね。ジョーイ、一体何があったの？」

ジョーイは起き上がろうとするが、リルが抑えて、首を横に振る。寝転がったまま、ジョーイは早川真須美の質問に答えた。

「それが俺にもさっぱりわからない。ただ変なチンピラとぶつかってしまって、謝っても許してもらえず、それで反感を買って殴られてしまった」

「そう、それは災難だったわね。でもどうしてジョーイは今日ここにやってきたの？」

「えっ？ そ、それは、その桜夜祭に興味があって」

「ふーん、ジョーイにしては珍しいわね」

早川真須美はそれ以上は何も言わず、ジョーイの側に寄ると腕を

取り脈拍を測った。

リルはまだ落ち着かず、心配そうにその様子を見ていた。

「えーっと、リルちゃんだったね。ジョーイは大丈夫よ。この程度じゃ死にやしないから、安心して。ジョーイも隅に置けないわね、いつの間にかこんなかわいい子と知り合いだなんて。てつきり女の子には興味ないかと思ってたわ」

「いえ、リルは、その」

ジョーイはどう説明していいかわからなかった。

「あの、私はただの後輩なだけです」

リルはもじもじとうつむき加減で答えていた。その様子を早川真須美は優しく微笑んで見ていた。

「だけど、なぜあそこにリルが居たんだ？」

今度はジョーイが疑問に思った。

「えっ？ そ、それは、私も夜桜祭りを見に来たの。そしたらジョーイが変な人たちに連れて行かれるところを見て、それで後をついてつけてしまって、そしたら殴られてたからびっくりした」

「そっか、リルも夜桜祭りに来ていたのか。なあ、リルはキノって知らないか？」

もしかしたらキノも来てるんじゃないかという名前が出てしまった。

「キノ？ ううん、知らない」

「あれ？ 今度は違う女の子の名前？ ジョーイ、一体どうしたの。この間のカウンセリングからなんか様子が違うわよ」

早川真須美がジョーイの態度が珍しいとばかりに口を挟んだ。

ジョーイは答えにくそうにしていたが、リルと目が合うとカウンセリングという言葉に拘り、自分の状況を知られるのが嫌で何も言えずに顔を背けてしまった。

「カウンセリング？」

案の定リルは不思議そうにその言葉を繰り返した。

「ああ、ここは俺がカウンセリングに通ってるところだ。この人がその先生ってな訳」

ジョーイは観念したかのようにそのことだけは伝える。

「ジョーイ、何か問題抱えているの？」

「まあな」

ジョーイは少し言いにくそうに相槌を交わす。リルはすぐにその気持ちを察知した。

「そう。ジョーイも悩みがあるんだ。でも、安心して、私口堅いから。カウンセリングに通っているって誰にも言わない」

早川真須美は気を遣うリルの様子を見て微笑まずにはいられなかった。

「ねえ、リルちゃん。この堅物ジョーイとはどうやって知り合った

の？」

「えっ？ どうやってって」

リルは首を傾げた。

「あのね、ジョーイは滅多に女の子に声を掛けるような子じゃないの。このお色気たつぷりの私ですら無視されるくらいなんだから」「先生、一体何が言いたいんだ」

ジョーイは余計なことを言わないでくれとばかりに顔を顰める。

「だから、なんだかジョーイが普通の高校生に見えてきたから、その原因を知りたくなっただの」

「それはまた今度のカウンセリングで話すよ。それでいいだろ」

リルの前ではこれ以上自分の素性を明かすのは嫌で慌てて答えていた。

リルはその時ジョーイをじっと見ていた。

暫く休むとジョーイの体調は元に戻り、少し前屈みで腹を押さえていたが歩けるようになった。

早川真須美が車で送ると言ったが、ジョーイが電車で帰れるという、リルも合わせるように申し出を断った。

そして二人はクリニックを後にして、夜桜祭りを見ながら肩を並べて歩いていた。

「リル、助けてくれてありがとうな」

「えっ、ううん、そんなお礼を言われるほどでもない。でも本当にもう大丈夫？」

「ああ、大丈夫だ。だけど、すごい偶然だったよ。リルがここに来て俺を見つけてなかったら、今頃俺どうなってたか」  
「ねえ、今日、ほんとは誰かと会う約束してたんじゃないの？」

その瞬間ジョーイははっとしてリルを振り返った。

「どうしてそんなことを」

「あの、その、なんとなくそう思ったの」

それはとてもぎこちない答え方だった。

「リル、何か隠してるんじゃないのか。お願いだ正直に言ってくれないか」

「あの……」

リルが何か言いかけたとき、目の前にジョーイの知ってる顔が不敵な笑みを添えて現れた。

「ヨッ、ジョーイ」

「ギー！」



「（なんだ、お前も桜見に来てたのか）」

「（なんだよ、その偶然会ったような言い方は。ギーがここに来るように仕向けたんじゃないのか）」

ギーはふんと鼻で笑いながら、ニヤリと笑みを見せたその顔は全くその通りと言いたげだったが、敢えて口には出さなかった。

ジョーイもギーが公に自分を呼び出したということを隠したいと感じていたために、暗黙の了解でその空気を読む。

ギーはその沈黙の間に視線をジョーイの隣に移すと、舐めるような目つきでリルをじろじろと見渡した。

「（彼女か？）」

「（違う）」

「（別に照れなくてもいいんだぞ。まあ、そんなことはどうでもいいがな）」

「（彼女とは偶然ここで会っただけだ。誤解するな）」

「（ほー、偶然ここで会った……か。本当にそうなのか？）」

「（どういう意味だ？ それにもう一つ聞きたいことがある。雑誌をある女の子から貰った。あれはお前が仕掛けたことなのか？）」

「（さあ、なんのことだか）」

「（じゃあ、どうして俺は今ここに居てお前と顔を合わしているんだ？ それにヒントをくれるんじゃないのか）」

「（ああそうだったな。しかし少し計画が狂っちゃってな、それどころじゃなくなった。とにかくその話はまた今度だ）」

ギーは踵を返して去っていく。

「(おい、待てよ)」

ジョーイは追いかけてしようとしたが、リルが力強くジョーイの腕を引く張った。

「リル、離してくれ」

「あの人が何があつたか知らないけど、なんだかとっても危険な感じがする。行かない方がいい」

そうしている間にギーは人ごみに紛れてすっかり姿を消してしまつた。

ジョーイは不完全燃焼になりながら、苛立ちを顔に表す。

「ジョーイさん、一体何に巻き込まれているの？」

リルが不安な面持ちで問いかける。

ジョーイはその質問に答えられないと、話の主導権を奪った。

「そつだ、さっきの質問だけど、なぜ俺が誰かと待ち合わせしているって聞いたんだ？」

「それは、その、ある人から聞いて」

「誰から？」

「全然わからない。下校中一人で歩いてたら、後ろから声を掛けられて、でも振り向かずそのまま聞いて言われて。そしたらジョーイさんが夜桜祭りで何かに巻き込まれるから、もし友達だったら助けに行つた方がいいって忠告された。私、それで心配になつて、言われた通りに来てみたら、ほんとに危ないことになつてたから怖かつた」

「何だつて？ 一体誰がそんな忠告を君に」

「私も分からない。私が後ろを振り返ったとき、もうそこには誰も居なかった。だけど声は男だった」

ジョーイは険しい顔をして黙り込む。

何かが確実に自分の見知らぬところで動き、そして関係のないリルまで巻き込んでしまった。

「一体何が起こってるんだ」

ジョーイは憤懣たる気持ち在必死に抑えて体を震わした。

「ジョーイさん、さっきの男と何を話してたの？ あの人は誰？」

「リルはそんなこと何も知らなくていい。それよりも巻き込んでしまつてすまなかつた。もう俺には関わらない方がいい」

「私なら大丈夫。もし何か役に立つことがあるならお手伝いしたい」

「だめだ、もし君に何かあったら俺責任とれない」

「そんなこと私全然気にしてない。それよりジョーイさんがあの時のお兄ちゃんみたいに突然姿を消すとかになったら私、そんなの嫌！」

リルは過去の事故で慕っていた友達を失くした辛さが蘇り、感情が高まると瞳を潤わせて突然ジョーイに抱きついた。

「おい、リル」

ジョーイは参ったと思いつつながらリルに抱きつかれるままになっていた。

すっかりと日が暮れ、夜桜がライトアップされて薄っすらとしたピンク色が幻想的に浮かび上がっている。

人々はそれらを眺めて楽しみ、ひっきりなしに人が川のように流れている。

そこにポツンと杭が立ったようにジョーイはリルに抱きつかれながら、周りの光景を目に映していた。

リルが落ち着いたとき、はっとしてジョーイから離れる。

「ご、ごめんなさい。私、つい」

「もういい。リルは過去の辛い記憶に振り回されているだけだ」

リルは下を向いたまま、何も答えなかった。

「とにかく帰ろう」

ジョーイが歩き出すと、リルもそれについていく。

二人もまた人ごみの中に飲まれていった。

その様子を溢れかえる人たちに紛れて見ていた者がいた。

「キノ、ほんとにこれでよかったのか」

「うん。今はこうするしかなかった」

「いつまでこんなこと続けるつもりだ。これ以上は危険だ。もう諦めろ」

「あともう少しだけ。もう少し私に時間を頂戴。ノア」

ジョーイとリルの様子を憂いを帯びた目で、キノは遠くからもどかしげに見つめる。

ノアと呼ばれた男はキノの行動がもどかしいと少し苛ついていた。それでも自分が口を挟めないともしどかしい気持ちを吐き出すようにため息を一つこぼす。

「しかし、あのFBIの男も無茶な賭けにでてきたな。まさか本当にジョーイに痛い思いをさせるとは思わなかった」

「私も同じように狙われているってことなのね」

「ああ、あの雑誌を故意にキノの目に付くところに置いてジョーイ

を誘い出すようにしたのも奴の作戦だろう。わざとジョーイを襲わせて、キノがどう動くか反応を見たかったんだろう。いいか、これからは自分の行動に気をつけるんだ」  
「わかってる」

キノの瞳は寂しさで乾ききるかのように色褪せてどんよりとしていた。

眼鏡を外して、キノは目を擦る。

ノアは優しくキノの頭に手を置いて、どこか慰めていた。

「お帰り」

ジョーイが家のドアを開けて玄関に入ると、トニーがニヤケながら出迎えた。

何やらいい匂いも家の中に漂う。

「飯の用意してくれたのか？」

ジョーイが靴を脱ごうと足元を見ると、見慣れない赤いハイヒールが目に入った。

「おい、誰か来てるのか？」

「うん、眞子ちゃん」

「えっ？」

ジョーイは慌てて靴をぬぎ、家の中に駆け込むと、台所で見知らぬ女性が料理を作っていた。

「あら、あなたがジョーイね。初めまして」

眞子がお玉を持ちながらジョーイに微笑んだ。

少しぼつちやりとしたように見えたのは胸がでかかったからかもしれない。

トニーが気に入りそうなメリハリのある体をした大人の女性だった。

「おい、一体どうなってんだよ」

トニーを睨みつけジョーイは不機嫌になっていた。

「おいおい、学校の先生だからいいじゃん。今日ご飯どうしようか  
なって眞子ちゃんに相談したら、ボランティアのお礼に作りに来て  
くれたんだ」

「俺の知らないところで勝手に人を家にあげるな」

「だって、ジョーイは今日遅くなると思ったんだもん。そしたら俺  
ご飯一人で作れないし。そう固いこと言わなくてもいいじゃん。ジ  
ョーイだってお腹空いてるだろ」

トニーは眞子に近づき、得意の話術で感謝の気持ちを甘い言葉に  
乗せて囁いた。

眞子にはにかんだ笑顔になりながら、すっかりその気にさせられ  
ている。

先生の立場なのにあれではただの男女の仲に見え、ジョーイは頭  
を抱えた。

「さあ、できたわよ。それじゃ私、帰るね」

「えっ、眞子ちゃんも一緒に食べていかないの？ ジョーイのこと  
なんて気にしなくていいから」

「うっん、明日も学校あるし、色々準備もあるのよ」

眞子はおっとりとした癒し系の笑みを浮かべる。

トニーはそれに骨抜きにされたようになり、残念とばかりに眞子  
を玄関まで見送った。

ジョーイは疲れたとばかりにソファに座り込んだが、呆れかえっ  
て何もやる気が起こらない。

「こっちは大変なことに巻き込まれて苦勞しているというのに、トニーの奴は……」  
不機嫌さは止まらなかった。

その日の夕食は眞子が作ったものを食べることになったが、食卓に並べてあったものを見る限り、家にあった食材で工夫して作ってくれているところを見ると料理の腕は確かだった。

「おい、ジョーイ、早く食べよ。上手いぜ」

トニーは好きな女性に作ってもらったというだけで嬉しそうに箸を口に運んでいた。

ジョーイも口にするが、腹を殴られたせいか食欲が全くない。

「どうしたジョーイ。なんか変だな。カウンセリングでなんかあったのか？」

「いや、別に何もなし」

ジョーイは意地になって無理にでも食べた。食べた。

「そういえば、昨日、豆腐のこと言っていた。あれから考えたんだけど、豆腐料理屋のレストランを思い出したんだ。そこ豆腐のフルコースのような料理が出るんだって。今度行きたいな」  
「豆腐料理のレストラン？」

そういえば大豆のこともうやむやになっていた。  
ジョーイは一体何が自分に起こっているのか考えると発狂しそうだった。



そしてふとトニーの電話の件を思い出した。駅のホームでつい立ち聞きしてしまったトニーの会話。あの時トニーもおかしなことを言っていた。

『別に不振な動きはありません』

まるでトニーも何かが起こることを前提に様子を探っているような言い草だった。

ジョーイは怪訝になって眉を顰めてトニーを見つめた。

「なんだよ。眞子ちゃんを勝手に呼んだことまだ怒ってるのか？ 勝手なことをしてすまなかった。これからは気をつけるから、いい加減機嫌直してくれ」

「そんなことはもういい。それよりトニーは何か俺に隠し事とかしてないか？」

ふとトニーの箸が止まる。

「なんだよ、急に。そりゃ俺だつて人には言えない話くらいはあるぞ。でもいちいちそんなことまでお前に言わないといけないのか？」

「例えばだ、俺に関することで何か隠してるということだ」

「はあ？ ジョーイに関すること？ 何があるんだよ。あっ、黙つてお前の部屋入ったことか？」

「いつ入ったんだよ」

「今日。眞子ちゃんに自分の部屋見せて、ついでにジョーイの部屋も見せた」

「おい、なんでそんな勝手なことするんだ」

「なんか見られてまずいものでもあったか？ もしかしていやらしい本隠してたとか？ それなら俺にも貸してくれ」

「いい加減にしろ。もういいよ。飯もいらね」

ジョーイはテーブルから立ち上がり、何もかもほっぼりだして自分の部屋へ行ってしまった。トニーのお気楽能天気さにはいい加減嫌気がさした。

「ジョーイ、ごめん。眞子ちゃんが来てつい浮かれてしまったんだ。許してくれ」

トニーが叫ぶが、ジョーイは耳を傾けることもなく階段を上り、自分の部屋に入るとドアを思いっきり音を鳴らして閉めた。

トニーは肩をすくめて、大変なことになったと思ったが、目の前の料理を見るとまた眞子の顔を思い出し、でれっとしながら食べた。

「トニーの奴、なんて勝手なことするんだ」

ジョーイは自分の部屋を見渡し、何も変わっていないか確認する。見たところいつもと変わらず、トニーが眞子とただこの部屋を覗いたというだけに過ぎなかった。

ベッドの上に寝転がり、頭の下で手を組むとジョーイはこの日のことを振り返った。

色々とありすぎたばかりに、またビー玉が転がるイメージが頭の中に浮かぶ。

次から次へと連鎖反応を起こし、ビー玉が転がる度に何かが計算されたように刺激を受けて動き出す。

収集がつかないくらいそれは広範囲に渡って作動している。

「一体最後にはどこに行き着くというんだ」

その時何が分かるというのだろうか。ジョーイははっきりしないこの状況に頭を掻きまわっていた。

土曜日の朝、ジョーイはまだ少し不機嫌なままの態度でトニーと駅に向かっていた。

「おい、いい加減に機嫌直してくれよ、ジョーイ。勝手なこととして悪かったよ」

ひたすら謝り続けるトニーだったが、ジョーイの機嫌が悪い原因はトニーの勝手な行動だけではなかった。

前日に起こった事柄も影響して、前夜それらを考えていたら寝つきが悪くなり少し寝不足気味で気分が優れず、さらに頭が少し痛かった。

「済んだことは仕方がない。もういいから、少し黙っていてくれな  
いか」

その言い方も鬱陶しいとばかりにトニーに八つ当たりするような怒り口調だった。

トニーは原因を作ったのは自分だと反省していたが、ジョーイの不遜な態度には辟易する。

常にジョーイの機嫌を伺うように接する事がこのときばかりはバカらしく思えた。

「あのさ、俺が悪いのは分かってるけど、ジョーイは常に自分主義だよな。少しは立場の弱い者のことも考えてくれ」

「立場が弱いつてどういうことだよ。トニーは俺以上になんでも好

きなことやってるじゃないか」

「ジョーイが思ってるほど、俺はそんなに自由じゃねえよ」

「なんだよ、今度は逆切れかよ」

トニーは口をぎゅっと閉じて黙り込んでしまった。そしてその後一言も発せずに学校まで来てしまう。

学校に着けば、トニーは知ってる顔を見る度に笑顔になって挨拶をしだした。

まるでジョーイなどもう知らないというばかりにあからさまに見せ付けるようだった。

ジョーイも意地を張ってしまい、ふんとわざとらしく苛ついている態度を取ってしまう。

そんなときにシアーズに会うから、益々ふてくされてしまった。

「（ジョーイ、今日も居残りしたいのか）」

それはごめんだとばかりにわざとらしく「グッドモーニング」と日本語の発音でバカ丁寧に答えていた。

シアーズは頭を左右に振り呆れていた。

この日は昼までに授業が終わり、いつもならジョーイはトニーとどこかで腹ごしらえするのだが、トニーは用事があると理由も告げずに一人でどこかへ行ってしまった。

英語教師の白鷺真子のためにまたボランティア活動をするのかもしれないとジョーイは思ったが、理由を言わずにプイと去っていくのは、やはりトニーも自分に対して気に入らない態度を示している

のが伝わってくる。

「勝手にしろ」

ジョーイもそんな態度を取るトニーにまたモヤモヤしてしまった。

しかしトニーがこういう出方をするのは珍しい。

いつもなら笑って受け流し、常に折れてジョーイを立てては機嫌を取ってくるだけに、こんなトニーの姿は見たことがなかった。

自分もそれに少し甘えすぎたかもと思ってしまう。

シアーズにも態度が悪いと言われるが、トニーも我慢の限界にきているのかもしれない。

ジョーイはそれでも悔い改めることなくふてぶてしく教室から出て行った。

「腹減った」

ジョーイがお腹を押さえて歩いて校門を出ようとしたときだった。

「ジョーイ」と後ろから声を掛けるものがいた。

振り返ればそこにキノが立っていた。

「キノ！」

驚いて、つい叫んだような声で名前を呼んでしまう。

二人は暫し見詰め合うだけで、その後の言葉に詰まっていた。

「あ、あの」

キノが話し出すと、ジョーイは緊張のあまり唾をぐくりと飲んでしまった。

「昨日はその、誘ってくれたのに会えなくてごめんなさい。あの、用事があったて来れなかつたんです」

「いや、俺もそのちよつと用事ができてかなり遅れてしまつて、つきりもう先に帰つたかと思つて」

また二人は黙ってしまった。

「あの、それじゃ私これで」

居心地が悪かつたのか、その場から逃げ出したかつたのかキノが去ろうとする。

「待てよ。どうせ帰るところ同じだろ。一緒に帰らないか……」

キノも驚いていたが、ジョーイ自身も自分が言ったことが信じられないとばかり、焦つてもじもじと落ち着かない。

暫くどうしようかと悩んだ顔つきになりながらも「は、はい」とどもつて返事をした。

キノが承諾したことでジョーイは自ら誘つたにも係わらず慌ててしまう。

やっと二人して話ができるというのに、そしてずっとこのときを待っていたのに、肩を一緒に並べて歩いてもジョーイは言葉が思うように出ない。このままではいけないとばかりにぐつと腹に力を入れて無理に話し出す。

「あのさ、前から色々聞きたい事があったんだけど、その……」

あれだけ知りたいことが色々あっても思ったように口が回らない。

「な、なんですか」

キノもまた何を聞かれるのかとおどおどしている。

ジョーイはとにかくまず犬の事から話し出した。

「犬飼ってるのか？」

「は、はい」

「その犬、盲導犬なのか？」

「はい、一応。でもなんで知ってるんですか？」

「訓練中って服をつけたその犬をキノが連れてるところ見たことあるんだ。でもなんでキノが盲導犬世話してんだ？」

「色々と事情がありました、今預かってるだけです」

「事情って？」

「それはプライベートなことなので……」

キノは言いにくそうに下を向く。

「ああ、すまない」

「でもどうしてそんなことを聞くの？」

「いや、そのコンビ二強盗があっただろ。あの時の犬が……」

ジョーイが言い終わる前にキノは言葉を遮った。それ以上聞きたくないとばかりに必死になっている。

「それ、他の人にもいわれましたが、私の犬とは関係ありません」



キノにきつぱりと言い切られてジョーイは「えっ」と声を出した。

実際あのとき自分は一部始終を見ていた。彼女の嘘は明白なのは分かっていたが、こうもはっきりと否定されると自分の見たものが信じられなくなってくる。

「だけど俺、キノがコンビニに犬と入るところ見てたんだ。その後あの事件が起こった。どうして嘘をつくんだ」

ジョーイは不快感を露にした顔になった。

「ジョーイもどうして私にそんなこと聞くの？ それを知ってどうなるというの？ ただの好奇心だけで色々と聞かれるのは迷惑だわ」

キノも気分を害した言い方だった。二人の間に気まずい空気が流れていく。

それならばと売り言葉に買い言葉でジョーイは思ったことを勢いでぶちまけてしまう。

「詩織を痴漢から助けたことも、あれもキノが分かかってやったことだろう。他にも何かと事件に関わって色々とやってるんだろ。なぜ隠そうとするんだ」

「何がいいいの？」

「だから、どうしてそんなことをするんだ。それに君は他にも人に言えないことがあるんじゃないのか」

キノはジョーイの顔を見つめた。どこか挑戦するような厳しい目つきが眼鏡のレンズから透過している。そしてゆっくりとジョーイに問いただす。

「それじゃ私が人に言えないことって何？」

「えっ、それはその、キノが有名な人物とか」

「有名な人物？ なんの話？ ジョーイは何か勘違いしてるんじゃないの」

「じゃあ、ミラ・カールトンって知ってるか？」

「ミラ・カールトン？ 知らないわ」

「キノ自身がミラ・カールトンじゃないのか？ ハリウッド女優のそしてお忍びで日本に来ている。そこでいろんな事件に巻き込まれて、素性がばれるのを恐れて色々と誤魔化している」

「えっ？」

キノは驚くがその後はなんだかおかしくなって笑い出した。

「ジョーイ、申し訳ないけどあなたの空想にはついていけない」

「空想？ 違う！ 君は嘘をついている。少なくともコンビニ事件のことは俺は確かにこの目で見ていた。どうして嘘をつくんだ」

笑われたことで少しむっとムキになり、白黒はつきりさせないと収まらないくらいジョーイは責め立ててしまった。

キノはジョーイの声を荒げた態度に少し考えた。どこか迷いを生じながらも穏やかに口を開く。

「ジョーイ、ここまで話がややこしくなっているのなら正直に言うわ」

ジョーイはまた息を呑むようにキノを見つめた。

「コンビニで起こったことはあなたが見た通りよ。あれは確かに私  
が起こしたこと。あの騒ぎは私の犬がやってしまった。でもそれは  
隠さなければならなかったの。ツクモは……」

「ツクモ？」

「あつ、犬の名前なの。ツクモは過去に人を噛んで怪我をさせたこ  
とがあつて、それで危険だからつて処分されそうになったの。それ  
を私が預かつて絶対人に役立つような犬にするからつて約束したわ  
け。これがさつきも話したプライベートな理由。もし今回のことが  
ばれちゃうとツクモを庇いきれないの。でもあの時、事件をミスミ  
ス無視できなくてついあんなことをしてしまった。私のせいでツク  
モがまた凶暴な犬だなんて思われたら困るからつい嘘をついてるつ  
てことなの。私だつて嘘をつくのは悪い事だと思ってるけど、守る  
ためには仕方がないこともあるの。だからごめんなさい」

最後はぐつと歯を噛み締めた絞った声となり、咄嗟に頭を下げた  
キノの態度は本当に悪いことをしていると分かっている様子だった。

ジョーイは不意打ちを狙われたように当惑してしまふ。

(守るためには仕方がない嘘)

ジョーイの頭にはその言葉がぐるぐるしていた。

そこにキノの殊勝な姿を見せ付けられると、さつきまで強気でい  
たジョーイの態度が一変してしまった。

「そ、そうだったのか。ごめん。俺の方こそなんか好き勝手に話し

てしまつて」

どうして良いのかわからないくらい戸惑つた顔だつた。

「でもこの事は誰にも言わないで欲しい」

「ああ、わかつた」

キノは安心したかのようにほつと息をつき、ニコツと微笑んだ。

「だけど、他の事件は本当に偶然なの。皆勝手に想像してくれてるみたいだけど、私の方が訳が分からない状態。それにミラ・カールトンってそんな有名な人で私に似てるってことなの？」

「いや、俺も最近知つただけだけど、確かにキノにそっくりだつた。というより、本人かと思つたくらいだ」

「それは本当に私じゃないわ。でもそんなに似てるのなら見てみたい。世の中自分とそっくりな人が三人いるっていわれてるもんね」

愛想程度に適当に答えていたが、似てると言われてもキノはあまり嬉しくなさそうだつた。

「それもそうだな。そっくりな奴がいるって話はよく聞く話だつた。それにミラ・カールトンはキノに瓜二つだけど、肌や目の色が違つていた。落ち着いて考えればやはり偶然に似てたんだろな。俺の方こそ勝手に思い込んで嫌な思いさせてすまなかつた」

「ううん、誤解が解けてよかつた」

ジョーイはそれでもまだ半信半疑だつた。上手くはぐらかされたようでもあり、まだまだ真相がはつきりと見えてない。

そこには前日雑誌を持つてきたことも含まれている。あれはどう

説明すればいいのだろう。あの雑誌を手にしたせいで、チンピラに絡まれ、そして前もってその事件が起こることを伝えられて助けに来てくれたリル。そしてあの場所に現れたギー、確かに全てが仕組みられたことだと分かっている。そのことについてはもうこれ以上キノには問いただせそうにもなかった。

キノは全てが終わったようにすっきりした表情でジョーイの隣で歩いている。

ジョーイもその雰囲気壊したくない思いで遠慮がちになってしまふ。

おどおどとキノを見つめると、そこには少しの間、キノをアスカに例えて勝手に想像してしまっている自分がいた。

まだキノからアスカのイメージが拭えない。

「あつ、そうだ」

ちょうど駅の前に着いた時、ジョーイは突然思い出し、ポケットに手を突っ込んでビー玉を取り出してそれをキノに差し出した。

「これは」

「これもホームに落ちてたんだ。あの時落としたビー玉だと思って持ってたんだ」

キノは恐る恐るそれを受け取った。

「ありがとう。覚えていてくれてたんだ」

「覚えるものにも、あんな派手なこと目の前でされたら、忘れられないよ。俺も子供の頃ビー玉で遊んだことあったからなんか色々思い出したよ。昔の友達のこととか」

ジョーイの瞳はキノを捉えているのに、その瞳に映っているのはキノの存在ではなかった。アスカを思い浮かべて瞳の焦点が合っていない。

キノはジョーイのそんな瞳をつい見つめてしまった。何かそこに映っているように見えたからだだった。

(キノがアスカなら俺は……)

ジョーイの心も完全に飛んでしまっていた。

駅前の人通りの激しい場所なために、側を通る人々は二人をちらりと見ながら歩いていく。

暫く特別な世界へと引き込まれたようにその場に突っ立ってお互いを見ていた二人の姿は、仲睦まじい若いカップルのようで初々しく見られていたかもしれない。

そして駅の周辺にいた一人は、確実にそう思いながら少し離れたところでジョーイを見つめていた。

リルだった。

友達と帰宅途中に寄っていた駅前の店から出た瞬間、駅前に女の子と一緒にジョーイの姿を見つけ、少なからずショックを受けたように口を軽く開け驚いていた。

どうしても無視できずリルは二人に近づいてしまった。

「ジョーイ」

自分の名前を呼ばれ、引きずりあげられたようにジョーイは正気に戻った。

(俺は一体何を)

頭を抑えながら、呼ばれた方向を見ればいつもの無愛想な表情でリルが立っている。”さん”付けだったのが、いつの間にか呼び捨てになっていたことに遅れて気がついた。突然呼び捨てになったのは前日の事件が絡んでリルに特別な変化が生じたに違いない。

「ああ、リル」

少し遠慮して欲しいとばかりに、ジョーイも冷たい表情だった。

「あれから具合は大丈夫なの？」

体の調子のことを聞かれ、前日リルに助けられたことを思い出し、少し邪険に扱ったことをジョーイはしまったと顔を歪めた。

「ああ、大丈夫だ。心配してくれてありがとう」

「それだったらいんです」

二人にしかわからない会話をしていることに優越感を抱いてリルはキノをちらりと見た。

キノはペコリと軽く頭を下げ挨拶して、困惑した笑顔を返した。

リルは愛想笑いを返すこともなくキノを見つめている。

暫く沈黙が続くと、ジョーイははっとしたようにそれぞれ名前を紹介してやった。

「そう。この人が、キノ」

リルがそういったのは前日ジョーイからキノを知らないかと聞かれたのを覚えていたからだだった。

どことなく心の中がざわめくとはかりに益々キノをじろじろと見つめていた。

キノも落ち着かずリルの視線を気にしていた。そして腕時計を見つめる。

「ジョーイ、そろそろ電車が来る時間。私それに乗りたいたから行くね」

キノは二人に気を遣っている様子だった。

「俺も、それに乗る。リル、それじゃまたな」

キノを追いかけるようにジョーイが去っていく様子をリルはむっつりと見ていた。普段から無愛想だが、このときの表情はもっと陰りのある怖い顔つきだった。

キノを目で追いながら唇を無意識に噛んでいた。



階段を下りて駅のホームに来たとき、すぐに電車が入って来た状態だった。

ジョーイはしっかりとキノの側について電車に乗り込む。

座席は空いているのにキノが座ろうとしないので一緒にドア側に立つが、隣に居るのが落ち着かない。

電車が動き出しても、これといった話題もなく何も話せずじまいだった。

キノももじもじしながら、時々ジョーイの顔を見て愛想笑いをしでは誤魔化してその場を繋いでいる様子だった。

二人の距離はかなり近く、どこか意識をしているのかぎこちない。このままでは一緒に帰っている意味がないと、ジョーイは無難な質問を試してみた。

「キノの趣味はなんだい？」

「えっ？ 趣味？」

聞き返されたとき、唐突な質問だったのかと失敗したとジョーイは少し眉を顰めて後悔したが、キノは空気を読んだように慌てて答えを返してきた。

「本を読むことかな。あとはツクモの世話も趣味に入る？」

「えっ、ああそうか。じゃあどんな本が好きなんだ」

「ミステリーが好き。誰が犯人とかトリックの技巧とか最後を読むまでに自分で推理するのが好き」

「それは俺も同じだ。いつも犯人はコイツだなんて思ったら大体当

たってる」

共通の話題が出てきたのでジョーイは調子付いてきた。

そしてその後はどんなミステリーを読んだのかと徐々に盛り上がってくる。

キノがまだ読んでいない話のあらすじをジョーイが教えてやると、ネタバレするからと耳を塞ぐしぐさまでしていた。

「私もいつかその本読もうと思っていたの。それ以上言わないで。楽しみが減っちゃう」

「ごめん、そういうつもりじゃなかった」

キノが笑うとジョーイはそれにつられて笑顔を見せていた。キノはジョーイの笑顔を見逃さなかった。

「ジョーイってもつと怖い感じの人だと思っていた。でもジョーイもやっぱり笑うんだね」

「えっ？」

ジョーイはそこで初めて自分が女の子を目の前にして笑っていたことに気がついた。

(俺が笑ってた？ 女の子を前にして自ら笑顔を見せた……)

突然ジョーイの胸がドキドキと高鳴り、キノを見つめてしまう。

「どうしたのジョーイ？」

「いや、なんでもない。だけど俺、こんな風に笑ったの久しぶりかもしれない」

「どれくらい久しぶりなの？」

「10年くらいかな」

「えっ、そんなに笑ってなかったの？ 嘘。ジョーイって冗談も言

えるんだね」

キノはどこか壺に嵌ってしまった笑い方になっていた。眼鏡がずり落ち抑えている。

ジョーイはやはりここでもキノをアスカとして見てしまった。つい本音が出てしまう。

「キノを見ていると、昔に会えなくなった友達を思い出すよ」

「どうして、私を見てるとそう思うの？ また私に似た人なの？」

キノは聞いていいものが不安になりながら問いただす。

「いや、正直顔は忘れた。だって10年も前のことだから。だけどキノみたいにその子もビー玉が好きだったんだ」

「そう。またその子といつか会えるといいね」

キノは優しく微笑んだ。

ジョーイは返事の変わりに、キノを見つめ口元を少し上げただけだった。

まるでキノにアスカなんだと問いかけている目を向けて、その返事を待っているかのようにだった。

乗り換え駅で次のホームに向かって連絡通路を歩いているときだった。

特別元気な声でジョーイの名前を呼ぶものが現れた。

また騒がしいのが来たとジョーイの身が竦んで固まってしまう。

その硬くなつた背中を勢いよく叩かれてしまい、ジョーイの顔が歪んだ。

「痛いじゃないか。手加減しろよ、詩織」

「だって、久しぶりで嬉しかったんだもん。会いたかったジョーイ」  
「久しぶりってこの間会ったばかりだろうが」

「今日はキノちゃんも一緒なんだ。嬉しい。ねえねえ、今からどこか遊びに行こうよ」

詩織はジョーイとキノの手を取って子供のように振っている。

「おい、いい加減にしろ。マイナス一点！」

ジョーイがその手を振り払うと、詩織はあからさまにぶくつと膨れた。

「やだ、またマイナスポイント？ まだあれ続けてるの」

詩織は不服とばかりにぶつぶつ文句を垂れていた。

その時ぐーつと音が鳴り、キノが咄嗟に自分のお腹を押さえ込んだ。恥ずかしさのあまり、キョロキョロとさせて二人を見ているが、瞳が眼鏡のレンズの中で泳いでいるようだった。

「キノちゃんお腹すいてるんだ。じゃあなんか食べに行こうよ」

詩織がキノを引っ張って途中下車しようとして改札口に連れて行く。キノは恥ずかしさで力が入らず抵抗できないで詩織のされるがままになっていた。

「おい、詩織、待てよ」

ジョーイもキノと中途半端に引き裂かれるのはごめんだと後をついていってしまった。

三人はハンバーガーショップでそれぞれ注文したものを目の前にしてテーブルについていた。

壁際の4人掛けのテーブルにキノと詩織が隣同士になりその前にジョーイが座る。

詩織はキノの世話をするかのように色々とお節介をやいている。

キノの髪を撫ぜては、髪型のアドバイスをしたり、眼鏡からコンタクトに変えるやら、頬が柔らかいと何度も突付いてはかわいいとまるで玩具のような扱いだっただ。

キノは何も言えずされるがままで、時折笑顔だけは見せていたが、どこか無理をしているような感じだった。

「詩織、いい加減にしたらどうだ。キノが嫌がってるぞ」

「だって、キノちゃんかわいくてもう放っておけないんだもん。なんでこんなにかわいく生まれたの。ジョーイもかっこいいけど、やっぱりハーフっていいな」

おめでたい詩織の発言に呆れ、ジョーイは口元にハンバーガーを持ってきては感情をぶつけるようにがぶりと食いついた。

この風貌が如何に素晴らしいかと詩織は思っているが、少なくともジョーイはじろじろ見られ見世物のように扱われることに腹立たしく思っている。詩織には何も言っても無駄だとばかりに、ひたすら黙々と食べることだけに専念した。

「私は詩織さんの美しさに憧れる。詩織さんは神から与えられた真の美しさだと思つ」

手に持っていた食べかけのハンバーガーをトレイに置いてキノは俯いた。

肩が微かに動き、感情を必死に堪えているようなキノの姿が意外で、ジョーイはそこに自分と同じコンプレックスを持っているのではないかと感じてしまった。

「やだ、キノちゃん。神から与えられた真の美しさはキノちゃんだよ。キノちゃん、その眼鏡外して自分を見てごらん。キノちゃんはもっと自身持つべき」

「私は普通に生まれてきたかった……」

キノは少し涙声のようにかすれて小さく呟いた。

「キノちゃんどうしたの？」

「おい、詩織、もういい加減にしる。どうしてそう脳天気なんだ。あのな、俺達ハーフと呼ばれるものにはそれなりの悩みつてものがあるんだよ。空気読め」

ジョーイは飲み物のカップを持ち、一気に飲み干した。最後にズズーと音がなるとそれを乱暴に置く。

詩織はまたジョーイを怒らせてしまったと思ったが、その原因がよくわからないでいた。気まずい思いを抱きながら静かに残りのハンバーガーを食べだした。

その後は容姿のことには触れなかったが、どこかギクシャクしてしまい、しらけたムードのまま店を出た。

「キノちゃん、もし私のせいで嫌な思いさせてしまったらごめんね」

詩織はなんとか取り繕うと素直に謝った。

「うつん、詩織さんは何も悪くない。私の方が雰囲気壊しちゃってごめんなさい」

「キノちゃん、なんて健気なの」

詩織は感動したかのようにキノに抱きついた。

キノは突然のことに当惑しながらも、それでも何かと構ってくれる詩織の優しさは心地よかった。

詩織の裏表ない素直なところをまた見せられ、ジョーイも口には出さないもののこういう部分は好感を持てるそばかりに側で黙って見ていた。

その後は詩織と別れて、またジョーイはキノと二人で駅のホームに向かう。

二人つきりになることにはすでに慣れていたが、また会話の糸がプツリときれてお互い静かだった。

電車を待っているとき、キノが遠くを見つめるような目をして独り言を呟くようにジョーイに話しかけた。

「ジョーイは今の自分に満足してる？」

心の準備もなく突然の質問にジョーイはすぐに答えられなかった。

その質問の内容が重々しく聞こえ、間を置いても何を言っているかわからない。ただ「はい」か「いいえ」を言うだけなのに。

「ごめん、変なこと聞いて」

「いや、いいんだ。もしかして詩織に言われたことまだ気にしてるのか？」

「少しね」

「そうだよな、俺達血が混ざり合ってるから特別な目で見られるもんな。キノもなんかそれで嫌なことでもあるんだろ」

キノは返事しなかった。ずっと向かい側の駅のホームをただぼんやりと見ている。

そして電車が入ってくる音楽とアナウンスがすると待っていた周りの乗客はそわそわしだしたが、キノはまだ動かさず目の前に入ってきた電車にも気がつかない様子に見えるほどだった。

電車が停止後、ドアが開いたとたん乗っていた人が押し寄せように降りてくる。

反対側では、狭い入り口にねじ込むように乗り込む乗客もいる。ひしめき合って座席を取ろうと必死になる中、キノはそれを一通り見てから静かに電車に乗り込んだ。



ジョーイもキノの後をついていく。

ドア付近に立ち、何か話しかけたい気持ちを持ちながら、キノをちらりとみるが、キノは寂しげな瞳を眼鏡のレンズの奥に潜ませて先ほどと変わらないように外を見ていた。

何か気の利いたことでも言えたらとジョーイは頭の中で色々と言問内容を思い巡らす。

だが、キノは身の回りの全ての事柄を遮断したように見えて、声が掛けにくい。

焦れば焦るほど頭の中は無意味な言葉が羅列されるだけで考えがまとまらなかつた。

「ジョーイ」

ドアが閉まり電車が動き出したとき、キノの方から話しかけてくる。

ジョーイの方が現実に引き戻されたような気になった。

「なんだ？」

「ジョーイの将来の夢って何？」

「えっ、将来の夢？」

「そう、ジョーイがやりたいこと」

「それがわかんないんだ。高校三年だし、進路を決めるって言われるんだが、何をしたいのかしたいことすらないんだ」

「でも、ジョーイは勉強がよくできるんでしょ。学校一の秀才だって噂を聞いたことがある」

「えっ？ それって俺のこと前から知ってたってことなのか」

どつりで初めて会ったとき、昔から自分のことを知っているように聞こえた訳だとその謎が解けた。面識がなかったが噂で聞いてい

たということだった。

また自分の中のアスカが遠くなっていった。

「そういうキノの夢はなんだ？」

「私の夢は人の役に立ちたい。自分ができるのなら惜しまずにその力を役に立てたい」

「へえ、偉いな」

「ううん、それは私に課せられたことだからって、そんな風に思いたい。こんな風に生まれてきたのも意味があるんだって思いたいの」

「俺も自分の容姿にはそれなりのコンプレックスはもってるけど、キノも相当根は深そうだな。だけどそんなに気にするな。自分もそうだから人に偉そうに言えたことじゃないけどな」

二人は静かに移り変わる窓の外の景色を見ていた。

駅について降りたとき、これでまたキノとお別れかとジョーイは残念に思った。

もう少し話をしてみたい。もう少しキノと親しくなりたい。

キノはアスカではないと結論が固まるまでに、自分の心の中にいるアスカをキノを通じてもう少し見てみたい。どうしてもそこに拘っていた。

改札口を出て賑やかな町のショッピングセンターに続く連絡橋を歩く。キノとはここでお別れだった。ジョーイはギリギリまでキノの側に居ようと試みる。

「キノは駅前に住んでるのか」

「うん」

「これからツクモの散歩でもするのか」

「そうだね。きつと待ってると思う」

「そっか。もし盲導犬の訓練で何か手伝えることがあったら言うてくれ」

咄嗟にそんなことを言ってしまったが、ジョーイ自身自分の言葉に驚いていた。

「あ、ありがとう」

「そろそろこの辺でお別れだな。じゃーな」

ジョーイはもう充分だと潔く去ろうとする。

「ジョーイ」

キノは咄嗟に呼び止めた。

ジョーイは振り返る。

「明日午後から、子供達の野球の試合があるの。知り合いが出るんだけどもしよかったら見に来ない？ ツクモも盲導犬の訓練として連れて行くつもり」

子供達の野球の試合、知り合いの出場と聞いて、ジョーイは駅前でおばあちゃんを待っていた野球帽を被った男の子が浮かんだ。あの時日曜日にキノと会う約束があるとも言っていたことも同時に思いつく。

『何見てんだよ、バーカ！』

あの言葉も蘇った。

生意気そうなガキだっただけにどんな試合をするのか興味も湧いてくる。そして何よりまたキノと居られると思うとジョーイは「ああ、行くよ」と笑みを添えて答えていた。

「試合は午後一時からだけど、場所は北口側の向こうにある花園小学校っていうところ。分かる？」

「ああ、分かるよ。それじゃまた明日な」

ジョーイは軽く手を振って連絡橋の階段を下りていった。

キノは暫くその場でジョーイの後姿を深く瞳に捕らえていた。

その油断していたとき、キノの鞆から携帯電話の音楽が目覚ませとタイミングよくかかってくる。

キノは現実に引き戻されるのを嫌がるように携帯を手に取り通話ボタンを押した。

「今どこにいるの？」

キノは辺りを見回しながら電話の対応をする。

改札口付近のところで、背の高い男が周辺の人々に紛れながら携帯を耳にあてキノをじっと見ていたのに気がついた。

キノはその存在を認めたくないように視線を逸らして背中を向けた。

精一杯の抵抗だった。

「ずっとつけてたのね。さすがねノア」

「キノ、お前らしくない。これくらいの尾行にも気づいてないとは、よほど油断していたな」

「本当はノアがどこかで見てたくらい分かった。でもそれを忘れてたかっただけ」

「キノ、これ以上ジョーイに近づくのは危険だ。何をやってるのか分かってるのか」

「分かってるわ」

「だったらなぜ？」

「ノア、ごめん。もう少しだけ普通の高校生でいさせて」

「だめだ、そろそろ帰らないとFBIが活発に動き出した。学校にもその手がすでに回っているかもしれない。それに、このままではジョーイも真相に気がつくのも時間の問題だ。それだけは避けたいことだろ」

「でも、私……」

「いい加減にしろ、キノ。そこまで頑固なら俺も手を打つぞ。それ

「でお前は悲しむことになるかもしれない」

「ノア、どうしてそこまでしなくっちゃいけないの？」

「それは、キノとそしてジョーイを守るためじゃないか」

キノの肩に優しく手が置かれた。ノアがいつの間にか側までやってきていた。

ノアは電話を耳から外し、キノを見つめて穏やかな笑顔を見せた。

「さあ、帰ろうか。ツクモが待ってる」

二人は一緒に歩く。

キノは俯き加減で虚ろな目をしてとぼとぼと足を動かしていた。

ジョーイとミステリーの本について夢中で話したことを思い出し、胸元のシャツをぎゅっと掴んでいた。

キノとジョーイの距離が急激に接近した影で不穏な動きの懸念が深まった。

そうとも知らずにジョーイはキノと近づけたことを喜んでいる。

「明日は午後から野球の試合か。カウンセリングが朝からだから、充分間に合う。でも俺カウンセリングなんか行かなくてもなんか変わっちゃまった気分だ」

自分の部屋でベッドの上にごろりと横になりながら、ジョーイはキノのことを考える。

女の子の前で愛想笑いすらない自分が、自然と心から笑ったことにキノの存在の意味を求めていた。

詩織がキノの世話を焼きかわいがっていたのも、妹と重ね合わせ  
ていたに違いないと思うと、自分もキノをアスカに見立てていいよ  
うに思い込んでいた。

詩織は少し入り込みすぎて度が過ぎていたが、口に出さなかった  
だけでジョーイも詩織と全く同じ事をしていると認めざるを得ない。

「しかしこれでいいのだろうか」

ジョーイの意識がぼやけていく。うつらうつらと睡魔がやってき  
てそのまま昏寝をしてしまった。

夕方目が覚めると、辺りはすっかり暗かった。

「あっ、夕飯の支度」

主婦かというくらいすっかり炊事の癖が身について、台所に下り  
ていく。

時計を見れば6時過ぎだった。

「トニーのやつまだ帰ってこないんだな」

朝、トニーと仲違いのようになり、このときになって少し反省の  
念が出てくる。

トニーはここでは居候の身。それが全く自由じゃないということ  
なのだろうか。

トニーが言った言葉の意味を考えれば、世話になつてる身分はど

うしてもその家の者に従わねばならないということなのだろう。

さらに人とどこか違う気難しい自分という存在を目の前にして、気を遣うのにいい加減我慢の限界だったのかもしれない。

比較的心身が安定してたせいもあったが、心の余裕の中に突然罪悪感が襲ってきてしまった。

はつきりと喧嘩した訳ではないが中途半端なすれ違いが気がかりとなり、ジョーイは料理中、何度も時計を見てはトニーの帰りを待っていた。

テーブルに夕飯を並べるとジョーイは自信たっぷりに頷いた。揚げたてのから揚げが湯気を出している。

これならトニーも気に入って笑顔になるかもしれない。その時ジョーイはさりげなく謝ろうと思った。

玄関のドアが開く気配がすると、ジョーイは思わず出迎えに向かった。

「トニー、遅かったんだな」

トニーは靴を脱いでるところだった。

顔を上げたとき「ああ」と疲れた声を出していた。どこかまだいっつもと違っている。

「ご飯できてるよ」

ジョーイはこれで喜ぶと思っていた。



「ごめん、いらぬ。外で食べてきた」

「えっ？ だったら連絡ぐらいしろよ」

「すまなかつた。ちよつと疲れたから今日はもう寝る」

トニーはジョーイの顔を碌に見もせず階段を上がっていった。

「おい、トニー」

ジョーイの呼びかけにも答えなかつた。

暫くしてボタンとドアが閉まる音が聞こえ、ジョーイの心の中にまで響く。

「ちえつ、なんだよ」

ジョーイは不完全燃焼でヤキモキしたが、自業自得だとばかりに首をうな垂れて台所に戻つた。

そしてテーブルにつき、から揚げの山を見つめ、ため息を一つこぼし「いただきます」と小さく呟いて、もそもそと食べた。

「さてと、今日はいろんなこと聞かなくっちゃ」

白衣の袖を捲り上げるしぐさをすると、早川真須美は少し意地悪っぽい笑みを浮かべて、簡易ベッドの上で横になっているジョーイを見下ろした。

ジョーイは根掘り葉掘り聞かれる覚悟をしていたが、どうも早川真須美は仕事の域を超えて興味本位さが混じっているように思えてならない。

「先生、これも治療の一環ですよね」

「もちろん！ といいたけど、ジョーイの場合特別な患者さんだから、色々好奇心もうずくわね。特にあのリルちゃんって女の子との関係は知りたいわ」

「だから、それはただの友達で、あの時は偶然に出会っただけだったば」

偶然に出会ったと言ってみたものの、リルをあそこに向かわせた奴は確かに存在するとジョーイは身に置かれている状況に改めて不可解になってきた。

ジョーイが夜桜祭りに呼び出され、チンピラに絡まれたのは誰かによって意図的に計画されたかと確信を持って言い切れる。その主犯者がギーということは分かっているが、リルはまた違う存在の者から呼び出されていた可能性が高い。その証拠に、ギーは計画が狂ったと言っていた。だが、その持つ意味や目的がわからない。

(一体何が起こっているんだ?)

その一瞬の心のわだかまりが見せたジョーイの表情を早川真須美は見逃さなかった。

「ねえ、正直に答えて。最近何か変わったことがなかった？ 過去のことを含めてそれを呼び起こさせる出来事、または何かそういう関係ある人物との接触があったとか」

さすがに鋭い指摘にポーカーフェイスが得意のジョーイも心が乱された。

キノが駅でビー玉を転がした場面に遭遇してから、確かに過去の記憶が呼び起こされた。

自分も転がったビー玉になったようにずっと転がり続け、何かに触れると次の仕掛けが作動するようにスイッチを入れて事が起こるような気分だった。

めまぐるしく自分の周りが変化している。

そしてギーというFBI捜査官との接触から、急激に危険が伴うようなことまで発展してしまった。

これが一体何を意味しているのかジョーイ自身困惑しているが、それを正直に早川真須美に言う気分になれなかった。

早川真須美が信用置けないというのではなく、自分で解決しなければならぬ使命感とでも言うべき感情が湧いていた。

「ジョーイ。何か隠しているでしょ。私に嘘をついてもだめよ」

早川真須美の目が一層細まり厳しくなった。

「先生、別に嘘をつくつもりはありません。ただ今はまだ自分でもはつきりしないだけで、何を話していいのかわからない。確かに何か変わったって感じるけど、俺が話したくなるまで待つて欲しい」「ジョーイ、それじゃ私の仕事にならないじゃない。ここに来る意味がなくなっちゃうわよ」

「俺だって、こういうことは最初から続けたくはなかった。でも母親がうるさくて無理に通ってるだけに過ぎない。俺は別に今のままでもいいと思ってる。普通と違っててももう平気だ。見かけも充分普通じゃないしね」

「そこまで頑なに言われたら仕方ないわね。でもジョーイ、普通と違うって事に本当に平気なのね」

早川真須美が一番大事なことのようにその部分を繰り返した。

「はい。それは俺の個性として受け止めるようにします。このふてぶてしさも生意気さも俺なんですよ」

「そうね。だけど、確かにジョーイには変化が見られる。何かが起こったんだろうけど、職業柄その原因を私は知りたいんだけどな。ヒントプリーズ」

「先生、なんですかそれ」

「だって、カウンセラーを飛び越えて勝手に答え見つけられたら癪じゃない」

あまりにも子供っぽい答え方をする早川真須美にジョーイは呆れてしまった。

早川真須美は真相を突き止めたくて隙を伺いながらも、他愛もない雑談を進めるが、結局時間切れでこの日のカウンセリングは終わった。

仕方がないと早川真須美は諦めるが、ジョーイが部屋を出たところでやはり電話を掛け、誰かへの報告は怠らなかった。

早川真須美もジョーイに対して何かを探るような部分を持っている。

ジョーイはまだそのことに関しては気がついていなかった。

その後クリニックを去り、ジョーイは普段と違う気分にも包まれたまま色々振り返りながら歩いていった。

思い出せば思い出すほど状況がややこしく順序だてて考えられなかったが、重要なことは何かと箇条書きにすれば、一つはキノと会う約束、もう一つはトニーとの喧嘩、最後にギーから出された問題のことに重点が置かれる。

「まずはこれからキノに会うことだ。後はそのときでいい」

ジョーイの頭の中はキノのことで一杯になっていた。

駅に着いたとき、時計は十二時半を過ぎたところだった。

一時からの試合には充分余裕だと、腕時計を見つめながらジョーイは試合のある花園小学校に向かった。

キノに誘われて、自分でもウキウキしている。

お昼ごはんを食べることも考えられず、お腹が空いていても食欲が全くない。

寧ろ胸が一杯になるように、何かが詰まって苦しい気分だった。

こんな気持ちは初めてだと、ジョーイも首を傾げつつ、自分に驚くばかりだった。

花園小学校の運動場が見えると、ユニフォームを着たちびっ子たちが目につく。

その周りは保護者や地元の人たちが集まっている様子だった。

犬が目に入ったところで、隣に居た眼鏡を掛ける女の子がすぐにキノだということが分かる。

ジーンズを穿き体にぴったりとするピンク長袖のＴシャツとその上にもう一枚お洒落なアウターで重ね着していた。

アメリカカカジュアルらしく、それを着こなしているキノはかわいらしかったが、最初に抱いた消極的なイメージからは程遠く活発な女の子に見えた。

そんなキノの側に早く行きたいと、ジョーイの足は自然と早まっていた。

「よっ、キノ」

「あつ、ジョーイ。来てくれたんだ」

お互い照れた挨拶を交わしていると、ツクモが「クウーン」と鼻を鳴らし、尻尾を振りつつジョーイを嗅ぎまくった。

「ツクモだったな。初めまして」

ジョーイが挨拶すると、ツクモは腰を下ろして座り込み「ワン」と一回吼えて挨拶を返す。

「コイツなかなか礼儀正しいじゃないか。かわいいな」

ジョーイはおもむろに頭を撫ぜた。

ツクモは満足そうにジョーイを見つめながら、尻尾を忙しく振っていた。

「ツクモ、ジョーイのこと気に入ったみたいだね」

犬を撫でているジョーイの姿を見つめながらキノもニコツとして呟いた。

犬が居るお陰で、ジョーイもキノもなんとか二人して側に居られるという雰囲気だった。内心この後どのように過ごせばいいのかわからない。

ツクモが急に他の方向を見たので、ジョーイも視線を向けると、ユニフォームを着た男の子がこっちに向かって走って来るのが目に付いた。

「おい、キノ！」

「聡君」

聡が近づくとツクモも立ち上がり、聡の側に寄って思いっきり尻尾を振って歓迎していた。

聡は挨拶代わりにツクモの首あたりを両手で掴むように撫ぜている。

その時ジョーイは、確かにこの男の子に「バーカ」といわれたと思いながらじろじろと見ていた。

「今日は絶対キノのためにホームラン打つからな」

聡はかっこつけて言い切った。

(キノのために…… っておいおい)

子供ながら大胆に発言する聡にジョーイはませると冷めた目つきになってしまふ。聡は視線を感じて負けずにジョーイを睨み返していた。

「ねえ、この人誰？」

「同じ学校に通ってる人」

キノがもじもじと答えると、益々面白くないと聡の目つきが険しくなった。

以前バカと罵ったことは全く覚えてなさそうだった。

だがその発言にふさわしく聡はやんちゃでどこか生意気そうな雰囲気漂う。



「ふーん、なんか気にいらねえ」

子供らしいといえればそれまでだが、どこかライバル意識をもったピリピリとしたものも伝わってくる。

ジョーイも生意気なふてぶてしさではいい勝負だと、聡を見て粹がったように口元の端を片方上げて応えていた。

「ジョーイだ。よろしくな」

一応挨拶を試みたが、聡はふんと首を横にフリ無視をした。

益々かわいくない奴だと思ってみたが、どこかで見たとような光景にジョーイは鏡を見ているような気分になった。

「俺、絶対頑張るからな。キノから教わったこと全部やってみる」

「うん。頑張つてね。ツクモも応援してるからね」

ツクモも一緒になって「ワン」と一回吼えると、聡はまたツクモの頭を撫ぜた。

「ツクモ、お前ほんとに変な名前付けられたよな」

ツクモが聡に前足を出して飛びつき、聡の顔を舐め始める。

「ツクモ、わかったよ。そうだよな、いい名前だよな」

「聡君、そろそろ試合始まるよ」

「うん、そろそろ行かなくっちゃ。だけどさ、キノ。なんで今日はそんな変な眼鏡掛けてるんだ？」

「えっ？」

キノが聡の指摘にびっくりしていると「聡！早く来いよ！」と遠

くから声が聞こえ、聡は慌てて走っていった。

ジョーイも聡が言った言葉が耳に引っかかり、キノの眼鏡をじっと見つめた。

キノの眼鏡は確かに初めて会ったときに似つかわしくないとジョーイも思っていたところがあつた。

黒ぶちでフレームの部分もまん丸に近く、年頃の女の子がかけるような眼鏡ではない。

眼鏡を掛けているキノは何かの動物に似ているとジョーイも思ったもんだつた。

眼鏡の形をどうこういうのはもうどうでもよかつたが、この時聡が言った『なんで今日はそんな変な眼鏡掛けてるんだ?』という部分が気になる。

(だったらいつもはどんな眼鏡をかけてるんだ?)

それを聞こうとしたときキノの方が先に声を掛けてきた。

「ここで突つ立ってるわけにもいかないから、あつちに行こうか」

保護者達が折りたたみ椅子やゴザを用意して散らばって座っている場所を指差して、そつちに向かつて歩いていった。

キノは持っていたトートバックから用意していた敷物を出して地面に敷いた。ジョーイに座るように手を差し伸べる。どうしていいか分からないままにジョーイはぎこちなく腰を掛けた。

キノも一人分の距離を開け座ると、その間にツクモが入って来た。お陰で二人の間の緊張感が和らいだ。

「ジョーイ、お腹空いてない？」

バッグから布に包まれた何かを取り出し、そして結び目を解くと二段の重箱のようなものが顔をだした。

「お、お弁当？」

ジョーイは目を白黒させてこのシチュエーションに驚いている。

「うん。野球鑑賞しながら何か食べ物があったらいいかなどか思っ  
て作ってきた。ツクモ、少し後ろに下がって、ゴーバック」

真ん中に座っていたツクモは命令どおりに動き、二人の後ろで賢く座る。

ジョーイの目の前に置いたお弁当の蓋を開けると、中から色とりどりのおかずと海苔やゴマをつけたおにぎりが出てきた。

「す、すいいや」

感嘆するジョーイの声にキノも素直に嬉しそうにしていた。

お箸を渡され、ジョーイは戸惑うまま一口食べると、自分がいかにお腹が空いていたかすっかり思い出した。

「美味しい？」

心配してキノが覗き込む。

「うん、旨いよ。ありがとう」

ジョーイの言葉に安心するとキノも一緒に食べた。二人して仲良くお弁当を食べている後ろで、ツクモが黙って見守っていた。

言葉なくジョーイはもぐもぐとキノが用意してくれたお弁当を口にしていたが、なぜこんなシチュエーションになっているのだろうと、考えれば考えるほど不思議に思えてきた。

それよりも何より、これってデート？  
そう思うのが一番強かったように思えた。

また自分らしからぬ感情が芽生えてくる。なぜかそれが心地よく、ほのぼのと楽しい気分になんてくれた。

そしてグラウンドで、ユニフォームを着た選手達が列になって帽子を取って挨拶を交わし試合が始まる。

あの聡は外野手でセンターにいた。  
周りが拍手や掛け声で騒がしくなっている。

キノも聡が心配だとばかりに見守っている様子だった。  
ジョーイも折角誘われたので、ここは聡のいるチームを応援することにした。

子供達の野球の試合と云えど、試合をしているものたちは一生懸命なのは理解できるが、周りの保護者の方がより一層力が入っているように見えるのは親心というものなのだろう。

ふと過去に父親とキャッチボールをした記憶が蘇る。

嬉しそうにボールを投げていたのは父親の方だったと、あの頃の無邪気だった自分がこんな風に育ってしまい、父親に対して何の感情も抱かなくなってしまうとは想像もできなかったとなんだか悲しくなってきた。

普通ではないことを受け入れると早川真須美に言い切ったものの、こんな風になって生まれてきた自分には何か意味でもあるのだろうかとかやはり心の迷いは拭えなかった。

ぼーと試合を見ていたが、ちょうどツーアウトのときに、センターフライがあがると聡がしっかりとそのボールを受け止めた。

キノが突然大きな声を上げそれを褒め称えて拍手を送っていた。

ジョーイはキノの意外な面を見たとき少し圧倒されたが、すぐに真似をして同じように声を出した。

その場のノリに合わせる自分の方がびっくりな行動だったかもしれない。

この後二人顔を見合わせて微笑んでしまう。

妙に照れてしまいはにかんだ笑顔だったが、お互いの顔を見ているうちに楽しいと感じると次第に慣れが生じてくる。

(今日は思うままに、感じるままに過ごしてみよう)

ジョーイはキノの側に居ることで抑えていた何かが飛び出てくるようだった。

一回の表が終了し、聡はグラウンドを走りながらキノの方向を見ているのがわかる。キノにしっかりと自分の姿をアピールしている様子だった。

「あの子、聡だっけ。なんだかはりきってるな」

「うん。聡君は一生懸命頑張ってるんだ。お母さんを早くに亡くして、お父さんも仕事で忙しくて、いつもおばあちゃんが面倒みてるんだ」

「そっか。でもなんだかキノに懐いている感じだな」

「バッティングセンターで知り合ってたなんか意気投合しちゃったって感じかな」

「へえ、バッティングセンターにも行くのか。そういえば、教わったこと全部やってみるって言ってたけど、コーチでもしたのか」

「えっ、そんな大げさな。ちょっとしたアドバイスだよ。ボールを良く見るとか、腰をもっと低くとか。基本的なことかな」

「キノは野球が好きなのか？」

「好きっていうより、体を鍛えるための趣味程度よ」

「へえ、スポーツ得意なのか？」

「得意って言うよりも、ストレス発散に近いものがあるかも」

そんな会話をしている中、聡のチームがヒットを打ち、誰かが一塁に走り出た。

そして次は聡の打順だった。

「聡君！ 頑張って！」

またキノが声を張り上げた。おどおどとした消極的なイメージだったキノがこのとき全く別人に見えてくる。

知り合いが出ているからいつになく興奮しているだけなのだろうか。

ジョーイはキノの姿にギャップを感じて圧倒されていた。

キノの応援に應えるかのようにカキーンという音が清々しく青空と混じるように響き渡ると、聡が一塁めがけて駆け出した。

ボールはセンターを勢い良く抜けている。

外野もボールを取りそこね、聡は一塁だけでは止まらず、二塁へ向かっているところだった。

聡の前に出ていた選手も三塁を目指している。

三塁側にボールが投げられたが、それはセーフとなり、そして聡も二塁に到着。

ノーアウト二塁三塁で聡のチームは点を入れるチャンスとなった。

周りの応援も力が入り、キノもまたしつかりと応援していた。

その隣で、ジョーイはキノが持ってきていたお弁当を黙々と食べている。

不意に見たツクモと目が合い、ソーセージを一つあげようと前に出したが、ツクモは決して欲しがらなかった。

「へえ、この犬賢いんだな」

「むやみに人から食べ物を与えられても口にしないようにそこは訓練してあるんだ」

「盲導犬だから、色々と訓練して他にも一杯賢いことするんだろうな。ミステリアスというのか、その飼い主のキノもやっぱり不思議だよな。今日は別人に見えるよ」

「でも私達まだお互いのことを知るほど知ってないと思うよ。ジョーイも最初抱いたイメージと全然違う。だけど本当の姿って一体な



んだろう。自分でも良く分かってないかもしれない」

またキノが憂いを帯びたような目つきで寂しく語った。

キノは何かのコンプレックスを持っているのか、自分の姿に触れられると我慢できないようだった。

ジョーイも同じ立場でそういうところは分かっているというのに、キノがそこまで拘る理由が気になりだす。

またカキーンという音がすると、キノは試合にのめりこんで聡を応援し始めた。

そして一回の裏は二点入り、聡のチームは益々活気付いてきた。

野球の試合は応援したい人がプレイしていると、少し力が入ってくる。例えばそれがバーカとかつて罵られた相手であっても、一生懸命の姿を見せられると応援せずには居られなくなる。

キノが用意してくれたお弁当をすっかり平らげて、ジョーイのお腹も満足していた。

ずっと気になっていたキノをまじかにして一緒に過ごしていると、夢を見ているような錯覚を覚える。

一体自分はキノの何が知りたかったのだろうか。

ふと冷静になると、そこにはなんの答えも見つからないことに気がついた。

勝手にアスカをイメージして、キノの不思議な行動がたまたま自分の記憶を刺激し、もしかという期待を抱かせたに過ぎなかった。

ジョーイは無邪気に応援しているキノの姿をじっと見つめている

と、自然と笑顔になっていた。

（俺、今笑ってるな）

しっかりと自分でも自覚していた。

きっかけはなんであれ、ジョーイの中にキノが入り込み、そして初めて女の子に興味を持ったと認めた。

キノが振り返り、ジョーイと目が合った。

お互いはつとしてまた目を逸らしながらもどこか落ち着かずにならぬ。わさわする。

だけどそれがなんだかジョーイには心を突付かれたようにドキドキとしていた。

試合はそのまま進み、聡のチームは追加点を入れていつの間にか五点となっていた。だが相手チームも負けてはならず、四点となりその差一点で、まだ勝利は最後になるまで分からなくなってきた。九回の表で相手チームが二点を入れたとき、立場が逆転となり、聡のチームはどこか焦りを感じていた。

「頑張れ」

キノはしっかりと聡に届くように応援をしている。

そして九回の裏、ツアアウト三塁、聡の打順だった。

ここで点数を入れたらばかりに聡は緊張する。

「聡君、落ち着いて」

キノの言葉が届いたのか、聡はキノを見つめて、首を一度縦に振

る。

そしてまだ打っていないホームランをここで打つんだと意気込むように、バットを一度空に掲げてフォームを直す。

このシチュエーションはジョーイもさすがにハラハラした。できることなら聡に頑張つて欲しい。

だが、こういうときに失敗するケースもある。

どっちになるか考えるだけでも落ち着かずキリキリとしてくる。

こんなにも力が入るなんてと、徐々に感情が湧き起こってジョーイは知らずと隣に居たツクモを撫ぜようと手を伸ばす。

だが先にキノもツクモを撫ぜていたために、ジョーイはキノの手に触れてしまった。

ジョーイもキノも一瞬「ん？」と顔を合わせるとお互いの手が触れてることに気がつき慌ててしまう。

どうしようと思っている時にカキーンと勢いよく空にまで響くように音が鳴るとボールは高く打ち出され、それと同時に歓声が湧き起こった。

「あっ、打った」

ジョーイが声を出す。

「聡君、行け！」

キノも掛け声をかける。

二人は手に触れた恥ずかしさを誤魔化すように大声を出しながら聡を応援する。

聡は一心不乱に走り、応援も過熱していた。

聡が打ったボールは守備を遙かに超えて遠くに落ち、その間に三塁に居た選手はホームに戻り、そして聡は最後の力を振り絞って必死に走る。

ボールもホームに向けられて投げられた。

聡が早いかボールが早いか、そしてキャッチャーがボールを受け取る瞬間、聡は滑り込む。

アンパイヤーの声が力強く放たれた。

「セーフ！」

聡は見事ランニングホームランを決めてさよなら逆転となり試合に勝った。

これには思わず皆声が出る。

惜しめない拍手と交わって辺りは暫く騒がしかった。

ジョーイもつい叫ぶほど、その瞬間は感動的なものだった。

キノはそのジョーイの横顔を見た後、ツクモと顔を合わせ何か言いたげになっていた。

勝利したチームの影で負けたチームはがっくりと肩を落としたが、これまた勝負の世界。

最後は整列して両者のチームと握手を交わして爽やかにゲームセットを決めていた。

小学生同士の野球だったが、充分楽しめたとジョーイも爽やかな気分で挨拶を交わしている小さな野球選手たちを眺めていた。

「あいつ、土壇場に強い奴だな」

ヒーローインタビューがあつたら聡が間違いなくそれにふさわしい。

生意気な奴だが、自分とは違う部分を見せ付けられたようで、ジョーイは聡に脱帽だった。

「聡君、ほんとに頑張った」

キノもそう言って二人は見詰め合う。

先ほど触ってしまったお互いの手のことには触れなかったが、どちらも忘れてはいないのか少し照れたような笑みを交わしていた。

試合終了後、聡が得意げな笑みを向けてキノの側にやってきた。

キノは遠慮なく聡を抱きしめ「おめでとう」と祝福する。

聡は少し頬を赤くして照れくさそうにしていたが、素直に受け入れてるところを見ると内心は嬉しくてたまらないようだった。

「お前、すごいな。見直したぜ」

ジョーイもつい声を掛けたが、ジョーイに対しては手厳しかった。

「ふん、こんなの当たり前さ」

やっぱり生意気なガキと心で思いながら、これってシアーズに見せる自分の態度そのものだと思うと、人のこと言えないなとジョーイは改めて自分のやっていることの酷さを知った。

かといって心を入れ替えて直せるわけでもなく、そんなことを考えていると聡がどんな悪態をついても憎めなかった。

ツクモが聡にじゃれ付きだした。

「そっか、ツクモも一緒に喜んでくれてるんだね」

聡はツクモの頭をぐしゃっと撫でていた。

その時喜んでいたはずのツクモの動きがピタッと止まり、そしてじっとすると今度はキノが何かに気がついたように辺りを見回した。

「ちょっとトイレに行つて来る」

キノは校舎側に走って行ったが、ジョーイはこのとき別に気にも留めなかった。

キノが居なくなると、改めて聡はジョーイを頭の先からつま先までじろりと見渡す。

「あんた、ハーフ？」

「俺はジョーイだ」

やっぱりそう来たかと、子供だけに容姿の違いは無視できないことは予め分かっていたことだった。

キノの前では少しは大人しくしていたが、ここから聡の本性発揮といったところなのかもしれない。

ジョーイも負けずと上から目線で聡を見つめる。

背が低い分聡は少し劣等感を感じたが、気を取り直して胸を張った。

「まあ、なんでもいいけどさ、キノは俺のもんだから」

「はっ？」

「だからあんたがキノと同じハーフでちよつとその、かつこいいかもしれないけど、それでも俺だつて、早く大きくなってかつこよくなるんだから、負けないって事だよ。わかんないのかそれくらい」

「宣戦布告しているつもりだった。」

ガキの癖にませてたが、正直に気持ちを伝えるところは子供らしくて好感が持てた。

ジョーイは長年切れていた喜怒哀楽のスイッチが入ったように聡

を見て笑ってしまった。

「なんで笑うんだよ」

「いや、俺もなんで笑ってしまったのか分からないくらいだ。信じないかも知れないけど、俺、普段笑わないんだぜ」

「そんなこと知るか。でもキノを取るなよ」

はつきりと子供らしい意思表示に、ジヨイは益々微笑まずにはいられなかったが、返事は曖昧にしておいた。

「キノのことがそんなに好きなのか？」

「うん。大好き。でも今日はなんであんな眼鏡かけてるんだろう。」

普段は掛けてないのに」

「えっ？　眼鏡掛けてない？」

「うん。あんなの掛けてたらなんかダサイ。キノは運動神経も頭もいいし視力もいいはずんだけど、もちろん顔だってかわいいのに、あれじゃ折角の魅力が台無し。もしかして原因はお前か？　でも眼鏡なんか掛けてなんの意味があるんだろう」

聡の言葉にさっきまで抱いていたほんわかムードが一編に飛んでしまった。

ジヨイはもつと聞きたいとばかりにたかが小学生の聡に食い込むように質問した。

「他にもキノについてなんか知ってることあるのか」

「他に？　そういえばキノは一杯色んな言葉知ってるみたい。計算も数を数えるのも早い。集めていたカードを落としたことがあって、それらを拾っていたら、全部で55枚あるねって言ってびっくりした。ほんとにそうだったから」

「なんだって」



「キノって本当にすごいんだ。女なのにバッティングセンターで時速150kmの球を簡単に打つんだよ。あまりにも軽々と打つから、それで俺が声を掛けて教えてもらったのがきつかけで仲良くなったんだ。でもキノと一緒にいると驚くことが一杯あった」

聡が話している側でツクモが鼻をクーンとならし、体を摺り寄せ、頭を撫ぜることを催促しだした。

「なんだよツクモ甘えだして」

聡がツクモに構っている間にジョーイは言葉を失って立ち竦む。そこにキノがこっちへ戻ってくる姿が目に入った。

その姿を冷静に見つめてジョーイは考える。

床に転がしたビー玉を一瞬のうちに数える遊びをしていた光景が蘇る。

予めビー玉の数が分かっていたというより、やはりあの時アスカは一瞬で数を数えたんだろうか。

そして自分も同じように人よりも早く数が数えられる方だったと、ジョーイはこの時過去の情景をぼんやりと描いていた。

そしてどうしても引つかかる。

(やはりキノはアスカなのか?)

その答えが知りたいとばかりに、ジョーイは真剣にキノを見つめた。

「なあ、キノ……」

ジョーイが話したそうとしたとき、聡が先にキノの前に立って遮った。

「キノ、今から俺んち来いよ。おばあちゃんも喜ぶし、遊びに来いよ」

「ごめん、今日はこの後ちょっと用事があるんだ。また今度ね」

「ええ、まさかこいつとどっか行くとか言っんじゃないだろうな」

聡はキーツとジョーイを睨む。

「違うよ」

キノは何か変化が起こったようにさっきの元気が飛んでいって力なく笑っていた。

学校の門を出ると、聡は名残惜しそうにして、何度も振り返りながらキノとの別れを惜しんでいた。

キノはそれに付き合うようにずっと手を振って応えている。

角を曲がって聡の姿が見えなくなると、トートバッグを肩に掛け直してツクモのリードをしっかりと持った。

「どうしたの？ ジョーイ、さつきからじつと私を見てるけど、何か顔についてる？」

「えっ、いや、今日は色々ありがとうと思って、その、いつお礼を言えばいいのかと思っていた」

本当は眼鏡が気になって見ていたが、咄嗟に誤魔化してしまう。それでも楽しかったことには変わりないのでお礼を言いたい気持ちはもちろんあった。

「うっん、こっちこそ付き合ってくれてありがとう。お陰でとても楽しかった」

キノも素直に笑顔を見せてジョーイを見ている。

すっかり距離が縮まり、二人は親密になった、またはまだこれからそうなっていくような予感がする。

その気分に乘せられてジョーイは思い切って疑問をぶつける決心がついた。

「なあ、キノ」

「なあに？」

「なんでその眼鏡掛けてるんだ？」

「えっ、これは、その、ファッション」  
「はっ？」

「今、黒ぶちの眼鏡って流行ってるんだよ。それにこれを掛けてると少しはハーフっぽい顔が目立たないかなって思って」

「それだけの理由？」

「うん」

もつとすごい理由を期待していただけに、あっさりと返された答えにジョーイは気が抜けてしまった。

「あのさ、聡が色々な言葉話せて計算や数を数えるのが早いとか言ってたんだけど、それって本当か？」

「日本語、英語は話せるけど、色々な言葉って、グラシアス、ダンケシエーン、メルシー、シェイシェイ、グラッチェとかそういうあたりがとうって言う言葉程度なら沢山の言葉で言えるくらいかな。計算が早いって小学生の問題程度なら早くしなくっちゃなんか高校生の立つ瀬がないという感じでちょっと聡君の前では無理した」

「だけど落としたカードを一瞬のうちに数えたって言ってたぞ」

「ああ、あのことが。あれは、カードに通し番号が付いてあって、聡君全種類もってたから、最後のカードの数字を言っただけ。それが一瞬にして数えたって思ったみたいで、おかしかった」

「じゃあ、バッティングセンターで150kmの球をバンバン打ってたっていうのは？」

「どうしたの？ ジョーイ。聡君なんか私のこと言ってたの？ さつきから質問ばかり。でもそれも実はコツがあって、ちょっと訓練したら誰でも打てるようになるの。今じゃ聡君も打てるよ」

「どうするんだよ」

「本を読むの。速読するというのか、思いっきり目を走らせて字を追っていくの。いつの間にか目にスピードが付いて、早いボールがはつきりと見えてくるんだ。後はそれを打つだけ。ジョーイもやっ

てみて。本当にできるから」

ジョーイはやはり子供のいうことはこの程度のことだったのかと、また自分の中でアスカという存在に踊らされたと脱力してどっと疲れってしまった。

どうしてもキノと居るとちょっとしたことが不思議に結びついてしまう。

こんなにも心揺れて、ジョーイも訳が分からなくなってきた。そしてキノもいつもと雰囲気が違う。

困惑した瞳を向けながらジョーイは独り言を呟くようにアスカじゃないのかと無意識に本人に確認していた。

「なんだか、今日のキノはハキハキとしているというのか、おどおどしていたときと全く別人のように思えるよ……もしかして君は……」

キノは突然くすつと笑い出す。

「だって、私、人見知りか激しくて、ジョーイってファンクラブがあるくらい人気者でしょ。最初は緊張しちゃった。でもジョーイも怖い人だと思ってたけど、全然そうじゃなかった」

「お、俺もか。そっか。そうだな。俺もなんだか今日は久し振りにはしゃいだ気分だった」

自分もそうだと指摘されると、身も蓋もなかった。

ジョーイは慣れぬ自分の感情をどう処理すればいいのかわからず、調子狂ってしまう。

キノの前で誤魔化した笑いを添えてもじもじしている。普段の自分じゃないのは百も承知だった。

このまま一緒にキノと居れば自分で抱いていた自分自身のイメージが変わっていくようにまで思えてくる。

堅物のカチコチに固まった心がほぐされて柔らかくなっていく感じだった。

キノと肩を並べて歩きながら、ジョーイは時々キノの横顔を見つめていた。

キノも視線を感じ時々ジョーイを見つめると自然に笑顔を見せている。

なんだかいい雰囲気だと、ジョーイは意識し始めてきた。

これも自分らしからぬ感情だった。

「ジョーイ、それじゃ私はここで失礼するね」

キノの言葉はここでやっと繋がりがけてきた二人の関係を切り離すように聞こえた。

用事があると言っていたことを思い出し、さっきの聡ではないがジョーイもまた名残惜しく思ってしまう。

「キノ、弁当ありがとうな。旨かった。そしたらまた学校でな」

「うん」

キノはツクモのリードを引っ張り、駅とは反対方向の方角へ向かおうとした。

まだもつと何かを話したかったジョーイはもどかしさを堪えてキノを見送る。

キノも同じような気持ちだったのか、もう一度振り返った。

「ジョーイ、今日はとっても楽しかった。本当にありがとう」

「ああ」

ジョーイは夕方の優しい光にあてられたキノの姿を見つめて軽く手を挙げて答えていた。

ツクモも尻尾を振って挨拶をしているようだった。

その場でずっと突っ立っているわけにも行かず、潔くジョーイも踵を返して別の方向へと足を向ける。

ジョーイが去っていく後姿を少し歩いた先からキノは振り返ってじっと見ていた。

「ツクモ、今日くらい許されるよね」

独り言のようにキノは呟く。

ツクモは「クーン」と鼻を鳴らしたが、それがキノには慰められているように聞こえた。

キノが向かったその先の道路際に白いセダンの車が停まっていた。ノアが運転席に前を見据えて無表情で座っていたが、もう一人男性が同じような表情で助手席に座っているのが見えた。

その二人の存在を確認するとキノの表情は固くそして心はどっしりと沈んでいく。

キノは嫌々ながらもその車の後部座席のドアを開け、そこにツクモを先に乗せ、後から自分も暗い表情で乗り込む。助手席に座っている男と面と向かうのが苦しかった。

ドアを閉めると、ノアがエンジンを掛けそして車は動き出した。

「（そんな顔をしているところを見ると、悪いことをしたと分かっているようだね。しかし子供野球の試合鑑賞は楽しんだみたいだね。それとも隣に居た彼とのおしゃべりを楽しんだのかな）」

助手席に座っていた男がバックミラーに映るキノを見ながら英語で静かに語った。

キノは黙って窓の景色を見つめていた。その男には逆らえないはずなのに、黙り込むことで不満をぶちまけている様子だった。

助手席に座っていた男はため息を吐く。そこには呆れた気持ちも入っていたが、同情する気持ちも込められているのか、話しかけるのを少し躊躇う。

「（キノ、よく聞きなさい。勝手な行動は慎みなさい。もうこれ以



上ジョーイに接近してはいけない。ジョーイの記憶を刺激してなんになるというんだ。ジョーイは確実に過去のことを思い出している。そして当然アスカのことも。アスカはもう死んだんだ。それは君も分かっていることだろ」

「（でも、シアーズ先生……）」

キノはバックミラーに映るシアーズの目を懇願する思いで見つめた。

ノアが運転する横で、シアーズは冷静に話を進める。

学校では教師だが、この二人の前では組織のボスのように振る舞っていた。

「（キノ、ジョーイは今日のカウンセリングで変化が見られたそう。真須美が報告してきたよ。そしてノア、どうして勝手な行動の手助けをするんだ。リルとかいう生徒を巻き込んだそうだな）」

「（あれは、FBIのギークがキノを罠に掛けようとしたから、キノを守るにはああするしか……）」

ノアが答えにくそうにしてるとキノが庇った。

「（あれも私の責任です。ノアが考えたことではありません）」

「（あの日、キノがジョーイから夜桜祭りに誘われてそれを阻止するために私に報告したまではよかった。ジョーイを無理に居残らせてキノとの接触を避けた。あのまま放って置けばそれで済んだことだった）」

「（でもジョーイに危険が迫っていたのを無視することなどできませんでした）」

「（だからといって、関係ないものを巻き込んでどうする。それが却ってキノが手を回したことになる」とギークが気づかないとも思っているのか？ これ以上こじれる前に、キノ、アメリカへ帰りなさい）」

「（シアーズ先生、もう少し、もう少しだけ普通の高校生でいさせて下さい）」

キノは恥を忍んですがった。

必死に頼み込むキノの声を肩越しに聞きながらノアは黙って運転をする。

助けてやれないもどかしさでハンドルを持つ手に力が入っていた。

シアーズはノアにも影響が出ていると気がつく。

この先に抱く不安はシアーズも未知のものであり、しっかりと管理する立場ながらどうしていいものかと困惑しだす。

自分に置かれてる立場とそれに係わる者達の心情を考えると心苦しくなってきた。

つい苛立ってしまったって声を荒げてしまう。

「（これでもキノの願いは受け入れたつもりだ。できることならそうしてやりたいが、事態はそうは行かなくなった。キノはどういう立場なのか自分で分かっているはずだ。このままでは真実はいつか暴かれジョーイが傷ついてしまうんだぞ。そしてジョーイの父親も危険に晒される。それでもいいのか）」

「（もちろんそれは一番避けたいことです。だけどその前に私はもう少しだけジョーイの側に居たいんです。今離ればもう二度とジョーイに会えません。決して危険なこととはしないと約束します。だから……）」

しつこくすがってくるキノ。

シアーズは返事に困って代わりに息を吐いた。

それほどこの時のキノには何を言っても一歩も引かない意気込み

を感じていた。

それに押されて、その気持ちを汲み取ってやりたいとつい協力したい気持ち芽生えてしまう。

自分が係わってきたことに対しての罪滅ぼしもあったのかもしれない。

しかしそれがもつと危険な道へと進んでしまつとわかっているだけにはつきりとは言えなかった。

シアーズにとつてもかなり曖昧な答え方でこの場を凌ぐための言葉だと自分自身充分承知していたが、そんな言葉を選んでしまった。

「（キノ、いつでも去れる準備をしておくんだ。その覚悟で一日一日を大切に過ごすことだ。私が次に帰れと命令した時は逆らえないことを覚えておきなさい）」

「（それじゃ、あと少しここに居てもいいんですか）」

「（キノが思っているあと少しとはどれくらいの期間を意味しているのかは私には分からないが、それはキノ次第ということだ）」

「（はい）」

滞在期間が延びたとはいえ、キノは素直に喜べなかった。キノは自分が何をすべきかもう答えを出していた。

そしてそれが折角許可してもらえた滞在期間を更に短くすることになると思いつつ、それでもすでに覚悟を決めていた。

ジョーイは玄関の前で少し戸惑っている。

前夜は仲直りできずに、トニーはそのまま寝てしまい、朝も結局は顔を合わさずに家を出てきた。

このときトニーと顔を合わせたらどんな顔をしていいのか、何を話していいのかわからない。

ぎこちない態度を取るのも嫌で、家に入るのを躊躇している。

一番良い対策は何かと考えたら、自分が謝ることが最良の策だった。

そんな策を思いつくのも、ジョーイの機嫌がよかったからかもしれない。

普段のジョーイならとことん意地を張り続け、仏頂面まっしぐらだっただろう。

これもキノと過ごした影響だった。

ジョーイは覚悟を決めて、鍵を開けるとドアノブに手をかけドアを力強く開けた。

「ただいま」

二階にも届く声で言ってみたが、その後反応はなく家の中は静まり返っている。

足元を見ればトニーのいつも履いているスニーカーもない。

「なんだ、あいつ出かけているのか」

折角謝る覚悟を決めて力んだ事が無駄に終わってしまった。しかし、次はトニーが帰ってきたときが勝負だった。

「夕食でも作って待ってみるか」

ジョーイは台所に入り、冷蔵庫を開けて何が作れるか食材を覗き込んだ。

「毎日の食事作りも大変だ。母さんも仕事しながら良くやってくれてるもんだ」

ぶつぶつ独り言を良いながら、夕飯の支度に取り掛かった。

冷蔵庫にあるものも底を付いてきて、大したものを作れなかったが、形なりに本日の夕飯が出来上がる。

時計を見れば6時を過ぎていた。

「トニーの奴、どこへ行ったんだ」

早くすすきりとしたくて、仲直りすることが気がかりでたまらなかった。

しかし待てども待てどもトニーは帰ってこない。

時刻は八時を過ぎ、ジョーイの作った夕食もすっかり冷めていた。

突然電話が鳴り、ジョーイはトニーからだと思って受話器を取った。

だが聞こえてきた声にジョーイは顔を歪ませた。

「(ジョーイ、元気か)」

「(ギー、何の用だ)」

「(あのさ、俺の存在とか大豆のこととかもう忘れたのか?)」

「(今はそれどころじゃない)」

「(おい、そうあっさりと返すなよ。まあ所詮お前には難しすぎた問題なのか?)」

「(色んな事が身の回りで起こり過ぎて、一度に考えられなくなっただけだ。難しいという前にまだ何も考えてなかっただけだ)」

「(まあ、そうムキにならなくてもいい。それじゃもう一つヒントをやるう。その色んな事だが、全てを辿れば一つになるということだ)」

「(だから一体お前は俺にそんなヒントを与えて何がしたいんだ)」

「(俺は真実を知りたいだけだ。お前の父親が何をやっていただけのことだ)」

「(俺の父親? どういうことだ)」

「(後は自分で考えな)」

そこで電話が切れた。

どこまでもしつこく付きまとい、曖昧な言葉を残してはもつたいぶるギーが鬱陶しいとばかりに、受話器に向かって悪態をついていた。

しかしそれも無駄なあがきだった。

「今度は父親のことかよ」

だが、ジョーイはどこか父親のことを考えないように生きてきたために、何をやってたかと聞かれて何も知らなかった。

母親のサクラが離婚をした後、子供心ながら父親のことは言うてはいけないと思い込んでいた。

そしてあの爆発が起こってからは一層ジョーイは心を閉ざし、辛い思い出から逃れるように極力考えないようにしてきた。

やがて記憶は曖昧になり、断片的にしか思い出せなくなった。

その記憶もどこまで正確なのか、それすらはつきりしない。

「ギーの奴、自分の知っている全てのことを俺に話せばいいだけじゃないか。大豆やら父親やら、一体何があるというんだ。俺の父親は豆腐でも作ってたのかよ」

なんだか苛ついてきてしまった。

そんなときにトニーが帰ってきた。

ドアが開いた音を察するとジョーイは玄関に走り寄った。

「トニー、こんな時間までどこに行ってたんだ？」

トニーはジョーイに目もくれないで、下を向きながら靴を脱いでいる。

かなりもたついてどこかふらつき加減で靴紐を解いていた。

やっと家上がりこんだとき、よたついてジョーイは咄嗟に支えるが、トニーから酒臭さが漂いつい顔をしかめてしまった。

「トニー、酒飲んできたのか」

「ああ、ちよっと同郷の奴と知り合って仲良くなってな、ノリで飲んできたよ」

「おい、未成年だろうが。一体何が起こったんだよ」

「なんだか飲まなくっちゃやってられなくなっただよ。家にいたらお前のお守りばかりさせられるからな」

「俺のお守りってなんだよ、それ。俺いつからお前にベビーシッターしてもらってたんだよ」

「この家に来たときからだろうが」

「トニー、いい加減にしろ。お前、かなり酔ってるな」

「ああ、酔ってて何が悪い。ジョーイはいいよな。皆から守られて大事にされて。俺なんて親も居ない孤児だぜ。子供の頃はディスレクシアで文字も碌に読めなくてずっとバカ扱いだっただよ」



「俺が守られて大事にされている？ 何言ってるんだ。それにトニーの過去のことは知らないが、今じゃ日本語ペラペラじゃないか。学校では人気者で友達も多いじゃないか」

「でも俺はジョーイのベビーシッターさ。腫れ物触るようにつき合ってる、自分の意見も押し殺しどこに行くこともできない俺の身にもなってくれ」

主張するように訴えるが呂律が回っていない。

「トニー、まだあの時のことを根に持ってるのか。もう気にしてないから。それに俺も悪かった。謝るから、機嫌直してくれよ。ごめん」

廊下でフラフラになっているトニーを支えながら、ジョーイは頭を下げた。

トニーはきよとんとしていたが、ジョーイが素直に謝ってる姿を見て徐々に気持ちが高ぶってきた。

「ジョーイ、一体どうしたんだ。お前が謝るなんて」

ジョーイは驚くトニーの顔を見て笑うと、トニーは一層びっくりして、目を丸くしていた。

「ジョーイ、お前笑ってるぞ」

「ああ、笑っちゃいけないか」

「オー、ジョーイ」

トニーは酔った勢いもあり、ジョーイを力強く抱きしめていた。

「おいつ、それはやめてくれ」

トニーはシャワーを浴び、酔いを醒ます。

タオルで頭を拭きながらダイニングに顔を出し、テーブルの上に乗っていた食べ物を一つつまんで口に入れた。

「やっぱりジョーイはいい奥さんになれるな」

「はいはい、なんでも好きに言ってくれ」

ジョーイも怒る気になるどころか、またいつものトニーに戻ってくれたことの方が嬉しかった。

トニーと本格的な喧嘩をしたのはこれが初めてだったが、喧嘩してみてもトニーの大切さに気がつく。

どれだけ自分は無駄な時間を過ごしてきたのか、思い知らされたような気分だった。

トニーがテーブルにつくと、ジョーイも向かい合ってテーブルについた。

すっかり冷たくなった遅い夕食だったが、仲直りで気が晴れた後では充分美味しいと感じられた。

「だけどき、一体何があったんだ。いきなりジョーイが変わったみたいだ」

トニーの質問に、ジョーイは真剣に向き合った。

「実はさ、今日キノとデートした」

「えー、キ、キノとデート？ 女に全く興味のないお前が？ 嘘だろ」

ジョーイは今日起こったことを一部始終話し、その間何度もトニーは驚いて声を上げていた。

「トニー、鳥じゃないんだから、奇声上げるのやめろよ」

「だって、弁当作ってもらって一緒に食べたとか、目が合ってドキドキしたとか、一緒にガキの野球の応援したとか、ジョーイらしくらぬ話にびっくりしてんだよ。しかもそれを隠さず俺に言うなんてそれも信じられない」

「まあな、この俺ですら驚いてるくらいだ。自分でもなぜそうなったのか分からないんだ」

「なあ、ジョーイ、俺思うに、ジョーイはキノを好きになったんじゃないのか。恋をすれば人は変わっちゃうからな」

「俺がキノを好き……」

「別に恥ずかしがることなんてないぜ。男ならそういうのは当たり前前の感情だ。俺なんかしょっちゅう女に惚れてるぜ。ジョーイの場合、やっと目覚めたってところかな」

ジョーイは少し黙って何かを考えて、そして決心がついたのか勢いつけて口を開いた。

「トニー、俺、過去にアスカっていう女の子に会った事があったんだ。実はその子がキノなんじゃないかってずっと思ってた」

ジョーイは出口を見つけたかのように助けを求めるような瞳をトニーにぶつけていた。

トニーは訳ありだと察すると、持っていた箸を静かに置き、真面目に語りだしたジョーイの話に耳を傾けた。

ジョーイは過去の自分の記憶をトニーに語りだした。

家の爆発のこと、父親が行方不明なこと、そしてアスカが目の前から消えてしまったこと、なぜ自分の感情が欠如してしまったのか、子供の頃に受けたトラウマを説明していた。

トニーも真剣にジョーイと向き合い、ジョーイの気持ちを汲み取るように頷きながら聞いている。

ジョーイが心を開いて話をしてきたことに、頼られている嬉しさも感じているようだった。

「そうか、そういうことがあったのか。そんなことも知らずに俺は時々ジョーイに対して無神経なことを口走ってたのかもしれないな。すまなかった」

「トニーは何も悪いことなんてしてないよ。寧ろいつも俺を励まして、俺のために努力してくれていたよ。謝らなければならぬのは俺の方だ。それにずっと甘えてたんだからな」

「なーに、それはお互い様って言うことでいいじゃないか。これでようやく俺はジョーイと分かり合えたような気分だよ。アスカがキノかどうかは分からないけど、でもキノは確実にジョーイに変化をもたせたいだな。もう勢いで付き合っちゃえよ」

「えっ、お、俺が付き合うっ?」

「ああ、俺が言えた義理じゃないけど、キノと付き合えば過去のトラウマが改善されるような気がする」

「そんな治療みたいに言われても」

「何言ってるんだ、俺は恋をしるって言ってるんだよ。完璧なお前に唯一つ足りないのが女だったからな」

「恋……」

「女のことはトニーに任せろというくらい、その晩、遅くまでトニーのレクチャーが行われた。」

「お陰で次の日二人は寝不足だった。」

ジョーイとトニーはシンクロナイズで大きな欠伸をしながら通勤、通学の人ごみの中、駅のホームで電車を待っていた。

欠伸で出た涙が目を潤って視界がぼやける。

すっかりだらけきっていたとき後ろで「おはよう」と声を掛けるものが現れた。

二人が同時に振り向くと、そこにはキノが立っていた。

「キ、キノ！」

ジョーイは驚き声が裏返る。トニーもまさかすぐにキノが登場してくると思わず、面食らっていた。

「おい、ジョーイ、昨晚言ったこと忘れるなよ」

トニーが肘を突き出しながらジョーイを突付いていた。

「忘れるも何も、まだ心の準備が」

ジョーイはトニーのアドバイスを思い出す余裕もなく、とにかくキノに挨拶をする。

電車が入ってくると、周りにもまれるように辺りはひしめき合った。

混み合った車両に三人は一緒に乗るが、トニーは邪魔をしてはいけないと見てみぬフリをしていた。

ジョーイとキノは時々お互いの目が合うが、愛想笑いするだけでなかなか話が弾まない。

だが、キノはそれでも恥ずかしがることなくジョーイの目を積極的に見つめていた。

それはどこか焦りも混じっているようで、何か言いたいけど言えないもどかしさを抱えているようだった。

ジョーイはそんなキノの様子に構うことすらできず、自分の事で精一杯で全く余裕がなかった。

二人は弾む話もできず、それでいてどちらも逃げようとせず一緒に居ることを望んでいた。

無理に踏ん張って、どちらもじれじれするこの雰囲気を開いたいと意地になっている。

その様子に二人は相思相愛だとトニーは感じていた。

学校の最寄の駅に着いたとき、トニーは一人さつさと歩きだし、その後ろでジョーイとキノは肩を並べていた。

初々しいカップルというのか、じれったいというのか、トニーは時々振り向いて一人ヤキモキしていた。

「ジョーイ、俺、先に行く。また教室でな」

これ以上見てられないと、トニーは先を急いだ。

「トニーの後を追いかけてもいいの？」

キノが聞くと、ジョーイはここぞとばかりにかっこつけたことを言ってみた。

「俺はキノともう少し一緒に居たい」

「えっ」

キノは驚きつつも、恥ずかしそうに笑っていた。

これは良い雰囲気の流れているとジョーイも手ごたえを感じていた。

二人は気がつかなかったが、周りに居た女生徒たちはこそこそ何かを話しながら二人を見ていた。

ジョーイは学校では知られた存在であり、女生徒の憧れの対象となっている。

女性に興味のないいつもクールな表情のジョーイが、どこかぎこちなく照れて歩いている姿は、その日のニュースになりそうなくらい注目を浴びていた。

憧れていた女生徒達が穏やかに居られるはずがなかった。

しかし、彼女達はどうすることもできず、ジョーイの隣に居るキノに羨望の眼差しを向けていた。

でも一人だけ、果敢に立ち向かうように堂々と入り込む輩がいた。

「おはよう」

ジョーイとキノの間に割り込むようにリルが入って来た。

リルはキノを睨み、その後でジョーイを見つめた。

「リル、おはよ」



ジョーイは突然の邪魔にもやつとしたが、平常心で挨拶を返した。

「ジョーイ、どうしてキノと一緒に歩いているの？」

「どうしてって、偶然電車で一緒になったからさ。別に俺が誰と一緒に歩こうがいいじゃないか」

「いい事ない！」

「お、おい、リル」

叫んだ声の大きさにも驚いたが、思いつきり否定の言葉が返ってきてジョーイはひるんでいた。

「ジョーイを取られたくない」

リルはきつい目をキノに向けた。あからさまに嫉妬心をむき出しにするリルに、ジョーイは言葉を失ってしまう。

しかし、キノはリルの感情にあたかも楽しむように笑って答えていた。

「リル、ジョーイが好きなのね。はっきりと自分の感情を表せるあなた羨ましい」

キノは落ち着いていたが、何かをふっきりたいかのようにいきなり眼鏡を外し、そしてリルを見つめた。

「それじゃ私も言っちゃおうかな。ジョーイが大好きって」

キノが言った言葉はリルだけじゃなくジョーイをも驚かせた。

そしてキノもリルも引けを取らずに見詰め合っていた。

二人は火花を散らせあう。

「お、おい。ちょっとなんだこの状況は。俺をからかって遊んでいるのか!？」

とんでもない展開になったとジョーイは慌てていた。

リルは刺激されてまた大胆な行動に走り、ジョーイの腕を取りしがみ付いた。

キノはそれを面白がり、ジョーイの反対側に回り込んで同じように腕を取って抱きしめた。

ジョーイは二人の女の子に両腕を取られながら学校の門をくぐることになってしまった。

「おい、二人とも一体どうしたんだ」

リルが仏頂面で競り合うのに対し、キノはあたかも楽しいとばかりにはしゃいでいた。

だが目の前にシアーズが現れると、キノはジョーイの腕を解き放した。

「グッモーニン、エブリワン」

シアーズが静かに挨拶をし、冷めた目つきでちらりとキノを見つめてからジョーイに視線を向ける。

「(ジョーイ、珍しく青春か?)」

普段ならきつと「放っておいてくれ」と憎まれ口を叩いただろう

が、ジョーイは「まあな」と曖昧に返事をしていた。

シアーズもこれには驚いたのか、眉を少しピクリとあげた。

「（そっか、まあほどほどにな）」

そついで残して他の生徒に目を向け挨拶をしていた。

キノはシアーズを気にしながら葛藤していたが、それを振り払いジョーイに微笑んだ。

「ジョーイ、それじゃまた後でね」

先にキノは走って去っていった。

リルは不機嫌にキノを気に入らないと見つめていた。

「おいリル、いい加減に手を離せ」

リルはジョーイに言われ俯き加減で手を離す。

「ねえ、ジョーイ、どこにもいかないで」

「俺、一体どこに行くんだよ。リル、言っておくが、俺はお前の知っているお兄ちゃんじゃないし、その代わりもできない」

ジョーイは自分で言った言葉に突然はっとした。

（俺もキノに何を求めているんだ。俺も結局はキノをアスカという存在を通して見ているに過ぎないんじゃないのか）

この気持ちをキノにぶつけていいものなのか突然心に迷いが生じ

てしまう。

暫く回りのことが見えないままに立っていた。

「ジョーイ、ジョーイ！」

袖を引つ張られリルの声で我に戻る。何かを振り払おうと首を振り、放つて欲しいとばかりに声を発した。

「リル、それじゃまたな」

逃げるように走り去った。

リルは寂しくポツンと暫く立っていたが、チャイムの音が鳴り始めて教室へと足を向けた。

「なあ、トニー、過去の記憶と今を結びつけて代わりを求めているものなのだろうか」

優しい水色の空に、割り箸に巻きつける前の出来立ての綿菓子のような白い雲が流れていくのを見つめながら、休み時間、教室の窓に寄りかかりジョーイが呟く。

「ん？ なんでもありでいいんじゃないか」

トニーは窓際の机の上に腰掛けて、携帯を弄りながら、上の空半分で答えを返していた。

「おい、人が悩んでいるのに、もっと真面目に答えろよ」

「だから、恋に理由なんて求めるなつてことだよ。お前は真面目だし、慣れてないから物事を自然に受け入れる姿勢ができてないんだよ。時には臨機応変に心そのままに行動してみたらどうだ」

「いいよな、いい加減な奴はいとも簡単に受け入れられてお気軽で」

「あんな、俺もそれなりに悩みはあるんだぞ」

「例えばどんなだよ」

「俺だって今恋をして悩んでるんだ」

「そののどこがだよ。ヘラヘラして色んな女の子に声を掛けまくってる奴が」

「これは真剣な恋なんだ。でも俺なんて年下だし、身分も違うから苦しいんだよ」

「おい、まさかそれって教師の眞子ちゃんって言うんじゃないだらうな」

「おっ、さすがだね。正解」

「それは無謀だろうが。諦めろよ」

「俺はお前の恋を応援してやってるのに、俺には諦めろだと。やっぱりジョーイは冷たいな」

「冷たいとかじゃなくて、年も違うし、第一相手は教師だぜ。そんなのを恋の対象にするのか？」

「だから魅力的なんじゃないか。禁断の恋。燃えるぜ」

話にならないとジョーイはそれ以上何も言わなかった。

空を見つめつつ、ため息をこっそり漏らす。

「なあジョーイ、今日英会話ボランティアと一緒に行かないか。キノも来るかもしれないぜ」

ジョーイのため息を聞いてトニーはさらりと誘う。

「そうだな」

ジョーイは風に吹かれて流れるままの雲を見ながら、そこに身を置いてもいいかもしれないとトニーの助言を受け入れた。

キノに会ってそれから自分がどうしたいか考えてみよう。その時自分の心ももっと変化するかもしれない。

風に吹かれて少しずつ形を変えていく雲を見つめていると、何か答えが見つかりそうな気になっていた。

その放課後、ジョーイはトニーに引つ張られて英会話ボランティアの教室へと連れて行かれた。

中に入れば十数名の男女が一斉に振り向き、女生徒たちは明るい声で「ハロー、トニー。」と迎える。

男子生徒も手を掲げ、ハイファイブと称してトニーの手のひらに軽くタツチしていた。

トニーはここでもすっかり人気者として祭られている様子に、ジョーイは感心していた。

女生徒たちがチラチラとジョーイを見てそわそわしだすと、それに気がついたトニーはジョーイを突き出して紹介した。

「俺の友達連れてきた。ジョーイだ」

ジョーイはとりあえず手を挙げて小さい声で「ハイ」 と挨拶すると、待つてましたと女生徒たちが群がってきた。

「おい、俺よりもジョーイの方がいいのかよ」

トニーは気に入らないとわざとらしい態度を取ったが、それもトニーのいつものふざけた行動の一つだった。

男子生徒は笑いながらトニーの肩を叩いたりして、ノリよくこの状況を英語で茶化していた。

その様子は、いつもトニーが気を遣って皆を喜ばしているのが用意に想像できた。

そこにキノが入ってくると、また皆は「ハイイ」と元気よく迎える。

キノもそれに笑顔で答えていたが、ジョーイが来ているのをみると、一層笑みをこぼす。

ジョーイも口元を少し上げてそれに答えていた。

キノはすぐに教室に入らず、ドア付近で廊下に居る誰かに語りかけている。

「リル、ほら、早く入って」

キノが引つ張るようにして教室にリルを入れた。

それに一番驚いたのはジョーイだった。

朝はライバル心むき出しに自分の両手を引つ張り合っていたというのに、キノはリルをここへ連れて来ている。

一体どうなっているんだと、ジョーイは目を見開いていた。

「おっ、新しい女の子か」

トニーは持ち前の明るさで声を掛ける。だが普段から仏頂面のリルは緊張して余計に顔が強張り、その印象はあまりいいものとは言えなかった。

「この子はリル。無理やり私が連れてきたの。一日英会話体験っていうことでいいかな」

クラスに居たものは別に意義はないと軽く頷いていた。

リルは居心地悪く俯き気味だったが、ジョーイが居たのでなんと



か踏ん張っている様子だった。

「それじゃ、今日のクラブ活動を始めます」

そのクラブの部長を勤めている三年生の男子生徒が声を上げる。

トニー、ジョーイ、キノを前に立たせて、それぞれのグループを作った。

一グループ四、五人くらい集まり、プリントに沿って会話を始めていく。

ジョーイはとにかくプリントに書かれてある会話を読んでは発音を正したり、英語で質問したりとトニーを見よう見真似でぎこちなくやっていた。

リルはキノのグループの中で大人しく座っているだけだったが、気持ちは落ち着かないのか手持ち無沙汰で花柄のハンカチを手に持って握り締めていた。時折ジョーイをチラチラ見ている。

途中から白鷺眞子が教室に入ってきた。

「皆、頑張ってるわね。あら、新しい人が増える。えーとあなたはトニーのお友達のジョーイね。こっちの女の子は……」

「リルです。私が連れて来ました」

キノが答えた。

眞子はそっけなく「あら、そう」とだけ言い、リルに向かっては愛想笑い程度の笑顔を添えた。

リルはじつと眞子の顔を見ていた。

眞子は補助としてそれぞれのグループの様子を見回るだけで、後は生徒任せだった。

トニーにはちょっかいを出して少し鼻屑目な感じがするとジョーイは思ったが、周りの生徒はいつものことのようにあまり気にしていない様子だった。

ジョーイには初めて来てくれたことに感謝しつつ当たり障りもなかったが、どうもキノには何かが違うような雰囲気が出てた。

存在を無視しているというのか、話を全くしない。只の偶然なのかもしれないが、ジョーイは眞子の接し方には温度差があると感じていた。

しかし、何よりキノとリルと一緒に行動をしている事が信じられない。キノは一体何を考えているのかジョーイには不可解だった。

時計が五時を過ぎた頃クラブが終わり、皆帰宅準備に取り掛かる。

ジョーイともう少し話したいと女生徒達は未練がある様子を残りつつ、何かを話しかけようとするが、結局は積極的になれないままに「また来て下さい」と言うのが精一杯だった。

ジョーイも適当に返事をしていた。

眞子だけが教室に残り、後はそれぞれ帰っていく。

ジョーイ、トニー、キノそしてリルとこの四人は固まって廊下を歩いていた。

リルはふとブレザーのポケットに手を入れはっとしたように叫ぶ。

「あつ、私ハンカチ教室に落としてきたかも。探してくる」

リルが教室目指して走って戻っていった。

その間チャンスだと思い、ジョーイはキノに質問した。

「なんでリルを連れて来たんだ」

「放課後、廊下で偶然会って睨まれたから。あのままじゃ後味悪くて、それなら私から友達になればいいかなって思ってた」

「だけど、朝、二人で俺のこと腕引つ張りあいながら取り合いしてなかったか」

ジョーイは言い難そうに聞いた。

「ああ、あれね。なんかああしたら楽しいかなって思って、ちょっと調子に乗ってしまったの。ごめんね」

ジョーイは呆れて言葉も返せなかったがトニーが首を突っ込んできた。

「一体何を話しているんだ。キノとリルがジョーイを取り合いした？ あのリルって子はジョーイが好きなのか。だけどあの子、どこか普通の女の子の雰囲気と違うよな」

「まあな、ちよつと変わってるって言えば変わってるかな。人のこと言えた義理ではないけどな」

ジョーイも同じ部類だと言わんばかりに痛々しい顔つきになっていた。

リルはそつと教室のドアを少し開き、中を覗きこむ。

眞子が窓際で外を見ながら携帯電話を持って何か話しているのが見えた。

会話は英語だったので、リルはその時ふと聞き取り体制になっていた。

リルは英語を話す能力は劣っていたが、かつて英語圏で住んでいただけに、英語を聞くことに関しては慣れている方だった。

所々の単語の意味が分からなくても、音は拾えた。

断片的にだが眞子が話している会話から知ってる単語が出てくる。

だが話の筋までは全く分からなかった。

その時拾った音は頭に残りながら、そしてドアをスライドさせる

と、眞子が振り向き慌てて会話を終わらせて電話を切った。

「あら、何か御用？」

無愛想なリルの表情に眞子も同じように冷たく聞く。電話の内容を聞かれていたのかと警戒しているようだった。

「ハンカチを落としたかもしれないので……」

リルは辺りを見回し、床の上に落ちていた自分のハンカチを見つけてやっぱりここで落としたと言いたげな顔をして取りに行った。

用が済んだので、すぐに帰ろうとすると、眞子が話しかけてきた。

「あなたキノとは親しいの？」

「えっ？」

「だって、キノが連れて来たお友達でしょ」

「いえ、友達とまでは…… どちらかって言うとライバルかも」

「ライバル？」

「いえ、なんでもありません」

リルはその場を去ろうとドアに向かった。

「待って」

眞子はリルを引き止めた。

「あいつ何してんだ、遅いじゃないか」

ジョーイが腕時計を見ながら言った。

そしてやっと手にハンカチを握り締めリルが戻って来た。口を一

文字にして、そしてキノをじつと見詰める。

「キノ、ちょっと話がある」

リルが無愛想に言つと、ジョーイはまた何かあるのかと気が重くなつた。

リルは独占欲を持ち、過去の記憶の人物をジョーイと重ねている部分があるだけにまた変な風に事が起こるのではと危惧していた。

「どうしたの、リル？ 私が無理やりクラブに連れて来たこと怒つてるの？」

「おいおい、とにかく早く帰ろうぜ」

この状態を何とかしようとジョーイが口を挟む。

「ジョーイ達は先に帰っていて」

放つてほしいとばかりにリルが言った。

「リル、一体どうしたんだ」

ジョーイは少し訝しげの顔になってリルを見つめた。

その時、廊下の奥から眞子が歩いてきた。

「あら、あなた達、まだ帰ってなかったの？ 早く帰りなさい」

モンローウオークじゃないが、タイトスカートで強調された腰を振りながら四人を通り過ぎて歩いていった。

その後ろ姿にトニーは口笛を吹いて、尻尾を振るように付いて行

き、眞子に絡む。

「トニーの奴、またあの調子かよ。まさかまた俺の家に連れてきて飯を作らせようとするんじゃないだろうな」

「ジョーイ、私達に気にせず先に帰ってて」

トニーの行動が気になってしまい、キノに言われて、そうするしかなかった。

「それじゃ先に帰るけど、なんか喧嘩すんなよ」

ジョーイは慌ててトニーを追いかけた。

ジョーイ達が行ってしまつとキノとリルはお互いを黙って暫く見詰め合った。

トニーは眞子に馴れ馴れしく語りかけ、ここが学校であることも生徒という立場も完全に忘れて一人の女性として眞子を口説いていた。

ジョーイは辟易しながら後を歩く。

そこにシアーズが通りかかり、眞子は挨拶をする。

ジョーイは天敵にあったようで無視を決めこむが、シアーズは目を細めてジョーイに一瞬視線を向けるとすぐに逸らし、そしてトニーに話しかけた。

「(トニー、少しいいか)」

シアーズが歩きだすとトニーは大人しくその後を着いていく。二人してどこかへと消えていった。

「あいつ何やったんだ。シアーズにあんな風に呼び出されるなんて珍しいな。まさか酒飲んだこと……」

そこまで言うと眞子の手前上、ジョーイはハツとして口をつぐんだ。

「ジョーイはトニーのことなら何でも知っているの？」

眞子は聞かなかつたフリをして笑みを軽く添えるように聞いてきた。

「大体のことなら分かってるつもりだけど、先生には関係ないだろ」



「なんだか私は嫌われてるって感じね。トニーから聞いたけど、生意気っていう意味が分かったわ」

「トニーの奴、俺の悪口でも言ってたみたいだな」

「悪口ではなかったけど、愚痴はこぼしてたわよ」

「それなら、昨日解決したよ。ちよつとアイツとやり合ってたきつちり謝ったよ」

「あら、そつなの」

「でも、トニーは先生には気を許して何でも話してそつだな。アイツ先生には本気みたいだから」

「まあ、光栄だわ」

「まさか、先生も本気ってことないよな」

「さあ、どうかしら。フフフ。それは冗談だけど、でもトニーはまだまだ子供ね。少し優しくしたただけで何でも話してしまうわ。揺れ動く年頃ってところかしら。まだまだ思春期で不安定なのね」

「先生がトニーを弄んでるんじゃないか」

「私が弄んでる？ あら、そんな風に思われるなんて私も気をつけなくっちゃね。私はこれでも生徒のことを考えて行動してるだけだわ」

「それにしても、キノにはなんか冷たい印象がしたのは気のせいなのか？」

「ここぞとばかりにジョーイはクラブ活動中に抱いた違和感を単刀直入にぶつけた。」

「あら、どういうこと？」

眞子の顔つきが少し変わり、ジョーイを見つめる目が厳しくなっ

た。

癒し系でおっとりしていた眞子だったから、そこを軽く見て強気に発言したことを後悔させるくらい別人に見えた。

どこか抜け目なく、物事を鋭く見るような目つき。

本能であり係わりたくないと思うくらいその時の眞子は威圧的だった。

「いえ、別になんでもありません」

別に理由を突き止めても仕方がないとジョーイは一步引く。

「それじゃ、私は用事があるので失礼するわ」

最後は穏やかな優しい笑みを浮かべて眞子は去っていった。

ジョーイは一人ポツンと薄暗い廊下に取り残され、ヒールをコツコツと音をさせて去っていく眞子の後姿をどこか信用置けない目つきで見っていた。

生徒指導室と書かれたサインがドアの上についている小さな部屋で、シアーズはトニーに厳しい目を向けながら注意をしていた。

「(トニー、日曜日はどこに行っていた。なぜ携帯に連絡をしても答えなかったんだ？ お前がここに居る理由を忘れたのか)」

「(もちろん覚えてますよ。俺はジョーイの監視役。そしてシアーズ先生は俺の保護者であり、雇い主。ジョーイの側にいる条件で、俺は憧れていた日本での留学を提供された)」

「（分かっているのなら、最近仕事を怠ってないか）」

「（俺は何も詳しい事情を知らされてない立場だ。一切それについての質問をするなど釘を刺された上でこの仕事を引き受けた。ジョーイの身の回りに変わったことはないか監視するだけの役目であり、それ以上のことは責任はないはずだ）」

「（だからといって、羽目はずしてもいいとは言っていない。ジョーイとの関係は常に気をつけると言っている。土曜日はなんだか喧嘩してたように見えたが）」

「（今までずっとあいつの態度に我慢してきたんだ、時には頭に来る時だつてある。それにその件についてはすでに仲直りした。それくらいやった方が却って自然じゃないか）」

シアーズは一度ため息をついた。

「（ジョーイの身の回りで不穏な空気が流れている。そのうち学校にも入り込もうとしてくるかもしれない。何か気がついたことはないか）」

トニーは横に首を振った。

「（そうか、だが何か気がついたことがあつたらすぐに連絡して欲しい。白鷺先生に現を抜かしてばかりいるなよ）」

「（分かっているよ。だけど俺のプライベートなことには口出しはしないで欲しいもんだ）」

「（お前は立場わかって言っているのか。お前の女好きだけは誤算だった）」

「（だから、俺の他にもう一人ジョーイの監視役を置いてるんだろ。電車の中でずっと前にそれらしき人物に出会ったよ。見かけは日本人だったが、あれは純粋な日本人じゃなかった。時々ジョーイと外

を出歩くとそいつを見かけたから、追いかけて声を掛けたよ。そいつは何も言わなかったが、振り向きざまに俺のこと知ってるような顔をして嫌味つたらしく笑っていた」

「（そつか、ノアとは面識があつたのか。それなら話は早い。そうだが、彼もジョーイを監視している一人だ）」

「（ノア…… やっぱりそうか）」

「（とにかく、不審な動きがないかそれだけは目を光らせておいてくれ。何か気がついたことがあればすぐに連絡をしる）」

「（一つ聞きたいんだが、キノはこの件に関係あるのか）」

「（言ったはずだ、この件に関しての質問はするな）」

「（シアーズ先生からは詳しいことは何一つ知らされてないが、昨日ジョーイが過去の話をしてくれたよ。家が爆発して、アスカという女の子が消えたのかな。そしてジョーイはその消えたアスカがキノなのではとまっていることまで色々と話してくれたよ）」

シアーズの目の色が変わった。

「（ジョーイがそこまでお前に心を許したとは驚きだ。だがそれ以上首を突っ込むな。場合によってはお前は日本にいられなくなるぞ）」

「（最後は脅しか。なんだかシアーズ先生に興ざめしちゃうな。まあ約束だから仕方ないけどな）」

「（話はこれで終わりだ。もういい、行け）」

「（はいはい。では失礼します）」

トニーは飄々として部屋を出て行った。

シアーズは限界を感じるように部屋の隅のデスクに腰掛けて気難

しい顔をしていた。

ジョーイは靴を履き替え、下駄箱付近でトニーを待っていた。

トニーはだるそうに歩いては「参った参った」と頭を掻きながらジョーイの前に現れる。

「シアーズと何喋ってたんだ？　もしかして日曜日酒を飲んだことばれてたとか」

「ジョーイ、大きな声で言うなよ。ばれたら停学になるだろうが。違うよ、野暮用さ。眞子ちゃんに現を抜かすなとかな」

トニーは適当に誤魔化していたが、眞子のことでは嘘ではないのでちょうどいい理由だった。

「なるほど、そっちか。けどあの白鷺眞子はおっとりしたフリをしてるだけでなんか信用置けないタイプだぞ」

「ジョーイは堅物だから大人の女の魅力がわかんないんだよ」

「まあ問題だけは起こすなよ」

二人が外に出ると、隣の校舎からキノとリルが同じように出てきたのが見えた。

ジョーイ達には何やら二人は言い争っているように見える。

「やっぱりあいつら喧嘩してたのか」

ジョーイが呟いた。

「どづいうことだ？」

トニーが聞いてきたので、ジョーイがリルの過去の話も含めてどづいう状況か説明してやった。

「へえ、三角関係か。だけどそれならジョーイとキノはお互い脈ありって事になるぞ」

「それが、キノもただ面白半分三角関係を作ってるって感じなんだ。リルだって、過去の記憶を補おうと俺に執着してるみたいな感じがして、二人とも俺のことが好きだからっていう理由じゃないかもしれない」

「なんかややこしいな」

「俺もなんか訳分らないんだ。俺も同じようなもんだし」

「お前の場合はアスカが気になってるもんな。それがキノと重なるんだろ。だけどそのアスカって一体何者だったんだ」

「それが分かれば俺もこんなに悩んでないよ」

「そっか、ジョーイは過去に何かに巻き込まれて、真相を隠されたって感じだな」

「真相を隠された……」

「隠されたんだったら、それを思い出されるのを誰かが恐れていたりして」

トニーはちらりとジョーイに視線を向けずに「まっ、俺には関係ないけどね」といって話を逸らした。

トニーはそういい残して、キノとアスカに面白半分に近寄った。

トニーの言葉にジョーイは引っかけかり、ギーから渡された大豆の件が改めて気になりだす。

ギーは少なくとも自分よりは何かを知っているということに重要性を感じてしまった。

眉毛を中央に寄せながら、何が起こっているのか一人考え事をしながらポツリポツリと歩く。

自分のことで精一杯になっているときに前を向けば、キノとリルが激しく言い争っている。

それを見るとジョーイは頭が痛くなってきた。

「リル、しつこいわね、いい加減にして！」

「別にいいじゃない。キノも頑固ね」

「お嬢さん達、何を言い争ってるんですか。ジョーイの取り合い？」

キノとリルの会話の中にトニーが仲介しようとして入り込んだが、それは見せ掛けで実際は生のキャットファイトを楽しんでいる様子だった。

「違うの、リルったら私の家に今から遊びに来たいとか言うんだけど、うちは来て貰うと困るから断ってるの」

「だからなんで困るのよ、キノ。だったら理由を教えてよ」

「なんで急にそんな話になってるんだい？ でも俺も一緒に行きたいな」

トニーも入り込んでキノは大ピンチとばかりに露骨に嫌な顔になった。

「嫌よ、絶対いや」

「どうしてそこまで、嫌がるの？ もしかして汚な部屋とか？」

「リルも突然どうしてそんなこと言い出すの？」

どちらも引けを取らずに自分の意見を強く押し出していた。



トニーは、案外と下らない理由だったので好きにという感じで最後は呆れて放っておいた。

「おい、ジョーイ、何モタモタ歩いてんだよ。さっさと帰るぞ」

一斉に三人からの注目を浴び、ジョーイはモヤモヤする気持ちを抱えたまま無理に彼らの側に掛けていく。

キノがジョーイの表情を見て心配するような目つきになると、リルはそれに対抗心を燃やす目になっていた。

トニーは巻き込まれても嫌だと携帯電話を弄りながら先頭を歩き出した。

日は暮れかけて、薄暗くなっていく。

四人は夕暮れの中、闇に飲み込まれていくように口数少なくなりながら歩いていった。

駅に着くとリルだけが反対方向なために不満そうな顔つきで別れるが、元々無愛想な顔つきなのでさほどいつもと変化はないように見えた。

だがまだしつこくキノに「今度遊びに行くから」と別れ際でも言っている。

何をそこまでムキになるのかキノも困惑していたが、時折じつと見つめて挑戦的になる瞳を見てみると、リルもキノが困っている様子を楽しんでるように思えてならなかった。

誰かがそうするように仕向けたに違いないと感じる。

リルの電車が先に来たために、リルはそれに乗り込み帰っていく。ホームが違うのでリルとはそこで別れたが、次の日も会えばきつと同じ事を言ってくる。キノは思っていた。

「それにしても、リルって変わってるな。無愛想で、同じこと何度も繰り返すなんて、あれは嫌がらせだな。キノも友達になりたい人だったら、家にくらい招待すればいいんじゃないのか」

トニーが呟いた。

「それが困るの。見られたくないものだってあるし、人を呼べるよ  
うな家でもないの」

「ふーん、なんかケチだな」

「ケチで結構です」

キノはトニーを無視した。

キノが露骨に怒ったので、トニーは少し慌ててジョーイに助けを求めようとしたが、ジョーイは上の空で二人の会話など聞いていなかった。

「おい、ジョーイ、さっきから黙り込んでどうしたんだ？」

キノも気になってジョーイを見つめていた。

「えっ、別に何でもない。ちょっと考え事をしてたんだ」

「あっ、そうか、今晚の夕食のことか」

説明できるような話ではなかったので、ジョーイはそういうことにしておいたが、キノは心配そうな顔つきをしている。

キノと目が合い、ジョーイはこの駅のホームでキノがビー玉をばら撒いたことを思い出し、それから何かが変わってしまったと、見つめ返していた。

（全てはキノが現れてから事が始まった。キノ、君は本当にアスカじゃないのか？）

そんな問いかける思いの瞳でキノを捉えると、キノはただ笑って愛想を返す。

電車が入ってくると、キノはそっちに気を取られてしまったが、ジョーイは暫くキノを見つめていた。

乗り換え駅の連絡通路を歩いているとき、ジョーイは後ろから目を覆い隠された。

「だーれだ」

またややこしいのが出てきたと、ジョーイはその手を追い払って「詩織」と嫌々声を発して振り返った。

「当たり前」

「こんな時間にここで何してんだよ」

「それはジョーイも同じでしょ。ハーイ、キノちゃん。元気？」

詩織はキノにも愛想良く接する。

「おっ、すげえ、美人」

トニーが紹介しろと催促すると、ジョーイは白鷺真子のごとは真剣じゃなかったのかと呆れて名前だけ詩織に知らせた。

以前コーヒーと一緒に飲んだ話をしていたので詳しいことは省いてもトニーならすぐに察すると思っていた。

「初めまして、私は詩織。日本語うまいんですね」

詩織の言葉にトニーは笑顔で答えていた。

「ジョーイ、結構隅に置けないな。俺の知らないところでこんな美女と付き合ってたんじゃないか」

「そんなんじゃないよ」

「もう、ジョーイったら照れることないでしょ。私はいつでも付き合ってもいいんだから」

甘えた声で詩織はジョーイの腕に自分の手を絡ませた。

「おいやめてくれ」

「あれっ？ キノ、リルの時と違ってここはジョーイを取り合わなののか？ キノもジョーイのことが好きなんだろ」

キノはトニーにいきなり話を振られて驚いていた。

「嘘、やだ、キノちゃんもジョーイの事が好きだったの？ えー、そんな。ジョーイはどう思ってるの？」

詩織は青天の霹靂に嘆いてしまう。

キノもどうしていいのか分からずに慌てていた。

ジョーイはどう答えて良いのか言葉すら浮かんでこなかった。それをじれったいとトニーは口を挟む。

「ジョーイ、これははっきり言った方がいいぞ。キノが好きだって……」

「おい、トニー、バカ、何を言うんだ」

「だって、お前、言ってたじゃないか、キノが気になるって」

「だからってトニーがここでいうことじゃないだろっ！」

「ええー、ジョーイもキノちゃんが好きなの？ 嘘」

詩織はショックで泣きそうになってしまい、キノも眼鏡の奥で目を丸くしている。

とんでもないことになったと、冷静なジョーイですら困り果てて慌ててしまった。

「こづいうジレジレするの俺嫌いなんだ。はっきり言えば事が収ま

るんだから、いい機会だはつきりしろ。ここでキノと付き合え」

「トニー、いい加減にしてくれ」

「そんな、キノちゃんとジョーイが両思いだなんて」

詩織はとうとう泣き出してしまった。

「詩織さん、ちょっと泣かないで」

キノはなだめようとするが、いい言葉など何一つ浮かばず、おろおろしていた。

トニーのお陰で事がもつとややこしくなり、詩織が泣き止むまでキノとジョーイは側についていた。

それが中々泣き止まないために、長いことその場でいかにも参ったという表情で立っている。

原因を作ったのはトニーなのに、自分は部外者だからとさっさと先に帰ってしまった。それは収集がつかなくなつて逃げたに等しい。

もちろんジョーイはトニーに対して怒り狂つてしまうが、それは家に帰つてから考えることにして、この状況をどうにかしなければと気だけ焦る。

「腹が減った。飯でも食いにいかないか」  
ジョーイの提案に詩織はかぶりを振る。

「何か食べられる気分じゃない」  
「しかし、周りはじろじろ見ていくし、このままここに立ってる訳にもいかないだろ」

ジョーイは参ったとばかりに辺りを見回す。  
キノに助けを求めるように不意に視線を合わすが、キノも困惑しきつた顔をしていた。

そしてキノも言葉を失い、何も言えずにジョーイの視線をわざと避けるように目を伏せた。

また暫く無言となり、ジョーイのふーっと漏れるため息がかすか

に聞こえると詩織は無理をしてゆっくりと顔をあげ、涙を自分の制服の袖で拭く。

以前ジョーイに袖で涙を拭けと言われたように、それは自分で解決するという意味を詩織は込めていた。

「ジョーイ、ごめんなさい。ショックでこんな風になってしまったけど、私受け入れるわ。仕方ないもんね」

「詩織……」

「でも、相手がキノちゃんでもよかった。辛いけど、なんだか応援できそう」

「あの、詩織さん、ちょっと待って」

「いいのよ、キノちゃん、気を遣わなくても。でも本当はもうちょっとジョーイを追いかけたかった。これでファンクラブも解散だわ」

「おい、何話してるんだよ」

「ファンクラブを創設したのはこの私なの。皆とジョーイのことでわいわいするのも楽しかった」

「勝手に俺の知らないところで俺のこと話題にするなよ」

「いいじゃないそれくらい。あーあ、でも、泣いてすっきりした。すごく残念だけど、でもジョーイがキノちゃんを好きなら仕方がないもんね。じゃあ、私これで帰るね」

詩織は目を赤くしたまま、一生懸命笑顔を作ってジョーイとキノに手を振って去っていった。

無理をしているのは明らかだったが、こういうときも詩織らしく、その潔さは男前な性格にふさわしくかっこいいとジョーイは大いに感心していた。

二人は暫く詩織が人ごみに紛れていくのを応援するかのように見ていた。

無事見送った後は一段落ついたのも束の間、今度は自分達のこと



をどうするのかと二人はお互いの顔を見合わせて気まづくなっていた。

「遅くなっちまったな。帰ろうか」

「うん」

ぎこちなく二人は会話をし、駅のホームに向かう。

この後どうすべきなのかジョーイは考えていたが、自分の意思とは全く関係なしに事が進んでしまっ、どうしたいのかわからなくなっていた。

それはキノも同じなのか、ジョーイの側で息をするだけで精一杯な状況だった。

外はすっかり暗くなり、それを背景に電灯に照らされたホームに居ると、コントラストでお互いのことがくつきりと浮かび上がって見えてくる。

ごまかしも逃げることもできずに二人は肩を並べて立っていた。

「あのさ」

「あの」

同時に喋りだし、それが余計に気まづさを増幅させる。

お互いそちらからどうぞと言い合い、無駄な気遣いがまた神経を消耗させる。

このままではいつまでも同じだと、ジョーイは覚悟を決めて話の主導を握った。

ぐつと腹に力が籠る。

「トニーが言ったことだけど、俺がキノのことを気にしているというのは本当のことだ。だがその前になぜそうなったか聞いて欲しい」

キノも緊張して「うん」と首を縦に一度振った。

「前にも話したけど、キノを見てたら昔に会った友達を思い出すんだ。ちよつと訳ありの状況でね、突然その子が俺の目の前から消えたんだ。俺はずつと気になっていたんだけど、状況が状況だけにあまり人には言えない話で一人で心の中にしまっていたんだ」

ジョーイはここでまず一息ついた。キノの様子を伺ってからその先を続ける。

肝心なところは伏せていたので、どこまで言いたいことのニュアンスが通じているのか少し慎重に話していた。

キノは眼鏡の奥から澄んだ瞳でジョーイを見つめ、話を漏らさないように聞いている。

「キノがビー玉を俺の目の前で転がして『I lost my marbles』って言った言葉が、過去の記憶と重なってしまった。俺の友達も同じことを言っつて、そして二つの意味があることで俺がそれを指摘して笑っつていたんだ。それから、キノを通じて友達の面影を思い出しているうちに、それがいつの間にかキノを意識するようになってしまったっつていうことなんだ」

ジョーイが話し終えた後、キノは口元を上げてにこりとした。

「そつか、そういうことなら気にしないで。私も今朝リルと張り合っつたよつな態度をとっつたけど、あの時リルの自分の感情をあからさまにする態度が羨ましくて、つい真似したくなっつちやつたの。私、

あまり友達いないから、ああやって女の子同士で張り合うこと一度やってみたかったし、高校生らしく恋の真似事もつい経験したくて、調子に乗っちゃったの」

「えっ」

ジョーイは少し戸惑う。キノは自分の話に合わせて恋愛ごっここと片付けようとしているだけなのだろうか。

話の核心を避けて上辺を無難にさらりと話すことに自分の期待から外れてしまう。

このままではつやむやになると瞳が揺れて曖昧にキノを捉えていた。

「だってジョーイは女の子の間で人気者でしょ。そんな人にあんなことができるなんて滅多にないことだからついやっちゃったって感じ。初めて会ったとき、私がおどしてたのも、ジョーイがまさか私の側にくるなんて思わずに、緊張してたの」

ジョーイはまた言葉を失う。

結局はお互い恋の感情なんて二の次のような会話になっていった。

だがキノがあやふやにしようとしたことで却って目覚めたように、ジョーイの気持ちはもうそれで収まりきれないところまで来ていた。

きっかけはそれぞれなんであれ、ジョーイはキノが気になって仕方がない。はつきり伝えなければ後悔する。

それが恋として求めているとジョーイはもう認めていた。

心の赴くままにジョーイは自分が何をしたいのか自問自答する。

キノの側にいて気がついたことは、自分の感情が自然と噴出して心地よかったことだった。キノがアスカを思い起こさせるなどもうどうでもよくなってしまった。

ジョーイは殻をやぶったように突然感情があふれ出し、そのまま思ったことが口から出てしまう。

「なあ、キノ。お互い変なところから入っちゃったけど、どうだろ、俺達付き合わないか。俺はもうこの気持ちに無視はできないんだ。キノは俺のこと恋愛の対象には見られないか？」

自分の口からそんな言葉が出るとはジョーイも驚いていたが、それと同時に自分の言葉に反応して最高に胸がドキドキと高鳴っている。

キノは眼鏡がずり落ちた感じで、レンズを通さずに眼鏡と顔の間からジョーイを驚いて見上げていた。

ホームに電車が入るアナウンスが流れ辺りが動き出しても、二人は動かずそのまま見詰め合っていた。

電車はホームに到着し、乗客が乗り降りする中、それでも二人は動かずにいた。

キノは驚きで電源をとめられた玩具のように動かない中、ジョーイはキノの言葉をずっと待っている。

このままでは電車に乗り遅れると判断したジョーイは、キノの手を握り案内するように引っ張って乗り込んだ。

だがその手は電車のドアが閉まっても、動いてもずっと離さなかった。

キノも時が止まったように動かず抵抗もしなかった。

ジョーイはキノの手を握りながらドア付近に立つ。

暗いために外の景色が見えなくなった窓は、車内の明るさで鏡となって二人を映し出していた。

電車の走る音と周りにいた車内の人達のせいで、大事なことを話せる雰囲気でもなく、まるで続きを引っ張るテレビ番組に挿入されたコマーシャルのように気持ちを焦らされ、ジョーイの胸の高まりは益々激しくなる。

静かな場所を見つけるまで、二人は結果を保留にした状態で電車に揺られていた。

暫しの間、これが青春の貴重な一ページだと自覚するほど二人は胸を一緒にドキドキさせていた。

駅に着いて多数の乗客に紛れて降りたが、皆一斉に同じ方向を目

指して歩いていく中、ジョーイとキノは動かず手を繋いだまま薄暗いホームに残っていた。

ホームから人が去ってしまい、周りには誰一人いなくなったときやつとキノが口を動かした。

だが声が伴ってない。

まだ相当動揺している様子だった。

「ジョーイ」

やつとの思いで声がでたとき、ジョーイは唾を飲み込んだ。

「ジョーイの気持ちはとっても嬉しい」

「じゃあ、俺達……」

ジョーイがいかけたときキノが被せかけるように遮った。

「だけど、私、その、どうしていいか分からない」

「別にこうして欲しいとかそういうんじゃない、俺はキノの側に居たいんだ。こんな気持ち俺も初めてなんだ。俺今まで女の子に興味なんて全くなかった。だけどキノだけは特別なんだ。俺キノのことが好きだ」

はつきりと自分の感情を言ったとき、ジョーイは口から心臓が飛び出しそうになるくらい最高にドキドキしていた。自分自身どこかへ打ち上げられるような感覚だった。

そんなことを言われるとキノも抑えていたストッパーが弾け飛んでしまった。

憧れていたけど、雲の上の存在。好きになってはいけない人。そ

んな風に思っていてどこかで本気になるのを恐れて気持ちをセーブしていたところがあった。

「私も本当はジョーイのことが気になっていたの。でも私……」

キノはそれでも中々付き合おうとはつきりと言わない。

もうそこまで答えは出ているというのに何をそんなに迷うことがあるのだろう。

ジョーイはもうこれ以上自分の気持ちを言葉で言い表せなくなり、じれったいキノを本能で引き寄せ、そして唇を重ねていた。

ジョーイもキノも自分達が何をしているかわからないままお互いの唇をくっつけていた。

キノがはっとすると、後ろに後ずさり、顔がみるみると真っ赤になって温度が上昇していく。触ればジュツと焼いた音を発しそうなくらい熱されていた。

自分がこんなにも大胆になれるとは思わずジョーイも息が止まりそうになっていた。

でも必死に言葉を選ぶ。

「俺、やっぱりキノのこと好きなんだ」

キノもキスとジョーイの言葉で歯止めがつかなくなってしまい、抑えていた気持ちが溢れて自分の気持ちを言わずにはいられなくなった。

「私もジョーイのことが好き」

最初のジョーイの告白からどれくらいの間がたったのだろうか。キノが頑なに拒んだ理由は、恥ずかしさからだったのだろうか。

そんなことはもうどうでもいいと、恋が成就したことでジョーイはほっとした。

一時はトニーのせいがかき回され腹が立ったが、結局は怪我の功名でこんな結果になるとは思わず、トニーに感謝すべきの気持ちが湧いてくる。

「遅くなったから家の近くまで送るよ」

すっかり彼氏気分のジョーイだった。

「でも私のマンションはすぐそこだよ」

「それでも送るよ」

ジョーイはまたしっかりとキノの手を握って、改札口へと向かった。

自分ですごいことをしでかしたと、まだ少し戸惑っているが、ドキドキが悪くない。

これが青春真っ只中かなどと考えながら歩いている。

駅を出てショッピングセンターに続く連絡橋を歩いているとき、キノが指で宙を指した。

「あれが私の住んでいるアパートメント。日本ではマンションっていうけど、英語のマンションって言ったら豪邸だから、私には抵抗ある」



それはすぐ目の前にある、この辺で一番大きく、防犯設備の整っているところだった。

「あんな素敵なところに住んでいるのに、どうしてリルが遊びに来たかって言っても断ったんだい」

「それは、その、リルとはまだ知り合っただばかりだし、まだそんなに親しくないから……」

「じゃ、俺はそのうち呼んでくれるのかい？」

「えっ、そ、そうね。その時はしっかりと掃除しなきゃ、今はやっぱりジョーイでも困る」

誤魔化すようにキノは答える。

「いいよ、無理しなくても。しかし今何時だ。すごい腹減った。遅くなりついでだ。一緒に何か食べないか」

キノもジョーイの誘いに答えようと笑顔でいたが、目の前に突然現れた人物を見て一瞬にして顔が曇り、ジョーイの手を振り払った。

「どうしたんだ、キノ？ あれ、あの犬、ツクモじゃないのか。隣に居る奴は誰だ？」

キノが見ている方向をジョーイも見れば、訓練中と書かれた布をまとったラブラドルの犬と男性が前から近づいてくる。

そしてキノの前で立ち止まった。

ツクモもかしくまってその男性の隣に座った。

ジョーイはどこかで見たことがあると薄暗い電灯に照らされた男性を見つめていた。

「キノ、遅いじゃないか。こんな時間まで何をしていたんだ。心配するだろう」

「ごめんなさい」

「ところでその隣に居る奴は誰なんだ？」

知っているくせにわざとらしい口調で聞くが、それがキノの心中を益々乱した。

「こ、この人は……」

キノが言う前にジョーイが背筋を伸ばし礼儀正しく自己紹介をする。

「俺は、ジョーイといいます」

「キノの友達かね。すまないがキノには近づかないでくれるか。悪い虫がついては困るのでね」

「ノア！」

そんな言い方はやめてと怒りをぶつけないのに、名前を呼ぶだけでキノは何も言えなかった。

「さあキノ、帰ろう」

ノアはジョーイの存在を無視して冷たい表情で語る。  
キノは困惑し、どうすることもできないもどかしさで、胸を押さえ込んでジョーイを見つめていた。

「キノ、この人は誰なんだ？」

ジョーイの質問に答えようとするキノをノアは手で遮って邪魔をする。

「キノ、ツクモを連れて先に帰ってなさい」

「でも」

「いいから帰りなさい」

キノは言われるままに、ツクモを連れて歩きだす。  
そして振り返ってジョーイを悲しげに見つめた。暗くて見えなかったがキノの瞳には涙がじわりと浮かんでいた。

「さて、ジョーイだったね。私はノア。キノの兄だ」

「お兄さん？」

ノアは全くハーフの風貌がない。だが日本人というよりも、アメリカに住んでいるアジア人という位置づけにされるような雰囲気があった。

そして初めて会った気がしない。

自信が体から溢れているように背筋を伸ばしてきびきびとしている。

背がすらりと高いだけに、芯を持ってがっしりと前に立たれると鉄格子でふさがれたような気分になった。

そのとき、ジョーイははっとした。初めてキノと会ったときに、電車で見かけた人物だと思い出した。

あの時は眼鏡を掛けていたが、確かにこの男だったとはつきりと思い出した。

そしてノアは更に続けた。

「ああそうだ。しかし、キノの兄として育ち一緒に住んでいるが、血は繋がってないということも伝えておこう」

「えっ？ 血は繋がってない？」

「いずれは私達は結婚することになっていてね、申し訳ないがキノには金輪際近づかないでくれるかい？」

「ちょ、ちょっと待って下さい。それって婚約者？ でもお兄さんって、どういうことですか」

「君には関係ないってことだ」

先ほどまで恋だの、青春だの現を抜かしていた気分が一度に吹き飛び、ジョーイはノアが悪者に見えるほど嫌悪感を露にしていた。

ノアはジョーイがどう思おうとお構いなしに、無視をして踵を返した。

ノアとキノは生活を共にしてきたので兄妹という立場は強い方だった。この場合、兄と名乗っても全く罪はない。

そして血は繋がってないことを強調し、婚約者だと仄めかしたの

はノアはただジョーイにキノのことを諦めると牽制しただけだった。意地悪く言うことで、キノにも思い知らせるという意図ももちろんあった。

そんな事情など全く知らないジョーイは一人取り残され、シヨックでその場に立ち竦む。

だが訳の分からないこの状況に納得できなかった。

「すみません。直接キノと話をさせて下さい」

ノアに食い下がり、ジョーイは納得いかない気持ちをぶつける。

ノアは立ち止まり冷たい表情で振り向いた。

「キノのことは忘れたまえ。どうせ敵わぬ恋だ。忘れるなら早い方が傷も浅い」

「だから、キノと話がしたいんです」

「君もしつこいな」

ジョーイは腹を立てノアを睨む。

ノアを無視して突然走り出し、キノを追いかけた。

「ジョーイ、やめるんだ！」

ノアの言葉など気にしてどうするとはかりにジョーイはメイン道路へと続く連絡橋の階段を駆け下り、犬と一緒に前を歩いているキノを目指す。

キノは大通りから右に曲がり、人が集まる広場へと向かった。その先にキノの住むマンションがあった。

ジョーイも同じようにその後をつけて右に曲がったときだった。ツクモが前屈みになり歯をむき出しにして威嚇体制を取って唸っていた。

キノはその場突っ立って目の前の人物を恐ろしげに見ている。

「あれは、ギー」

ジョーイが立ち止まって驚いていると、後ろからノアが現れ、キノの側に駆けつける。そしてツクモに命令をして何事もなく去っていくようにする。

「（盲導犬って凶暴だったんだな）」

意味ありげにギーが呟いてもノアは完全に無視をしていた。

「（おい、待てよ。お前達の存在は俺は疾うに気がついてるんだ。ジョーイに接触するのも何か意図があつてじゃないのか。モルモットさん達よ）」

（ギーは何を言ってるんだ？ それにモルモットってどういうことだ？）

ジョーイはギーの言葉が気になった。

それでもノアは平常心を伴い、キノを守るように歩いていた。

ジョーイはキノを追いかけたくとも、ギーがそれを阻止するよう前に立ちはだかる。

「（よっ、ジョーイ）」

「（ギー、こんなところで何をしてるんだ）」

またややこしいのに会い、邪魔をされてジョーイは不機嫌極まりない。

その間にもキノ達はマンションの入り口にさしかかり入っていく。ジョーイは怒りを込めてギーを睥睨していた。

「（そつちこそ、かなり苛立ってる様子だが、なんかあったのか）」  
「（うるさい）」

「（おいおい、落ち着けよ。そうすれば、物事も見えてくるぜ。しかしあいつらがお前に接触するところを見ると、やっぱりお前もモルモットってことなんだな。ロバート・スタンリーはお前だけは特別扱いか）」

「（モルモットってどういう意味だ？ なぜ俺の父の名前が出てくるんだ？ あの二人とどういう関係があるんだ？）」  
「（それならば、こつちも質問だ。なぜ目の前で全てを吹き飛ばすように家が爆発したんだ？ なぜ、父親が行方不明なんだ？ お前のIQが高い理由はなんだと思う？ もう一度大豆を見て考えてみる。じゃあな）」

ギーは嘲笑い、そしてジョーイに軽蔑の眼差しを向けて去っていった。

ジョーイは湧き起こる怒りを抑えるのに必死だった。

邪魔をされた挙句、訳の分からないことを言われ、処理できないほどの不満と困惑。

そしてキノとノアと名乗った血の繋がらない兄。  
ジョーイはとにかくキノの住むマンションへと足を向けた。

大きなエントランスはICカードを通さなければドアは開かず中へは入れなかった。訪問者はモニターを通じて認証されてからロックを解除するシステムらしい。

これではキノの部屋番号も分からず、例え部屋がどこか分かったところでノアが居る限り許可がされる訳がない。

どうあがいてもそのマンションには入る術などなかった。

ジョーイは高く聳え立つマンションを下から眺め、悔しい吐息を吐く。

持っていきよのない感情を発散させるがごとく思いっきり地面を蹴り、最後は諦めて肩を落しながら家に向かってとぼとぼと歩き出した。

「キノ、あれほど気をつけると言われていながら一体何をしているんだ」

ノアの怒号が何も全くない部屋で飛び交う。

そこは家具などもなく、引越した後の全く何も残っていない空間があるだけだった。

ほんの少しの必要な身の回りの物は部屋の隅にただ置き去りにされている。

部屋の中にいるのに、全く生活の機能をしていない住処。

まるでホームレスが寝るために小さなスペースを町の一角で確保しているような状態だった。

それはいつでも出て行く準備ができてるといのように、キノが家



に誰も呼びたくない理由がこれだった。

何もない部屋は音響効果抜群に叱る声が壁や天井に跳ね返り、音に一番敏感なツクモは怯えて部屋の隅で伏せていた。

時折垂れた耳をびくつと動かし、心配そうな瞳で下から見上げるようにおどおどと二人に向けていた。

キノも全てを受け入れてこういうことになることを覚悟していたとはいえ、ノアに叫ぶほどに責め立てられるとまだまだ小さな女の子のように怖くなって身を竦めている。

ノアも怯えているキノを見ると声を荒げたことが一瞬のうちに罪悪感へと変わっていく。

そして息を吸い込んで落ち着きを払った。

「夕方、シアーズ先生からも連絡があった。ジョーイは過去のことをトニーに話してしまったらしい。それがどういうことかわかっているだろう。シアーズ先生はかなり懸念している。そして帰りが遅いから様子を見に行けばこんな時にジョーイと手を繋いで歩いているとはどういうことだ。約束が違うじゃないか」

「まさか、ノアがジョーイの前に現れるなんて思ってなかった」

いい訳にもなっていないキノの答え方は、まるでノアに邪魔をし  
て欲しくなかったと言っているようなものだった。

反省するどころか開き直っているキノの姿に、ノアの折角落ち着  
こうとした気持ちがかまた乱れてしまう。

再び威圧的な目を向けた。

「言ったたる、キノが言うことを聞かなければ俺も手を打つと。そ  
して悲しい思いをするとも警告したはずだ」

「ノア、どうして私は素直にジョーイが好きだっていつちゃいけないの？」

「分かってるだろ、俺達の立場を。俺達は表にでちゃいけない人間だ」

「じゃあ、だったらなぜ私と同じ日に同じ場所で生まれたミラは派手に映画なんか出てるのよ。私は影で、ミラは普通どころかハリウッドで活躍してるじゃない」

「これも研究のための一環だ。一方は普通に育てられ、もう一方は特殊教育をされる。表に出てもいいと選ばれたのはミラだったということだ。それにミラは姉妹がいるとも知らないし、自分がどうやって生まれたかも何も知らされてない。女優になってるのは偶然だが、彼女は極一般人の間扱い。だが俺達は違う。そしてキノは研究の成果が見事に現れた特別な存在だ。キノも自分の運命を受け入れて今まで生きてきたじゃないか。俺達は国家機密レベルの人間だ。要するに俺達の方が選ばれたエリートだ」

「でもあいつは私達のことをモルモットと呼んだわ。正体もばれてる」

「それは大丈夫だ。ああいうのは必ずしも発生するというもんだ。超常現象や不思議な出来事だけに焦点を当てたX-ファイルズというのが存在する。そして真相はなかなか表ざたにならない。さらに都合の悪い真実は潰されるのも時間の問題だ。これに関しては心配はしてないが、ジョーイのことに関しては避けられないかもしれない。ジョーイもそのうち何もかも気がつくことだろう。その前にキノ、アメリカに帰る準備をしる。シアーズ先生も滞在期間を延ばしたとはいえ、事態が変わってしまっただけでその方がいいと言っていた。もうここには居られない」

「でも今姿を消したら、ジョーイは益々疑問に持つ。私達が話せば、なんとか誤魔化せるかも」

「キノ、そこまでしてまだここに残りたいのか。ジョーイに嘘はもう通用しない。諦めるんだ。後の処理はシアーズ先生に任せればいい。とにかく俺は今からその準備にかかる」

キノはもうだめだと思った。

自分が抵抗しても上からの命令には背けない。

このままではジョーイにはもう会えなくなってしまう。

キノは眼鏡を外し、覚悟を決めたようにノアに哀れみの目を向けた。

「だったら、最後に一つだけ願いを聞いて欲しい。これが最後の私の我侭だと思って」

キノはノアにそっと告げる。そしてノアは「わかった」と頷いた。ノアが部屋から去って、ドアがバタンと閉まった音が聞こえると、キノはツクモを呼び寄せた。

ツクモは小さく鼻を「クーン」と鳴らして側に寄って悲しそうな目を向けた。

「ツクモ、後をよろしくね」

キノはツクモを抱きしめながら殺風景な部屋で泣きじゃくっていた。

ジョーイが疲れ果てて家に戻り、玄関のドアを開けると二階からトニーの嘆き声が聞こえる。

怒りを何かにぶつけ、暴れている様子にジョーイは驚き慌てて階段を駆け上がった。

「どつした、トニー」

部屋のドアを開けるとトニーは手当たり次第にモノを投げつけめちゃくちゃにしていた。

「おい、何をしてるんだ。やめろ」

ジョーイがトニーの腕を掴み押さえ込む。

トニーは泣きながらもジョーイをきつく睨み我を忘れている状態だった。

「離せ、放っておいてくれ」

「トニー、こんな状態を見て放っておけるか。ここは俺の家だ。これ以上物を壊すな」

「うるさい。俺の勝手だ」

「落ち着け、一体何があつたんだ。お前また酒の匂いがするぞ」

トニーはジョーイの腕を払い、そして落ちていた本を壁に投げつけたので、ジョーイはトニーの頬を殴ってしまった。

トニーはその拍子に後ろに倒れこみ床に尻餅をついてしまう。

「いい加減にしろ。いくら酔っ払ってるからってやっていい事と悪いことがあるぞ」

頬を押さえ込み、座り込んだままトニーは肩を震わせている。

「俺は欠陥品なんかじゃない」

トニーはそう呟くと悔しさで歯を食いしばっていた。

「トニー一体誰と飲んだんだ。未成年のお前が酒なんか一人で飲める訳がないだろ。側に誰かがいたんだろ。そいつに何か言われたのか」

「ジョーイ、お前は完璧な人間なのか、いや、それ以上なのか」

「おい、何を話しているんだ。とにかく酔いを醒ませ」

「俺は酔ってなんかない。酔ってない」

だが呂律が回ってなかった。

「分かったから、今日はもう寝ろ。そして明日片付ける。わかったな」

ジョーイは部屋を出て行こうとするとトニーは呼び止めた。

「待ってくれジョーイ。ずっと前に大豆のことを俺に聞いたよな。俺、他の奴にも大豆についてどう思うか聞かれたんだ。変な奴だなって思いながらも、そいつアメリカ出身だったから同郷のよしみで何度か会って食事に誘われて仲良くなつていったんだ。酒もそいつと飲んだ。ちょうどジョーイと喧嘩したときも奴と会ったんだ。その時愚痴のつもりでお前のこと話しちまって、そしたらあいつ不公平だなんて同情してくれた」

「まさかそいつの名前はギーっていうんじゃないだろうな」

「やっぱりジョーイの知り合いなのか」

「知り合いも何もあいつはFBIだ」

「FBI? あいつ俺から何か探ってたのか。実は今日も駅で声を掛けられて一緒に飲んだ。その時喧嘩のことを持ち出されたから、仲直りしたって言ったら、それからジョーイの事を色々聞かれたよ。」

相変わらず何するのも器用かとか、天才かとか。そしてやっぱり不公平だなんて言うから、今度は何が不公平なんだって聞いたら、頭を指すんだ。そして俺が欠陥品だっていいやがった。あいつ、俺がデイスレクシアで学習障害なことを知ってやがった。それで俺が孤児なのは不要な人間だから親に捨てられたんだとかまで言い切った。完璧な人間のために不幸な人間まで作り出す世の中が許せないとか訳のわからないことも口走ってたけど、自分が欠陥品と言われて腸煮えくり返って、酒の勢いもあったからこうなっちまった。ジョーイ、迷惑かけてすまない」

トニーは理由を話して落ち着いたのか酔いのせいなのか、目を閉じて、「疲れた」とそのままごろんと物が散らかった床に寝転がった。

ジョーイはトニーの姿を見下ろしながらギーにぶつけられた質問の意味を暫く考えていた。

ギーがトニーに近づいた理由。そしてこの有様。

キノとノアの事も知っていた。

自分の父親の名前も言われ、これらが全て関係して一つになるために元を辿れば父親が何をしていたかに繋がってくるというのだろう。

父親が一体何をしていたか、それを知るには母親が隠して飾っていたあの写真にヒントがあるのかもしれない。

トニーに布団を掛けてやった後、部屋を出て階段を下り母親の部屋へ向かった。

そして箆笥の上にあった写真立てを掴み、中から隠されていた写真を取り出した。

もう一度良く見る。

最初は写っている人物ばかりに気を取られていたが、周りに写りこんでいる物も注意深く見ていると、観葉植物に隠れそうになりながら右端に壁に張り付いたゴールドのプレートが目に入った。

光って小さかったがなんとか字が読める。

その字を読んだとたん気がついてしまった。

『Institute of Gene……』

「途中で切れているが、インスティテュートは研究施設のことであり、Geneの後に続く言葉は多分、Genetics、遺伝学のことだろう。」

ギーが聞いたかったのはこれだ」

ジョーイは全てのキーワードを繋ぎ合わせた。

「俺の父親が何をしていたか。俺のIQが高い理由。モルモットと呼ばれた訳。そして大豆に込められたヒント。ギーは遺伝子のことを言っていたんだ。大豆には遺伝子組み換えをされているものがあるってことか。そしてこれから考えると父親がしていたことは人間の遺伝子操作だといいたいのだろう。そうすれば全てが繋がってくる。俺は人間の手によって遺伝子を操作されたってことなのか。それじゃキノとノアもモルモットと呼ばれたのは、俺の父親が実験で作り出した人間ってことなのだろうか」

ジョーイはいつかキノが言った言葉を思い出していた。

『私は普通に生まれてきたかった……』

『こんな風に生まれてきたのも意味があるんだって思いたいの』

キノがジョーイ以上に見かけに対してコンプレックスを抱いていた。

その影でキノは遺伝子を操作されていたことを気にしていたという事に繋がる。

『私の夢は人の役に立ちたい。自分ができるのなら惜しまずにその力を役に立てたい』

この言葉がこの時になってジョーイの心に響く。

自分の運命を受け入れてキノは生きている。ジョーイはそう感じ取った。

ジョーイは写真を見つめながら、父親の顔を悲しげに見つめていた。

「ただなぜ俺は何も知らされずにいるんだ。全てを隠すために家が吹き飛ばされたということなのか？ 父親は一体何をしようとしてたんだ。そして居なくなったアスカもまた遺伝子操作をされた子供だったってことなのか？」

まだまだ分からないことだらけだった。

また写真を元に戻すが、写真立てには父親と母親が写っている写真の前にして飾っておいた。

真実と向き合いたい、ただその気持ちを込めて。



次の日の朝、バツが悪い顔をしてトニーが居間に現れ、ジョーイに朝の挨拶をしていた。

ジョーイも前夜は眠れなかったのか、疲れ切った表情ですでに制服を着てソファーに座り、元気なく挨拶に答える。

その様子を見てトニーはいたたまれず、つい誤魔化すように頭を掻きながら申し訳ないと反省する。

「俺、なんか頭が痛い。なんであんなに暴れたのか、今となっては恥ずかしい。すまなかったジョーイ」

「もういいよ。お陰でこつちも色んなことがわかってきたよ。もしそうなることを意図されていたのなら、あれはギーの計画だ」

「ん？ 何のことだ？」

「いや、トニーには関係ない。気にするな」

「でも、FBIっていうのが気に掛かる。もしかしたら俺がここに居る理由に関係あるのかもしれない」

「どういうことだ」

「ジョーイ、俺もう黙っているのは苦しいから言っよ。俺はジョーイを監視するためにここに送られてきたんだ」

「なんだって」

「事情は一切何も知らされてない。だけど、お前を守りたいと周りで人が動いている。俺はその一人で、何か異変が起こったらすぐに連絡する立場にあるんだ」

「誰にだよ」

「シアーズ先生だ」

ジョーイは疲れ切ったふにゃつとした体に、一瞬で空気を送り込まれたように体をつっ張らしてこの上なく驚いていた。

「シアーズ先生は俺が日本に留学できるようにしてくれた人であり、そしてその代わりに仕事を命じられた。それがジョーイの様子を守ることだ」

「なるほど、それでベビーシッターか。常に俺に優しく、何でも言うことを聞いていたのも仕事だったからなのか」

「すまない。でもお前と喧嘩したとき思ったんだ。ジョーイはやっぱり親友だって。俺も過去に色々あった。親はいないし、更に学習障害で勉強ができないと思われてくれたんだ。そんな時シアーズが助けを差し伸べてくれた。勉強の仕方を教えてくれたり、読めないのなら、耳で覚えろって。たまたま日本のアニメ見てたら日本に興味を持って日本語を耳で何度も聞いて繰り返し返したんだ。そしたら不思議なほど頭によく入って覚えられたよ。そこを見込まれてここにいる訳なんだが、日本に来て本当に楽しかった。二ヶ国語話せることで自信に繋がって今では学習障害というコンプレックスも気にならなくなった」

「それで何が言いたいんだ」

「ああ、だから隠し事はしたくないってことだ。昨日の俺の行動で何かFBIに影響をもたらしてジョーイに迷惑が掛かるのが嫌なんだ。それを説明するには俺の状況を言わなければ分かってもらえないと思ったんだ。俺はシアーズ先生よりも、ジョーイの力になりたいから。もちろん友達としてな」

トニーがウインクして最後の言葉を強調すると、ジョーイは口元を上向きにした。

「サンキュー。だけど何も心配するな。俺は大丈夫だ」

「そつか、俺にできることがあるなら何でも言ってくれ」  
「それより、早く学校に行く支度しろ。遅れるぞ」

トニーは全てを吐き出してすっきりしたのか、晴れやかになっていた。

ジョーイは少しずつ知らなかった真実が暴かれて来たことに、最後は最も知りたかった謎が分かるような気分になってくる。

転がったビー玉が色んなところにぶつかり連鎖反応を起こし、そして全てが繋がって確実にゴールへ近づいているイメージが湧いていた。

その時全てが分かる。

(そして俺は何を思っているのか)

ジョーイは恐れることなど何もないと立ち上がり、自然と体に気合が入っていた。

真つ向から立ち向かう、そういう覚悟だった。

駅に向かって歩いていったとき、途中キノの住んでいるマンションが視界に入る。

めまぐるしい展開で、自分自身ついて行くのが大変だったが、それも全て解決すると信じて先を進む。

転がったビー玉はゴールに着くまで転がり続けなければならない。またきつとキノとの繋がりに続くとマンションを横目に駅に向かった。

学校に着き門をくぐると、ジョーイは自らシアーズを探した。

一方でトニーはジョーイが辺りを見回している姿に、ここからは

立ち入れないと黙って先に教室に向かう。

事情は知らないとはいえ、係わっていることは確かなので少し心配なのか校舎に入る前に振り返っていた。

その時ジョーイとシアーズが対峙しあっている姿を見てしまい、トニーはこれから嵐でも来そうな気持ちになっていたが、その思いとは全く対照的な青空の広がる清々しい空に視線を移した。

その青空の下を沢山の生徒達は普段と変わらずに登校している。

そしてトニーもその生徒の一人として、クラスメイトに会うとにこやかな笑顔で挨拶を交わしていた。

自分はこれ以上係われない、または係わりたくないという思いが本能的に芽生えていた。

トニーがシアーズによって送り込まれてきた事実を知った今、なぜそんなことをするのか理由を知りたいとジョーイは挑戦的な瞳をシアーズに向けている。

それでも背筋を伸ばし普段より丁寧に挨拶を試みる。

「（おはようございます、シアーズ先生）」

「（なんだ、ジョーイ。今日は礼儀正しいじゃないか）」

「（先生、話があります）」

いつになく真剣に見つめるジョーイの目つきにシアーズは疑念を抱く。

大体の察しがついていた。

シアーズもある程度覚悟はできているので、慌てずに対処する。

「（その調子だと、何か気がついたことがあるみたいだな）」

「（はい。トニーから聞きました。先生は俺を監視している）」  
「（そうか）」

この件に関してシアーズはあまり驚かなかった。落ち着きを払い、ジョーイを見据えている。

「（一体、先生の目的は何ですか）」

「（私の目的？一言で言えば、ジョーイを見守ることだ）」  
その時見せたシアーズの瞳は深くジョーイを捉えていた。

「（なぜ、俺なんですか？先生が特定の生徒を鼻屑するのは褒められたことではないでしょう）」

「（そうかもしれないが、お前は特別だからな）」

「（それって、俺は遺伝子を操作された人間だからですか）」

「（はっ？何を言ってるんだ）」

このときばかりはシアーズも驚きを隠せなかった。

「（誤魔化さなくてもいいです。ある程度のことは分かりました。俺の父親が関与し遺伝子操作をして完璧な人間を作り出そうとしている。俺の周りでFBIが何かを嗅ぎつけようと付きまとうて俺にも回りくどく教えてくれました）」

シアーズは言葉に詰まってしまうが、腕時計を見つめ時間がないことを知らせる。

「（ジョーイ、できたら放課後に話さないか）」

「（その時何もかも話してくれるということですか？）」

「（そうだな、できる限りのことは……）」

そういい残し、シアーズは去っていった。

ジョーイは黙ってシアーズの後姿を見ていたが、チャイムが鳴り始めたことで教室に走っていった。

この日は授業に身が入らぬほど前日に起こったこと、これから知らされる真実やそしてキノのことなど頭の中で渦を巻くように巡り巡っていた。

昼休みの時はじっとすることができないで、ジョーイは一年の校舎へ足を向けキノを探しに行く。

キノとも話をしなければならぬ。

前日、邪魔ばかり入り思うように行かずに不完全燃焼のまま引き裂かれてしまった。

あの流れから考えれば、見えてきたこと。

それは、キノが本当に遺伝子操作をされた人間なのかということだった。

自分もその可能性が高いだけに、例えそうであってもその部分に關してはジョーイは気にするつもりなどなかった。

だが自分の父親が關与しているなら別だ。

その息子である自分はどうか接すればいいのか迷うところだった。

少なくともキノはコンプレックスまで感じ、自分の姿を喜んでい  
る雰囲気ではなかったからだった。

とにかく会って話しをするまではとやかく考えても仕方がないと、  
ジョーイはキノを探しまくった。

キノのクラスがどこか分からないので手当たり次第に教室を覗き、  
時にはその辺の生徒に聞くが知らないと言われ、キノを見つけられ  
ないでいた。

「ジョーイ」

廊下で声を掛けられ、勢いつけて振り返るとそこにはリルが無表情で立っていた。

「なんだリルか」

「その調子だと、キノを探してるのね。やっぱりジョーイはキノが好きなの？」

リルは寂しげに目を伏せて尋ねていた。

「すまないが、そんなことを話してる暇はないんだ」

リルは遠い目をして少し苛立ったジョーイを見つめた。

そして籠ったように小さく呟いた。

「キノなら、今日は学校に来てないらしいよ。私も探してて、クラスの人に聞いたから確かな情報」

（くそ、ノアの奴、休ませたのか）

やられたとジョーイは舌打ちをしていた。

そしてまだリルは続けた。

「それが、急なことでアメリカに帰ったって担任が言ってたらしい」

「なんだって？ それは本当か」

「だから私も今、白鷺先生に訊きに行こうとしてたの。あの人、なんだかキノのことに詳しいの。昨日もハンカチ取りに教室に戻ったとき、キノが困ることを教えてくれたし」

「キノが困ること？」

「うん、家に遊びに行きたいって言ってごらんって絶対嫌がるからって」

「なんでキノの嫌がることをリルに教えたんだ」

「私がキノのことライバルって言ったたら、それならいいこと教えてあげるって言われた。でも白鷺先生、キノのこと嫌いなのかな」

それに関してはジョーイも感ずるところがあった。

「とにかく、探してみよう」



職員室に向かい、その辺に居た先生を捕まえて居場所を聞くと、さつき駐車場に向かっているのを見たと言われ、すぐにそこに走って行った。

駐車場は校舎の裏側にあり、昼間は人気あまりない。

そして駐車場の決められたスペースを使わず、無造作に停めている車の隣で眞子が立って話をしているのが目に入った。

運転席に座って窓から顔を出している男がいた。

あの髪型とサングラスで誰だかすぐにわかり、ジョーイは咄嗟に停まっている車の陰に身を隠した。

「ギー、なぜ学校に来て、白鷺先生と話をしてるんだ」

ジョーイはリルを引っ張り、同じように身を伏せると指図する。

リルは言われたまましゃがみこみ呟いた。

「あの人、日本人じゃないね。白鷺先生、昨日も携帯で誰かと英語で話してたけど、相手はあの人だったのかな」

「その時どんなことを話していたか思い出せるか？」

「ジョーイの名前を言ったと思う。それからトニーの名前、そしてレフト、メイドアップ、オーライトとか聞こえたけど、そんなにらしいかわからなかった」

「それだけじゃ意味がわからない。だけど話していた相手はギーってことなのか。すると白鷺先生はFBI側の人間。キノを嫌う理由も納得がいくかもしれない。トニーと仲良くして俺の家に上がりこんだのも、何らかの情報を得るためだと考えれば辻褄が合う」

「ジョーイ、一体何を言ってるの？」

リルの前だったと、ジョーイははっとして口ごもる。

「いや、何でもないこつちのこと」

「あっ、車がどっかに行くよ。白鷺先生もこつちに向かって歩いてくる。どうするジョーイ？」

「どうするも、何も」

ジョーイは近づいてきた眞子の前にいきなりすくつと立ち上がった

た。

「きゃっ、いやだ、ジョーイじゃない。先生を脅かすのはやめてよ。びっくりしたじゃない」

「先生、今の男と何を話してたんですか？」

「えっ、どうしたの急に」

「いいから、俺の質問に答えて下さい！」

「ちよつとある生徒のことで質問されただけよ」

「それはキノのことですか」

眞子は答え難そうにしていた。

「ねえ、ジョーイ一体どうしたの？」

リルもジョーイがまた何かに巻き込まれているのではないかと思うと気がかりで心配になってくる。

昼休み終了のチャイムもこの場を沈めようと鳴り出した。

「ほつら、次授業始まっちゃうよ。二人とも早く行きなさい」

「ジョーイ、行こう」

ジョーイは納得できないまま、リルに引っ張られる形でその場を去った。

眞子も、どうしていいか分からずその場で二人が去っていくのを見ていた。

結局キノが本当にアメリカに帰ったのか確認できないまま、リルと別れて教室に戻る。

五時間目は数学の授業だった。

老人の域に達したようなよぼよぼの先生が何の工夫もないつまらない授業をしている。

昼ご飯を食べた後でもあり、お陰で誰もが眠たそうにしていた。

ジョーイもまた上の空で授業など全く聞いていなかった。

(放課後、シアーズと会えば何もかも分かるのだろうか)

ため息を大きくつくと、先生に注意された。

「桐生ジョーイ、たるんでるぞ。前に出てこの問題を解いてみる」

ジョーイは黒板に書かれた方程式をチョークをもつや否や殴り書くように数倍の速さで解いていた。

先生は難しい問題だったはずだと本を見ながら答えを確認するが、正解に間違いはなかった。

まだ教えてないはずなのにと、少し悔しがる。

「戻って宜しい。しかしちょっとできるからといってそれで安心するな。態度が悪いと折角点数が良くて内申書で損をするぞ」

「はい、わかりました。どうもすみませんでした」

珍しく素直に受け答えをしたので先生はまた面食らって、喉を一度コホンとならして、そしてつまらない授業を始めた。

ジョーイは、自分が解いた方程式を見つめ、頭の中で数字が一瞬で明確に浮かんで来ることにやはり自分の能力に特別なものを感じる。

遺伝子操作。

ジョーイは自分の手のひらを見つめ、何度も握ったり開いたりしていた。

放課後、シアーズの方から接触があり、教室のドアの付近に立ち、ジョーイを一瞥してついて来いと顎で指図された。

トニーは「頑張れよ」と口パクでジョーイに知らせていた。廊下ではシアーズの後ろを一定の距離を空けてついていく。

シアーズの後姿を面と向かって見たのは初めてであり、背も高くシャープでがっちりとした肩幅が前を常に歩くリーダーにふさわしい。そこには威厳が溢れているように見えた。

昔どこかで同じような光景を見たとき、自分の父親のことを薄っすらと思い浮かべていた。

自分の父親の背中もあんな風であり、子供心に尊敬していたことを思い出す。

だが父親が何をしていたか、それが明らかとなった今ジョーイの心は重く鉛を飲まれたような気分だった。

そしてこれからシアーズは何を話すというのだろうか。

ジョーイはそのときを静かに待つ。

シアーズは生徒指導室へとジョーイを連れてきた。

シアーズが先に中に入り、窓際の先生用のデスクにつく。ジョーイはドアを閉め、二三步前に進むと無言で立ち止まった。

「(さて、何から話していいものやら)」

デスクに肘をつき、シアーズは指を絡めてジョーイを見つめる。

「(俺も何から聞いていいのか分からない。俺は何をまず知るべきなんだ？　そして先生は一体何を知っているというんだ?)」

「(そうだな。まずは君の父親の事だな)」

なぜシアーズが自分の父親のことを知っているのかは二の次として、ジョーイは黙ってシアーズの話に耳を傾けていた。

「（お前の父、ロバートは、立派な科学者だとまず言っておこう。そして研究熱心であり、努力家でもあった。そのお陰で遺伝学では誰もが成し遂げられなかったことをやり通した）」

「（それが遺伝子操作ということなのか）」

「（さあ、私は詳しいことまでは知らない。だが、この世の中、皆が知らない研究がされて、そしてそれがとてつもない大きなプロジェクトとなることもある。例えばだ、超能力を研究していたとして、それが使えるようになったとしたらどうなると思う?）」

「（スーパードクターになるか悪人になるかのどっちかだろう）」

「（ジョーイらしい面白い答えだ。そうだ、誰よりも優れた才能を發揮して力を持つことで最強となることだろう。ロバートはそういう人間を生み出すように命じられたんだ）」

「（一体誰に?）」

「（国家だ）」

「（それって、国を挙げてそういう人間を作ろうとしていたってことなのか）」

「（国家機密でそういう人間を生み出し、更に英才教育をさせ、超天才エリート集団を作りあげる。そして国のためにいろんな方面で活躍してもらうんだ。小説の世界の話だけじゃない。技術はどんどん進んでいる。倫理に反してクローン人間もそうやって知らずとすでに作られているのかもしれない）」

「（そんな、それじゃ人間を材料として実験してるだけじゃないか。失敗することだってあるだろう）」

「（そうだ、失敗だってもちろんあるだろう。人間として機能しない場合とかな）」

「（その時はどうするんだよ。失敗したからといって殺して捨てるのか。人間だぜ）」

「（そこが、FBIが関与してくるところなんだ）」

「（どういうことだ？）」「

「（その処理の方法……）」

「（どういう風に？）」「

「（そうだな、一つの例として言うなら臓器提供だ。しかしこれはあくまでも噂として聞いて欲しい。極端な例としてだ。私も真相を知っている立場ではない）」

ジョーイは言葉を失った。あまりにも恐ろしい話に耳を塞ぎたくなる。

「（分かっている、それが人間として許されない行為という事を。だが、そのお陰で他の人間が救われる。そうなると目を瞑る輩が出てきてもおかしくない。そしてその部分は国を挙げて隠し通されているとしたら、国全体が目を瞑ったこととなってしまふ。だが国がどこまで関与してるかは私も実際は知らない。もしかしたら国は知らないかもしれない。その部分は常に闇に葬られる。そしてそれが実際に行われていることなのか私も分からない。そういう話は信憑性に関係なく噂になりやすい）」

「（そんな、なんてこった。それじゃFBIのギーはその真実を暴こうとしているのか）」

「（彼はそんな負の部分の噂を聞いて一人で捜査している。上の者はそれを知っていて好きにさせているんだ。本気に捉えずにただの都市伝説と思う者もいるし、真実を知っているものは絶対に表ざたにならないと分かっているからな。だが、遺伝子操作の件についてはもしもという事がある。その時のために、ロバートは研究のためとは言え、人道に外れる行為を悔やみ良心の呵責から国家と取引をした。真実が漏れたとき、自分が一人で罪を被ると言った。そのためには姿を消し行方不明と世間に知らしめ、できるだけ真実が闇

に葬られる形をとったという訳だ。そうすることで、ギーのように疑いを持った人間はロバートが主犯者だと思い込むように仕向けたんだ」

「（国家と取引をしたと言ったが、一体なんのメリットがあるんだ）」

「（それはジョーイとお前の母親を守ることだ）」

「（俺と母さんを守るために。それで離婚して行方不明になったただ）」

「（そうだ。お前をこのことに一切関与させないことにするために、そして、父親が何をしていたかジョーイの記憶から消すためにもアスカも一緒に姿を消さなくてはならなかった）」

「アスカ！」

ジョーイは叫んでしまう。シアーズの口からこの名前が聞けるとは思わず、驚きすぎて息が荒立っていた。

「（当時、ジョーイはアスカと英才教育を受けていた。ジョーイの能力も目を見張るものだった。だが、ロバートは自分の息子をこの件から切り離れたかったんだ。ジョーイには普通の子供として過ごして欲しかった）」

「（そんな、俺だけが特別扱いだったってことじゃないか）」

ギーが同じ事を言っていたとジョーイは思い出しはつとしていた。「（あの時、故意に家を爆発させて全てをリセットさせた。何もかも吹き飛ばすことで、ジョーイの記憶も一緒に吹き飛んだということだ。私も側に居たからあの時のことは良く覚えている。ぬいぐるみを渡したのはこの私だからな）」

ジョーイはよろよろとよろめき、側にあつた椅子に腰を掛けた。

「（それじゃアスカはどこにいるんだよ。ちゃんと生きてるのかよ）」

「

「（残念ながらアスカは死んだよ。殺されたんだ）」  
シアーズは目を伏せた。

「（どういうことだよ、殺されたって。あの爆発で犠牲になったってことなのか）」

「（そういうことになる）」

「（なぜそこまでしなきゃならなかったんだ）」

シアーズは急に黙りこくった。まだ何か言えない秘密があるのか、それとも辛くてそれ以上話せないのかジョーイもシアーズが話さなければ知りようがなかった。

ここで黙られては先に勧めないとジョーイは質問の内容を変えた。

「（まだ知りたい事がある。FBIのギーがモルモットと呼んだキノや彼女の兄と名乗るノアは遺伝子操作された人間なのか）」

「（さあ、それは私にはなんとも言えない）」

「（ここまで俺の父親がやっていることを喋っておいて、なぜそれは答えられないんだ）」

「（なぜなら、遺伝子操作されなくてもすでに天才と呼ばれる人間が自然に生まれることがあるからだ。そういう人間も選ばれて一緒にこのプロジェクトの英才教育を受けさせられる。その施設に入れば、誰が遺伝子操作されたかそうでないかごく一部の関係者以外わからなくなるんだ。そして私はこれに関与していても詳しいことは知らない人間であることもわかって欲しい。だが一つだけはっきり言えるのは、ジョーイ、お前は歴としたロバートとサクラの遺伝子だけを受け継ぐ子供だ）」

「（俺は遺伝子操作されてないか？）」

「（そうだ。お前は本当に天才と呼ばれる人間なんだ。それもそのはず、ロバートとサクラも優秀だからな。そんな子供が生まれてもおかしくない）」

ジョーイはもう何も言えず首をうな垂れた。



その時、ドアが開いて眞子が入って来た。

「（シアーズ先生、こんなところにいらっしやっただんですね。手はずは全て整いました）」

「（ご苦労だった。白鷺先生。ありがとう）」

ジョーイは突然の眞子の登場に驚くが、信用置けない人物だけにシアーズと親しく話す様子にすぐさま懐疑的になる。また何か企んでいるのではと眞子に訴える目つきで口を開いた。

「（白鷺先生はFBIの手先だ。昼休みにギーと話していたのを俺は見た）」

眞子はお色気と余裕の笑みを浮かべて、一語一語丁寧に子供に言い聞かせるように語り掛けた。

「ジョーイ、何を勘違いしているの？ 私は日本でのキノの保護者だったのよ。もちろん、事情を知ってる唯一の人物でもあります。私の仕事はシアーズ先生のお手伝いと言ったところ。そしておまけでトニーの監視。トニーがFBIに目をつけられてたから、それを探ってただけ。トニーの女癖の悪いところを利用して、私に夢中にさせて何もかも話すように仕向けてただけよ。トニーは事情を知らないから、時々変化を見落とすのよ」

「なんだって。でもキノに冷たかったじゃないか。リルに変なことを教えたし」

「あら、ちよつとね、あれは恥をかかせた復讐のつもりだったの。だってキノつたらみんなの前で私の英語がおかしいって訂正するのよ。ちよつとプライドが傷ついたから、あんな態度になっちゃったわ。でも嫌ってたわけじゃないわ」

「じゃあ、ギーは何の用だったんだ」

「あれは偶然だったの。キノのことを知っている英語を話せる教師を探していて、私が対応したということ。キノがマンシオンから出て行ったから、どこへ行ったのか探してたのよ。お陰でしつこく聞かれちゃったけど、家庭の都合で国に帰ったとは言ったけどね」

「えっ？ キノがアメリカへ帰ったっていう噂は本当なのか？」

眞子は少し答えにくい顔をしてシアーズを見つめる。言っているもののなか確認を取っていた。

「（その雰囲気だとキノのことについて話しているみたいだな。ジヨイ、キノはノアと一緒にアメリカに帰ったよ。今頃は飛行機の中だろう）」

「（なんだって。俺に何も言わないでか）」

「（仕方がなかったんだ。FBIのギーがしつこく係わってきた。これ以上キノ達を危険に晒すわけには行かなかったし、ジヨイも巻き込みたくなかった。キノ達は日本を離れるしかなかったんだ。それに彼らにはこれから与えられた使命があるんだ）」

「（なんだよ、それ。結局は生まれる前から全ての人生を決められているんじゃないか。そんなの不公平だ。俺の父は神にでもなったつもりか）」

「（ジヨイ、人生は不公平と感ずることがあるかもしれない。だが他のものから見れば羨ましいことだってある。だからそれは自分が納得して受け入れられるかの問題じゃないだろうか。そんなに嘆くな。生きていけばいつかキノに会えるときが来る。それはジヨイ次第だと思うが）」

「（もういい。俺帰るよ）」

ジョーイは無性に腹が立ってこれ以上話をするのが嫌になってきた。真実を知ったところでなんの得にもならない。胸がムカムカするだけだった。

「(ジョーイ、サクラは予定では明日帰って来るんだろ。帰ってきたら連絡が欲しいと伝えておいてくれないか)」

「(母さんがなぜシアーズ先生を頼れって言うていたのかよくわかったよ。シアーズ先生は俺の母親とも連絡取ってたのか)」

「(まあな。そのうち徐々にいろんな事がわかってくるだろう。私も立場上まだジョーイに自分の口から全てを言えないことがあるんだ)」

「(だろうな、所々の話がぼやけてたもんな。こうなったら自分で調べるしかないってことか)」

「(言えないというのは相手からの口止めや自分の身を守りたいという部分があるからだ。この問題を取り巻く組織が大きすぎるんだ。そうすると下手なことを喋ると私も危険に晒されるし責任を負わされる。だが本人が勝手に知りたいたいと思っただけで気がつくのなら別だ。一つ私ができる手助けとしてこれをお前にやろう)」

シアーズはスーツのポケットから何かを取り出し、それをジョーイに差し出した。

それは小さな茶色いコインだった。

「(なんだよこれ)」

「(ユーロ、ヨーロッパのお金だ。どこの国がユーロに加盟しているか知ってるか)」

「(ああ、なんとなくだが、一体なんでこんなものを)」

「(ユーロの硬貨の片面はユーロ加盟国全て共通したデザインだが、もう片面は各国の独自のデザインだ)」

ジョーイはコインをひっくり返した。そこにはふくろうの絵が描かれてあった。

「（それはギリシヤが発行したものだ。ふくろうのデザインは、古代アテネで発行されたテトラドラクマ銀貨から採用されている）」  
「（だからそのテトラドラクマ銀貨がどうしたっていうんだ）」  
「（何かの役に立つかなと思ってな。持っておけ）」

ジョーイは何も答えず硬貨を手にして部屋を出て行った。

また大豆に続いての謎解きかとも思ったが、それを上着のポケットにしまいこみ廊下を気だるく歩いていく。

知ってしまった真実が重苦しく、蹴散らしたいほどに心の中で不快にへばりついていた。

知らなかったときには戻れず、このまま背負っていくしかない。  
ズボンのポケットに手を突っ込みやるせなくなっていた。

下駄箱で靴を履き替えて外へ出ると、そこにはリルが待っていた。

「ジョーイ、一緒に帰ろう」

「待ってたのか？」

リルは「うん」と頷いた。

二人は駅まで肩を並べて、夕暮れのセピア色の中を歩いていた。

「やっぱり、キノはアメリカに帰っちゃったの？」

元気のないジョーイの顔を見てリルは呟く。

「ああ」

「そっか。それでそんなにがっかりしてるんだ。キノのこと好きだったんだね」

「そうだな」

ため息のようにジョーイの口から自然と漏れていた。否定する気など全く起こらなかった。

「あっ、とうとう本音が出た。なんかショックだけど、でもすっきりしたかも」

リルは顔を上げた。上を向いたとき泣くまいとして踏ん張っていると口元が上向きになっている。

ジョーイはそれを見つめた。

「リル、お前なんか笑ってるぞ」

「笑ってるか…… こうするとそんな風に見えるんだ」

「でも笑った方がかわいいぞ」

ジョーイにそんな風に言われてリルは少し照れて恥ずかしそうに微笑んだ。

「キノ、帰っちゃったのか。なんだか寂しい。あんなに私と言い争った人なんて居なかった。私いつも影で何か言われるか、空気のようにどうしてもいい存在だった。でもキノは真っ向からぶつかってきて、今思うと楽しかった。あのまま一緒にいたらいい友達になれたかもしれないのにな」

「キノもきつと同じこと思ってるんじゃないのか」

「そうだったら嬉しいな」

駅に着いて、お互いのホームを目指して別れる。

またいつものようにリルの電車が先に来て、それに乗り込んでリルは窓から手を振って去っていた。

ジョーイはキノがかつて座っていたベンチを眺めて、ビー玉を転がした場面を思い描いていた。

またため息が出てくる。

「生きていたら会えるだど？ だったら今すぐ会いたいっていうんだよ」

ジョーイはこみ上げる気持ちを抑え、肩を震わしていた。

そして乗り換えの駅について、連絡通路を歩いているとき、いつかのキノを追いかけていたストーカーを見かけた。

お互い目があつて「あつ」と声を上げる。

ストーカーは逃げようとしたが、ジョーイが機敏に動いて前を立ちふさがった。

「おい、何も逃げることはないだろ」

「だって、すぐに絡んでくるから怖くて」

「そんなでかい体つきしていて、何が怖いだ」

「だからその言い方が怖いじゃないですか。一体僕になんの用です？」

「そうだ、お前いつかキノを追いかけていたよな。一緒に電車から降りようとしてたけど、キノに巻かれて降り損ねただろ。一体あれは何をしてたんだ？」

「キノつてあの黒ぶち眼鏡をかけたハーフの女の子のことですよ。あの子に直接お礼をいいたかつたんです」

「お礼？」

「はい、以前電車に乗っていたとき、同じ学校の生徒も乗ってたんですけど、なぜか僕が痴漢みたいに思われたのか、じろじろ見られて誤解を解こうとしてたんです」

「あつ、あんた詩織が言っていた痴漢だったのか」

「違います。人聞きの悪いこと大きな声で言わないで下さい。僕は何もしてません。あの時そう思われてしまい、なんかもじもじしたのが余計に誤解を招きました。そのとき、あの子が『動かないで』つて僕に耳元で囁いたんです。そして自ら倒れこんで、あの時の雰囲気を変えてくれました。その時ふと僕の隣に居た男性の手の甲が見えたんですけど、ペンで”ちかん”つて書いてあつたんです。男性も気がついてドサクサに紛れてどこかへ移動していったんですけ

ど、あれは僕を助けてくれたに違いありません」

「やっぱり、キノはわざと行動を起こしてたのか。あいつは本当にスーパーヒーローだったんだ」

「スーパーヒーロー？」

「いや、なんでもない。こつちの話だ。とにかくだ、詩織にその話をすればいいじゃないか。きっと詩織なら信じると思っぜ。そして誤解も解けるだろう。話を聞いてくれそうになかったら、俺の名前を言えばいい。ジョーイと友達になったとかなんとか」

「ジョーイ？」

「ああ、俺の名前だ。宜しくな」

「はい、僕は渋川カオルです」

「カオルか」

「そうなんです。よく名前だけみたら女みたいだと思われます。こんな風貌だから顔と名前が合っていないとかも」

「俺はそこまでいってないぜ」

「あつ、そうですね。でも自己紹介すると必ず言われるからつい癖で」

「いいじゃないか見かけ通りの名前じゃなくても」

「あなたも喋ってみるとなかなかいい人そうなんですな」

（見かけと名前が確かに合っていない。でもそのギャップが面白いってこともあるもんだ。見かけはアレかもしれないが、中身はいい奴そうだ）

ジョーイは口には出さなかったが、笑みを浮かべる。

その後は「またな」とお互い挨拶をして別れ、自分のホームに向かっていった。

そして自分の駅に着いて改札口を出たとき、目の前に近寄ってくるものに驚いた。



「ツクモじゃないか。なぜここにいる」  
ツクモは尻尾を思いつきり振り、ジョーイの足元に体を摺り寄せ  
る。

口にくわえていたものをポトリとジョーイの目の前に落とす。

「これはキノの黒ぶち眼鏡。ツクモどういうことだ」

ツクモは「ワン」と一度吼えた。

ジョーイは眼鏡を拾い、キノが居るのではと辺りを見回したが、  
いくら探せど姿は見当たらない。

「ツクモ、キノは近くに居ないのか？」

ツクモに聞いてみたところでツクモは鼻をクーンと鳴らすだけだ  
った。

そしてしきりに体を撫ぜると催促するようにジョーイに頭を摺り  
寄せる。

ジョーイはツクモの目線までしゃがみこんで、両手で抱え込むよ  
うに色んなところを撫せてやった。

ツクモはきつちりかしこまって座り、首を上下に何度も動かして  
いた。

「どうしたんだ。首が痒いのか？」

ジョーイはリクエストしているのかと、首を撫せてやる。

ツクモはその間何かを知らせるように何度も吼えていた。

ツクモの首には、黒い革の首輪がついている。

まるで首輪を見ると言われているように感じ、ジョーイはツクモ

の首輪を調べ始めた。

すると内側に細工がしてあり、そこに紙が細く折り曲げられてくつついていた。

「こ、これは手紙？」

ジョーイはそれを取り出し広げた。

そこには英語でメッセージが書かれていた。

慌てて書いたのか太い油性マジックで走り書きされたような文字だった。

それを読んでキノがツクモをジョーイに置いていったのが分かった。

> i32059 — 3985 <

(キノが残した手紙の画像)

Dear Joey

Please take care of ツクモ .

I will miss you .

Love , Kinno

5 + 5 11 037

親愛なるジョーイ

ツクモの世話をお願い。

あなたに会えなくて寂しくなります。

愛を込めて キノ

と書かれているところまではジョーイは分かったが、最後の数字が不可解だった。

「この数字はなんだ？ 電話番号？ 計算問題？ なぜツクモだけカタカナ表記？」

ジョーイは首を傾げたが、ツクモは何かを伝えたそうに「ワン」と吼えていた。

その手紙を畳んで黒ぶち眼鏡と一緒にポケットの中に突っ込む。キノが世話してくれと置いていった犬。

キノは自分の代わりとしてジョーイに何かを残しておきたかったに違いない。

ジョーイはツクモを自然と受け入れた。

ツクモのあどけない目を見ていると、シアーズから聞いた話で重くなっていた心が癒されていく。

「ツクモ、なんだか訳が分からないが、今日から俺が飼い主だ。宜しくな」

ツクモは思いっきり尻尾を振って喜んでいた。

ジョーイが歩き出すと、リードをつけなくても、ツクモはぴったりとジョーイの真横をついていく。

そしてキノが住んでいたマンションの通りの近くに差し掛かると、寂しげな瞳でマンションがある方向を見つめ、まるでキノのことを思い出している様子だった。

「ツクモ、キノはどこへ行ったんだ？」

ツクモもわからないのか、目を潤わせ困惑していると言いたげに

首を傾げていた

家に着くとすでに玄関の錠は開いており、ドアを開ければトニーのスニーカーも目に付いた。

「ただいま。トニー帰ってるのか？ ちょっと大変なことになったんだ」

ツクモを玄関の中に入れ、ドアを閉めて靴を脱いでいるとき、ツクモが急に小さく唸りながら、牙を見せて威嚇体制になった。

「どうしたんだ、ツクモ。初めて来る場所だから警戒してるんだな」  
ジョーイは頭を撫せてやり、安心させようとした。

その時家の奥から、物が落ちるような音が聞こえた。ツクモは益々警戒し邪悪な犬の表情をする。

「仕方がないな、とにかくお座り、シットダウン」

ジョーイが指示を出すとツクモは渋々と玄関で座った。

「そろそろご飯の用意しなきゃいけないな。おい、トニー、今晚何食べたい？」

ジョーイは叫びながら居間へ入っていった。

そしてそこでガムテープで口を塞がれ、両手両足を縛られてソファーに寝転がっているトニーの姿を見て驚いた。

「ウグググググ」

涙目になりながら、必死に訴えている。

「トニー、一体何が起こってるんだ」

その時キッチンから包丁を持った男が姿を現した。

「ハロー、ジョーイ」

「ギー」

ジョーイはこの上ない危機感に血の気が引いていった。

不敵に笑みを浮かべた狂った目つきを突きつけながら、ギーは包丁を面白半分に握って尖った部分をジョーイに向ける。

「（ギー、家になるときぐらい靴を脱げ。ここは日本だ）」  
ジョーイは平常心を保っていると知らしめたくてそんな口を叩いたが、ギーは強がっているジョーイの態度がこっけいに見えて鼻で笑っていた。

自分の家の包丁だというのにジョーイは自分に向けられるだけで充分脅威を感じ、あれで自分が料理をしていたなんてと包丁ばかりに視線が行ってしまふ。

トニーはソファアの上で手足を縛られた状態でうつぶせになりながら、訴えるような目でジョーイに逃げろと示唆する。

そんなことができるかと、ジョーイも必死な表情でトニーを見つめ返した。

ギーはトニーの頭の隣のソファアの端に軽く腰掛け、包丁を目の前に掲げて色んな角度からそれを見回して弄んでいた。

そしておもむろにその包丁をトニーの喉元にあてる。

突然向かってきた刃物にトニーの体は怯えぐつと力が入って海老のように反れて硬くなり、その反動で背筋がすーっと寒くなっている。

テープで口を塞がれていたために悲鳴は出なかったが、息詰まった吐息が籠って端からぶくぶくとカニのような泡がでてきそうな勢

いだった。

「（ギー、やめろ。あんたはFBIなんじゃないのか）」

「（真実を暴くためなら犠牲者が出てもいい）」

「（無茶苦茶だ）」

「（さてと、ジョーイ、父親の居場所を教えてもらおうか）」

包丁を握っている手に力が入り、より一層トニーの喉下に密着する。

「（俺は全く知らない。俺の方が訊きたいくらいだ）」

「（そのままだと友達を一人亡くすぞ）」

「（やめるんだ。ギー。FBIならFBIらしく捜査しろよ）」

「（俺が手順を踏んでやっても、なぜかあと一歩のところまで上手く運ばない。必ずどこかで邪魔が入り情報が跡形もなく根こそぎ消されて逃げられてしまう。今回もだ。何一つかめないものだから、拳銃の果てに無駄な捜査ばかりするなどと、とうとうこの件から手を引かって長官直々に命令された。もう我慢ならない。それなら俺の首を賭けてでも真実を暴いてやる。さあ、知ってるだけの情報を俺に言っんだ）」

ギーの焼き付けるような睨みは本気だった。一気に片をつけたい。このときまで抱いてきた不満が憎しみに変わり思考回路も正常に働いている状態ではなかった。

トニーの顔は真っ青になり、ギーに喉を切られる恐怖に慄いている。

ジョーイも息苦しいほどに呼吸が乱れ、この戦慄にどうしようもなく足元がふらついてしまう。

どうにかしなければならぬ。

その時ふとアイデアがよぎり、一か八かの賭けに望を託す。無謀

でジョーイも本当に通用するか半信半疑だったが、他に方法もなくやるしかないと握り拳に力を入れて覚悟を決めた。

「（言う、言うから、包丁をトニーから離してくれ）」

「（最初から言うこと聞いてたらこんなことにならなかつたんだよ）」

包丁がトニーから離れ、ギーの気が一瞬緩んだ時、ジョーイは尽かさず息を吸い込んで声を上げた。

「ツクモ！ シックレッグス！」

「（何を言ってるんだ？）」

ギーが声を出したと同時に、ジョーイの隣を猛スピードですり抜けてツクモがギーに飛び掛った。

突然のことにギーは意表をつかれてしまい、持っていた包丁を落とし、そしてツクモに床に押し倒されて慌てふためいていた。

ギーも必死に抵抗しているが、ツクモの牙と唸り声が混じる半端ない攻撃は獰猛な犬と同じレベルで、まるで熊に襲われているような恐怖心を煽られた。

その隙にジョーイは転がっていた包丁を拾い、そしてトニーの縛られていた両手、両足を解放した。

ジョーイとトニーですらまじかに見て「スゲー」とツクモの威力に圧倒されている。

ギーが逃げようとへたり込みながら後ずさると、ツクモは容赦なく足にがぶりと噛み付き、ギーの悲鳴が部屋に響き渡った。

ジーンズを穿いていたが、分厚いデニムの生地から血が滲んできている。ツクモはそれでも噛むことを止めない。

人質となっていたトニーの手足が自由になり、自ら口元のガムテ



ープを痛そうにびりっとはがし、そしてトニーもツクモに加担する。

「この野郎！ さっきはよくもやってくれたな」

勢いつけて覆いかぶさってボコボコと数回殴り、ジョーイと一緒にギーを後ろ向きに押さえ、トニーは自分がされたようにガムテープでまず手をぐるぐると縛り上げた。

ツクモはまだギーの足を噛んだままだった。

「ツクモ、グッドジョブ」

トニーは足もぐるぐる巻きにする。

ギーが手足を縛られて動きが封じられると、ようやくツクモは落ち着いてまた大人しくなっていた。

悪態をつきお決まりの忌まわしい言葉をギーは叫びながら悔しそうな目を二人に向けると、ツクモはまだ懲りてないのかと言いたげにすぐに牙を見せて「ウー」と威嚇の声を上げた。

ギーはまた噛まれてはたまらんと大人しくなったフリをしていたが、転がりながらなんとか逃げようとして陸にあげられた魚のように手足をばたつかせている。

ジョーイはその間に警察に電話を入れた。

警察の到着にそんなに時間は掛からなかったが、サイレンが鳴り響いてやってきたために辺りは騒然となり、ジョーイの家の前には野次馬が広がった。

あの近所の噂好きなおばさんも誰よりも目立って覗き込んでいた。

警察は手順良くテキパキと動いて家の中を捜査する中、ジョーイとトニーは質問に答えていた。

訳の分からないことで脅されて、ギーが狂ってることを強調し、

ジョーイ自身なぜ巻き込まれたのか分からないと白を切る。

ギーが全てを語ったところで日本では全く関係のない事件であり、FBIのトップもきつとこの事件の真相を闇に葬ることをジョーイは良く理解していた。

自分の知らないところで誰かが処理をする。

ジョーイ自身、ギーが本国に帰ってくれさえすればそれでよかった。彼もその時、はむかえないほどに処分されることだろう。

ギーがなんだかお気の毒に思えたが、ジョーイを睨みながら足を引きずり警察に連れて行かれる態度を見るとその考えもすぐに撤回していた。

ツクモは部屋の隅で寝転がっては、時々耳を動かし愛らしい瞳で様子を伺っていた。

ある捜査員がツクモの前で立ち止まり、首を傾げる。

「なんかこの犬、コンビ二強盗で出てきた犬みたいだな」

ツクモはむくつと立ち上がり、尻尾を振ってその捜査官にじゃれ付くと、捜査官は犬好きなのか嬉しいとばかりに頭を撫でて歓迎していた。

「いい犬ですね」

ジョーイにそう言ってまた持ち場に戻って行った。

「ツクモ」

ジョーイの声に反応してツクモは側に寄った。

かしこまって座り、ジョーイの顔を見上げている。

先ほど勇敢にギーに立ち向かったツクモの恐ろしい形相とは全く似つかない、穏やかであどけなく甘えた表情をしている。

一般に穏やかな性格として知られているラブラドルレトリバーが、あんなに怒り狂った表情をすることがジョーイには信じられなかった。

そして忠実に命令を聞く姿勢もその状況と言葉を理解して行動しているように思えてならなかった。

「ツクモ、お前もしかしてアレなのか？」

ツクモもまた人間の役に立つように遺伝子操作されているのではとジョーイは感じていた。

でも知ったところでどうでもいいと、すぐに笑顔を見せて、優しくツクモの耳の後ろを撫でてやった。

ツクモは気持ちよく目を細めて喜んでいる。

キノもこんな風にしてかわいがっていたのだらうと、ジョーイはキノの姿を思い浮かべていた。

「そっか、キノは本国に帰っちまったのか」  
夜遅く、やっと静かになった居間のソファアに深く座り、トニーは呟いた。

ジョーイはシアーズから聞いた真相には触れずに、ツクモと一緒に床に座りながら、当たり障りのないことだけをトニーに説明していた。

トニーもジョーイが話すこと以外、詳しい真相を聞こうと突っ込みもしなかった。

FBIがあんな風に絡んできた以上、真実を知ってまた命を狙われては困るとばかりに怖くて聞きたいとも思わない。

「ツクモ、寂しいだろうけど、俺達がかわいがってやるからな」

トニーの言葉にツクモは尻尾を振って「ワン」と返事する。

トニーの足元に絡んではじゃれ付き、頭を突き上げて早速体を撫せて可愛がれと催促しているようだった。

「お前、かわいいな」

トニーもすぐにツクモを気に入り、体を撫でてスキンシップを図っている。

その様子をジョーイは微笑ましく見ていたが、これで終わりじゃなかったとふと我に返った。

「そっか、なあ、トニー、これどう思う？」

ジョーイはキノの手紙をポケットから取り出して見せた。

「キノからの手紙か。でもなんだこの最後の数字は？ 5 + 5

1 1 0 3 7？」

「そうなんだ。俺もそれが分からない。全体が英語なのに、ツクモもカタカナで書かれているのも不自然だろ」

「んー、これは何かの暗号なのか？ 何かをジョーイに知らせたいんじゃないだろうか。他に何かヒントはないのか」

「そういえば、黒ぶち眼鏡もツクモが持ってきた」

それも取り出してトニーに見せた。

「あつ、もしかしてこの眼鏡を掛けて手紙を読んだら、文字が浮かびあがってくるのかじゃないのか」

ジョーイははつとして、その眼鏡を掛けて手紙を見てみた。だが全く変わりはない。

「何も変化はないよ。だけどこの眼鏡、やっぱり伊達だったんだな。なんでこんな眼鏡選んだんだろう。他にももつと女の子らしいものもあつただろうに」

ジョーイは眼鏡を掛けたままトニーの顔を見て答えを求めた。

「俺に聞かれても…… ジョーイが分からないのに、俺が分かるわけじゃないじゃないか。だけどその眼鏡掛けてると、なんかフクロウみたいだな。キノの時もそう思っただけ、女の子だったから言わなかった」

「えっ、フクロウ？」

そう言えば、ジョーイもこの眼鏡を掛けているキノを見たとき動物を連想していたことを思い出した。

だが、フクロウという言葉がまた出てきたことにひっかかる。シリーズからもフクロウのコインを手渡されたばかりだった。

「漫画でそういう描き方するじゃないか。ジョーイは見たことないかな。トツツイーポップスのキャンディのCMに出てくるフクロウのキャラクター。そんな丸い眼鏡かけてるんだよ。アメリカじゃ結

構有名だぜ。Tootsie Popsで検索してみな一杯画像出てくるから」  
「キャンディのことはどうでもいい。そのフクロウだけど、それならこれどう思う？」

今度はシアーズから貰ったユーロ硬貨を見せた。

トニーはそれを手にとって眺めた。

「へえ、これがユーロか。初めて見た。俺、ヨーロッパまだ行つたことないもんな。でもこれもフクロウがデザインされてるんだな」

「それは古代アテネで使われてたテトラドラクマ銀貨のデザインだ」

「えっ、なんて？ テ…… ドラ…… クマ？」

「テトラドラクマだ」

「なんかややこしい名前だな。最後のクマしか聞き取れないよ。だけどそれも何か関係しているのか？」

「分からないから聞いてるんだろうが」

二人は暫くキノの手紙を見つめながら、首を傾げるだけだった。

その晩、ジョーイは自分の部屋にツクモを入れて、一緒に寝るところにした。

机の上にキノの眼鏡、手紙、そしてコインを並べふーっと息をつく。

「疲れた」

この一週間の目まぐるしい変化を振り返り、ベッドに腰を下ろす。次の日は母親のサクラが出張していたアメリカから帰国する。

サクラが帰ってくるまで一段落したことに少し胸をなでおろしていた。

このまま何事もなかったように済ませたいが、ツクモも居るし、シアーズもサクラと話をすると思うとそうも行かない。

そしてサクラもまた過去を思い出し辛い思いをするのではとジョーイは心配になってしまった。

自分ですら、父親が何をしていたか知らされてかなりのショックを受けた。

サクラがその話を知らない訳がない。

当時サクラも同じように思ったことだろう。

そうなると折角薄れていた心の傷をまた深くえぐる事になるかもしれない。

ジョーイの瞳は悲しくまどろんでいた。

ツクモは慰めるようにジョーイの側により、鼻を何度も「クーン」と鳴らす。

「ツクモもキノと離れて寂しいのに、俺のこと気遣ってくれてるのか」

「ワン」

「そうか。有難うな。だけど、またいつかキノに会えるときがあるんだろうか」

その時ツクモはデスクに向かって二本足で立ち上がり、キノの手紙を加えてジョーイの前に持ってきた。

「どうしたツクモ？」

ジョーイはその手紙を受け取りまた眺めた。やはり何度見ても意味が分からない。

その間ツクモが手紙を見て吼え続けた。

「なんだよツクモ、お前はなんか知ってるのか？」

ジョーイが両手で持っている手紙に向かってツクモは下からその裏を舐めだした。

「どうしたんだ。裏になんかついてるのか」

何気に手紙の裏をひっくり返したときだった。  
ジョーイははっとした。



「こ、これは」

油性マジックで書かれた手紙は、裏も字が滲んで裏からも文字がはつきりと見える。

そして裏返したとき、突然そこに漢字が浮き上がって見えた。

> i 3 2 1 0 1 — 3 9 8 5 <

(手紙の画像)

「5 + 5」のこの部分はひっくり返して縦にすると『九十九』と読めるじゃないか。これはツクモの漢字じゃないか。そして”1”は『ニ』?、”037”はOWLと読める、即ちフクロウのことだ。続けて読めば、ツクモ ニ フクロウとなる。これはどういうことだ? ツクモ、お前何か知ってるのか?」

ツクモは尻尾を振り返事するかのようになんて答えていた。暗号は解けたが、まだ意味がクリアーに理解できない。

ツクモニフクロウとはツクモにフクロウを与えるということなのだろうか。

ジョーイはそこでフクロウがデザインされた方を向けて「ユーロ硬貨をツクモの前に置いてみた。

ツクモは匂いを嗅ぐだけでそれ以上の反応は示さなかった。

コインに描かれている絵では小さすぎてフクロウと判別できないのかもしれない。

夜も更け、ジョーイの疲れは頭の回転を鈍くさせる。

仕方がないと、その晩は謎解きは諦めて寝ることにした。

疲れ切っていたジョーイは目を閉じるや否や、ストーンと谷底に落ちたように眠りにつく。

そのベッドの側でツクモも丸くなり眠りについていた。

真相を知った後の夢は、一層はつきりと家が爆発したときの記憶が映し出された。

ソファで眠るアスカ。

顔の部分はぼやけているが、手にぬいぐるみを抱きしめながらブランケットを掛けられてスヤスヤ寝ている。

そしてジョーイは電話が鳴る音を聞いて受話器を取っていた。

誰かと話して、呼び出されて外に飛び出す。

外には離れたところで車が停まっただけで、側で母親のサクラが手招きしている。

ジョーイは走り寄って母親に抱きつき、アスカが家で寝ていることを伝えると、側に居た見知らぬ男性が家に向かい中に入っていた。

その後、ぬいぐるみを手に持って外に出てくる。

それをジョーイに手渡してくれた。

その直後、熱い熱気が肌を刺し、突風が体を押し上げた。

ジョーイは母親に抱きしめられ、怯えている。

振り返れば、黒々とした魔物のような煙を上げて家が業火と化していた。

母親を見上げれば赤い炎の光を受けて涙を流している。

ジョーイはぬいぐるみをぎゅっと力強く抱きしめ呆然と立ち竦んでいた。

喉がカラカラに渴いた状態でジョーイは目覚めた。

夢の中では本当に起こった出来事と信じきっていたので感情が高まり、目が覚めたときもぼーっとして暫く起き上がれない。

「悪い夢とっていいのだろうか」

実際は本当に自分が体験したことであり、それを夢として見ることは夢で片付けられない思いだった。

一晩寝ただけでは疲労は回復していない。  
時計を見つめれば、いつもの起きる時間だった。

だが学校に行く気分になれず、ジョーイはそのままベッドの中でずっと横になって天井をひたすら見つめていた。

時計の針はどんどん進んでも起き上がる気配がなかった。

「おい、ジョーイ学校に遅れるぞ」

ジョーイがいつまでたつても起きてこないとトニーが心配になって部屋の様子を見に来て起こしに来る。

「俺、学校休む。シアーズにそう言っておいてくれ。どうせ昨晚のギーの一件のこと奴に報告するんだろ」

「まあな。ジョーイも少しは休んだ方がいいだろうな。シアーズもそう思っているかもな。じゃあ、俺は言ってくるわ。昨日怖い思いしたから、眞子ちゃんに会って慰めてもらわなくっちゃ」

「その白鷺先生だが、止めた方がいいぞ。やっぱり大人の女性はするいぜ」

「なんだよ、俺の夢壊すようなこと言うなよ。絶対俺くどいてやるんだから」

ジョーイは好きにしろと最後は笑っしかなかった。

トニーは鼻歌交じりに階段を下りていく。命に係わるような事件に巻き込まれたというのに、それをすっかり忘れている。

トニーのお気楽さはジョーイには尊敬に値するほどまでになってきた。

二度寝しようにもすっかり目が冴えてしまい、このままずっとベッドの中に居るわけにも行かず、ツクモもお腹を空かせていそうだった。

それでも何も文句も言わず、忠実にジョーイに仕えるように側を離れずじつと床に伏せている。

「ツクモ、腹へったか？」

ツクモの垂れた耳がぴくっと反応し、申し訳なさそうにジョーイに丸い目を向けていた。

「そくだよな、腹は減るよな」

ジョーイも自分のお腹を押さえていた。

身支度をさつさと済ませて、ツクモの餌を買いにジョーイが外へ出たとき、近所の例の嗜好きのおばさんが吸い付くように側にやってきた。

「ジョーイ君、昨日大変だったわね。泥棒が入ったんでしょ。大丈夫だった？」

ギラギラとした目を光らせ、体の太さに似つかわしい厚かましさに寄り添ってくる。

「はい、ご心配おかけしてすみません」

「いいのよ、ただあの泥棒、外国人みたいだったけど、もしかして他になんか理由があるんじゃないの？」

結構鋭い突っ込みに、ジョーイは侮れないおばさんだと体が無意識に反れて避けてしまう。

しかし、話すことは何もないと言っても何度でもしつこく聞いてきそうだったので、ジョーイは話を作ってやった。

「ここだけの話にしておいて下さいね」

ジョーイが声を小さくして、腰を少し屈めると、おばさんは耳を大きく引き伸ばすように聞いていた。

「うちの母がファーストレディと友達でしょ。それでアメリカ大統領の秘密がないか探っていたんですよ」

「あら、まあ、そうなの」

こんな単純な嘘を鵜呑みにするおばさんにジョーイは楽しくなってくる。

「おばさんもこの事黙っておいて下さいね。ばれちゃうとどっかの組織から命狙われるかも。あまりうちと親しくしたりしない方がいいですよ」

「あら、怖い」

かなりの効果があったのか、おばさんは後ずさると辺りを見回してそして去って行った。

これで当分は係わってこないだろうとジョーイも嘘も方便の効果にやっと気がついた。

ドッグフードを買ってきた後、それをツクモに与え、ジョーイも適当に食事した。

ツクモはジョーイから離れず、常に後を着いて回る。

「ツクモ、好きにしているんだぞ。お前はまるで家来だな。というより、やっぱり盲導犬だからそういう風に訓練されてるんだな。でも”シックレッグス”で足を噛む事まで訓練されてるって、お前やっぱり何者だよ」

ツクモはあどけなく「ワン」と吼えていた。

昼も過ぎた頃、表で車が停まった気配がして、ドアの開け閉めの音が聞こえる。

そして玄関のドアが開き、懐かしい声が家に響き渡った。

「あー、やっと帰ってこれた。疲れた」

サクラだった。

「お帰り、母さん」

「あれ、ジョーイ、学校はどうしたのよ。それにあら、何、その犬？」

ジョーイは黙って寂しげな瞳を向けるだけだった。

その代わりにツクモが「ワン」と何かを代弁するように吼えた。

「もう、ちよつと留守している間に、好き勝手なことして。どこでそんな犬拾ってきたのよ。とにかくまずはお風呂入りたい。話はそれからだわ。ジョーイ、悪いけどスーツケース部屋まで運んでちょうだい。ちゃんとお土産買って来たからね」

ジョーイは黙ってスーツケースを家に上げた。

サクラはツクモを困ったようにじつと見つめながら、自分の部屋に入っていく。

ジョーイは後からスーツケースを部屋に運ぶと、サクラが筆筒の上に飾られていた写真の前で目を見開いて呆然と立ち竦んでいる姿が目に入った。

「ジョーイ……」

恐々としてサクラは振り向いた。

「ああ、母さん、シアーズ先生から話は聞いたよ」

サクラはペタンと床に座り込んでしまった。諦めたように、それでいて気が楽になったようにも見える。

「そう、私がない間に何かあったのね。そっか、もう隠さなくてもいいのね。ジョーイ、ごめんね」

ジョーイは写真立てを手に取り、それを見つめる。

「何も母さんが謝ることなんてないよ。俺もショックだったけど、否定しても真実は変えられないから受け入れる事にしたんだ。ただどすぐには消化できそうもないけどね」

「ジョーイ」

サクラは名前を呟くだけで精一杯だった。徐々に涙が溢れてくる。「母さん、泣くなよ。母さんの方がもつと辛い思いしたたる。俺を守るためとはいえ、ずっとダデイのこと話せなくて、そして俺を一人で育ててくれた。感謝してるくらいだ。もうこれからは俺のこと気にしなくていいから。俺も母さんを助けるから」

「ジョーイ、ありがとう」

何よりも一番嬉しい言葉だった。

「だけど、この写真に写ってるこいつ、誰なんだ？」

ジョーイは髪の毛の長い、髭の生えたワイルドな風貌の男を指差す。

「それは、あなたのダデイの弟よ」

「それじゃ、おれの叔父さんになる人か。ダデイに弟がいたなんて知らなかった。今この人どこにいるんだい？ やっぱダデイと同じように行方不明なのか？」

「そうね、表向きはそうなってるわ。名前を変えてロバートと関係がないようにその人も生きている」

「そっか。それじゃ叔父さんにも会えないってことか」

「ううん、彼には会えるわよ。というより、いつも側にいて会ってるじゃない」



「えっ、それってどういうことだ」

「シアーズ先生よ」

「う、嘘だろ、アイツが俺の叔父。しかもこの写真、シアーズかよ。今と全然違うじゃないか」

「彼、昔は結構ワールドでね、しかも冒険家でしょっちゅう世界を旅してたわ」

サクラは懐かしむように言った。

シアーズが私情を挟んでいつも絡んできた訳がジョーイはやっとわかった。

ジョーイもまたヘナヘナと床にへたり込んでいた。

サクラはおもむろに立ち上がり、そして押入れを開けて奥から箱を引っ張り出してきた。

「何してんだ母さん？」

箱を開けたとき、中から茶色いフクロウの縫いぐるみが出てきた。それをジョーイに渡す。

「もうこれをあなたに返してもいいわよね」

「なんだよ、この縫いぐるみは」

薄汚れて古臭くなっていたが、目が丸くて大きいかわいらしいフクロウだった。

「クマよ」

「はっ？ 熊？ これ、どうみてもフクロウじゃないか」

「だから、名前がクマちゃん。ジョーイ覚えてないの？ アスカちゃんも持っていた縫いぐるみ」

「アスカ、アスカの縫いぐるみ」

「あの時、アスカちゃんがジョーイのイメージネーションだなんて言うてごめね。真実を隠すためにはそうするしかなかったの」

「アスカ……」

「アスカちゃんがいいたらジョーイはいつか真相を知ると思ったので、ああいう形になってしまった」

「クマ…… そっか俺はこの名前に惑わされて熊の縫いぐるみなんて思い込んでたのか。本当はフクロウだったなんて」

ジョーイははっとした。

シアーズから手渡されたユーロ硬貨のフクロウのデザイン、そして古代アテネのテトラドラクマ銀貨の最後のクマの音の部分。また一つ繋がった。

あの時、縫いぐるみを手渡したのはシアーズと言っていた。そのことを知っていて、ジョーイの勘違いを正そうとあの硬貨を渡したに違いない。

その勘違いだが、熊の縫いぐるみとジョーイが言っていたと知っていたのも、早川真須美のカウンセリングの内容をシアーズが把握していたことになる。

ジョーイはやられたと言わんばかりにフーッと息を吐いた。

だが疑問が残る。シアーズはアスカは死んだと言ったし、殺されたと強く言い切っている。

今更何のために間違いを正そうとこんなヒントを与えたのだろう。

あの後黙りこんでしまったシアーズ。

まだ言えないことがあったのだろうか。

『私も立場上まだジョーイに自分の口から全てを言えないことがあるんだ』

シアーズは真実を全て話した訳ではなかった。所々の箇所が曖昧

でばやけていた。

裏を返せば嘘をついているということにもなる。

だったらアスカが死んだと言うのはもしかしたら嘘ではないだろうか。

そうじゃなければ、アスカが持っていた縫いぐるみがフクロウだということをやわざわざ教える必要はないはずだ。

それでもヒントを与えてきた。

『本人が勝手に知りたいたいと思って自分で気がつくのなら別だ』

ジョーイはシアーズのこの言葉も思い出す。

シアーズの口からは言えないが、ジョーイが自ら知ったとなればシアーズは手を出したということにならない。

(それならばアスカは生きている?)

だが、アスカが死んでしまったと言われなければならなかった理由は一体なんだったのだろうか。

ジョーイがそう考えているとき、ツクモがフクロウの縫いぐるみを口で銜えてジョーイから奪い取った。

「おい、ツクモ、どうしたんだ。あつ、そうか。ツクモにフクロウ

……」

ツクモは尻尾を振って玄関に向かった。

ジョーイはツクモが何かを知っているとつい後をつける。

「ジョーイどうしたの?」

「ちよつと出かけてくる」

ジョーイは説明している暇もなく、慌てて靴を履き、玄関の扉を開けた。

ツクモは喜び勇んで外へ出て後ろを振り返り、ついて来いと尻尾をはちきれんばかりに振って、ジョーイの顔を見ていた。

ツクモはフクロウの縫いぐるみを口に銜えたまま町を歩く。ジョーイは心臓を高鳴らしてツクモがどこへ行くこうとしているのか見守りながら歩いていった。

この先に何が待っているのか。  
それがビー玉が転がった先の最終地点のゴールになるのか。

そしてそこにアスカがいるとでもいうのだろうか。  
ジョーイの体に力が入り緊張が高まる。

駅に来て、北側へとツクモは進む。  
学校の下校途中の時間帯で、ランドセルを背負った小学生の姿が所々で見られた。

日曜日に野球の試合を見に来た花園小学校のグラウンドが視界に入ると、ツクモの足取りが速くなった。  
そして小学校の門の前で座り込んだ。

「ツクモ、どうした。ここは小学校だぞ」  
下校する小学生達がツクモを見るとかわいいと寄ってきて頭を撫ぜたりする。

「おい、ツクモ何してるんだよ。遊んでる暇ないぞ。早く行こう」  
ジョーイはせかすがツクモは縫いぐるみを銜えたまま前を見据えて座っていた。

艇子でも動きそうにもなく、ジョーイは高まった気分が今度は苛立ちに変わりそうだった。

暫くは下校してくる小学生達に囲まれ、ツクモは体を触られまくり、ジョーイは側で腕を組んで足を揺らしながらそれでも辛抱強く待っていた。

そしてツクモが立ち上がり、前を見つめて尻尾を振り出し、身を乗り出してそわそわしだす。

前を見れば、あの生意気な聡が歩いてくる。

「なんだよ、ツクモ、アイツに会いにきたのか」

ジョーイは自分の思ったように事が運ばなくてがっかりしてしまっただ。

聡はツクモの姿を見て走り寄って来た。

「キノが来てるのか？」

目をきらきらさせてジョーイに聞く。

ジョーイは首を横に振ると、聡はがっかりしていた。

このときツクモは口に銜えていたフクロウの縫いぐるみを地面に置いた。

それを見て聡は驚いている。

ジョーイはツクモの気まぐれに振り回されたと、意気消沈してフクロウの縫いぐるみを拾い、軽くはたいた。

「おい、そのフクロウはお前のか？」

聡が聞いた。

「ああそうだ。なんだよ、バカにでもするのかよ」

「それじゃ、お前なのか？」

「ん？ 何を言ってるんだ？」

「とにかくついて来いよ」

聡はランドセルの位置を整えるように肩を一度上げて、そして歩き出した。

その後をツクモがついていく。

ジョーイは訳がわからないと突っ立っていたが、聡が振り向いて「早く来い」と叫んだので仕方なしに後をつけた。

そして住宅街を歩いて、ある家の前で止まり、聡は自分の家だと知らせる。

築2、30年くらいは経ってそうな古い日本風の平屋だが、屋根が新しく変えられて所タリフォームされていた。

庭と呼べる程ではないが、玄関に行くまでに花を植えられるくらいのスペースが少しあり、そこには小さな灯籠のようなものも飾られ、子供用の自転車も置かれていた。

その時、門のところに付いてあった石の表札を見てジョーイは目を見張った。

そこには『九十九』という漢字が書かれている。

聡はその家の玄関のドアをスライドさせて大きな声で「ただいま」と叫んだ。ツクモもぴったりと寄り添っていた。

中からおばあちゃんが出てきて優しい笑顔で出迎えた。

「お帰り、聡ちゃん。あら犬のツクモも一緒なのね。キノちゃん来てるの?」

おばあちゃんが履物を履いて外に顔を出すと、ジョーイと目が合った。

ジョーイは咄嗟にお辞儀をして挨拶を交わす。

おばあちゃんもにこやかな笑顔を添えてお辞儀を返していた。

「ちょっと待ってる」

聡がジョーイにそう言って家の中に入って行く。

「あの、よかつたら中へどうぞ」

おばあちゃんが気を遣うがジョーイは遠慮した。

「何かうちの孫がご迷惑かけたんじゃないですか？」

「いえ、そんなことはありません」

「そうですか。それならいいんですけど」

その時家の中で電話が鳴り響く音がした。おばあちゃんは申し訳ないと謝りながら家の中へ入っていった。

ジョーイはその間、門の表札の『九十九』をじっと見ていた。

(これは一体どういうことなんだ?)

暫くして聡が戻ってきた。

「何そこで突っ立ってじろじろ見てるんだよ。言っとくけどそれキユウジユウキュウって読むなよ」

「それぐらい分かってるよ。お前もツクモって名前なのか？」

「そう。九十九聡。この犬のツクモと同じ」

ジョーイははっとした。

手紙に書いてあったカタカナのツクモと暗号の漢字で表された九十九で、ツクモが二人いるということの意味していると気がついた。九十九にフクロウ。

ジョーイは思わず聡にフクロウを突き出した。それに聡は反応する。

「やっぱりそうか。お兄ちゃんがキノが言ってた人なんだ」

「何かキノから聞いてるのか？」

「うん。フクロウを俺に見せる人が来たら、これを渡してくれって頼まれてたんだ」



聡は赤い缶をジョーイに差し出した。

その缶はジョーイには見覚えがあった。

駅のホームでキノがビー玉を転がす前に開けていた缶だった。

ジョーイはそれを受け取る。振れば中でゴロゴロと何かがぶつかる音がした。

「ちゃんとそれを渡したからな。だけどキノはどうしたんだ？ 难道でお兄ちゃんがツクモを連れてるの？」

「キノはアメリカに帰ったんだ」

「えー、なんで？ 嘘だろ」

聡は泣きそうな顔をしていると、ツクモが慰めるように聡の足に自分の頭をこすり付けていた。

聡は泣くのを必死に堪えてツクモを撫ぜる。

ジョーイも同じような気持ちなので同情せずにはいらなかった。

「また、いつかキノ戻ってくるかな」

聡は涙声で呟いた。

「そうだな。いつかまた会えるときが来るさ」

自分もそうでありたいと願うジョーイは答えていた。

そして缶の蓋に手をかける。

キノが開けようとしたときはいかにも固くて開けにくそうにしていたのに、ジョーイが試すと、缶の蓋はちょっと持ち上げただけで簡単に開いた。

次に中を覗くとビー玉が一つ入っているのが見えた。

それを取り出してジョーイは水を掛けられたくらいはっとして驚いた。

「うわあ、なんて綺麗な虹色のビー玉」  
聡が呟いた。

そのビー玉はまるで透明なゼリーに所々に七色の着色をされたような色をしていた。

「アスカが失くしたと言っていた虹色のビー玉……」  
ジョーイも呟いた。

「（ジョーイ、ビー玉失くしちゃった）」

「（アハハハ、それって気が狂ったってどういう意味にもなるんだよ）」

「（それならほんとに狂っちゃうかも）」

「（えっ、まだ他のビー玉が箱に一杯入ってるじゃないか）」

「（でも一個足りないの）」

「（一個くらいいいじゃないか）」

「（だけどそれが一番お気に入りだったの。だって虹色でとっても綺麗だったから）」

「そうか、そうだったのか。キノはやっぱりアスカだったのか」  
突然ジョーイは叫んだ。

失くしたものを見つけたときの嬉しさ。  
知りたかったことを知ったときの満足感。  
全てが心をじわりと温めていく。

ずっと心に引っかかっていた靄が晴れるようにすっきりした表情で、ビー玉を空に掲げてじっくりと見つめた。

駅のホームで簡単に開けられる缶の蓋をわざと開けられないフリをしてビー玉をジョーイの目の前で散らばせたのも、そして『I lost my marbles』と言ったのも全てアスカとしてジョーイに発したメッセージだった。

あの黒ぶちの眼鏡もフクロウの縫いぐるみを思い出して欲しいと自らフクロウを意識してやっていたことだった。

全てに意味があり、やっと繋がった。

やはりジョーイが感じた感覚は正しかったことになる。

キノは真実を口で告げられなかったためにこんな遠回りのメッセージを送っていた。

やはりジョーイに会いに来ていた。

アスカがキノ、キノがアスカ

名前を繰り返して、そこにもヒントがあったことにもジョーイは今更ながら気がついた。

日本語の音で考えれば”明日と昨日”。

キノがここまで計画していたのだから、そういう意味も込められているといっても過言ではないのかもしれない。

転がったビー玉は全てのことを繋げて見事着地地点にゴールした。

聡にお礼を言っ、ジョーイは家に帰ろうとした。

「お兄ちゃん、待って。時々、ツクモつれて遊びに来いよ」

「ああ、そうだな。今週の土曜の午後、キャッチボールでも一緒にやるか？」

「うん！ 約束だよ」

「ああ」

ジョーイは聡に思いつきり笑って答えていた。

## エピソード

「グッドモーニン」

シアーズが学校に登校してくる生徒達に向けて朝の挨拶を交わしている。

「（シアーズ先生、おはようございます）」

ジョーイは自ら進んで声を掛けた。

シアーズはジョーイと目が合うと粹に微笑む。

「（おはよう。ジョーイ。気分はどうかね）」

「（はい、絶好調…… とまでは行きませんが、すっきりした気分です。テトラドラクマ銀貨とフクロウの関係も分かったことだし）」  
シアーズは口元を少し上げて満足そうに微笑する。

「（そっか。それでこれからどうするつもりだ?）」

「（どうするも何も、ただこのまま高校生活を続けてしっかり勉強するだけですよ）」

「（何をしたいのか進路はもう決めたのか）」

「（はい、俺は人の役に立つことをしたいです）」

「（例えばどんな?）」

「（もちろん、スーパーヒーロー）」

ジョーイは制服のポケットからキノの黒ぶち眼鏡を取り出してそれを掛けた。

「（なるほど、クラーク・ケントってどこか。せいぜい頑張れよ）」  
シアーズもそれなりに合わせていた。

「（なあ、先生。またキノに会えるときが来るだろうか。先生はキ

ノの居場所を知ってるのか？」

「（さあ、アメリカに帰ってしまったら私にも居場所は分からない。ギーがあんな事件を起こした後では警戒するだろうし連絡の取りようもない）」

「（そつか、でも俺諦めないよ。またいつかキノに会えると信じる。そしたら必ずキノはまた俺に会いに来てくれる…… だろ？）」

「（ああ、そうだな。きつとそうなる。いつになるかわからないが、まずはしっかりと残りの高校生活頑張れよ）」

「（もちろん。思いつきり楽しむぜ。じゃーな、シアーズ叔父さん）」

「（おい、学校では慎めよ）」

ジョーイは走って教室に向かって行った。

そして知ってる顔を見ると片っ端から「おはよう」と笑顔で声を掛けていた。

シアーズはジョーイが明るさを取り戻したことを嬉しく思いながらあの過去の事件を振り返っていた。

事件というよりも前もって兄のロバートから指示された出来事だった。

ジョーイを迎えに行き、そして家の中に入ってアスカを探し、その後で誰も他に居なかつたと伝える計画だった。

あの時家の中に入れば、アスカは部屋の真ん中に立ち、小脇に縫いぐるみを抱きしめシアーズを見据えて力強く立っていた。

小さな子供なのに、目だけは何もかも見てきたという虚ろな悲しげな大人の瞳をしていた。

「（これをジョーイに渡して。アスカはイメージションだったって言うて）」

縫いぐるみをシアーズに手渡してアスカはそう言った。

「（アスカはどうするんだ？）」

「（私はこれからアスカを殺すの。アスカはもう居なくなる。死んじゃうのよ）」

アスカは目に涙を溜めていた。

「（名前を変えて姿を消すだけじゃないか。何もそこまでいう必要は……）」

「（あるの！ ジョーイが知っているアスカは消えてしまう。それって殺すことじゃない。私とジョーイと一緒に過ごした思い出はなくなってしまうの。アスカは死ぬのと同じ。だったら私が殺すの）」

シアーズはこんな小さな子が力強く死という言葉を使うことで、そこに相当の辛い思いを抱えている事に気がつく。

全く自分が望んでいない、仕方なく従わないといけない悔しさ。自分が置かれている立場を理解してるが故に、悲しみを背負って生きていかなければならないとこんな小さな体で全てを受け入れている。

まだ五歳くらいだというのに、物事を理解しすぎて大人びてしまっている姿が憐憫の情を誘う。

「（私、ジョーイが大好きだった。もう会えないなんて）」

「（またいつか会えるかもしれないじゃないか）」

「（アスカとして会えないのが悲しい。その時は名前が変わって違う人になってるはず。だけど会えたならやっぱりアスカだって思っ  
て欲しい）」

「（ジョーイの前ではアスカとしては名乗れないし、真実は隠さなければならぬ）」

「（わかってる。だからアスカは今から死ぬのよ。おじさんも早くここから出て行って。私アスカを殺さなくっちゃ）」

小さな女の子の台詞にはあまりにも衝撃的だった。

やるせない思いに押しつぶされそうになりながら、アスカを自分で殺すと言い切ることで割り切ろうとしている。

シアーズは渡された縫いぐるみを持つ手に力が入った。

後は何も言わずに背を向けて家を出て行く。

そしてその後、家が爆発した。爆発のスイッチを押したのはアスカだったのかもしれない。

あの後、シアーズも後味が悪く、ずっとその事実を誰にも言えずに来た。

アスカは殺されて死んだとアスカの言葉通りに受け取った。もう一人そう思っている人間が居ればアスカも救われるかもしれないと思つたことだった。

再びアスカがジョーイの前に現れれば、決してアスカの真実を漏らしてはいけない。

それでもアスカはキノとしてジョーイの前に現れた。

ずっと会いたいと思つていた気持ちを募らせて、シアーズの協力の下、キノの願いは叶えられた。

キノはこの時を待ちわび、直接自分の口では言わないで、ジョーイに自分がアスカだと伝える方法を計画していたと言える。

それでジョーイが気がついたとなったら、約束を破ったことにならない。

「(ずるい手だ)」

シアーズはくすつと笑いを漏らし、晴れた空を見上げる。雲一つない青空に自分の心もそうなっていると清々しい気分になっていた。

両手を伸ばして伸びをすれば、チャイムが鳴り響く。

また一日が始まると校舎へ慌しく向かって行った。

それから一ヶ月が過ぎた頃、ジョーイが学校から戻り、郵便受けを覗くとアメリカからフクロウの写真が印刷された絵葉書が届いていた。

それには意味不明に漢字が並べられて書かれていた。  
差出人は不明。

目 肉 湯 寒 日

愛 昨日

ジョーイはそれを見てクスツと笑った。

「何もこんな手のこんだことをしなくても」

絵葉書を見ながら玄関のドアを開けるとツクモが尻尾を振って出迎えた。

「ただいま」

ジョーイはツクモの頭を撫せてやる。

そして絵葉書を差し出すと、ツクモは匂いを嗅いで更に強く尻尾を振った。

「そうだよな、必ず会えるよな。俺達が待ってるんだからな」

ツクモはジョーイの言うことが分かっているかのように「ワン」と吼えて答えていた。

>T h e E n d <



## エピローグ（後書き）

あとがき

最後までお読み頂きましてありがとうございます。

どのようにお感じになりましたでしょうか。

楽しんで読んで頂けたら幸いです。

この話は、偶然5という数字が漢字に見えて、そこから暗号は考えられないかと思つて先に暗号を考えたのがきっかけでした。

そしてたまたまビー玉が沢山転がっていくイメージが浮かんで、この話が出来上がりました。

それで、最後のこの絵葉書ですが、お分かりになりましたでしょうか。

差出人はもちろんキノでしたが内容は

目 肉 湯 寒 日

愛 昨日

e y e ( I ) m e a t ( m e e t ) y o u s o m e d a

y .

L o v e k i n o

いつか会います。

愛を込めて、キノ

といったメッセージでした。

うだうだと書いてしまいましたが、とにかく楽しく読んで頂けたら嬉しい限りです。

最後までお付き合いありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9084w/>

---

ロストマーブルズ

2011年10月3日09時22分発行